日田地区遺跡群発掘調査報告５
日田市埋蔵文化財調査報告書第52集

吹上 Ⅱ

－９～11次調査の記録－

2004年

日田市教育委員会

吹上 Ⅱ －９～11次調査の記録－
日田市埋蔵文化財調査報告書第52集
2004年
日田市教育委員会

吹上原台地全景（東上空から）

９次調査区Ｂ地点全景（上空から）

10 次調査区全景（上空から）

11 次調査区全景（東上空から）

序　　文

本市に所在の吹上遺跡は日田市を代表する遺跡の一つで、また古くから弥生時代の集落遺跡として知られてきました。

遺跡はこれまでに当委員会が 11 回の調査を行い竪穴住居跡や貯蔵穴といった生活遺構や、甕棺墓や箱式石棺墓といった墳墓が発掘され、多くの遺物が出土しています。

なかでも、６次調査では、青銅武器や鉄製武器のほか貝製腕輪などの豊富な副葬品が出土した甕棺墓や木棺墓が発見され、現在この場所は大分県指定史跡として保護され、日田市が管理を行なっています。

また、出土した資料は日田市埋蔵文化財センターで展示や保管を行なっており、その活用・普及に努めています。

本書はこれまで吹上遺跡で発掘調査を行なった記録報告の２巻にあたり、今後の埋蔵文化財保護や地域の歴史、学術研究等にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、報告書作成にあたり多大なるご協力を賜りました別府大学下村智先生を始めとします学生の皆様方に、心から厚くお礼を申し上げます。

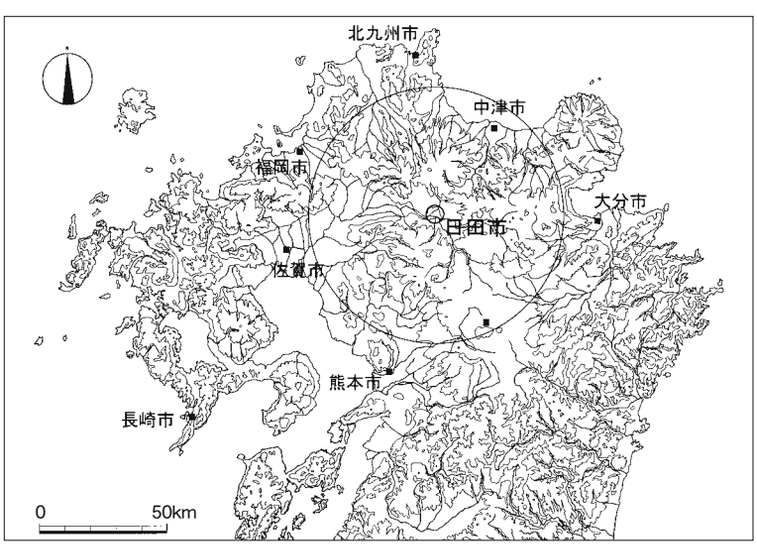
平成 16 年 3 月 31 日

日田市教育委員会

教育長　諫　山　康　雄

例　　言

1．本書は、日田市教育委員会が国庫・県費の補助を受けて実施した吹上遺跡の発掘調査報告書である。
2．吹上遺跡の調査報告書については分冊発行とし、本書では９次～ 11 次調査分を『吹上Ⅱ』として刊行する。
3．９次～ 11 次調査にあたっての調査組織及び調査協力者については『吹上Ⅰ』第１章第４節に記している。
4．調査現場での実測や写真撮影等の記録作成については担当調査員及び調査参加学生が行った。
5．本書の巻頭カラーと各調査報告の記録に用いた航空写真は、平成 10 ～ 12 年度に九州航空に撮影委託した成果品を使用した。
6．写真図版中の番号は、全て挿図番号と一致する。
7．出土遺物及び記録類（図面、写真等）は、日田市埋蔵文化財センターに保管している。
8．本書の執筆は担当調査員及び調査参加学生、整理参加学生が分担して行った。分担執筆分は文末に記している。
9．本書の編集と構成は土居と下村が協議し、主に下村が行った。
10．題字は、日田市文化財調査員である武石邦男氏の揮毫によるものである。



日田市の位置

目　　次

第６章　９次調査の記録 …… 1
第１節　調査の概要 …… 3
第２節　調査の内容 …… 6
１　Ａ地点 …… 6
２　Ｂ地点 …… 23
第３節　小結 …… 83

第７章　10 次調査の記録 …… 141
第１節　調査の概要 …… 143
第２節　調査の内容 …… 147
第３節　小結 …… 182

第８章　11 次調査の記録 …… 221
第１節　調査の概要 …… 223
第２節　調査の内容 …… 226
第３節　小結 …… 233

挿 図 目 次

（第６章　９次調査の記録）
第１図　９次調査の位置（1/2500）…… 2
第２図　９次調査区Ａ地点の位置図（1/1000）…… 4
第３図　Ａ地点遺構配置図（1/400）…… 5
第４図　Ａ地点１号貯蔵穴実測図（1/30）…… 7
第５図　Ａ地点１号貯蔵穴出土遺物実測図（1）（1/4）…… 9
第６図　Ａ地点１号貯蔵穴出土遺物実測図（2）（2/3・1/2・1/3・1/4）…… 10
第７図　Ａ地点１号貯蔵穴出土遺物実測図（3）（1/2・1/3）…… 11
第８図　Ａ地点２号貯蔵穴実測図（1/30）…… 13
第９図　Ａ地点２号貯蔵穴出土遺物実測図（1/2・1/4）…… 15
第10図　Ａ地点１・２号貯蔵穴出土遺物実測図（2/3・1/2・1/3・1/4）…… 16
第11図　Ａ地点３号・４号貯蔵穴実測図（1/30）…… 17
第12図　Ａ地点６号貯蔵穴実測図（1/30）…… 19
第13図　Ａ地点３号・６号貯蔵穴出土遺物実測図（1/4）…… 20
第14図　Ａ地点３号・４号・６号貯蔵穴出土遺物実測図（2/3・1/3）…… 21
第15図　Ａ地点表採その他出土遺物実測図（2/3・1/2・1/3）…… 22
第16図　９次調査区Ｂ地点の位置図（1/500）…… 24

第17図　９次Ｂ地点遺構配置図（1/80）…… 25
第18図　Ｂ地点 10 号竪穴住居実測図（1/60）…… 26
第19図　Ｂ地点 10 号竪穴住居出土遺物実測図（2/3・1/2・1/3・1/4）…… 27
第20図　Ｂ地点 16 号竪穴住居実測図（1/60）…… 28
第21図　Ｂ地点 16 号竪穴住居出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 28
第22図　Ｂ地点 19 号竪穴住居実測図（1/60）…… 29
第23図　Ｂ地点 19 号竪穴住居出土遺物実測図（1/4）…… 30
第24図　Ｂ地点７号貯蔵穴実測図（1/30）…… 32
第25図　Ｂ地点７号貯蔵穴出土遺物実測図（1）（1/4）…… 33
第26図　Ｂ地点７号貯蔵穴出土遺物実測図（2）（1/4）…… 34
第27図　Ｂ地点７号貯蔵穴出土遺物実測図（3）（2/3）…… 35
第28図　Ｂ地点７号貯蔵穴出土遺物実測図（4）（1/3）…… 36
第29図　Ｂ地点８号貯蔵穴実測図（1/30）…… 37
第30図　Ｂ地点８号貯蔵穴出土遺物実測図（1/2・1/4）…… 37
第31図　Ｂ地点 25 号貯蔵穴実測図（1/30）…… 38
第32図　Ｂ地点 25 号貯蔵穴出土遺物実測図（1）（1/4）…… 38
第33図　Ｂ地点 25 号貯蔵穴出土遺物実測図（2）（2/3・1/2・1/3）…… 39
第34図　Ｂ地点 27 号貯蔵穴実測図（1/30）…… 39
第35図　Ｂ地点 27 号貯蔵穴出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 40
第36図　Ｂ地点 35 号貯蔵穴実測図（1/30）…… 41
第37図　Ｂ地点 35 号貯蔵穴出土遺物実測図（1）（1/2・1/4）…… 42
第38図　Ｂ地点 35 号貯蔵穴出土遺物実測図（2）（1/2・1/3・1/6）…… 43
第39図　Ｂ地点 37 号貯蔵穴実測図（1/30）…… 44
第40図　Ｂ地点 37 号貯蔵穴出土遺物実測図（1）（1/2・1/3・1/4）…… 45
第41図　Ｂ地点 37 号貯蔵穴出土遺物実測図（2）（1/2）…… 46
第42図　Ｂ地点 38 号貯蔵穴実測図（1/30）…… 46
第43図　Ｂ地点 38 号貯蔵穴出土遺物実測図（1）（1/4）…… 48
第44図　Ｂ地点 38 号貯蔵穴出土遺物実測図（2）（2/3・1/4）…… 49
第45図　Ｂ地点 42 号貯蔵穴実測図（1/30）…… 50
第46図　Ｂ地点 42 号貯蔵穴出土遺物実測図（1/3・1/4）…… 50
第47図　Ｂ地点６号土坑実測図（1/40）…… 51
第48図　Ｂ地点６号土坑出土遺物実測図（1/2・1/3・1/4）…… 52
第49図　Ｂ地点９号土坑実測図（1/40）…… 53
第50図　Ｂ地点９号土坑出土遺物実測図（1/4）…… 53
第51図　Ｂ地点 17・18・26・28・29・31 号土坑実測図（1/40）…… 54
第52図　Ｂ地点 30 号・32 号～ 34 号土坑実測図（1/40）…… 55
第53図　Ｂ地点土坑出土遺物実測図（1）（1/2・1/4）…… 57
第54図　Ｂ地点土坑出土遺物実測図（2）（2/3・1/2・1/3・1/4）…… 58
第55図　Ｂ地点 21・22 号溝及び 21 号溝出土遺物実測図（1/30・1/4）…… 59
第56図　Ｂ地点１号甕棺墓実測図（1/30）…… 60
第57図　Ｂ地点１号甕棺実測図（1/8）…… 61
第58図　Ｂ地点２号甕棺墓実測図（1/30）…… 62
第59図　Ｂ地点２号甕棺実測図（1/8）…… 62
第60図　Ｂ地点３号甕棺墓実測図（1/30）…… 63
第61図　Ｂ地点３号甕棺実測図（1/8）…… 64

第62図　Ｂ地点４号甕棺墓実測図（1/30）…… 65
第63図　Ｂ地点４号甕棺実測図（1/8）…… 66
第64図　Ｂ地点 12 号甕棺墓実測図（1/20）…… 67
第65図　Ｂ地点 12 号甕棺実測図（1/8）…… 67
第66図　Ｂ地点 14 号甕棺墓実測図（1/20）…… 68
第67図　Ｂ地点 14 号甕棺実測図（1/8）…… 68
第68図　Ｂ地点 24 号甕棺墓実測図（1/20）…… 69
第69図　Ｂ地点 24 号甕棺実測図（1/8）…… 69
第70図　Ｂ地点 41 号甕棺墓実測図（1/20）…… 70
第71図　Ｂ地点 41 号甕棺実測図（1/8）…… 70
第72図　Ｂ地点甕棺墓壙出土遺物実測図（1/4）…… 71
第73図　Ｂ地点 13 号土壙墓実測図（1/30）…… 71
第74図　Ｂ地点 20 号木棺墓実測図（1/30）…… 72
第75図　Ｂ地点 23 号土壙墓実測図（1/30）…… 73
第76図　Ｂ地点 44 号木棺墓実測図（1/30）…… 73
第77図　Ｂ地点５号石棺甕棺併用墓実測図（1）（1/30）…… 74
第78図　Ｂ地点５号石棺甕棺併用墓実測図（2）（1/30）…… 75
第79図　Ｂ地点５号石棺甕棺併用墓甕棺実測図（1/8）…… 76
第80図　Ｂ地点 15 号石蓋土壙墓実測図（1/30）…… 76
第81図　Ｂ地点土壙墓・木棺墓等墓壙出土遺物実測図　(2/3・1/2・1/3・1/4)…… 77
第82図　Ｂ地点柱穴他出土遺物実測図（1）（1/2・1/4）…… 78
第83図　Ｂ地点柱穴他出土遺物実測図（2）（1/2・1/4）…… 79
第84図　Ｂ地点出土石器実測図（2/3・1/2）…… 80

（第７章　10 次調査の記録）

第１図　10 次調査の位置（1/2500）…… 142
第２図　10 次調査区の位置図（1/1000）…… 144
第３図　９・10 次調査区遺構配置図（1/100）…… 145・146
第４図　36 号竪穴住居実測図（1/60）…… 148
第５図　36 号竪穴住居出土遺物実測図（1/2・1/4）…… 149
第６図　115 号竪穴住居実測図（1/60）、炉址土層断面図（1/30）…… 150
第７図　115 号竪穴住居出土遺物実測図（2/3・1/4）…… 150
第８図　122 号竪穴住居実測図（1/60）…… 151
第９図　122 号竪穴住居出土遺物実測図（1/4）…… 152
第10図　142 号竪穴住居出土遺物実測図（1/2・1/4）…… 152
第11図　145 号竪穴住居実測図（1/60）…… 152
第12図　101 号貯蔵穴実測図（1/30）…… 153
第13図　101 号貯蔵穴出土遺物実測図（1/4）…… 154
第14図　102 号貯蔵穴実測図（1/30）…… 155
第15図　102 号貯蔵穴出土遺物実測図（2/3・1/2・1/4）…… 156
第16図　103 号貯蔵穴実測図（1/30）…… 157
第17図　103 号貯蔵穴出土遺物実測図（1/4）…… 158
第18図　104 号貯蔵穴実測図（1/30）…… 159
第19図　105 号・111 号貯蔵穴実測図（1/30）…… 160

第20図　103・111 号貯蔵穴出土遺物実測図（1/4）…… 161
第21図　112 号土坑実測図（1/40）…… 161
第22図　112 号土坑出土遺物実測図（1）（1/2）　…… 163
第23図　112 号土坑出土遺物実測図（2）（1/4）　…… 163
第24図　127・128・131 ～ 133・137・140・143 号土坑実測図（1/40）… 164
第25図　土坑出土遺物実測図（1/4）…… 165
第26図　102・109・113・114・125 号柱穴実測図（1/40）　…… 166
第27図　土坑及び柱穴出土遺物実測図（1/4）…… 167
第28図　柱穴出土遺物実測図（1/4）…… 168
第29図　100 号溝実測図（1/40・1/80）…… 169
第30図　100 号溝出土遺物実測図（1）（1/4）…… 171
第31図　100 号溝出土遺物実測図（2）（1/2）…… 172
第32図　100 号溝出土遺物実測図（3）（2/3・1/2・1/3）　…… 172
第33図　149 号掘立柱建物実測図（1/60）…… 173
第34図　150 号掘立柱建物実測図（1/60）…… 173
第35図　116 号甕棺墓実測図（1/20）…… 174
第36図　116 号甕棺実測図（1/8）…… 175
第37図　144 号甕棺墓実測図（1/20）…… 175
第38図　144 号甕棺実測図（1/8）…… 175
第39図　136 号・147 号土壙墓実測図（1/30）…… 176
第40図　107 号木棺墓実測図（1/30）…… 177
第41図　108 号木棺墓・109 号土壙墓実測図（1/30）…… 178
第42図　107 号・108 号木棺墓出土遺物実測図（2/3・1/2・1/4）　…… 179
第43図　その他の遺構（146 号貯蔵穴）出土遺物実測図（1/4）…… 180
第44図　115 号竪穴住居・113 号貯蔵穴・126 号土坑出土遺物実測図（1/2・1/3）… 181
第45図　10 次調査遺構検出面出土石器実測図（1/2）　…… 182

（第８章　11 次調査の記録）

第１図　11 次調査の位置（1/2500）　…… 222
第２図　11 次調査区の位置（1/1000）　…… 224
第３図　11 次調査区全体図（1/150）…… 225
第４図　２号竪穴住居実測図（1/60）　…… 226
第５図　２号竪穴住居出土遺物実測図（1/4）…… 226
第６図　６号貯蔵穴実測図（1/30）　…… 227
第７図　７号貯蔵穴・５号土坑・１号溝実測図（1/30・1/40・1/80）…… 228
第８図　３号・５号土坑・６号貯蔵穴出土遺物実測図（2/3・1/2・1/3・1/4）…… 230
第９図　１号溝出土遺物実測図（2/3・1/2・1/3・1/4）…… 231
第10図　４号溝・柱穴・その他出土遺物実測図（2/3・1/2・1/4）…… 232

写 真 図 版 目 次

巻頭図版１　吹上台地全景（東上空から）
　　９次調査区Ｂ地点全景（上空から）
巻頭図版２　10 次調査区全景（上空から）
　　11 次調査区全景

（第６章　９次調査の記録）
図版１　Ａ地点全景（西から）…… 93
　　Ａ地点１号貯蔵穴土層堆積状況（東から）
図版２　Ａ地点１号貯蔵穴出土状況（東から）…… 94
　　Ａ地点Ｄ３区遺構検出状況（西から）
図版３　Ａ地点２号貯蔵穴出土状況（北から）…… 95
　　Ａ地点３号（右）・４号（左）貯蔵穴出土状況（西から）
図版４　Ａ地点６号貯蔵穴出土状況（西から）…… 96
　　Ａ地点６号貯蔵穴出土状況（南から）
図版５　Ｂ地点及び吹上原台地全景（西上空から）…… 97
　　Ｂ地点全景（上空から）
図版６　Ｂ地点 10 号竪穴住居出土状況（北から）…… 98
　　Ｂ地点 16 号竪穴住居出土状況（北から）
図版７　Ｂ地点 19 号竪穴住居出土状況（西から）…… 99
　　Ｂ地点 19 号竪穴住居遺物出土状況（南から）
図版８　Ｂ地点７号貯蔵穴出土状況（北から）…… 100
　　Ｂ地点７号貯蔵穴遺物出土状況（北から）
図版９　Ｂ地点８号貯蔵穴出土状況（東から）…… 101
　　Ｂ地点 25 号貯蔵穴出土状況（東から）
図版10　Ｂ地点 27 号貯蔵穴出土状況（東から）…… 102
　　Ｂ地点 35 号貯蔵穴出土状況（東から）
図版11　Ｂ地点 37 号貯蔵穴出土状況（南から）…… 103
　　Ｂ地点 38 号貯蔵穴出土状況（南から）
図版12　Ｂ地点 42 号貯蔵穴出土状況（南から）…… 104
　　Ｂ地点６号土坑遺物出土状況（東から）
図版13　Ｂ地点６号土坑出土状況（西から）…… 105
　　Ｂ地点９号土坑出土状況（西から）
図版14　Ｂ地点 17 号土坑出土状況（北から）…… 106
　　Ｂ地点 28 号土坑遺物出土状況（東から）
図版15　Ｂ地点 29 号土坑出土状況（東から）…… 107
　　Ｂ地点 31 号土坑出土状況（北から）
図版16　Ｂ地点 32 号土坑出土状況（北から）…… 108
　　Ｂ地点 33 号土坑出土状況（東から）
図版17　Ｂ地点 34 号土坑出土状況（東から）…… 109
　　Ｂ地点墓地群出土状況（上空から）
図版18　Ｂ地点１号甕棺墓土層堆積状況（北から）…… 110
　　Ｂ地点１号甕棺墓出土状況（北から）

図版19　B 地点１号甕棺墓人骨出土状況（北から）…… 111
B 地点２号甕棺墓出土状況（北から）
図版20　B 地点２号甕棺墓人骨出土状況（北から）…… 112
B 地点３号甕棺墓土層堆積状況（東から）
図版21　B 地点３号甕棺墓出土状況（北から）…… 113
B 地点３号甕棺墓人骨出土状況（北から）
図版22　B 地点４号甕棺墓出土状況（西から）…… 114
B 地点４号甕棺墓出土状況（北から）
図版23　B 地点 12 号甕棺墓出土状況（南から）…… 115
B 地点 12 号甕棺墓人骨出土状況（南から）
図版24　B 地点 14 号甕棺墓出土状況（東から）…… 116
B 地点 24 号甕棺墓出土状況（東から）
図版25　B 地点 24 号甕棺墓出土状況（北から）…… 117
B 地点 41 号甕棺墓出土状況（西から）
図版26　B 地点 20 号木棺墓出土状況（東から）…… 118
B 地点 23 号土壙墓出土状況（東から）
図版27　B 地点５号石棺甕棺併用墓蓋石出土状況（西から）…… 119
B 地点５号石棺甕棺併用墓出土状況（東から）
図版28　B 地点５号石棺甕棺併用墓甕棺部分出土状況（南から）…… 120
B 地点５号石棺甕棺併用墓石棺部分出土状況（東から）
図版29　B 地点 15 号石蓋土壙墓・44 号木棺墓出土状況（南から）…… 121
B 地点 15 号石蓋土壙墓蓋石出土状況（西から）
図版30　B 地点扁平片刃石斧出土状況 …… 122
B 地点太型蛤刃石斧出土状況
図版31　９次調査区出土遺物 …… 123 ～ 140
～48

（第７章　10 次調査の記録）

図版１　10 次調査区及び市街地遠望（北上空から）…… 187
調査区全景（東から）
図版２　調査区遠望（東上空から）…… 188
調査区全景（上空から）
図版３　遺構群分布状況（１）（上空から）…… 189
遺構群分布状況（２）（北上空から）
図版４　遺構群分布状況（３）（北上空から）…… 190
36 号竪穴住居出土状況（東から）
図版５　115 号竪穴住居出土状況（東から）…… 191
115 号竪穴住居出土状況（北から）
図版６　115 号竪穴住居遺物出土状況（西から）…… 192
115 号竪穴住居炉址出土状況（１）（南から）
図版７　115 号竪穴住居炉址出土状況（２）（東から）…… 193
122 号竪穴住居出土状況（南から）
図版８　145 号竪穴住居出土状況（南から）…… 194
101 号貯蔵穴土層堆積状況（北から）

図版３　６号貯蔵穴遺物出土状況（南から） …… 237
　　６号貯蔵穴土層堆積状況（南から）
図版４　５号土坑土層堆積状況（北から） …… 238
　　５号土坑出土状況（東から）
図版５　第１トレンチ１号溝出土状況（北から） …… 239
　　第２トレンチ１号溝出土状況（東から）
図版６　第３トレンチ１号溝出土状況（東から） …… 240
　　第４トレンチ４号溝出土状況（東から）
図版７　11 次調査区出土遺物 …… 241

挿 入 写 真 目 次

（第６章　９次調査の記録）
写真１　Ａ地点から市街地を望む …… 3
写真２　Ｂ地点発掘作業風景① …… 23
写真３　Ｂ地点発掘作業風景② …… 84
（第７章　10 次調査の記録）
写真１　現地説明会風景 …… 143
（第８章　11 次調査の記録）
写真１　発掘調査風景 …… 223

表　　目　　次

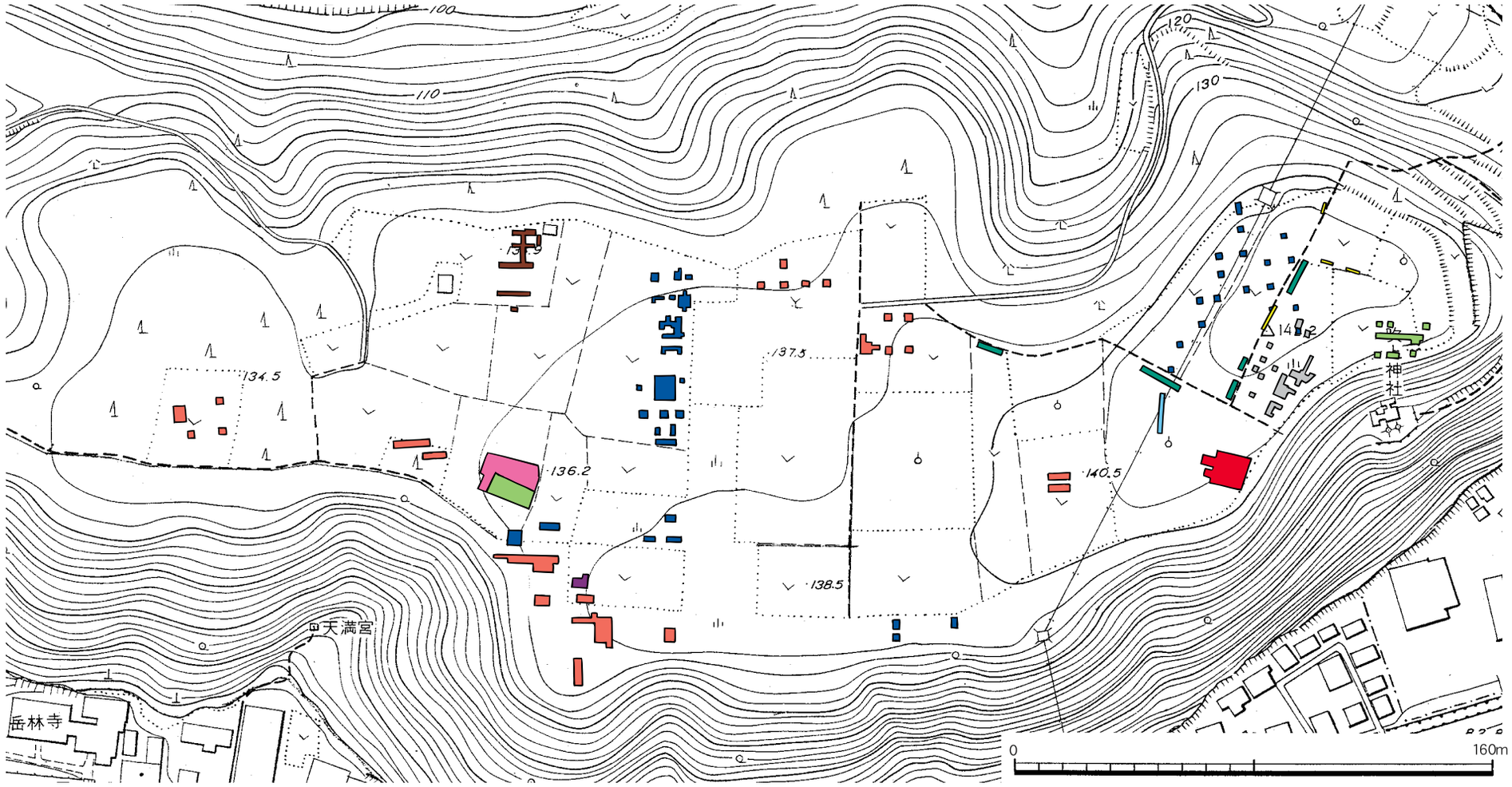
（第６章　９次調査の記録）
第１表　９次調査出土土器観察表 …… 85
第２表　９次調査出土土製品観察表 …… 91
第３表　９次調査出土石器観察表 …… 91
（第７章　10 次調査の記録）
第１表　10 次調査出土土器観察表 …… 183
第２表　10 次調査出土土製品観察表 …… 186
第３表　10 次調査出土石器観察表 …… 186
（第８章　11 次調査の記録）
第１表　11 次調査出土土器観察表 …… 234
第２表　11 次調査出土石器観察表 …… 234

図版９　102 号貯蔵穴土層堆積状況（東から）…… 195
102 号貯蔵穴出土状況（北から）
図版10　103 号貯蔵穴土層堆積状況（北から）…… 196
103 号貯蔵穴遺物出土状況（北から）
図版11　103 号貯蔵穴出土状況（南から）　…… 197
104 号貯蔵穴土層堆積状況（北から）
図版12　105 号貯蔵穴土層堆積状況（北から）…… 198
111 号貯蔵穴出土状況（北から）
図版13　111 号貯蔵穴出土状況（西から）…… 199
112 号土坑遺物出土状況（北から）
図版14　112 号土坑遺物出土状況（東から）…… 200
127 号土坑出土状況（東から）
図版15　131 号土坑遺物出土状況（西から）…… 201
133 号土坑遺物出土状況（南から）
図版16　143 号土坑遺物出土状況（東から）…… 202
109 号柱穴遺物出土状況（南から）
図版17　113 号柱穴遺物出土状況（南から）…… 203
114 号柱穴遺物出土状況（南から）
図版18　100 号溝全景（北上空から）…… 204
100 号溝全景（東上空から）
図版19　100 号溝全景（北から）…… 205
100 号溝Ⅰ区南側土層堆積状況（北から）
図版20　100 号溝Ⅱ区南側土層堆積状況（北から）…… 206
100 号溝Ⅱ区北側土層堆積状況（南から）
図版21　149 号掘立柱建物出土状況（東から）…… 207
150 号掘立柱建物出土状況（南から）
図版22　116 号甕棺墓出土状況（南から）…… 208
116 号甕棺墓出土状況（西から）
図版23　144 号甕棺墓出土状況（東から）…… 209
136 号土壙墓出土状況（東から）
図版24　147 号土壙墓出土状況（東から）…… 210
107 号木棺墓出土状況（東から）
図版25　107 号木棺墓出土状況（北から）…… 211
108 号木棺墓出土状況（南から）
図版26　108 号木棺墓出土状況（東から）…… 212
109 号土壙墓出土状況（南から）
図版27　10 次調査区出土遺物 …… 213 ～ 220
～34

（第８章　11 次調査の記録）
図版１　調査区全景（上空から）…… 235
調査区全景（東上空から）
図版２　調査区近景（南から）…… 236
２号竪穴住居出土状況（東から）

第６章　９次調査の記録

吹上原台地空中写真（白印は調査位置）



第１図　９次調査の位置（1/2500）

1次　2次　3次　4次　5次　6次　7次　8次　9次　10次　11次

第１節　調査の概要（第１図）

９次調査はこれまでの調査成果を受け、吹上遺跡の保存を目的とした内容把握のための確認調査として実施したものである。調査地点は２ヶ所設け、台地東端部近くの市街地が一望に見渡せる場所をＡ地点とした。吹上神社のすぐ上に位置し、青銅器や鉄器、玉類が副葬されていた６次調査地点の北東約70ｍの位置にあたる。一方、台地西側の休耕地をＢ地点として設定した。東南部には既調査地の２次・４次調査区があり、土坑や甕棺墓・石棺墓などが調査されている。Ｂ地点でも同様の遺構の広がりが想定できた。

調査は平成10年７月22日に着手し、８月31日に終了した。調査面積は合計291㎡である。Ａ地点では５ｍ×５ｍのグリットを設定し、東西軸をＡ～Ｅとし、南北軸を１～３と呼称した。2.5m×2.5m のグリットを５ヶ所、20ｍ×２ｍのトレンチ（その後４ｍ×２ｍ拡張）１ヶ所、５ｍ×2.5ｍのトレンチを１ヶ所設定した。表土除去は手掘りで行い、30～60cm で黄褐色ロームの遺構面に達した。場所によってはかなり削平を受けており、ゴボウ栽培による溝状の撹乱が多く見られた。調査の結果、貯蔵穴５基、不明遺構１基、柱穴群などが確認できた。遺構は台地縁辺ぎりぎりまで広がっており、崖そのものが長い年月の間に侵食されていることを窺わせている。Ｂ地点は10ｍ×20ｍの範囲を面的に調査した。重機によって表土を除去し、その後人力による掘り下げを行った。検出された遺構は、円形竪穴住居２軒、方形竪穴住居１軒、掘立柱建物２棟、貯蔵穴８基、土坑12基、溝２条、成人用甕棺墓４基、小児用甕棺墓４基、木棺墓２基、土壙墓２基、石棺甕棺併用墓１基、石蓋土壙墓１基、未掘及び性格の不明瞭な遺構６基、ピット群などである。遺構群は調査区全体に認められ、生活遺構と墓地遺構とに分けられる。墓地遺構は調査区北側にまとまって検出された。調査内容の一部はすでに概要報告にまとめているので本報告もそれを踏襲しているが、一部変更が生じた部分については本報告をもって正式な報告としたい。

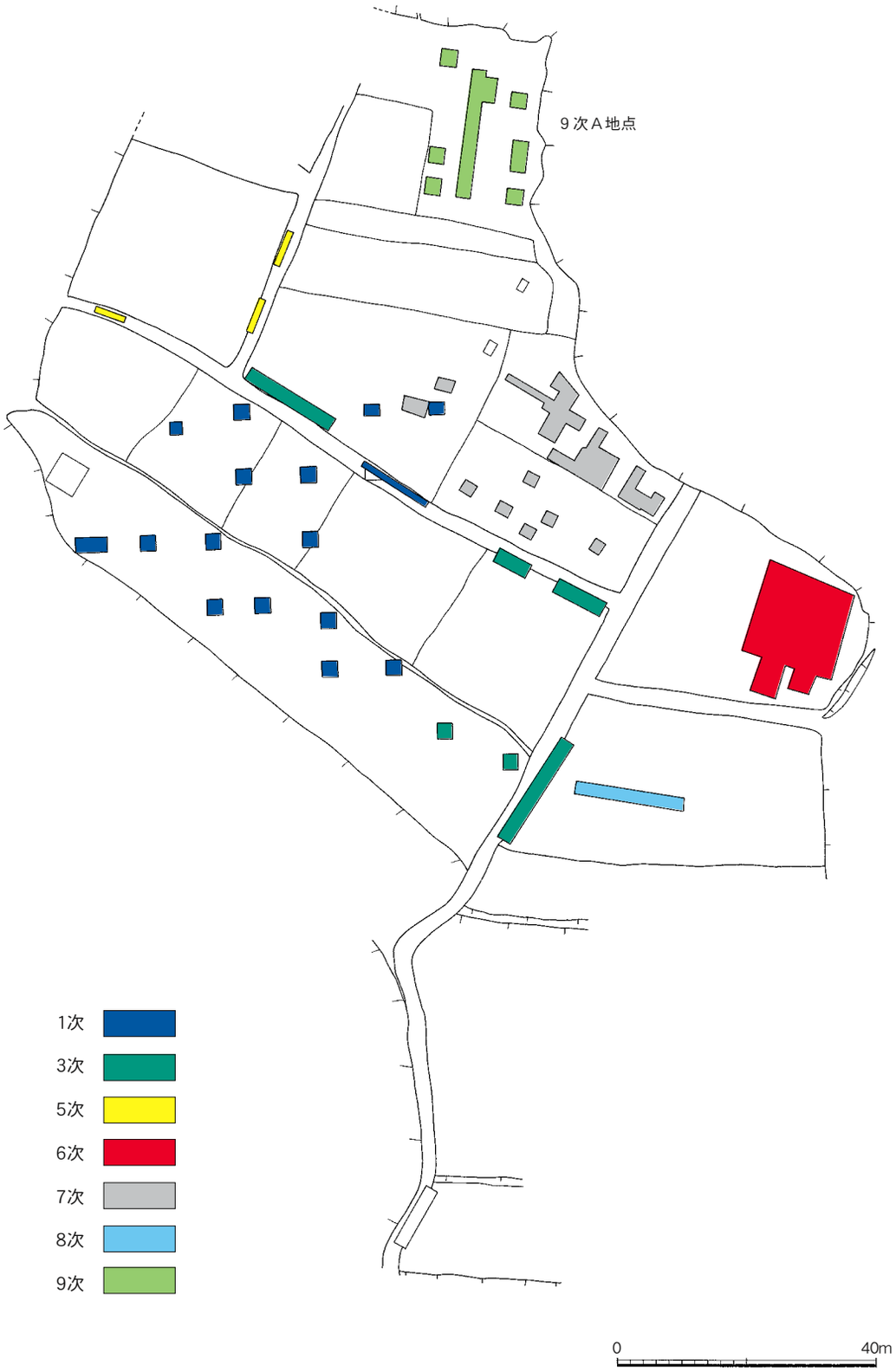
９次調査の報告に関する平成15年度の組織体制は、以下のとおりである。

調査責任者　諌山康雄（日田市教育委員会教育長）

調 査 事 務　後藤　清（同文化課長）、佐藤　晃（同文化課文化財係長兼埋蔵文化財係長）、園田恭一郎（同文化課主査）

報告書担当　土居和幸（同文化課主査）、下村　智（別府大学文学部助教授）

写真１　Ａ地点から市街地を望む



第２図　９次調査区Ａ地点の位置図（1/1000）

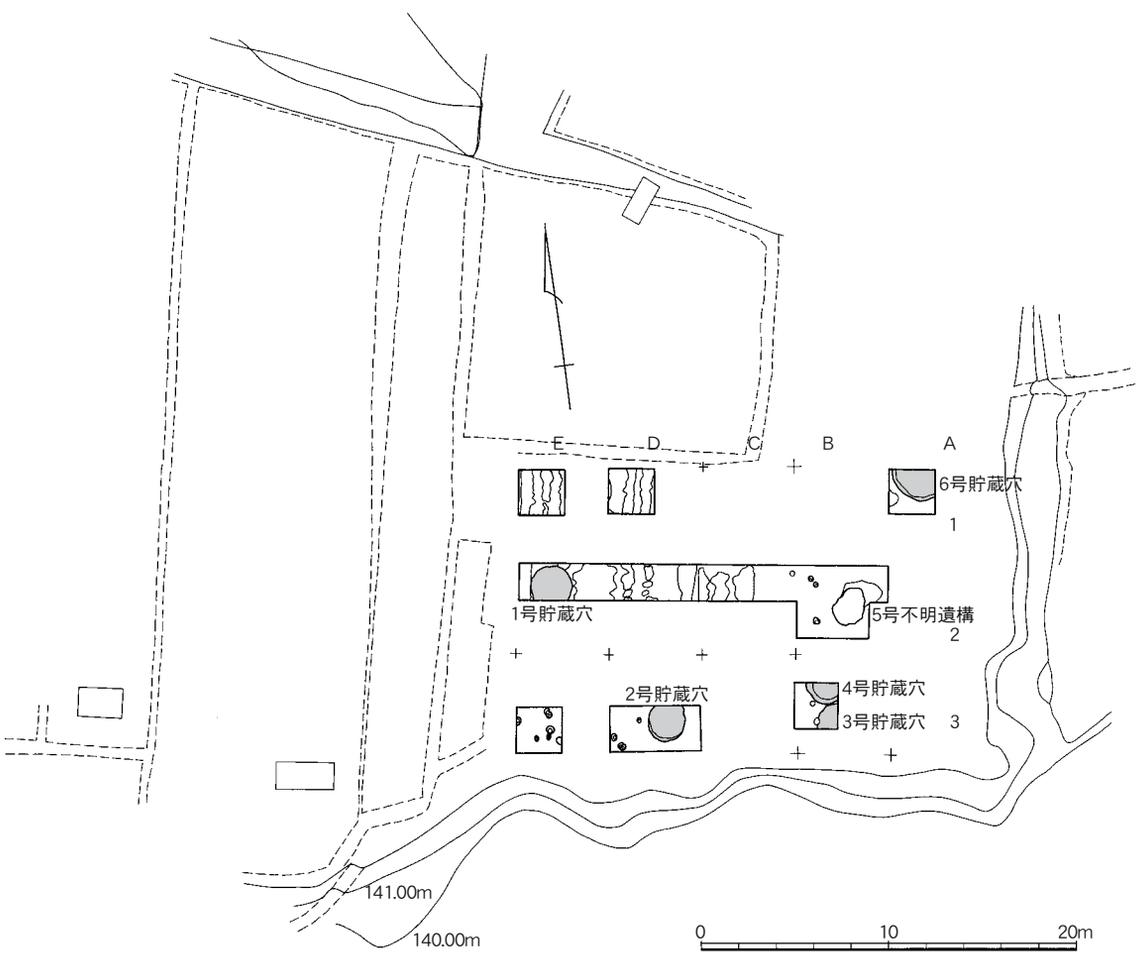
整理　作業　玉川剛司、井上誠二、北川貴洋、下森弘之、伊藤友美子、末國琢也、田中健一郎、鶴田貴大、手柴智晴、坂井貴志（文化財学専攻大学院生及び科目等履修生）、豊田沙和美、谷山こず恵、平ノ内武史、平山景将、嘉村哲也、坂井由葉、坂本　梢、西村康子、松下弥生、横尾明花（文化財学科学生）

なお、報告書に掲載した挿図・図版作成に携わった関係者は次のとおりである。

遺物　実測　吉田和彦、玉川剛司、井上誠二、北川貴洋、下森弘之、伊藤友美子、末國琢也、田中健一郎、鶴田貴大、手柴智晴、坂井貴志（文化財学専攻大学院生及び科目等履修生）、豊田沙和美（文化財学科学生）

製　　図　吉田和彦、北川貴洋、下森弘之、伊藤友美子、末國琢也（文化財学専攻大学院生）、江上正高（大分市教育委員会嘱託）、山本哲也（大分県教育委員会嘱託）、藤野美音（日田市教育委員会調査補助員）

遺物　写真　玉川剛司（文化財学専攻大学院生）



第３図　Ａ地点遺構配置図（1/400）

第２節　調査の内容

１　Ａ地点

５基の袋状貯蔵穴と性格の不明な遺構１基、ピット群が検出されている。袋状貯蔵穴は下半部のみしか残存していないものが多く､形状から考えると１ｍ以上削平を受けているものと推測される。袋状貯蔵穴については以下に説明を加えるが、Ｂ２区で検出された５号遺構について簡単にふれておきたい。この遺構は井戸状に掘り込まれたもので、2.5ｍ掘り下げたが底に到達しなかった。黄褐色系の層が厚い層序をなしており、土層で確認する限り人為的に一気に埋めたものと思われる。堆積土は地山に近似したもので新しい土は混じっていないことを考慮すると、かなり古いものであろう。Ｂ２・Ｃ２区などでは地面に陥没がみられ、似たような状況を呈していることから、このような陥没を埋めたものである可能性がある。遺物は全く出土していない。

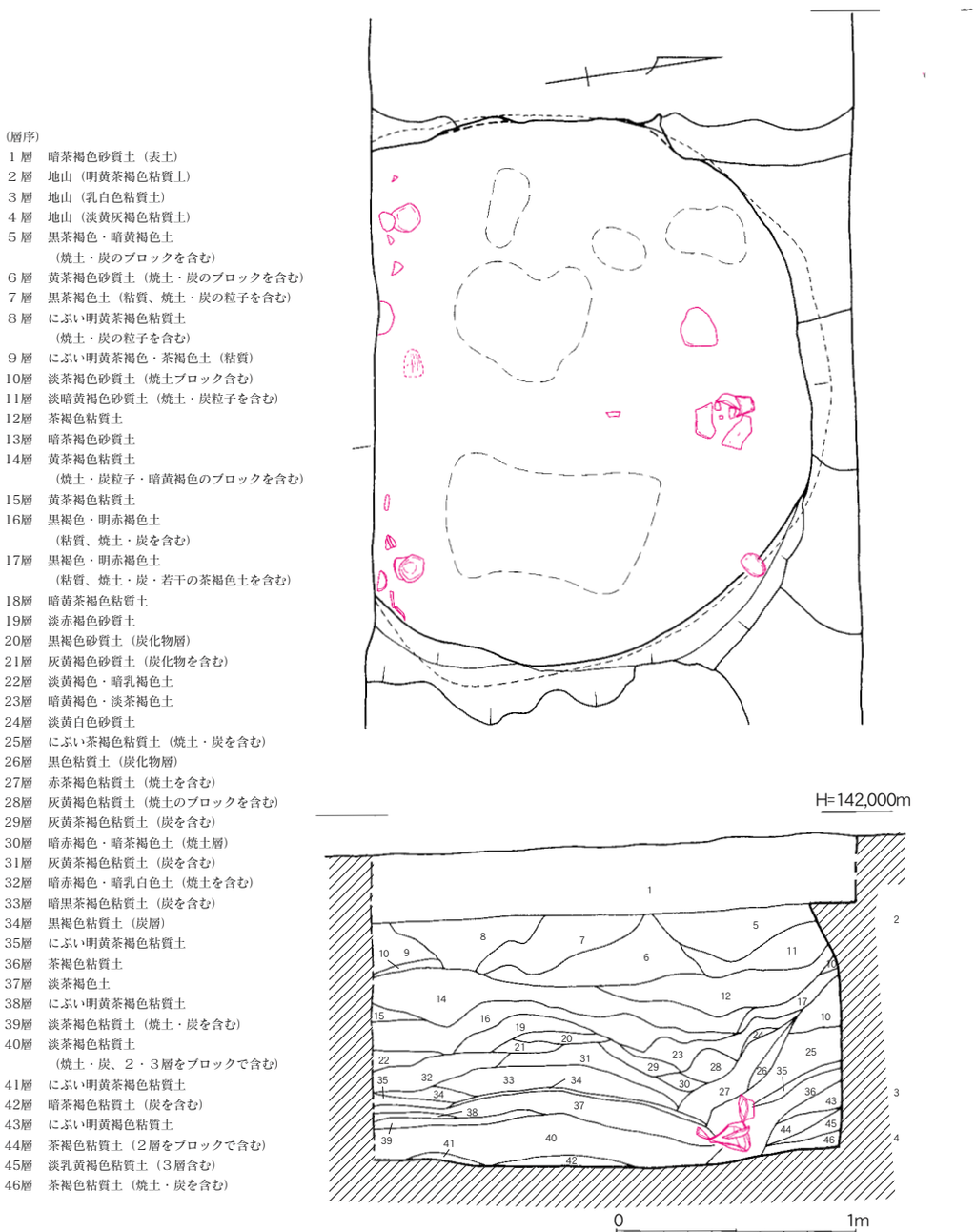
柱穴はＢ２・３、Ｄ３、Ｅ３区でそれぞれ検出している。調査区が狭いため建物としては復元できないが、柱穴内からは弥生土器の細片が出土している。調査区全体では弥生前期末から中期初頭の遺物が主体を占め、３号貯蔵穴を切っている柱穴も存在することから、貯蔵穴群の時期と同時期かやや新しい時期に属するものであろう。

１号貯蔵穴（第４～７図、図版１・２）

Ｅ２区の西側で検出した袋状貯蔵穴である。上面は削平されているが、確認面で径2.3ｍ、深さ1.24ｍ、底径2.45ｍを測る。埋土は大きく、上・中・下の３層群に分けることができる。上層は茶褐色を呈し、中央部には焼土と炭化物がブロック状に含まれる。中層は暗茶褐色を呈し、上層と同様に焼土と炭化物がみられる。中央部には直径50cm、厚さ５cm 程の円形の灰層が広がる。この灰層は灰黒色を呈し、粒子は非常に細かい。下層は茶褐色の粘質土で、焼土がブロック状に散らばり、５mm 前後の炭化物も含まれている。遺物は下層からまとまって出土している。主に壁面付近や中央部に集中していた。遺物は甕形土器が主体を占め、壺形土器や磨製石器などもみられた。１号貯蔵穴は各層にわたって焼土や炭化物が含まれており、貯蔵穴としての機能が停止した後は、廃棄物の処理土坑として使用されたものであろう。

第５～７・10図は出土した遺物である。第５図１～21は主に上層から出土した土器群である。１・２は甕で、口縁から胴部上位まで残存する。１は如意形口縁を呈し、屈曲がやや強くなっている。端部は薄く引きのばす。胴部の器壁は厚い。２は逆Ｌ字状口縁を有し、上面に平坦面を持つ。全体的に薄い作りになっている。ともに外面の口縁下に１条の沈線を巡らす。１の外面には粗いナナメハケとやや細かなタテハケが施され、口縁内面にも粗いハケ目痕が残る。２には細かなタテハケとナナメハケがみられる。３～８は甕の口縁部である。３は如意形口縁を呈し、端部に刻目を施す。口縁下には沈線がみられる。４はいわゆる下城式の甕口縁部で、端部は平坦に仕上げ、外面口縁下に刻目を施した三角突帯を貼り付ける。５は口縁端部が両側に張り出し、中央部がやや窪む。器形の傾きから器高が浅めのものであろうか。６は逆Ｌ字状を呈する口縁で､口縁下に沈線を施す。７も逆Ｌ字状口縁を有し、口縁下に浅い突出の三角突帯を持つ。全体に器壁が厚く内面には指頭圧痕がみられる。８は強く外反する口縁を持つ甕で、端部は肥厚し中央部が窪む。未発達な跳ね上げ口縁である。内外面ともに、屈曲部には成形時の指頭圧痕がみられる。外面はタテハケの後、やや幅広い横方向のミガキが施され、内面にも横及び斜めの細かなミガキが加えられる。９～13は甕

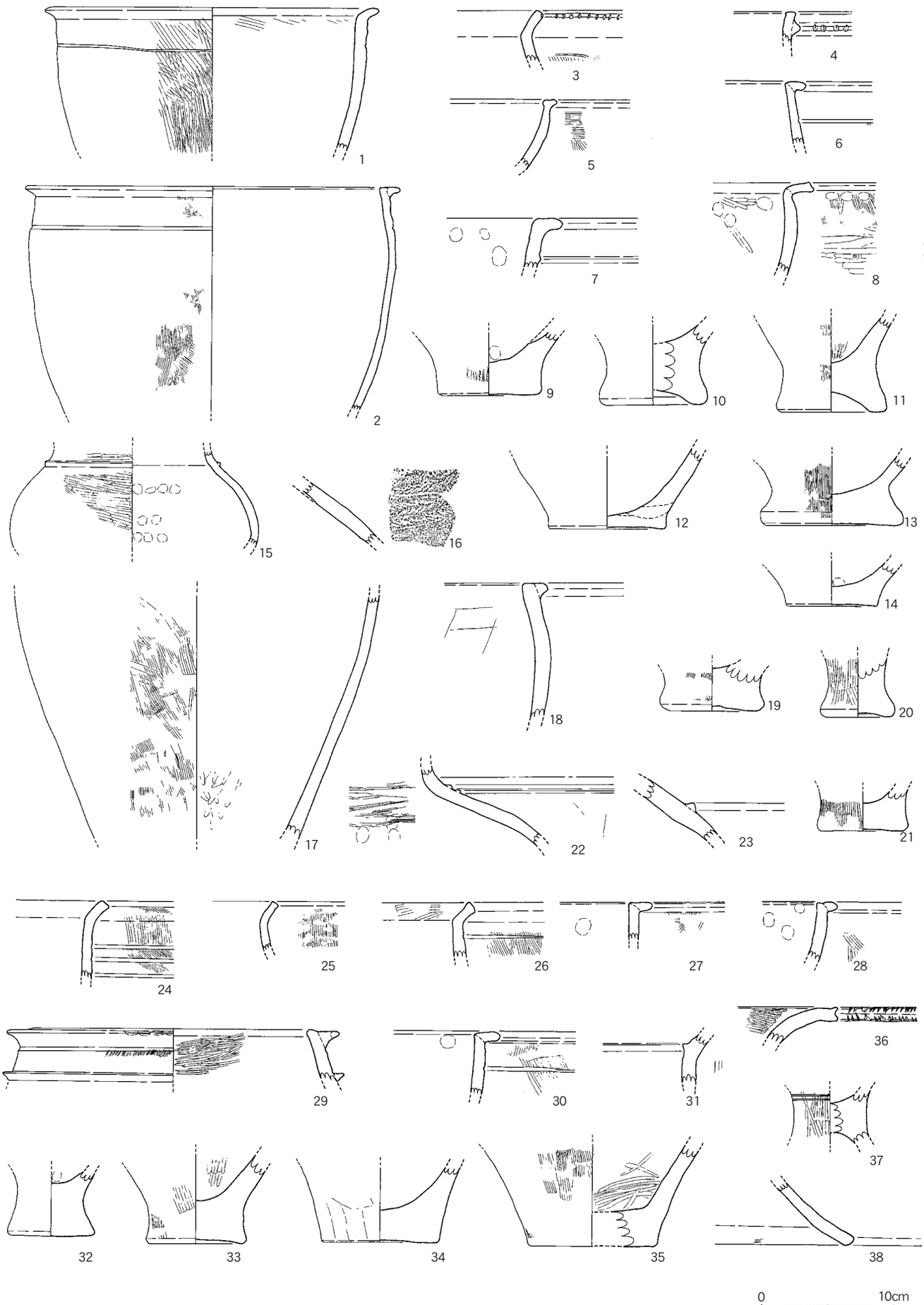
の底部である。９は平底で底面から直に立ち上って外側に開く厚みのある底部である。外面はタテハケ、内面には指頭圧痕がみられる。10はきわめて厚いつくりで、窪み底となり、底面から一旦括れて外側に広がるタイプである。11も似たタイプで底面の窪みがさらに強い。底面は一旦平坦面を形成し、中央部が半球状に窪む。外面はタテハケ、内面にはミガキが加えられている。12は単純に外側へ広がる形態である。全体に薄いつくりとなっている。13は大きく括れてやや内弯しながら上方に伸びる底部である。厚みが強く底面はやや窪む。外面はタテハケ、内面はナデ調整である。14は壺の底部である。底面は周縁を除いてやや窪み、外面及び底面にはヘラミガキが施される。15は壺の頸部から胴部上半である。胴部は扁球形を呈し、外面の頸部と肩部との境に三角



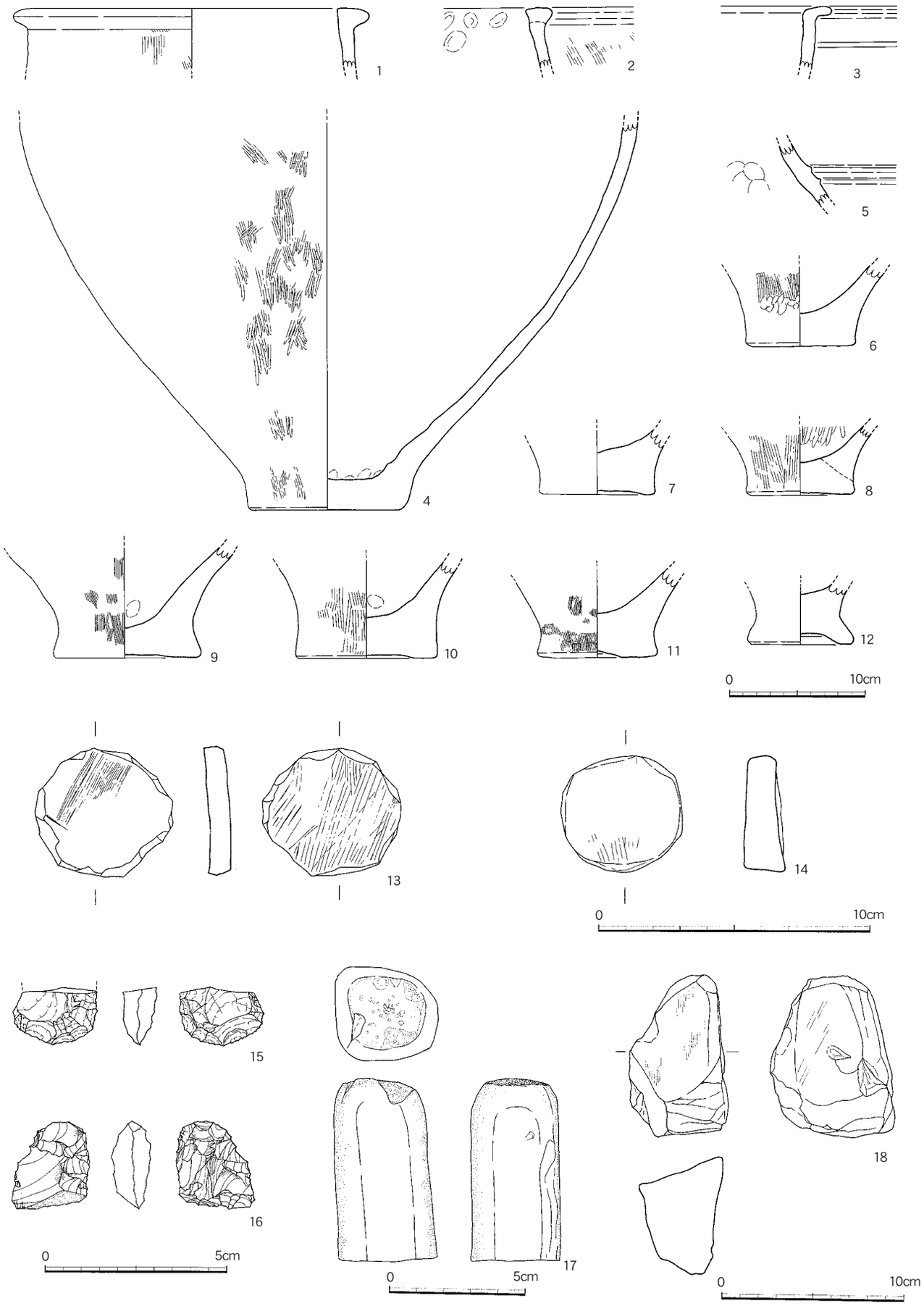
第４図　Ａ地点１号貯蔵穴実測図（1/30）

突帯を巡らす。調整は外面がヨコ及びナナメ方向のヘラミガキで、内面には指頭圧痕が残る。16は壺の肩部である。無軸羽状文が３段施文され、下端に沈線を１条巡らす。17～21は主に東半部から出土した土器である。17は甕の胴部で、口縁部及び底部を欠損する。外面にはタテハケとナナメハケが、内面下部にはミガキが観察される。18は甕の口縁から胴部上位で、口縁部は未発達な短い逆Ｌ字状を呈する。外面は磨耗のため調整は不明であるが、内面には工具ナデがみられる。全体的に厚いつくりになっている。19～21は甕の底部である。19・20は若干窪み底を呈し、底面より一旦括れて外側に広がる厚みのある形態である。19は外面にタテハケを施す。20は細身で高い。外面にハケ目調整が施される。21も同様のタイプで底面は平底に近いがやや窪む。外面にタテ方向のハケ目調整がみられる。22は壺の頸部から肩部にかけての部位である。扁球形の胴部を持つとみられ、頸部と肩部の境には断面三角形の貼付突帯が２条施される。磨耗のため詳細は不明であるが、ハケもしくは工具ナデのような痕跡がある。その後ミガキを施したのであろうか。内面は指オサエの後、ヨコ方向のヘラミガキが加えられている。23は壺の肩部である。外面には断面三角形の貼付突帯が１条みられるほか、ヨコナデが施されている。24～38は中層出土の土器群である。24～26は外反口縁を持つ甕の口縁部である。24は口縁部がゆるく外反し、端部は方形で平坦面を持つ。外面はタテ及びナナメハケの後、口縁下に3条の沈線を巡らす多条沈線をもつタイプである。瀬戸内の影響を受けたものと思われる。25は口縁部がゆるく外反し、端部は方形でやや肥厚する。外面はタテ及びナナメハケを施す。26はくの字状を呈し､端部は方形でやや肥厚する。外面はタテ及びナナメハケの後、口縁下に１条の沈線を施す。沈線はやや整美ではない。なお、内面はハケ及びナデが主体である。27～30も甕の口縁部であり、口縁部が逆Ｌ字状を呈するタイプである。27は上面が平坦になり、28は接合部が窪む。ともに外面はタテハケ、内面はナデ調整である。29は口縁部に、断面三角形の突帯を貼付け、逆Ｌ字状に形成している。口縁下に断面三角形の貼付突帯を１条巡らす。外面にはタテハケが、口縁付近及び内面には横方向主体のミガキがみられる。30は外面がタテ及びナナメハケの後、口縁下に粗い沈線を施し、内面はナデ調整である。31は壺の頸部付近で､内面に断面三角形の突帯を有す。周防灘沿岸地域の影響をうけた土器である。32･33は甕の底部で、32は細身で器壁が厚いつくりになっており、内面には指頭圧痕がみられる。33は若干窪み底を呈す。外面にはタテハケ、内面にはミガキを施す。34・35も甕の底部である。両者とも外面にはタテハケがみられる。34は底面が中央にむかって若干窪む。35は内面に螺旋状のミガキがみられる。36は壺の口縁部片で、口縁端部は窪み、両方に刻目を持つ。内面には横方向のミガキを施す。37は高坏の脚部であり、縦方向のミガキの後、坏部との境に2条の細い沈線を施す。38は蓋の口縁部で、ハケの後ナデ調整がみられる。

第６図は、11が最上層、５・９・12は中層、１～４・６～８・10は下層出土のものである。１～３は甕の口縁部である。１・３の口縁部は短い逆Ｌ字状を呈し、２は上面に平坦面を持ち、内外に肥厚させるタイプである。３には口縁下に１条の沈線がみられる。調整は主に外面がタテハケ、内面がナデである。２には口縁部整形時の指頭圧痕が残る。４は壺で、胴部下半から底部が残存する。外面にはタテ方向のミガキが施され、底部付近にハケ目調整が残る。内面底部付近には指頭圧痕がみられる。５は壺の肩部で、外面には２条の断面三角形の突帯がめぐる。内面には指頭圧痕がみられる。６～12は甕の底部で、調整は外面がタテハケ、内面はナデ主体である。６の外面にはタテハケの後、調整の際と思われる工具痕が残る。７～10は厚みのある平底であるが底面中央部



第５図　Ａ地点１号貯蔵穴出土遺物実測図（1）（1/4）



第６図　Ａ地点１号貯蔵穴出土遺物実測図（２）（2/3・1/2・1/3・1/4）

第７図　Ａ地点１号貯蔵穴出土遺物実測図（３）（1/2・1/3）

がやや窪む。11は若干窪み底となり、12は窪み底である。13・14は土器片を加工したメンコである。それぞれ中層からの出土である。内外面にハケなど転用前の調整が残る。13は縁辺部を丁寧に打ち欠きほぼ円形に仕上げているが、周縁は研磨が施されていない。14は底部付近の破片を使い、周縁を丁寧に研磨してほぼ円形に仕上げている。断面は片方が厚い。

15～18は出土した石器である。15・17が上層、16が中層、18が下層出土である。15はサヌカイト製のスクレイパーである。一端が欠損している。厚い剥片を素材としており、二次加工としてスクレイパーエッジを両面からの調整剥離によって整形している。16は黒曜石製のスクレイパーである。端部に二次加工を加えスクレイパーエッジを形成している。一面に自然面が残存し、不純物をあまり含まない質のよい漆黒の黒曜石を使用している。西北九州産のものであろう。17は安山岩製の敲石である。一端は欠損しているが、角柱状を呈している。先端に敲打による打痕が窺える。18は砂岩製の砥石である。不定形で全体のうち３面に使用痕が確認できるが特に一面に平坦面を形成するほど顕著に使用の痕跡が確認できる。サイズや使用面から手持ち砥石としても使用されたものと推測される。

第７図1～５も石器である。1～３が上層、４・５が中層出土である。１は、太型蛤刃石斧で、刃部は破損によって欠失している。裏面には使用によって破損した大きな剥離面がある。全体的には敲打調整後、研磨が加えられ概ね平滑に仕上げられている。部分的には製作時の調整剥離痕や敲打痕が認められる。基部頂部は丁寧な敲打による調整が観察される。青灰色を呈する玄武岩で、福岡市今山産と考えられる。２は扁平片刃石斧片である。上部・下部ともに欠損し体部の一部を残すのみである。残存している面は丁寧に研磨されている。石材は頁岩である。３は長楕円形の自然礫を用いた敲石で、下端に敲打痕が顕著にみられる。敲打面の一部および、上部の一端は欠損する。安山岩製で使用面以外は全体に平滑である。４は台石兼敲石である。片面は平滑で、もう一方の面には敲打痕が多く観察される。周縁にも敲打痕が残り敲石として使用されたことを示している。５は台石兼砥石である。方柱状で敲打痕及び擦痕が残り、３面は砥面として使用している。ともに安山岩製である。

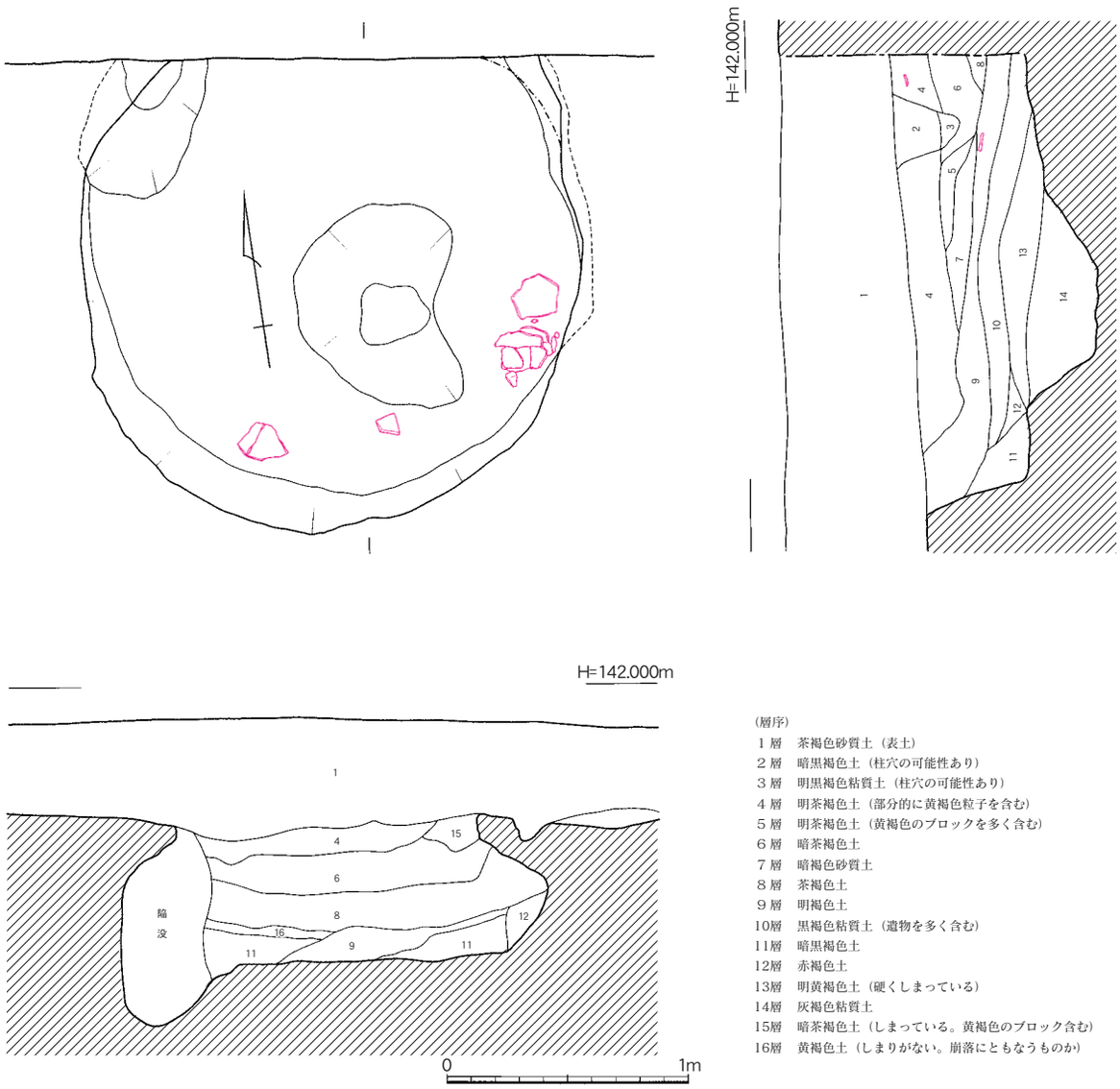
第10図６は下層から出土した敲石兼磨石である。一面の平坦部を使用し敲打と研磨を行った痕跡がうかがえる。７は中層から出土したホルンフェルス製の敲石である。縁辺部に敲打痕が密に確認でき、敲石としてよく使い込まれている。

また、写真のみの掲載であるが、安山岩製の敲石兼磨石が出土している。最大長10.5cm、最大幅8.3cm、最大厚は4.4cm を測る。平坦面は２面あるが、１面では磨痕、他の１面では敲打痕が窺える。また、全面に被熱により赤褐色から黒色に変色しているのが観察できる。

（安東・吉田・下森）

２号貯蔵穴（第８～10図、図版２・３）

調査区南側のＤ３区で検出された袋状貯蔵穴である。調査区の制約で北側は一部検出していない。台地の縁辺部に近い貯蔵穴の１つである。上面はかなりの削平を受けており、また北側には陥没が認められる。現状で、上面径2.28m、深さ0.60m前後（ただし中央南寄りにある掘り込みは含まない）、底径2.03mである。本調査区中もっとも規模が小さい貯蔵穴である。平面形はほぼ円形に近く、東側が大きくオーバーハングする。底面は北側が浅くなっているが概ね平坦である。中央南



第８図　Ａ地点２号貯蔵穴実測図（1/30）

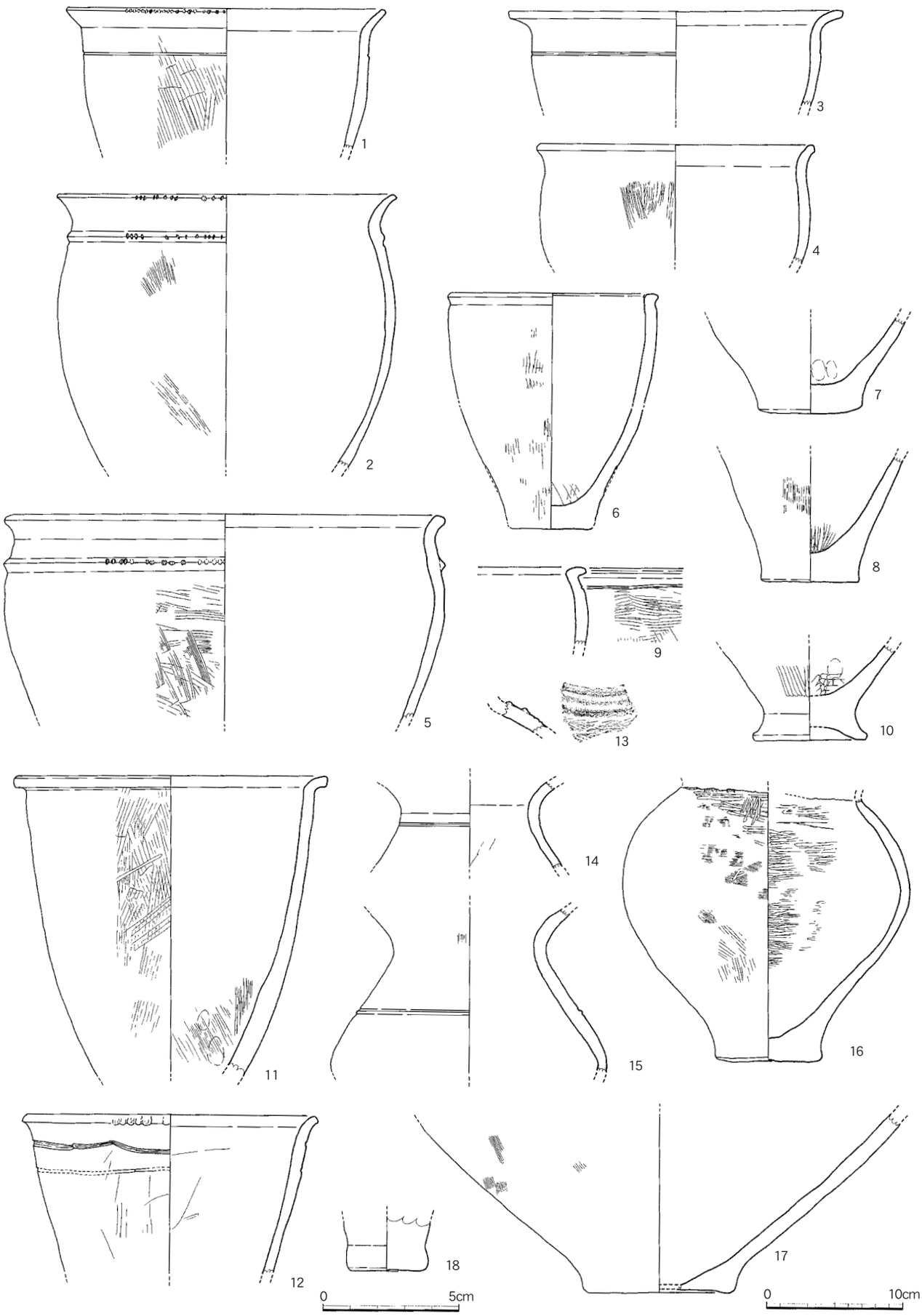
寄りにやや大きめの窪みがある。埋土は大きく上層（４～８層・15層）、中層（９層）、下層（10～13層・16層）の３層にわけることができる。なお、２・３層は、後世の柱穴の層と考えられる。11・12・16層は崩落にともなう層と考えられ、うち11・12層は早い段階での壁面の崩落土と考えられる。10層は凸レンズ上に堆積する。遺物は比較的まとまって出土し、東側から南側にかけて集中していた。

第９・10図は出土遺物である。第９図１～４は甕の口縁から胴部上位である。１は如意形口縁であるが、やや直線的に伸びる。口縁端部に刻目を施す。外面には粗いハケ目調整がみられ、口縁下に１条の沈線を巡らす。２は甕の口縁から胴部下位である。胴の張った器形を有し、口縁部はゆるやかに外反する。口縁端部下端に刻目を施す。口縁下に断面三角形の突帯を持ち、その頂部にも刻目を有す。外面はタテハケ及びナナメ方向のハケ目調整、内面はナデ調整である。３は口縁部が強く外反し、端部は平坦に仕上げる。口縁下に1条の沈線を巡らす。４は口縁端部を平坦に仕上げ

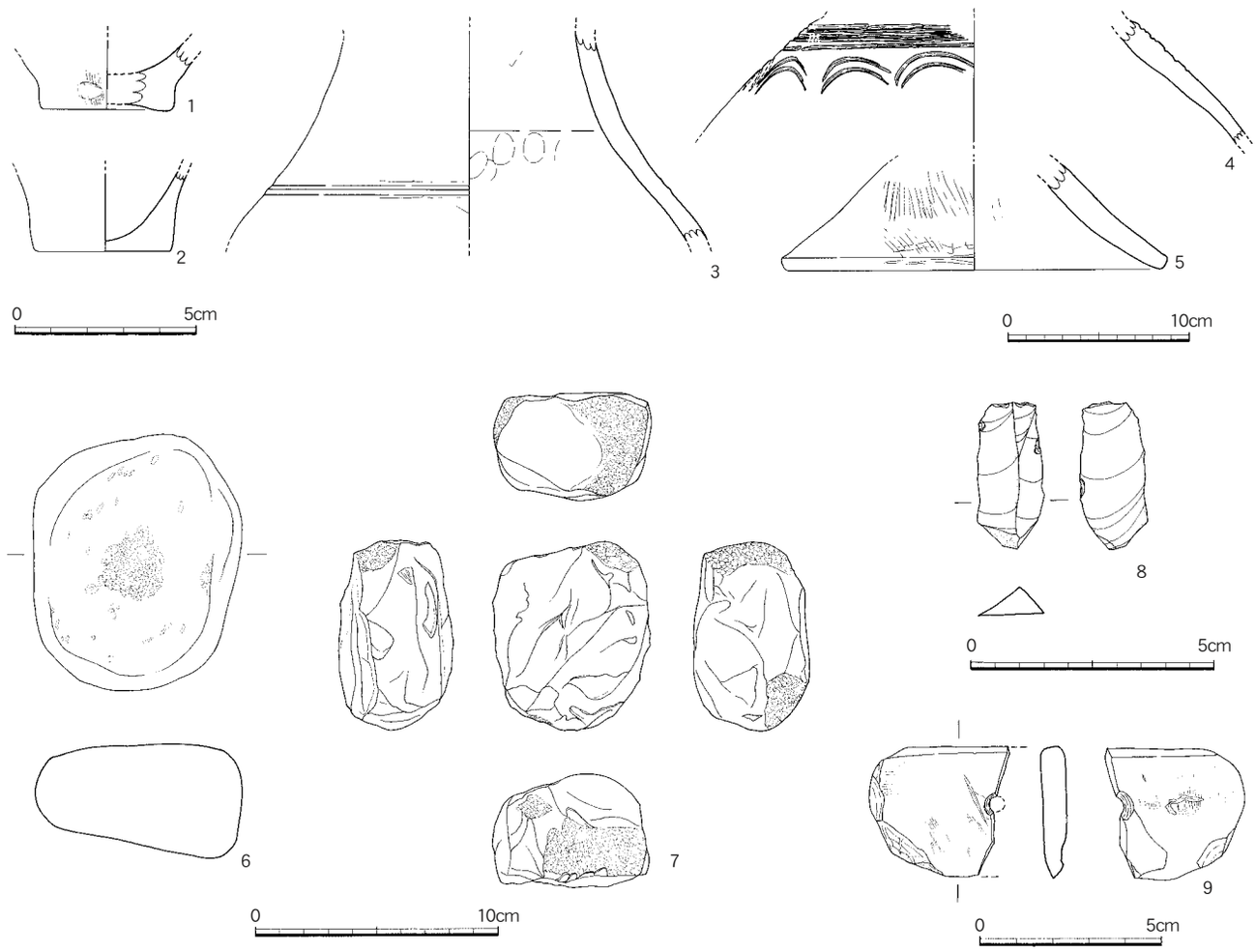
る如意形口縁の甕である。外面にはタテハケが施される。５は甕の口縁から胴部上位である。大型の器形で器壁が厚い。如意形口縁を呈し、端部はやや方形に近く整形する。口縁下には断面三角形の貼付突帯を持ち、その頂部に刻目を施す。調整は胴部上位がヨコ方向、中位以下がヨコ及びナナメ方向のハケ目である。６はほぼ完形に近く復元できる小型の甕である。口縁部は平坦に仕上げ、やや外側に肥厚させる。底部は厚みのある平底である。胴部上位から口縁にかけては直立するプロポーションである。外面がハケ、内面はナデ主体である。７・８・10は甕の底部である。７は底面に丸みを持ち、内面に指頭圧痕を有す。８は平底で直線的に立ち上がる。外面はタテハケ目、内底面にはミガキが施される。10は窪み底で、一旦括れて外方に広がる。調整は外面がタテ方向のミガキ、内面は不定方向のミガキである。９は甕の口縁から胴部上位である。口縁部は短い逆Ｌ字形を呈し、上面は丸みを持つ。口縁直下に沈線を巡らし、外面にはヨコ及びタテハケがみられる。また煤の付着も確認できる。11は甕の口縁から胴部下位である。細身で直線的なプロポーションである。口縁部は強く外反した如意形口縁で端部は肥厚し平坦に仕上げる。内外面ともハケ目調整を施す。また内面下位には指頭圧痕もみられる。12は甕の口縁から胴部上位である。外反の少ない如意形口縁を有し、端部に粗い刻目を持つ。外面口縁下に2条の沈線を持つが、整美なものではない。短い沈線を1回1回継ぎ足して1条の沈線としている。描線方向は、実測図面むかって左から右である。13は壺の肩部片である。2条の断面三角貼付突帯を持ち、沈線下部に無軸羽状文がみられる。14・15は壺の頸部から胴部上位である。14はゆるやかに頸部が窄まり外面頸部下に浅い沈線を持つ。15も14とよく似た器形で頸部はゆるやかに窄まり、なで肩の肩部へ移行する。外面肩部には1条の断面三角突帯を施す。調整は磨耗のためわかりづらいが、外面にはハケ目、内面には工具ナデがみられる。16は口縁部を欠く壺である。球形の胴部を有し、厚みのある平底に移行する。底面中央部付近は若干窪む。外面はタテ及びヨコハケ後ミガキ、内面はヨコ方向のミガキが主体である。17は大型の壺の胴部下位から底部である。平底であるが断面は薄く、底面は中央にむかって若干窪む。外面はハケ目、内面はナデ調整が主体である。18はミニチュア土器の甕と思われるものの底部である。風化が激しく調整は不明である。以上の出土遺物のうち上層が（１・８・13)、中層が（２・４・６・７・10・12・14・15・18)、下層が（３・５・９・16）である。

第10図１は甕の底部である。やや窪み底を呈す。外面にはハケ後ナデがみられる。２はミニチュア土器の底部で調整は風化のため不明である。底面は薄い作りになっている。３・４は壺の頸部から肩部である。３は頸部が緩やかに窄まり、なで肩の肩部を持つ。外面肩部には突出の低い断面三角形の突帯を有す。４は大型の壺で外面の頸部下に粗い5条の沈線を、さらにその下に重弧文を持つ。なお、沈線は全周せず、短い沈線の連続で1条を線画している。方向は、実測図むかって左から右である。５は蓋の受部である。器壁が厚く内外面にハケ目調整がみられる。８は黒曜石製の剥片である。打面は除去され、端部に自然面が確認できる。側縁には使用痕と考えられる細かな剥離が観察される。断面は三角形を呈する。色調は漆黒色を呈し、透明度が高く縞が確認できることなどから西北九州産黒曜石と考えられる。９は頁岩製の石庖丁である。半分が欠損し、片方の紐孔の半分までが残存している。刃部は使用により鋭利さがあまり感じられない。本来外湾刃半月形の石庖丁と考えられるが、使用による研ぎ減りで長方形に近い形になっている。両面には研磨による擦痕が残る。以上の遺物の内、１・２・９が上層、３・４が中層、５・８が下層出土である。

（吉田・下森）



第９図　Ａ地点２号貯蔵穴出土遺物実測図（１）（1/2・1/4）



第10図　A地点１・２号貯蔵穴出土遺物実測図（２）(2/3・1/2・1/3・1/4)

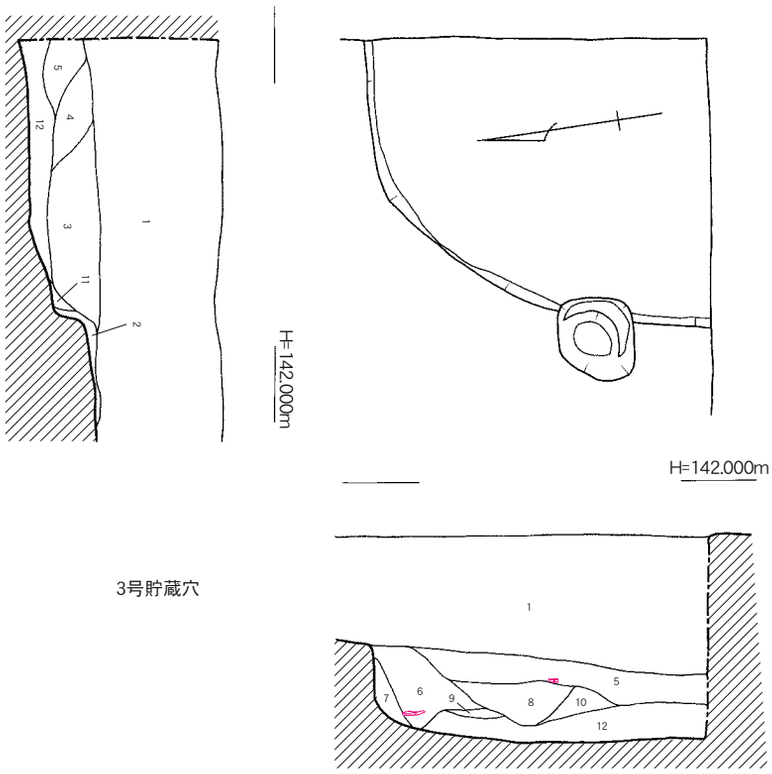
３号貯蔵穴（第11・13・14図、図版３）

調査区南側のＢ３区で4分の１程検出された袋状貯蔵穴で、北側には４号貯蔵穴が隣接する。台地の縁辺部に最も近い貯蔵穴の１つである。上面はかなりの削平を受けており、また西側の一部を後世の柱穴によって切られている。現状で、復元径2.70m程、深さ0.35m、復元底径2.60m程である。本調査区中もっとも浅い貯蔵穴である。床面は、中央部のレベルよりもコーナー付近のレベルが高くなる傾向があり、隣接する４号貯蔵穴とは床面の形態を異にする。埋土には全体的に炭や焼土がまじる傾向がある。また地山ブロック（２層）もまじる傾向がある。12層は凸レンズ状に堆積する。

第13図１・２、第14図１・２は出土遺物である。第13図２は６層から出土した。第13図１は甕の口縁から胴部上位片である。口縁部はゆるく、やや外反する。外面に一部ハケ目調整がみられる。２は壺の肩部であり、張りが強い。内外面にヘラミガキがみられる。

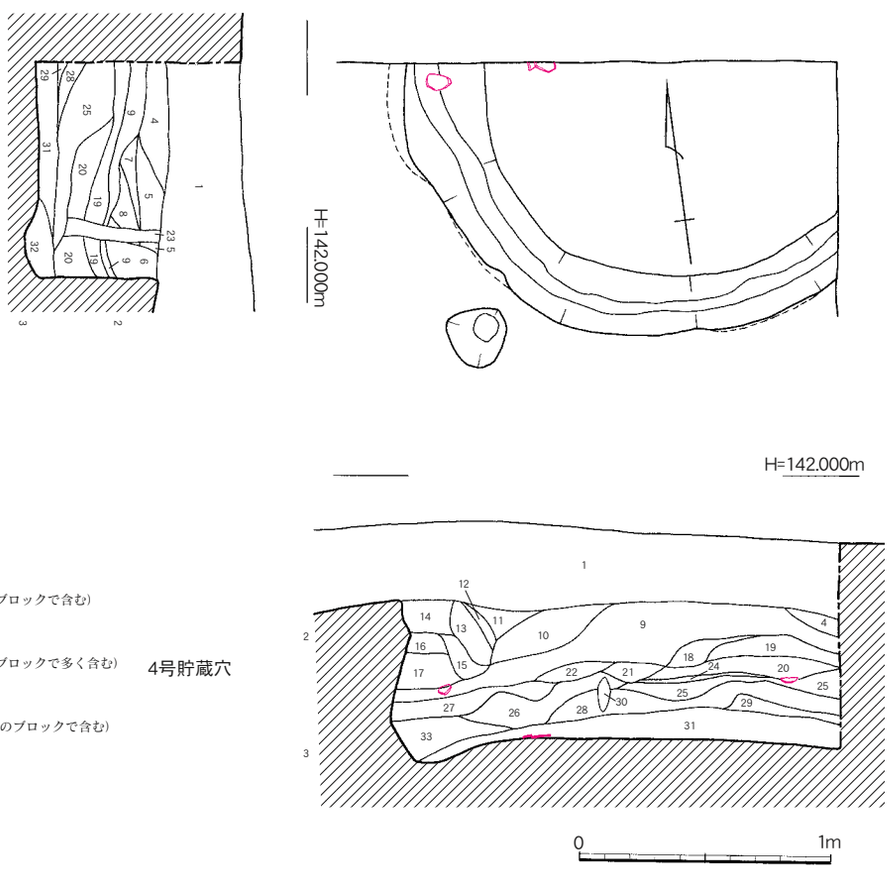
第14図１・２は石弾であろうか。３～４cm 大の安山岩製の礫で、ほとんど未調整である。このような円礫や紡錘形に近い小礫が、各貯蔵穴とも割りと目立って出土する。　　（吉田）

（層序）
１層　茶褐色砂質土（表土）
２層　乳白色粘質土
３層　茶褐色砂質土（焼土・炭を多く含む）
４層　茶褐色粘質土（焼土・炭を含む）
５層　茶褐色土
（焼土・炭を含み、
２層をまばらにブロックで含む）
６層　黄茶褐色粘質土（炭・焼土、暗黄褐色土を含む）
７層　黄茶褐色土（焼土・炭、２層がブロックでまじる）
８層　明茶褐色粘質土
（焼土・炭をかなり多く含む。
２層がブロックで若干はいる）
９層　暗黄褐色粘質土（焼土・炭を若干含む）
10層　明茶褐色粘質土（焼土・炭を若干含む）
11層　暗茶褐色粘質土（２層がブロックで含む）
12層　茶褐色粘質土（焼土・炭、２層を含む）



3号貯蔵穴

（層序）
１層　茶褐色砂質土（表土）
２層　地山（乳白色粘質土）
３層　地山（淡暗黄灰粘質土）
４層　淡茶褐色粘質土（暗赤褐色のブロックを含む）
５層　淡茶褐色土
（やや粘質、２層がブロックで含む）
６層　淡茶褐色土
（やや粘質、２層がブロックで含む、
２～３cmと６層より厚い）
７層　暗茶褐色粘質土（焼土・炭化物を含む）
８層　茶褐色粘質土
（焼土・炭粒子、２層がブロックで含む）
９層　暗茶褐色粘質土（焼土・炭粒子を若干含む）
10層　暗茶褐色土（焼土・炭粒子を若干含む）
11層　黄茶褐色粘質土（焼土・炭を含む）
12層　明黄茶褐色粘質土
13層　黄茶褐色土
14層　茶褐色砂質土（表土よりやや淡い）
15層　茶褐色土（焼土・炭を若干含む）
16層　茶褐色粘質土（暗赤褐色土をブロックで含む）
17層　茶褐色粘質土（２層の大きなブロックを含む）
18層　茶褐色砂質土（焼土・炭を若干含む）
19層　暗赤褐色土
20層　明茶褐色土
21層　茶褐色粘質土（炭含む）
22層　暗黄茶褐色粘質土（焼土・炭を若干含む）
23層　黒茶褐色粘質土（木の根）
24層　明茶褐色粘質土
25層　明茶褐色粘質土（暗赤褐色のブロックを含む）
26層　茶褐色粘質土
（炭・焼土を若干含み、２層・暗赤褐色土をブロックで含む）
27層　暗茶褐色粘質土（2層をブロックで含む）
28層　暗肌色粘質土
（焼土・炭、暗赤褐色土を若干含み、２層をブロックで多く含む）
29層　赤褐色・明茶褐色土
30層　やや暗めの茶褐色土
31層　茶褐色粘質土（焼土・炭を含み、炭を３cm大のブロックで含む）
32層　暗乳白色粘質土（２層の落ちこみ）
33層　暗乳白色・茶褐色土（２層を含む）



4号貯蔵穴

第 11 図　A地点３号・４号貯蔵穴実測図（1/30）

４号貯蔵穴（第11・14図、図版３）

調査区南側のＢ３区で5分の２程検出された袋状貯蔵穴で、南側には３号貯蔵穴が隣接する。台地の縁辺部に近い貯蔵穴の１つである。上面はかなりの削平を受けている。現状で、復元径2.30ｍ程、深さ0.65ｍ、復元底径2.15ｍ程である。床面は、平坦であるが周縁が溝状に掘り込まれている。隣接する３号貯蔵穴と比較すると、残存する深さが深く、また床面に周溝を持つなどの相違がみられる。埋土は、炭や焼土まじりの層や地山ブロックを含む層が主体である。最下層の31層や最上層の９層を含む各層は、幾重にもレンズ状に堆積する。２層よりさらに上面の地山と思われる暗赤褐色土のブロックが中・下層（16・19・24～26・28・29層）で多くみられることも注目される。このことから早い段階でこの遺構の上面が崩落し始めたことを示している。また上面の大幅な削平も窺える。

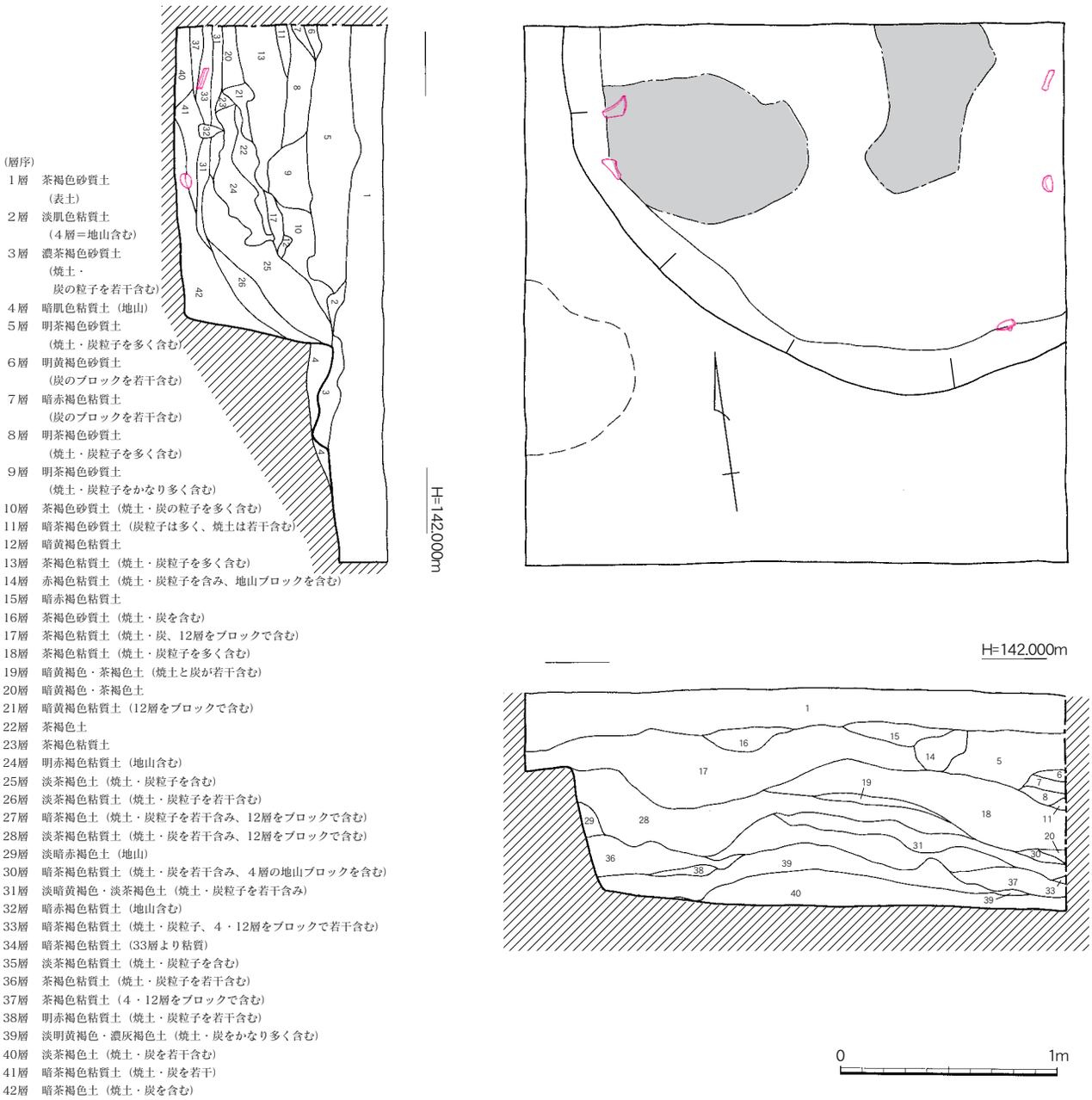
遺物は土器･石器が出土しているが、土器は図示し得るものはない。第14図３～５が出土石器で、３が下層、４・５が中層出土である。３はサヌカイト製の剥片である。大型の剥片を素材とし、側縁には細かな使用痕状の剥離が観察される。スクレイパーとして使用されたものであろうか。４・５は安山岩製の磨石である。４は楕円形の扁平な礫を用い、片面は平坦に擦り磨かれている。５は不整形な楕円形礫を素材とし､両面を使用している。両面ともよく使い込まれ､使用面は平滑になっている。（吉田･下森）

６号貯蔵穴（第12～14図、図版４）

北側のＡ１区で検出した袋状貯蔵穴である。最も台地縁辺部から奥まったところに位置するものである。全体の約３分の１を確認することができた。底面の半径は約1.6ｍで、復元すると３ｍを超え、吹上台地でこれまで検出された貯蔵穴の中では最も規模が大きいものである。上面はかなり削平され、深さは0.52ｍしか残存していなかった。貯蔵穴の埋土は大きく、上・中・下の3層に分けることができる。上層は茶褐色を呈し、中央部には焼土と３mm 程度の炭の粒子を含んでいる。中層は暗黄褐色で、上層と同様に焼土と炭の粒子を濃密に含有している。下層は淡黄褐色粘質土で炭の粒子をまばらに含んでいる。壁面付近には淡明黄褐色の地山の崩落土が被っている。

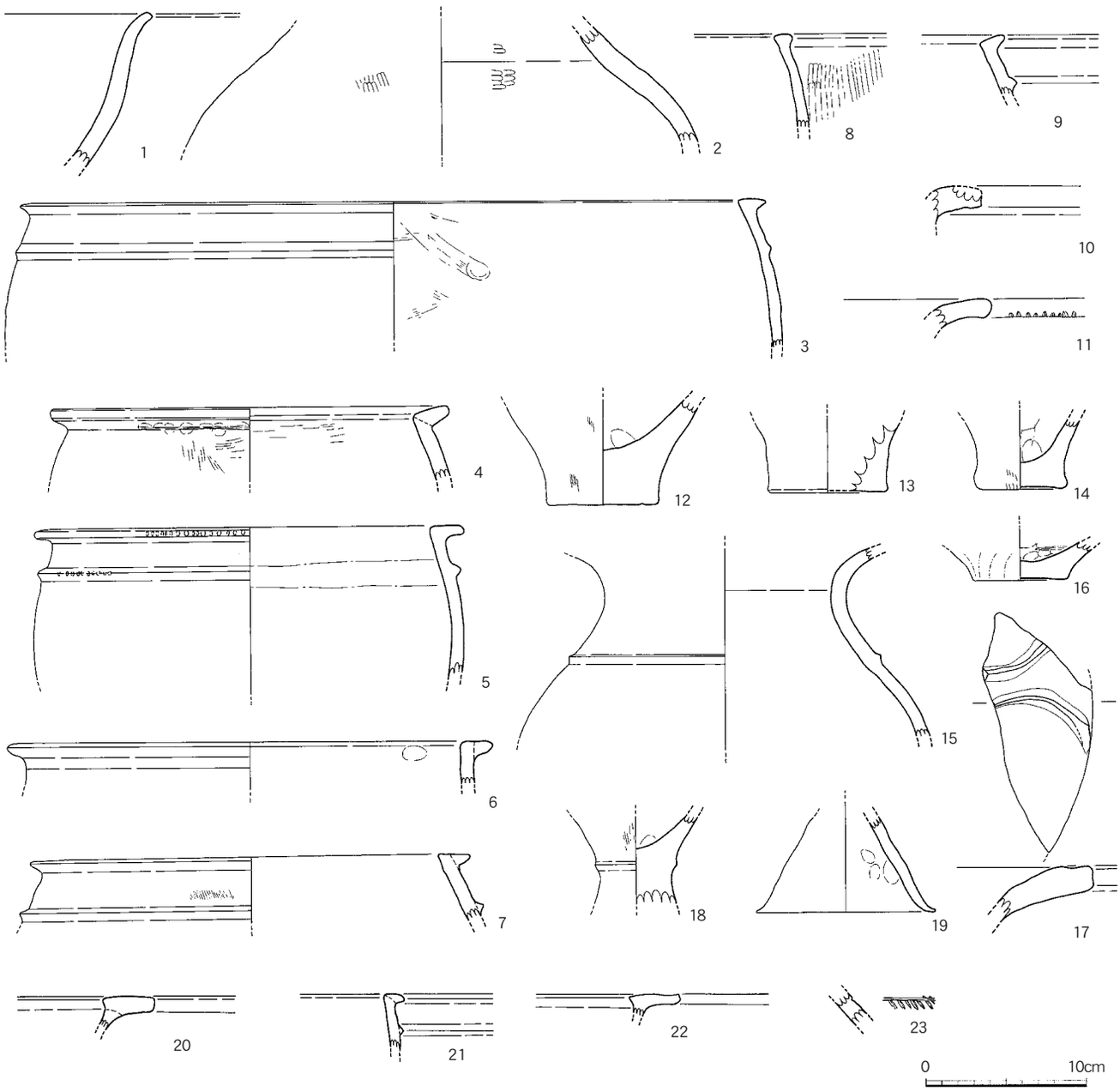
遺物は上・中・下の３層とも出土しており、甕が主体を占める。その他、壺や高坏、上層では黒曜石製の打製石鏃や焼骨なども出土している。遺物の出土状況は、主に壁面に近い場所や中央部に集中してみられた。第13図３～19、および第14図６・７が出土遺物である。第13図３が最上層、第13図８・10・11が上層、第13図７・13～15・18・19・第14図６が中層、第13図４～６・９・12・16・17・第14図７が下層出土である。

第13図３～９は甕の口縁から胴部上位である。３は大型の甕で、口縁上端部は平坦に整形し、外方に突出させる。口縁下には三角突帯を1条巡らす。外面は風化による剥落で調整が分からないが、内面はヨコハケの後、手ナデが施されている。４はやや内傾した逆Ｌ字状口縁を持つ。胴は丸みを帯び、外面はタテハケ、内面はヨコハケの後、ナデ調整である。口縁部屈曲付近に指頭圧痕がみられる。５は丸みを有する胴部に逆Ｌ字状口縁を持つ甕である。口縁下に断面三角形の貼付突帯を巡らす。口縁端部及び突帯頂部には刻目を施す。６は逆Ｌ字状口縁を持ち、胴が張らない。内面には指頭圧痕がみられる。７は口縁部が内傾し、上面は平坦となる。端部は三角突帯状に整形する。口縁下には三角突帯を1条巡らす。外面はタテハケ、内面はナデ調整である。８は口縁端部が



第 12 図　A地点６号貯蔵穴実測図（1/30）

平坦に近く、内外面を肥厚させる。外面には粗いタテハケが施される。９は短い逆Ｌ字状の口縁を有し、口縁下に三角突帯を貼り付ける。10・11は壺の口縁端部片である。10は図では明確でないが鋤先状を呈し、11は大きく外反する。11の端部下端には刻目がみられる。調整はナデである。12～14は甕の底部である。12は厚みのある平底で、外面にタテハケを施す。内面はナデで、指頭圧痕が残る。13は厚みがきわめて強く、直に立ち上がる。14は平底に近いが底面中央部がやや窪む。調整は外面がハケ、内面はナデ調整で、指頭圧痕がみられる。15は壺の頸部から胴部上半部で、頸部は緩やかに括れ、口縁部は強く外反する。肩部はなで肩で、頸部と肩部との境に三角突帯を1条巡らす。16は壺の底部である。内外面に指頭圧痕がみられる。17は壺の口縁部で、内面に曲線の貼付突帯による文様を形成している。周防灘沿岸地域の影響を受けた土器である。18は高坏の脚部から坏部下半付近である。坏部と脚部の結合部に一条の断面三角形の突帯が巡る。外面はハケ・ナデ、内面はナデがみられる。19は高坏の脚部で、脚端部が外反する。調整はナデ主体で、内面



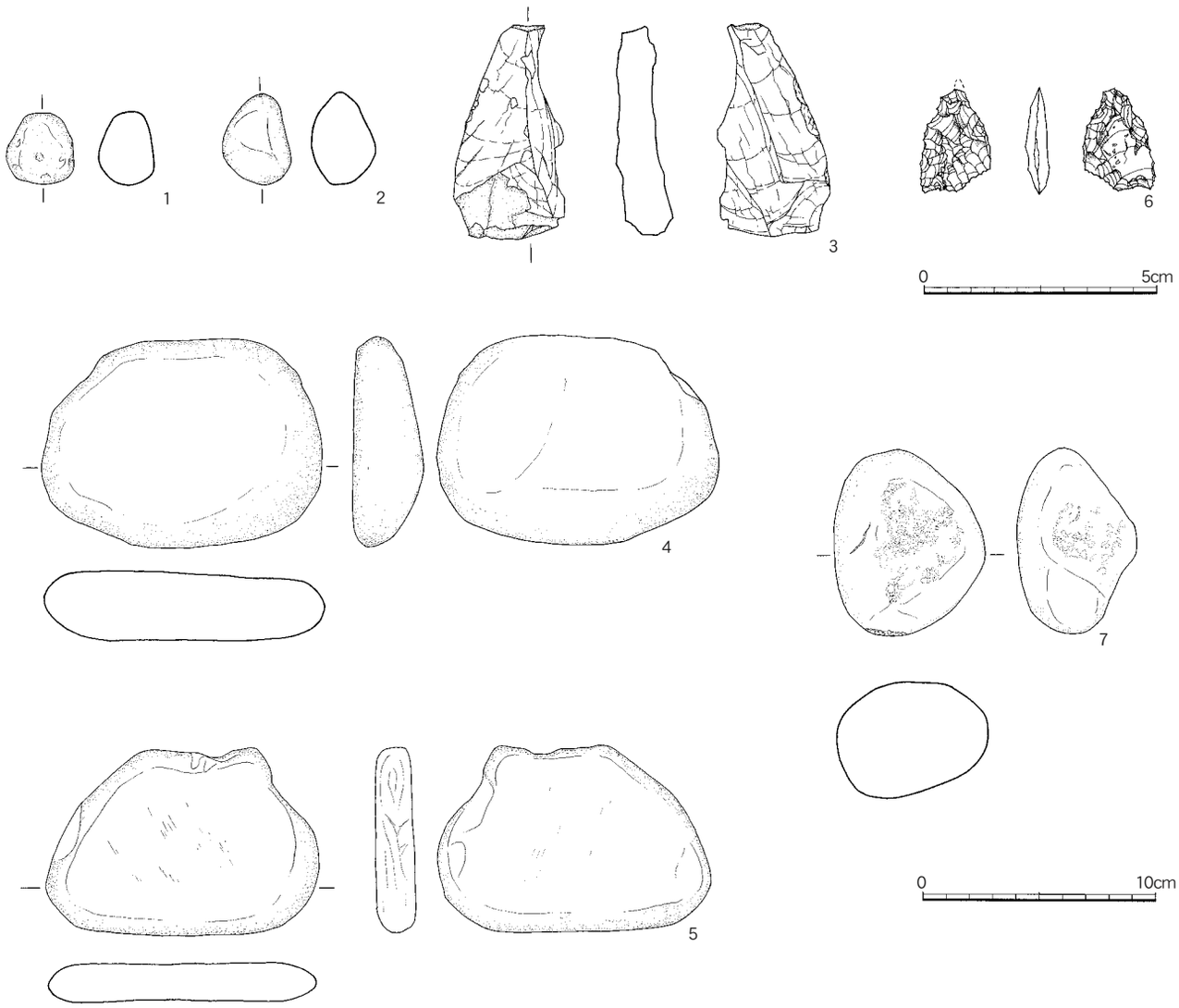
第 13 図　A地点３号・６号貯蔵穴出土遺物実測図（1/4）

に指頭圧痕が多くみられる。

第14図６は中層の焼土混入土層から出土した黒曜石製石鏃である。周縁から調整剥離が加えられ、主要剥離面側は周縁部のみの調整で整形を行っている。不純物を多く含み、透明度の高い黒曜石を使用している。西九州産の黒曜石であろう。７は安山岩製の敲石である。円礫の平坦部に敲打痕が観察される。

表採その他出土遺物

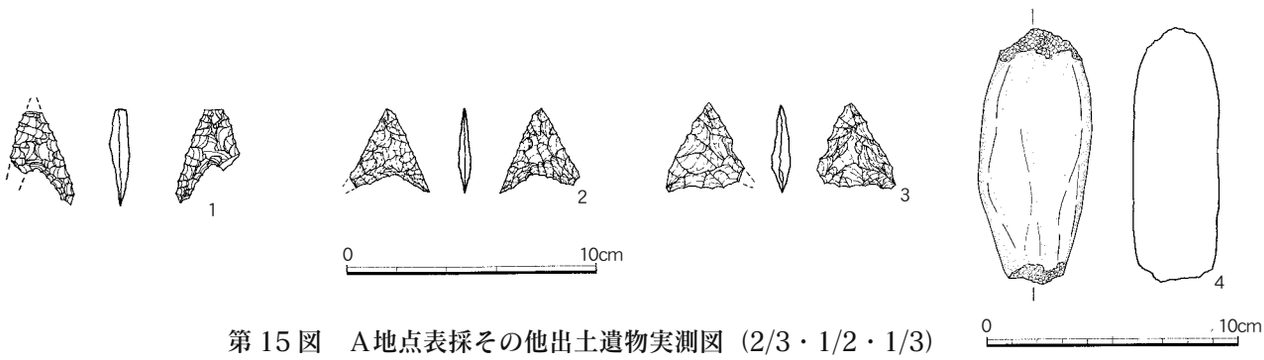
第13図20～23、第15図は、調査区内およびその周辺出土の遺物である。第13図20は鋤先状を呈する壺の口縁部である。上面はやや丸みが強く厚みがあり、内面はあまり突出しない。21はＡ



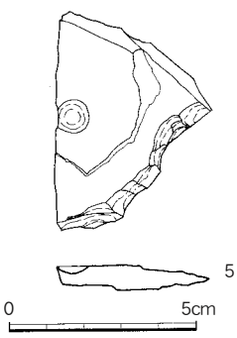
第 14 図　A地点３号・４号・６号貯蔵穴出土遺物実測図（2/3・1/3）

１区の表土より出土した甕の口縁部で、逆Ｌ字状を呈する。口縁下に断面三角形の貼付突帯が１条めぐる。22は甕の口縁部で、20同様口縁形態は鋤先状を呈する。上面端部はやや窪む。20は須玖Ⅰ式、22は須玖Ⅱ式土器の範疇にはいるものと考えられる。Ｂ３区表土より出土している。23は壺の肩部片である。施文の順番は、羽状文を施した後、横方向の沈線を引いている。

第15図１は姫島産黒曜石製の石鏃である。丁寧な作りで二等辺三角形状をなし、基部の抉りが深い。先端部と片側脚部が欠損している。２はサヌカイト製の石鏃である。基部に浅い抉りが入り、全体を丁寧な二次加工で整形している。先端部と片側脚部に欠損がみられる。３はサヌカイト製の石鏃である。平基式の基部を有する正三角形に近い形状を呈する。全体的に作りが雑な感じである。片側脚部に若干の欠損がみられる。４は安山岩製の敲石である。長軸の両端に顕著な敲打痕が観察できる。５は石庖丁の未成品と考えられる。Ｂ２からＥ２区にわたる細長いトレンチの西側で出土したものである。全体的に粗割段階で、刃面は調整剥離によって形成されているが未研磨である。紐孔も途中の凹みの段階で孔が貫通しきれていない状態である。使用石材は頁岩で、遺跡内でも在地の石材を使用して石庖丁の生産が行われていたことを示している。今回写真のみの掲載になったが、表採資料として絹雲母片岩製の砥石が採取されている。最大長11.4cm、最大幅4.0cm、最大



第 15 図　A地点表採その他出土遺物実測図（2/3・1/2・1/3）



厚は1.4cm を測る。全面に使用の痕跡が窺える。　（松竹・吉田・下森）

小結

Ａ地点は台地東端部にあたり、日田盆地が一望に見渡せる眺望のきく場所に位置している。墓地群の広がりを想定して調査区を設定したが、袋状貯蔵穴などを中心とする生活関連遺構の発見があった。第１・３・６・７次調査区でも多数の袋状貯蔵穴が確認されており、台地東側部分には特に多くの袋状貯蔵穴が分布しているものと考えられる。袋状貯蔵穴そのものは、台地全体から発見されているが、住居址の密集する集落中央部には比較的少なく、台地周辺部に多く分布する傾向にある。台地東側部分は微地形からみると中央部分よりやや高く、この部分に袋状貯蔵穴が多数作られたものであろう。今回調査したＡ地点の袋状貯蔵穴は５基で、１号貯蔵穴を除いてかなり削平を受けていた。遺構確認面は、黄褐色ローム層下位の紫褐色から白色化した阿蘇Ⅳの風化土である。この層位からみても上層はかなり削平されていることが分かる。６号貯蔵穴は底径が３ｍを超える袋状貯蔵穴であり、これまで吹上遺跡で確認された袋状貯蔵穴の中では最も規模が大きい。貯蔵穴群の中で特に大型の貯蔵穴が１～２基存在することは貯蔵穴のあり方を考える上で重要である。確認された５基の貯蔵穴は板付Ⅱ式の新段階から城ノ越式土器が主体を占め、廃絶時期は中期初頭に属するものであろう。中には下城式土器や周防灘沿岸の影響を受けた土器が少量含まれる。

使用目的が終了した袋状貯蔵穴は廃棄物処理などに使用されたと考えられ、焼土や灰層、炭化物や獣骨などが出土する。数基の袋状貯蔵穴から出土した炭化物には、個別説明ではふれなかったがドングリ（カシ）が含まれていた。石器はすべて図示していないが、石皿・敲石・磨石などの礫石器が多数出土しており、堅果類の加工に多用されたことが窺える。米以外に植物質食料の獲得が盛んであったことを示しているといえよう。

吹上遺跡では、弥生時代前期後半から袋状貯蔵穴が作られ始め、前期末から中期初頭にピークを迎え、中期前半には終焉する。これまでの調査結果から想定すると数百基から千基を超える数の袋状貯蔵穴が作られたものと推察される。また、Ａ地点では住居址は確認できなかった。貯蔵穴の残り具合からすると削平されている可能性もあるが、分布域が異なることも考慮しておかなければならない。これまで、第１次調査で円形住居址がわずか１基確認されているのみである。全体的に未調査区域が多いため、今後の課題としておきたい。

２　Ｂ地点

調査地点は、吹上台地のほぼ中央西側、日田盆地を見渡せる台地南側に位置する。円形竪穴住居・方形竪穴住居、袋状貯蔵穴、土坑などの生活遺構と甕棺墓、木棺墓、土壙墓、石蓋土壙墓、石棺甕棺併用墓などの墓地遺構とに分けられる。生活遺構は調査区全体に広がり、墓地遺構は中央部に塊状にまとまって検出された。

（1）　竪穴住居

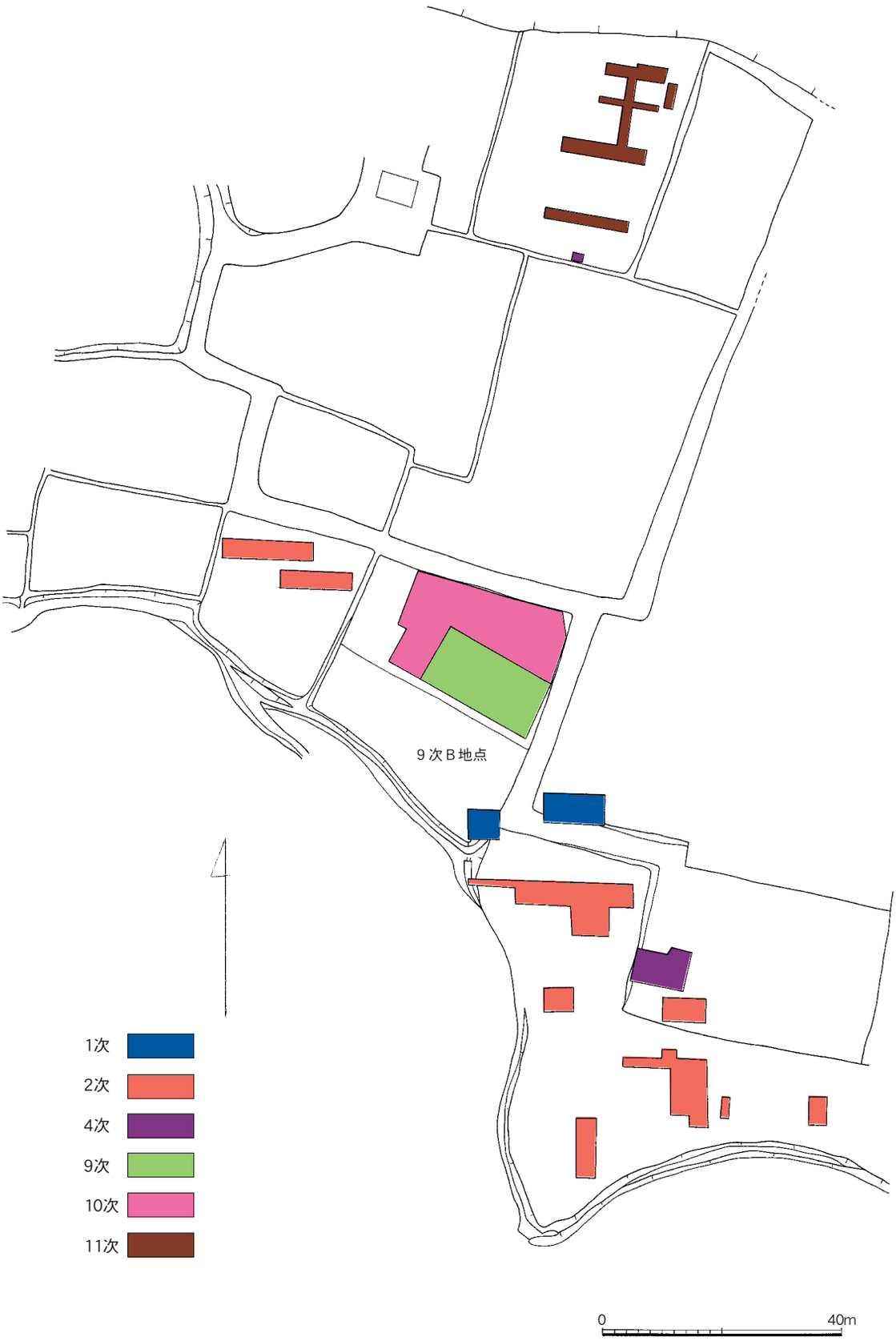
円形竪穴住居２軒、方形竪穴住居１軒が検出されている。調査区南側に分布し、未調査区へ伸びている。円形竪穴住居は第１次調査で１基確認されて以来のことであり、集落の分布を考える上で重要である。竪穴住居群はさらに南側に展開するものと考えられる。

10号竪穴住居（第18・19図、図版６）

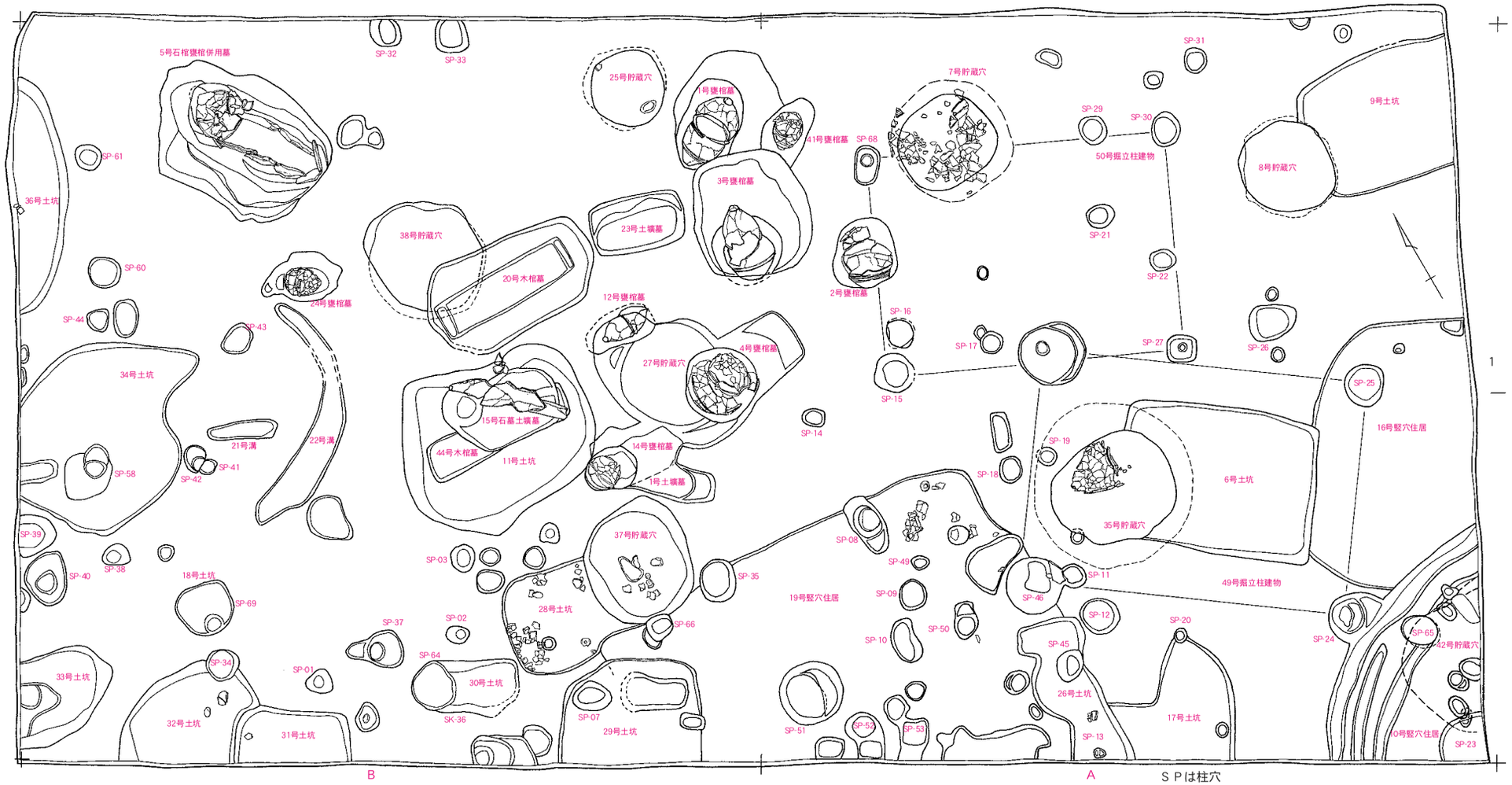
調査区南端の角部に位置し、全体の４分の１弱を検出した。16号竪穴住居、42号貯蔵穴、23号柱穴と切り合い関係を持ち、16号竪穴住居、42号貯蔵穴に後出し、23号柱穴に切られる。住居は調査区外に伸びており全掘されていないため、住居址の直径等は確認できないが、検出された部分から推定すると直径8．５m前後の大型の円形住居址になると考えられる。周囲には幅約0.2m 弱の周溝を３条めぐらしている。建て替えもしくは建て増しされたものであろう。そのうち内側２条の周溝は全周せず途切れている。遺構内の埋土状況も前述の切りあい関係に対応しており、全16層のうち、10号竪穴住居址に伴う土層は第１～５・15・16層と考えられ、土器は第１～５層に含まれる。第６、第7層は42号貯蔵穴に伴う層であり、その後、10号住居址の最下層（第５層）が堆積した段階でピット（第８層）が掘り込まれたものと考えられる。さらに第４、第３層が堆積した段階で23号柱穴が掘り込まれ、第11、第10、第９層、第２、第１層の順で堆積している。なお、第12層は23号柱穴が掘り込まれた際の第５、第６層からの流れ込みと考えられる。

第19図は、同遺構の出土遺物である。甕、壺、高坏、鉢、土製品、石製品等、多種にわたる出土遺物が確認できる。１は椀形の鉢で、内面には丹塗りの痕跡が認められる。胎土から、搬入土器の可能性がある。２・６は甕であり、２はやや湾曲したくの字状口縁を呈し、端部を跳ね上げる。６は座りの良い平底の底部で肥厚せず､ナデの調整が認められる。３は広口壺の口縁部である。４・

写真２　Ｂ地点発掘作業風景①

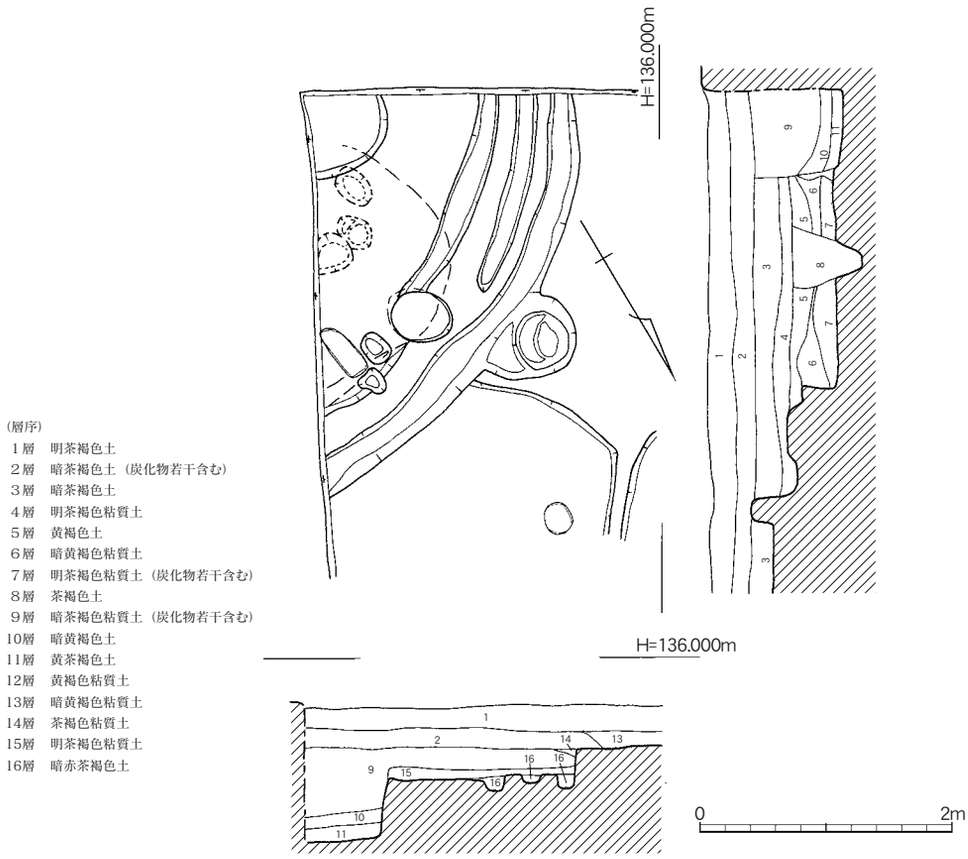


第 16 図　９次調査区Ｂ地点の位置図（1/500）



0　2　4m

第 17 図　９次Ｂ地点遺構配置図（1/80）

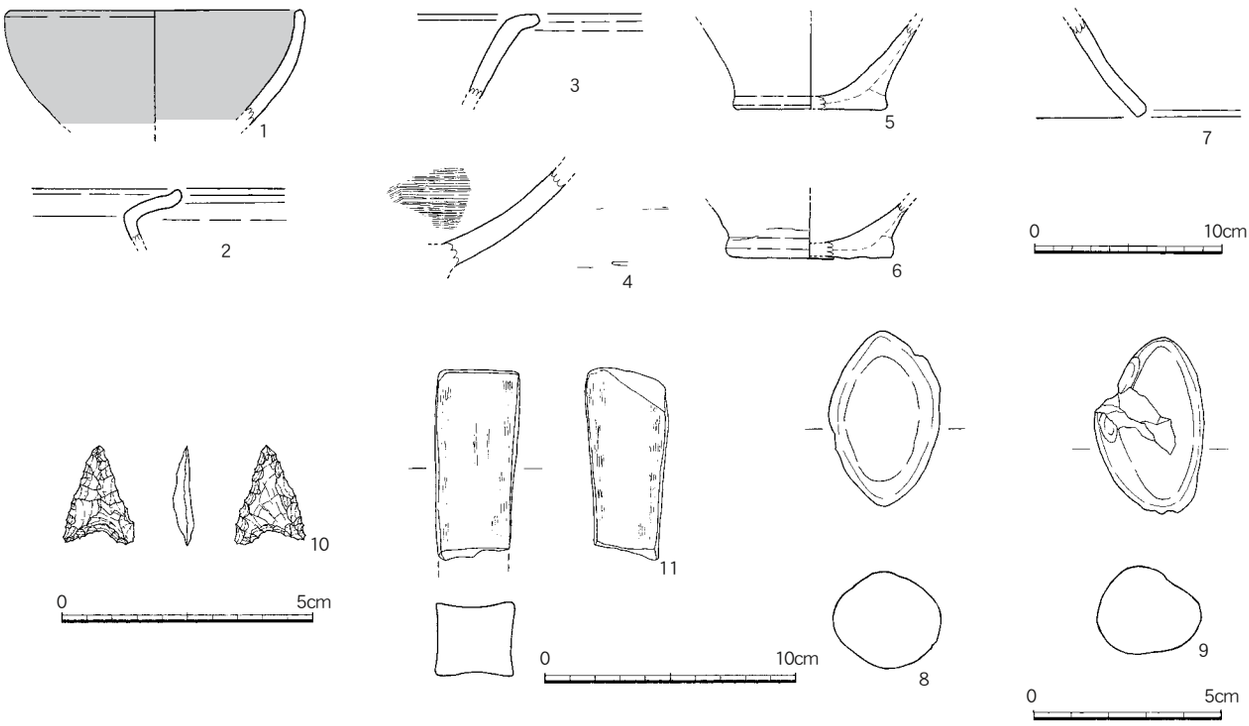


第 18 図　B地点 10 号竪穴住居実測図（1/60）

７は高坏で、4は坏部下半、7は脚部である。４は、外面にハケ後ナデ及びミガキが施され、更に丹塗りが施される。５は甕の底部であるが、10号住居の周溝に伴う24号柱穴から出土した。平底で厚みはなく、外方へ立ち上がる。内面にはススが付着している。８・９は土製の投弾である。８は長さ4.65cm、幅2.95cm、重さ25.56gである。９は長さ4.7cm、幅2.9cm、重さ22.65ｇである。両方とも若干押し潰された状態で、９にはひび割れが生じている。10・11は石器である。10はサヌカイト製の石鏃である。長さ2.0cm、幅1.5cm、重量0.6ｇをはかり、丹念な調整である。基部は若干の凹みを有す。11は青銅器の鋳型に使用されるのと同じきめの細かい石英長石斑岩質の砥石で、10号竪穴住居の周溝に伴う24号柱穴から出土した。断面はほぼ正方形にちかい形で、四面ともよく使いこまれた使用痕がうかがえる。同遺構の出土遺物は須玖Ⅰ式段階のものが多く、中期前半に比定できよう。（伊藤）

16号竪穴住居（第20・21図、図版６）

調査区東壁の中ほどに接する形で検出された略円形竪穴式住居址である。遺構のうち調査区内で検出された範囲は全体の３分の２程度であり、残り３分の１は調査区域外である。また、南辺を10号竪穴住居址に、西北辺を６号土坑にそれぞれ切られて検出された。残存する部分の長径は3.67m ほどで、復元すると径４m 程度になるものと考えられる。全体のプランは方形気味の略円形で壁周溝や柱穴、炉跡などは検出できなかった。床面は平坦で遺構の残りは最も深いところで



第 19 図　B地点 10 号竪穴住居出土遺物実測図（2/3・1/2・1/3・1/4）

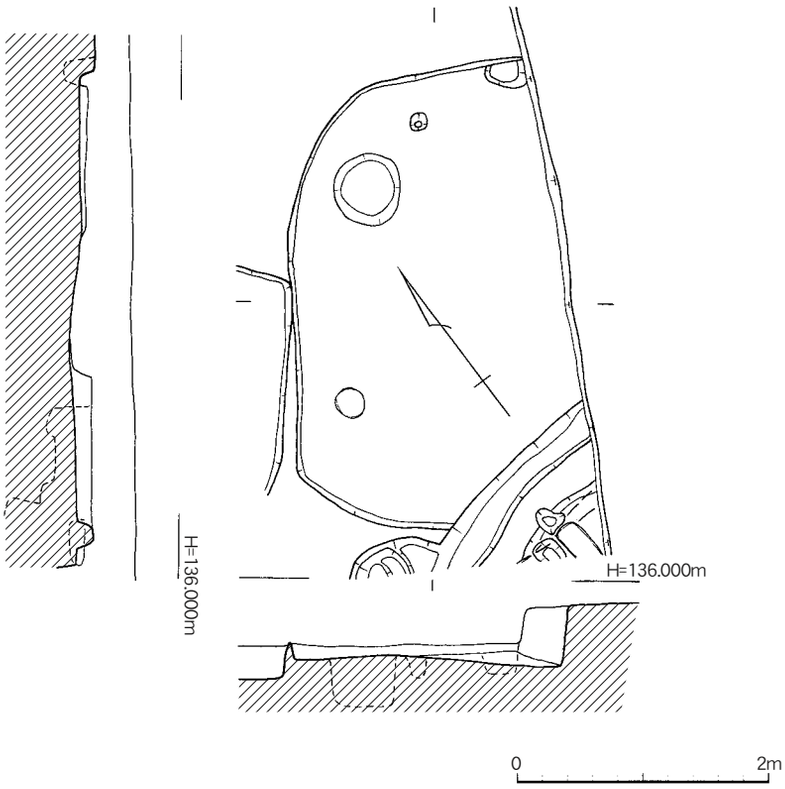
0.2m 程度である。全体にかなり削平を受けているものとみられる。竪穴住居とするには根拠が足りないが、全体的なプランからここでは一応竪穴住居として報告しておきたい。

遺物の出土はあまり多くないが、甕や壺などの土器や石器が若干出土している。第21図1は、短い逆Ｌ字状の甕口縁部である。全体に著しく磨耗しており調整等は明らかでない。第21図２は復元底径7.4cm を測る壺の底部である。平底で内面・外面及び底面にナデ調整を施す。内面底部付近に指頭圧痕が見られる。また、外面全体に黒班が存在する。第21図3は安山岩製の石皿である。法量はそれぞれ最大で長さ21.5cm、幅19.5cm、厚さ6.7cm を測る。上面は使用によってかなり磨滅している。一部に熱をうけたと思われる形跡があり、黒色や赤色に変色している箇所が見られる。（鶴田）

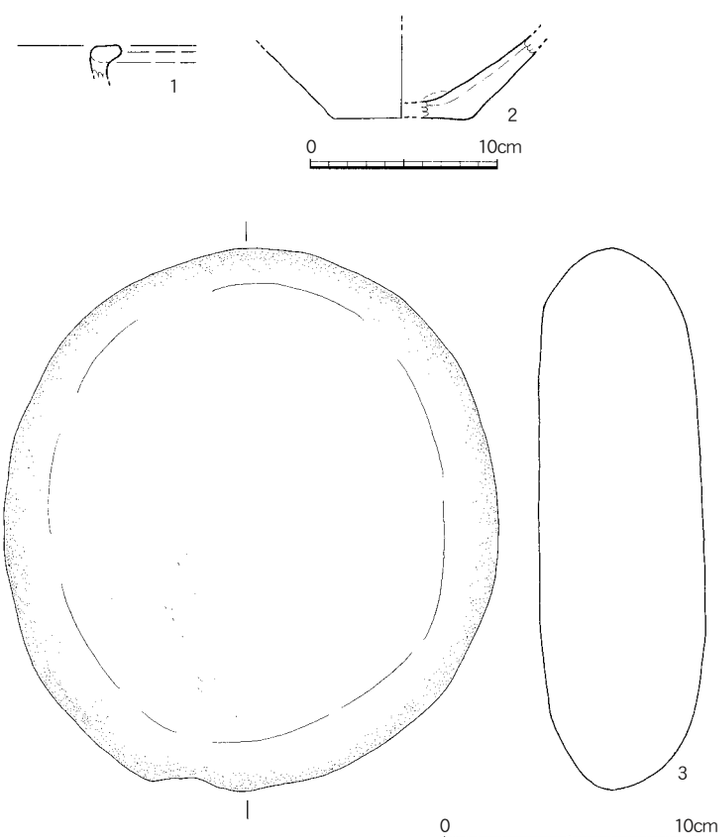
19号竪穴住居（第22・23図、図版７）

調査区南端の中央に位置し、南側半分は調査区域外に広がっている。上面は削平を受けており、西側部分は37号貯蔵穴、28・29号土坑に、東側部分は26号土坑に切られている。全体のプランとしては、１辺が5.6ｍの方形プランの竪穴住居であると考えられる。また、住居址内には柱穴等が多数検出されているがプランの半分しか検出していないため、現状としては伴う柱穴は確定できていない。床面は平坦に仕上げられ、貼り床等は認められなかった。土層の堆積状況を見ると、住居址に伴う土層は２～23層である。そのうち15層は26号土坑に伴う層である。また、１層は表土層で、以下の層は住居址の肩から堆積しているので住居址の埋土と考えられる。

遺物は、甕、壺、高坏がまとまって出土した。第23図は、同住居址出土の土器である。13は上層、１～12・14～16は住居址東側隅部で集中して床面直上より出土した。全体としては城ノ越式

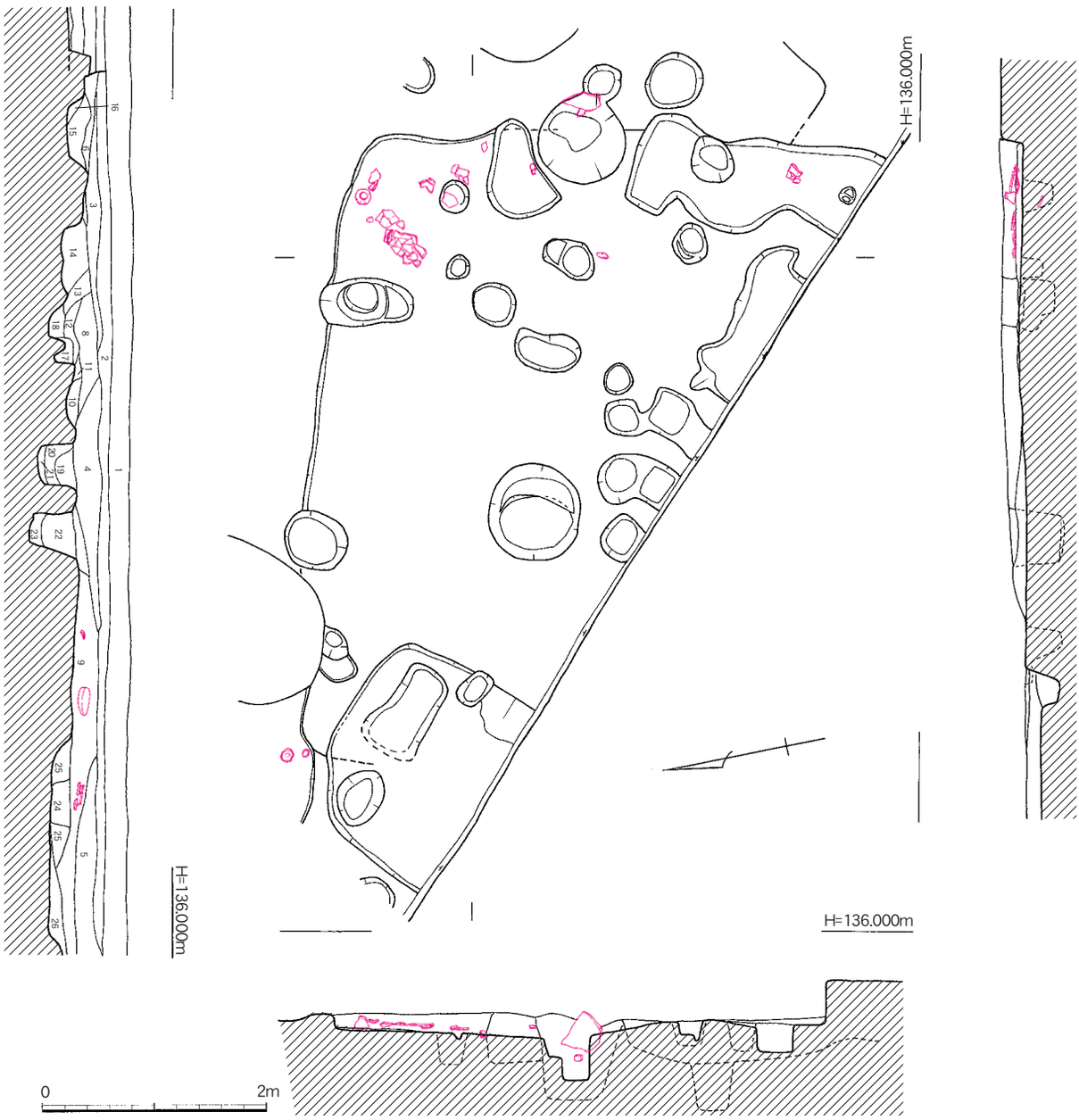


第 20 図　B 地点 16 号竪穴住居実測図（1/60）



第 21 図　B 地点 16 号竪穴住居出土遺物実測図（1/3・1/4）

段階のものが主体を占める。１～５は短い未発達な逆Ｌ字状口縁を持つ甕である。１は口縁端部に三角突帯を貼り付け、平坦面が若干外傾する。復元口径は25.6cm を測る。体部は緩やかに窄まり、厚手の底部に移行する。外底面はやや窪む。胎土に石英を多く含み、外面は縦方向のハケ目後、下から上方向にミガキ調整が施される。内底面には工具痕が残る。２は口縁部に平坦面を持ち、口縁部下位に１条の沈線が巡る。外面はタテハケ、内面には指頭圧痕が残る。３は口縁上面がやや窪み、口縁部下位に１条の沈線を施す。沈線は雑に入れられ湾曲しながら巡るが、磨滅により不明瞭である。胴部はやや丸みを持つ。４は口縁端部に粘土帯を貼り付け肥厚させる。上面は丸く仕上げる。復元口径24.6cm を測り、胎土に赤色・白色粒子を多く含む。外面には縦方向のハケ目が認められる。５は口縁部を肥厚させ、端部は平坦に仕上げる。復元口径21.2cm を測る。６は甕胴部で、復元胴部径27.5cm を測る。７・８はくの字状口縁を呈する甕である。端部はやや窪む。７は復元口径31.0cm を測る。内外面

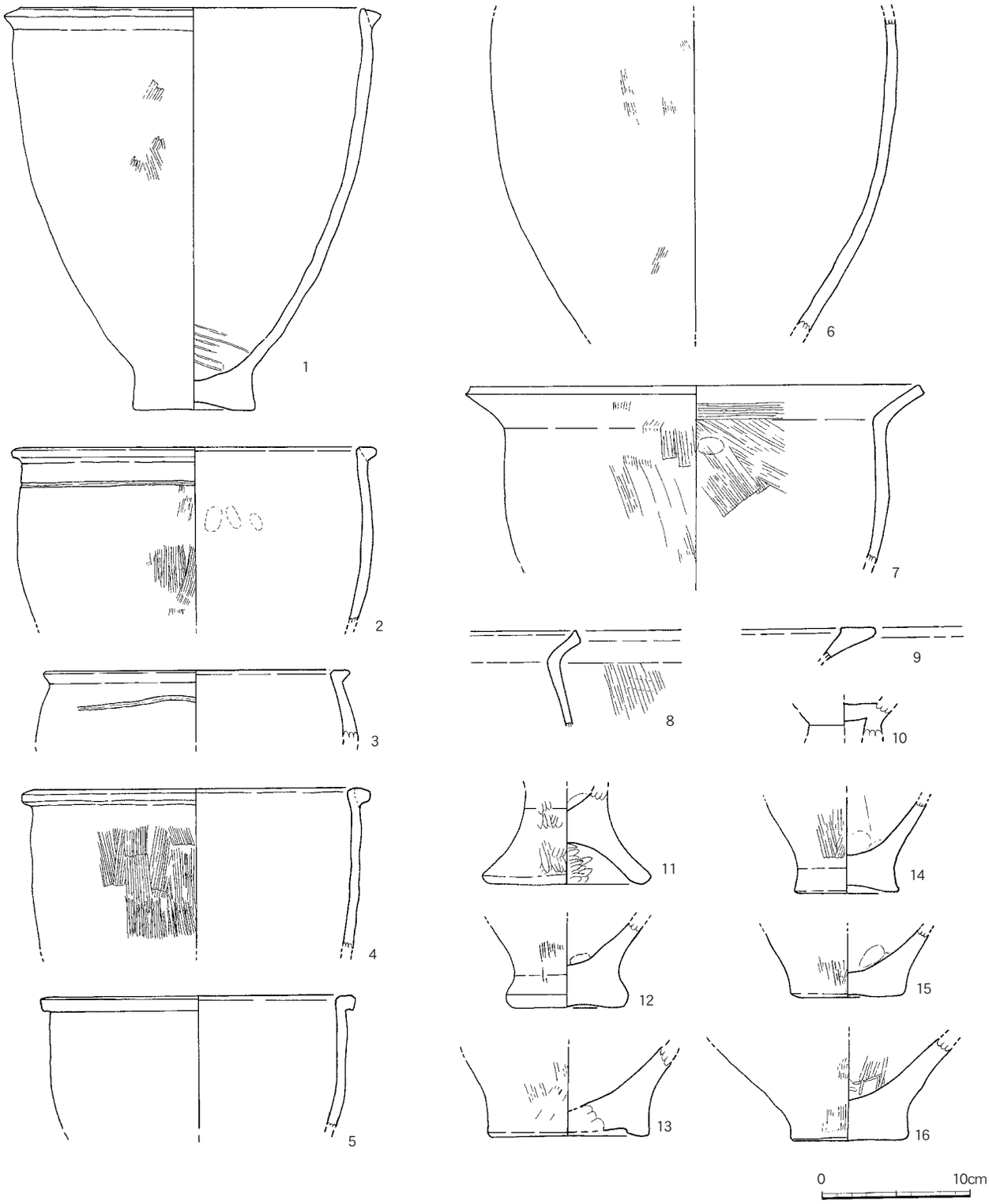


（層序）

1層　明茶褐色土
2層　暗茶褐色砂質土（炭化物若干含む）
3層　暗茶褐色砂質土（炭粒子若干含む）
4層　暗茶褐色粘質土（炭化物若干含む）
5層　暗灰茶褐色粘質土
6層　暗茶褐色粘質土（焼土･炭粒子若干含む）
7層　濃黄茶褐色粘質土
8層　淡暗茶褐色粘質土（焼土・炭化物含む）
9層　暗茶褐色粘質土（炭化物若干含む）
10層　暗茶褐色粘質土
11層　黄茶褐色粘質土
12層　暗茶褐色砂質土（焼土多く含む）
13層　黒茶褐色粘質土
14層　淡茶褐色砂質土
15層　暗黄茶褐色粘質土（焼土・炭粒子含む）
16層　明黄茶褐色粘質土
17層　暗茶褐色砂質土
18層　淡茶褐色粘質土
19層　淡黄茶褐色粘質土
20層　黄茶褐色粘質土
21層　明茶褐色粘質土
22層　茶褐色粘質土（炭粒子若干含む）
23層　淡明茶褐色粘質土
24層　黒茶褐色粘質土（炭化物若干含む）
25層　暗黄茶褐色粘質土（炭化物若干含む）

第 22 図　B地点 19 号竪穴住居実測図（1/60）

ともハケ目調整が認められ、口縁部内面では横方向のハケ目後ナデが施されている。８は跳ね上げの口縁端部を呈しており、胎土に赤色粒子を多く含む。９・10は高坏である。９は全体に磨滅しているが、未発達な鋤先状口縁を呈している。10は高坏の坏部と筒部との接合部片で、接合面が顕著に見られる。11～15は甕の底部で、16は壺の底部である。11は底面が強く窪み脚台状を呈



第 23 図　B地点 19 号竪穴住居出土遺物実測図（1/4）

する。復元底径11.4cm を測り、外面に縦方向のミガキ、内底面には横方向のミガキが施されている。12は肥厚する平底であるが底面がやや窪む。底部の端部がやや張り出すタイプである。復元底径7.4cm を測る。外面には黒班が認められる。15は平底であるがやや窪みのある底部で、12ほど厚くはない。底径7.8cm を測る。外面に黒班が認められる。14は窪み底を呈しており、復元底

径7.0cm を測る。外面に縦方向のハケ目が施され、胎土に角閃石、石英を多く含む。13は平底で、傾きを調整するために粘土を貼り付けている甕底部で、胎土に金雲母を含む。外面は縦方向のハケ目が施されている。16は肥厚する平底の壺底部で、胎土に白色粒子が非常に多く含まれる。内外面の一部に黒班がみられる。内面調整は縦方向のミガキが施され、外面には縦方向のハケ目調整の後横方向のナデが施されている。

住居址東側隅部の床面直上から集中して検出された土器群は、弥生時代中期初頭に比定され、同遺構の廃絶時期を示している。また、住居を切る37号貯蔵穴、28･29号土坑出土遺物（第40･53図）と同形式であるため、切り合い関係から時期差があるものの形式的な変化は認められず、これらの遺構群との時期的な差はほとんどないと考えられる。（玉川）

（2） 貯蔵穴

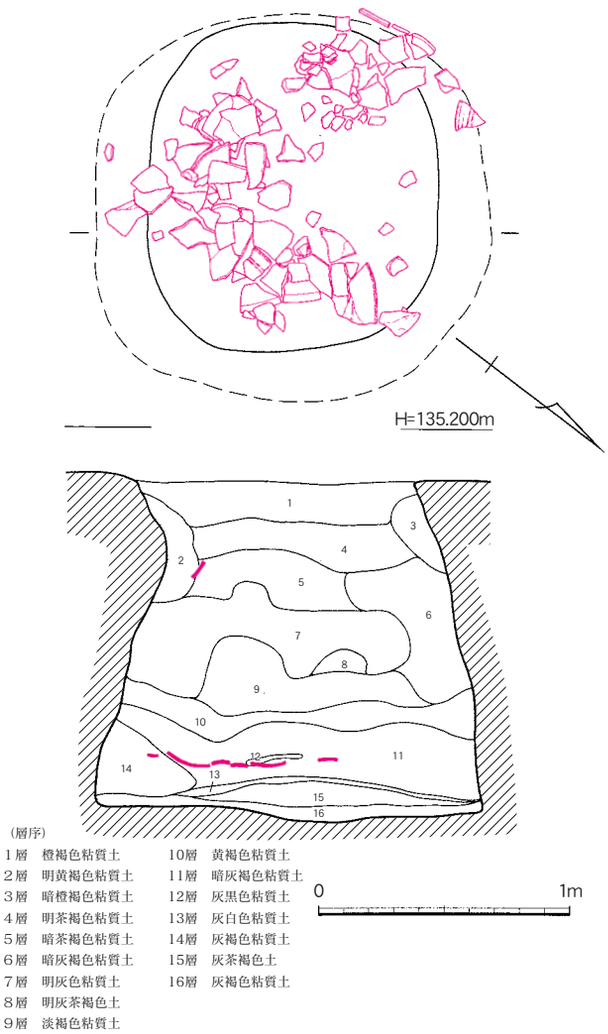
いわゆる袋状貯蔵穴が８基出土している。調査区の中央部から東側に分布し、墓地群や住居群と重複している。西側部分には土坑群が広がり分布域に片寄りがみられる。規模にはバラつきがあり７号貯蔵穴や35号貯蔵穴はやや大型で底面まで深く、25号貯蔵穴は小型で浅い。７号貯蔵穴からは廃棄された状態でまとまって遺物が出土している。

７号貯蔵穴（第24～28図、図版８）

中央部北端で検出された袋状貯蔵穴である。平面は径1.15～1.3mを測る略円形で、断面は袋状をなす。床面はほぼ水平で径1.6m、深さは確認面より1.4mを測り、柱穴は確認されていない。埋土は上層（第１～６層）、中層（第６～９層）、下層（第10～13層）、最下層（第14層）のほぼ４層群に大きく分けられる。第10層は黄褐色粘質土層で崩落土と考えられる。また、第12層の灰黒色粘質土は灰を多量に含む。

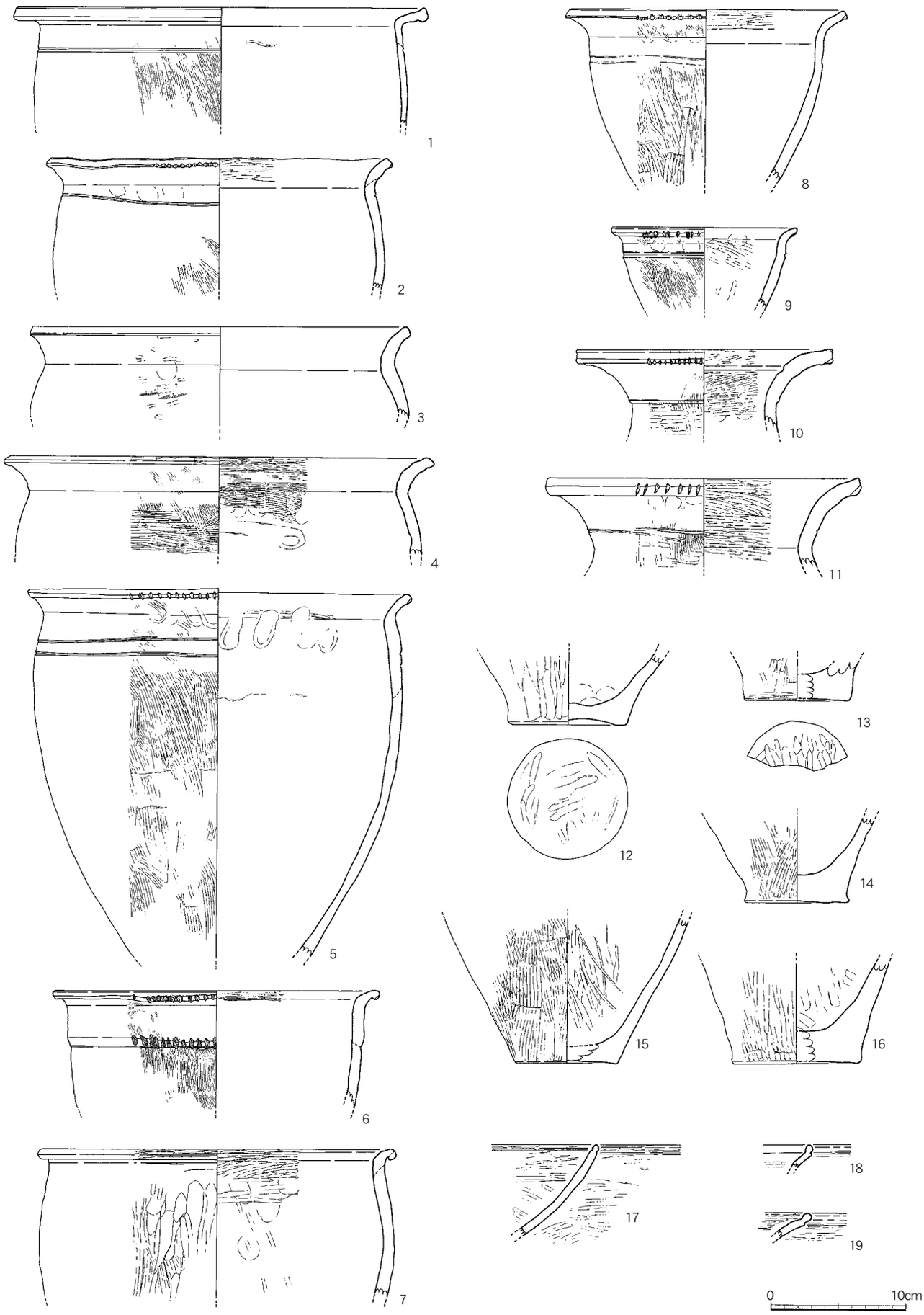
遺物は各層からみられ、第１層より磨製石剣が出土した。床面より約0.3m ほど高い部分の第11層には廃棄されたとみられる土器が集中し、下層にドングリなど炭化物を多く含み、動物の骨片や黒曜石の剥片が出土した。第25図８・９は上層、２～４・11・17は中層、５～７・10・12～14・18・19は下層、15・16は最下層、１は埋土からの一括出土である。

１は口縁部から胴部にかけて残存している甕である。口縁部は逆Ｌ字状を呈し、端部は肥厚し跳ね上げ状になる。口縁下には一条の沈線がめぐり、胴部にはタテハケが施されている。内面には粘土接合痕が器面と断面より確認できる。２は口縁部から胴部まで残存し、口縁部は如意形を呈する甕である。口縁端部下端に刻目、口縁下には沈線を一条有する。胴部はナナメ方向のハケ、口縁部の内面には横方向のヘラミガキが施されている。また、内面には二次的に火熱を受けた痕跡が確認できる。３は口縁部から胴部まで残存している甕である。口縁部から頸部にかけてミガキがみられ、頸部には一部指オサエが確認できる。胴部にはタテハケが施され、一部にハケ工具の圧痕が確認できる。４は口縁部から胴部にかけて残存している甕である。口縁部は強く外反する。端部には横方向のミガキが施されている。胴部はタテハケの後にヨコハケ、最後に横方向のミガキにより調整されている。口縁部内面はヨコハケの後に横方向のミガキが施され、頸部では指オサエによる整形の後にヨコハケによって調整されている。５は口縁部から胴部下半まで残存している甕である。口縁部は如意形を呈し、端部下端に刻目が施されている。胴部上位には沈線が二条めぐり、沈線以

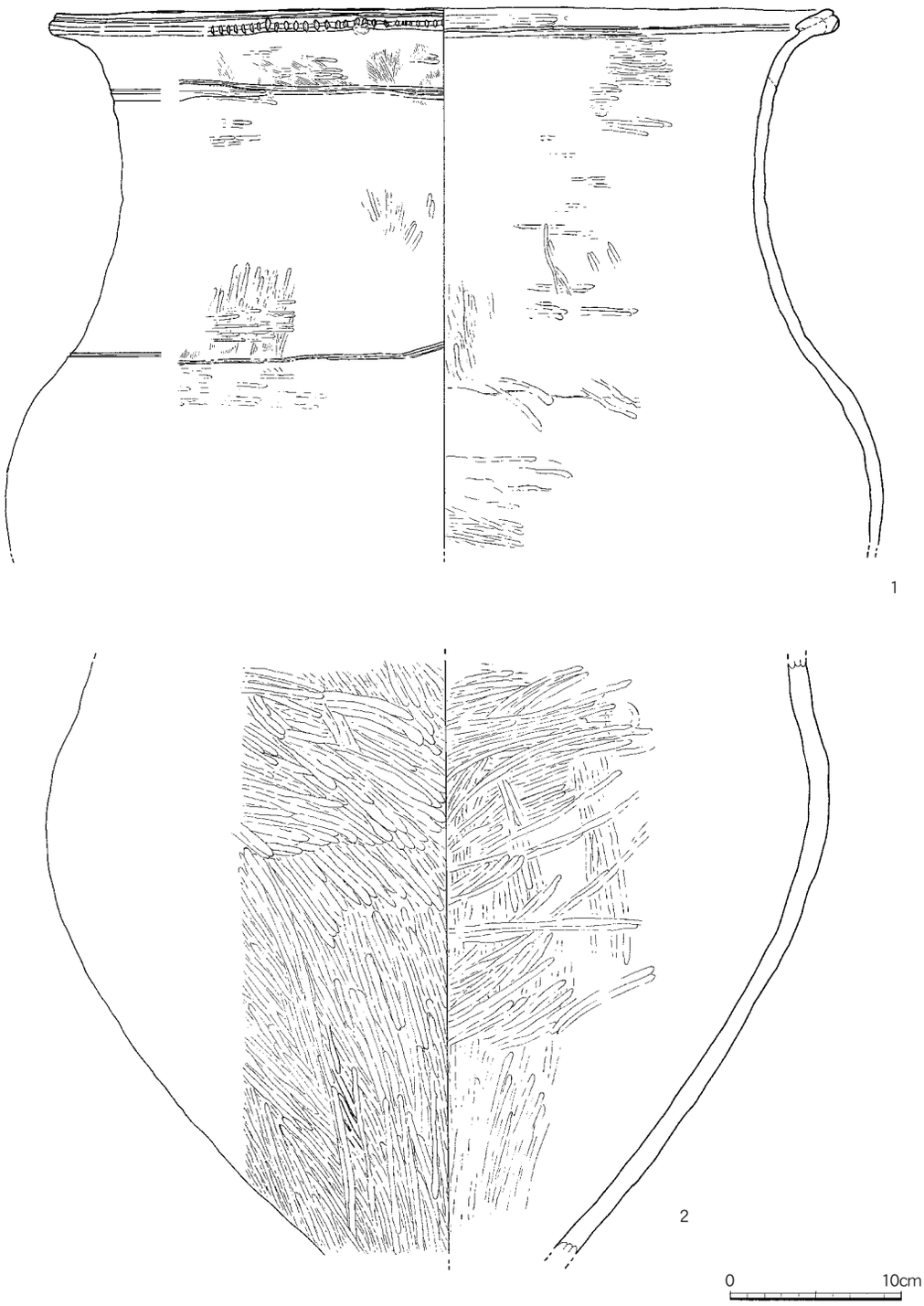


第 24 図　B 地点７号貯蔵穴実測図（1/30）

下ではタテハケが確認される。内外面には指頭圧痕が残り、内面には粘土接合痕が観察できる。６は口縁部から胴部まで残存している甕である。口縁部は如意形を呈し、端部をやや下方に向けて肥厚させている。口縁下端部にはハケ目原体による刻目が施される。胴部には粘土帯接合による段を作り出し、その直上にもハケ目原体による刻目を入れる。また口縁部から胴部上半にかけて製作時の補修痕跡（ヒビ割れの補修）が認められる。口縁部の刻目と補修された口縁の刻目の長さ、幅が異なっている。外面はタテハケによって調整されており､口縁部内面にはヨコハケが残る。７は口縁部から胴部まで残存している甕である。口縁部は如意形を呈し、端部には粘土貼り付けによって下方を丸く整形している。端部には横方向のミガキが施され、胴部外面にはタテハケ後にケズリ状の幅広なミガキが施されている。内面は指オサエによる整形の後に口縁部は横方向のヘラミガキ、胴部上位も横方向のヘラミガキ、さらに下部では斜め方向のヘラミガキによって調整されている。８は口縁部から胴部下部まで残存している小型の甕である。口縁部は緩く外反し、端部は肥厚する。端部下端には刻目を施す。胴部にはやや不明瞭であるが幅広の沈線がめぐる。胴部はタテハケにより整形され、口縁部内面には横方向のミガキが確認される。９は口縁部から胴部まで残存している小型の甕である。口縁下端部には刻目が施され、胴部には沈線が１条めぐり、沈線下部ではタテハケが確認できる。内面では、胴部上半に斜め方向のミガキ、胴部下半には縦方向のミガキが確認できる。10は口縁部から頸部にかけて残存している壺である。外反する口縁部は肥厚して段を有し、端部下端に刻目が施されている。頸部には段を作り、タテハケの後に横方向のミガキが施される。内面は横方向から斜め方向のミガキにより調整され､頸部内面には指頭圧痕がみられる。11は口縁部から頸部にかけて残存している壺である。口縁部には下端に刻目が施され、頸部には沈線がめぐるが重ならず、互い違いになっている。内面は横方向のミガキにより調整されている。12は壺の底部であると考えられる。外面は縦方向のミガキが確認でき、底面にも不定方向のミガキが施されている。13は甕の底部と考えられる。外面にはタテハケの後に縦方向のミガキが施され、底面には一定方向のミガキが確認される。14は甕の底部である。外面に斜め方向のハケが施されている。15は胴部下半部から底部までが残存している甕の底部である。外面は縦方向のハケが施され、内面には縦方向から斜め方向のミガキが施されている。16は底部から胴部下半部まで

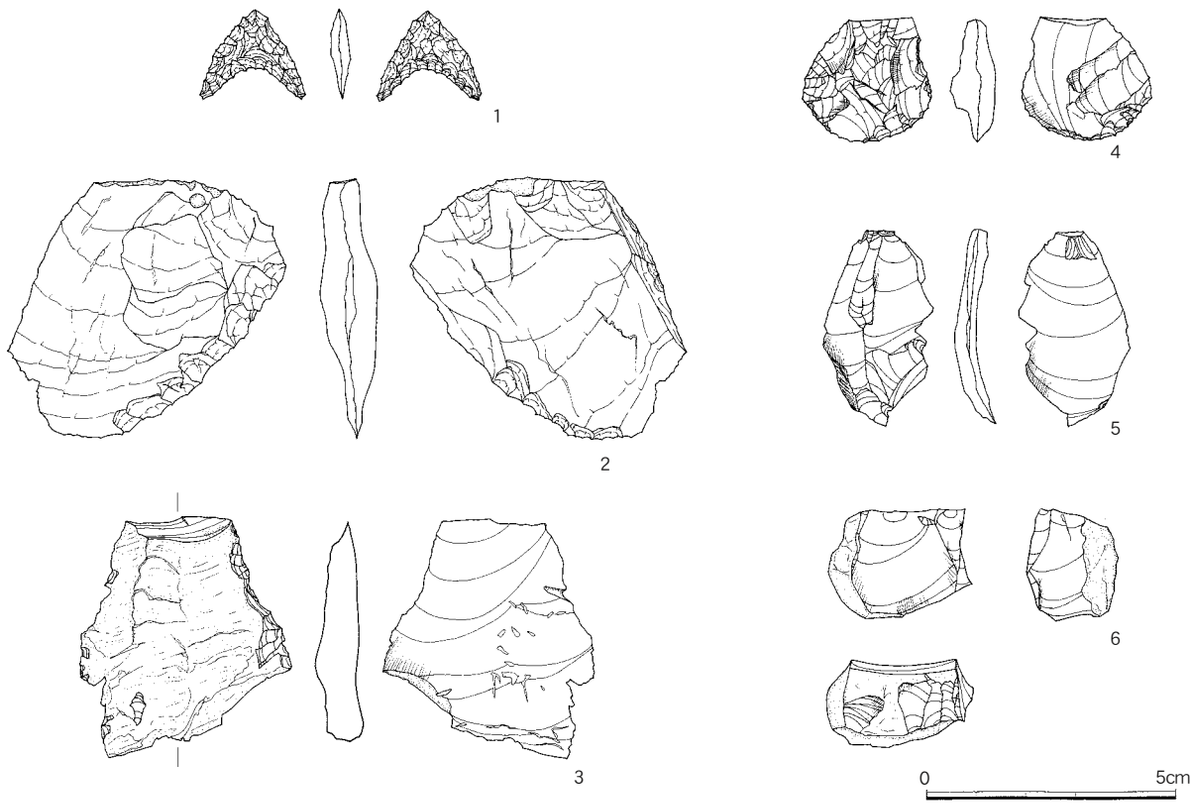


第25図　B地点7号貯蔵穴出土遺物実測図（1）（1/4）



第 26 図　B地点７号貯蔵穴出土遺物実測図（２）（1/4）

が残存している甕の底部である。外面はタテハケの後に縦方向のヘラミガキ、内面は不定方向のミガキが施されている。17は口縁部から胴部上位が残存している縄文晩期の浅鉢形土器と考えられる。内外面とも口縁部に沈線がめぐる。調整は内外面共に口縁部付近では横方向のヘラミガキ、胴部では斜め方向のヘラミガキが施されている。18は口縁部のみ残存している縄文晩期の浅鉢形土器である。口縁部外面に１条の沈線がめぐる。内面で一部ミガキが確認できる。19は口縁部のみ残存する縄文晩期の浅鉢形土器である。口縁部外面に１条の沈線がめぐり、器面は内外面共に横方

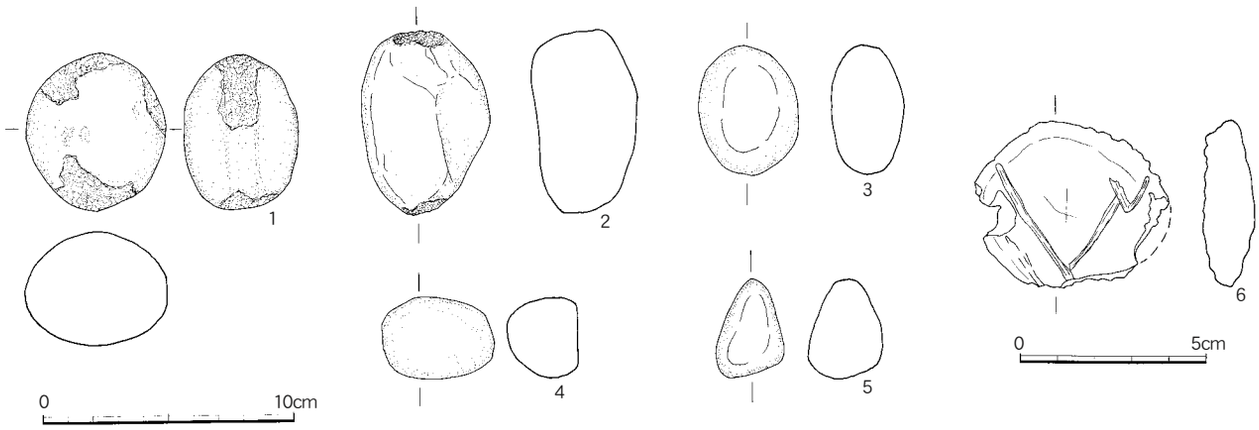


第 27 図　B地点７号貯蔵穴出土遺物実測図（３）(2/3)

向のヘラミガキである。

図26の１は下層より出土した大型の壺である。口縁部径67.6cm。胴部最大径77.3cm を測り、胴部最大径が口縁部径を若干上回る。口縁部は外反し、口縁内面に粘土帯を貼付け肥厚させる。端部には沈線を入れ、下端部に刻目を施す。頸部と胴部の境は不明瞭で口縁下と肩部に一条ずつの沈線がめぐる。口縁部付近では斜め方向のハケの後に横方向のミガキ、頸部では縦方向のミガキ後に下方では横方向のミガキ、胴部では横から斜め方向にかけてのヘラミガキが施されている。内面も横方向及び縦方向のヘラミガキが加えられる。全体的に強い被熱の痕跡が窺える。２も壺である。口縁部から肩部にかけてと底部が欠損し、胴部のみが残存しているが、残存部から頸部の締まりはあまりないものと推測される。調整は外面肩部から胴部最大径の部位で横方向のヘラミガキ、最大径から下方にかけて斜め方向のヘラミガキ、下方から底部付近にかけて縦方向のヘラミガキを主体とする。内面は肩部から胴部最大径の部位にかけて縦方向後に横方向のヘラミガキ、胴部最大径から下方にかけて斜め方向のヘラミガキ、下方から底部付近にかけて縦方向のヘラミガキが施されている。厚手ではあるが、きわめて丁寧な作りの壺である。

図27の１は下層から出土しているサヌカイト製の石鏃である。凹基式の基部を呈し両脚がひらき、所謂鍬形鏃といえるタイプである。丁寧な作りで、押型文土器に伴うものであろう。２は中層から出土しているサヌカイト製のスクレイパーである。大型の剥片を素材として一端に二次加工によるスクレイパーエッジを形成し、刃部の角度を調整している。３は中層から出土した黒曜石製の二次加工剥片である。素材となる黒曜石は内部に不純物を多く含むが西北九州産と考えられる。背



第28図　B地点７号貯蔵穴出土遺物実測図（4）（1/2・1/3）

面に自然面を大きく残し、一端にあまり丁寧ではない二次加工を加えている。４は姫島産黒曜石製のラウンドスクレイパーである。主要剥離面には一部の周縁部と中央部にまで達する２枚の剥離だけしかみられないが、背面には全体的に調整剥離を加えて整形している。５は中層から出土した黒曜石製の剥片である。西北九州産の漆黒色を呈する黒曜石を使用し、薄く湾曲した剥片を剥離している。背面の一端には自然面が観察できる。６は下層から出土した黒曜石製の石核である。小さな亜角礫の原石を用いて、一端に打面を形成し、剥片を剥離している。剥離痕の一端に古いパティナを持つ面が観察できる。

図28の１は上層、２・３・5は中層、４・6は下層から出土している。１は安山岩製の敲石である。丸みがあり周辺部に敲打痕が認められる。２は安山岩製の敲石である。両端に顕著な敲打痕が観察される。３～５は安山岩製の石弾と考えられる楕円形を呈する小礫である。自然礫を利用し、特に加工はみられない。６は扁平な楕円形を呈する土製品である。片面に沈線状の線でＶ字状に文様が施されている。全体的に被熱しており、表面は黒変、裏面は赤変している。両端は破損し、沈線の中には細かな条線が認められる。

上層及び中層（第1～9層）から出土した土器は全体として多くない。各層ともに如意形口縁、口縁部の刻目、胴部上半に沈線が施される特徴を持つなど、概ね板付Ⅱ式の新しい段階から城ノ越式に比定される。第11層からは土器が集中して出土している。図26の１はその形態的特徴から金海式併行期のものと考えられ、日田市域内でのこの時期の大型壺の発見は初めてである。２は板付Ⅱ式の新段階ではないかと考えられる。これらの遺物は完形ではなく、下層から集中し出土することなどから廃棄されたものであると考えられる。また、床面には完形の土器や柱穴などは確認されていないが、床面の北、南、東側の３つの隅には拳大の礫が５点確認され、貯蔵行為と何らかの関連性があるのではなかろうか。25図の17～19のような縄文晩期の遺物も含まれるが7号貯蔵穴の出土土器は板付Ⅱ式の範疇に入り、概ね前期後半から終末にかけての時期に相当する。貯蔵穴の機能を失うと廃棄土坑として利用されるがそれも短期間で埋没したものであろう。　（米村・下森）

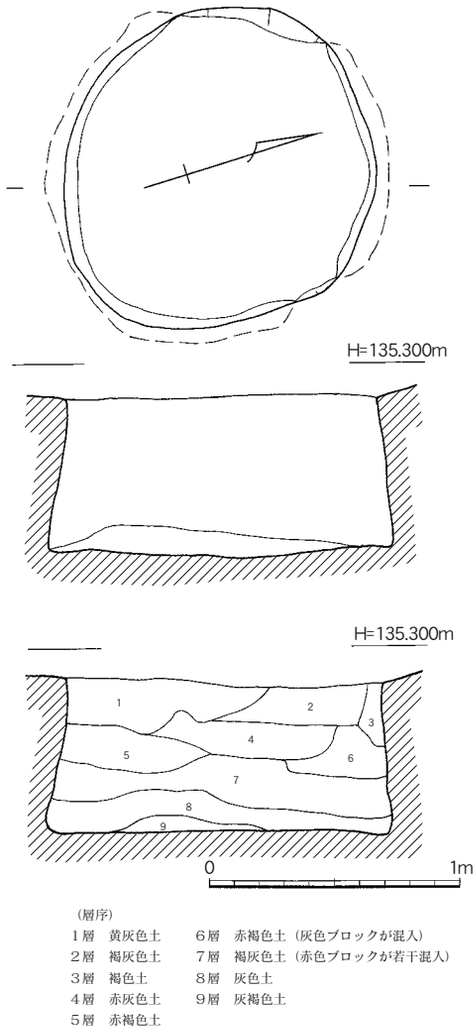
８号貯蔵穴　（第29・30図、図版９）

調査区の東側で検出した袋状貯蔵穴である。遺構は９号土坑を切っており、上面は大きく削平を受けている。規模は径1.25m、深さ0.64m、底径1.37mを測る。床面は中央が、やや窪み、柱穴

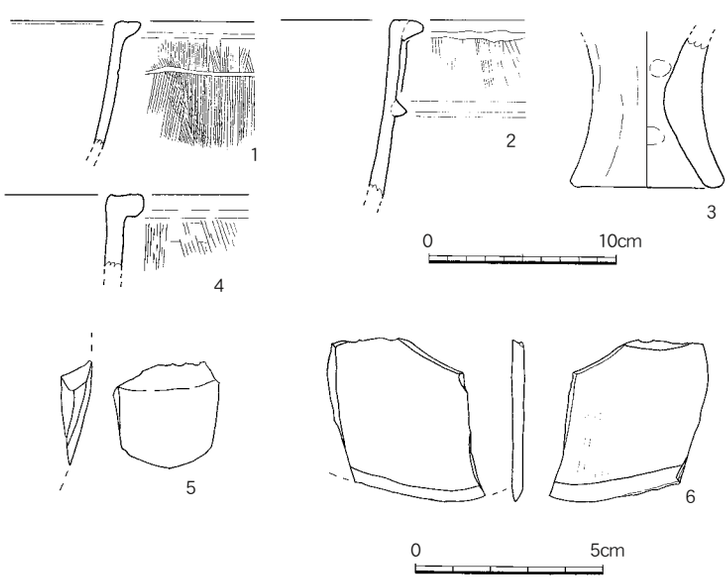
は認められない。埋土は大きく上層（１～３層)、中層（４～７層)、下層（８～９層）の３層群に分けられる。２層には赤色ブロック、５～６層には灰色ブロックが混入している。８～９層の灰色、灰褐色土層からは炭化物が出土している。

第30図は出土した土器と石器である。１が上・中、２～４が下層よりそれぞれ出土している。１は短い逆Ｌ字状の口縁部を持つ甕である。胴部上位には１条の沈線を巡らす。外面のハケ調整は斜め方向の後に縦方向に施している。２も短い逆Ｌ字状口縁を呈する甕で、胴部は膨らみを持たず直線的にのび、外面には１条の突帯を施す。口縁部には指頭圧痕がみられ、口縁部から突帯の間にはタテハケ調整の跡がみられる。また、口縁部上面にもハケによる調整の痕跡が見られる。３は小型の器台である。口縁部を欠損し、復元すれば10cm 程度になるものと思われる。外面には縦方向のヘラナデ様の稜線を確認する事ができる。４は逆Ｌ字状の口縁部を呈する甕である。上面はやや窪み、端部は肥厚させる。外面は横ナデの後に斜め方向のハケによる調整を施している。５は柱状片刃石斧の一部であると考えられる。刃部に近い部分で、破損面以外は平滑に仕上げられている。使用石材は頁岩である。６は石庖丁である。石材は頁岩を使用し、一部に刃面が確認できるが欠損により紐孔、背部は確認できない。

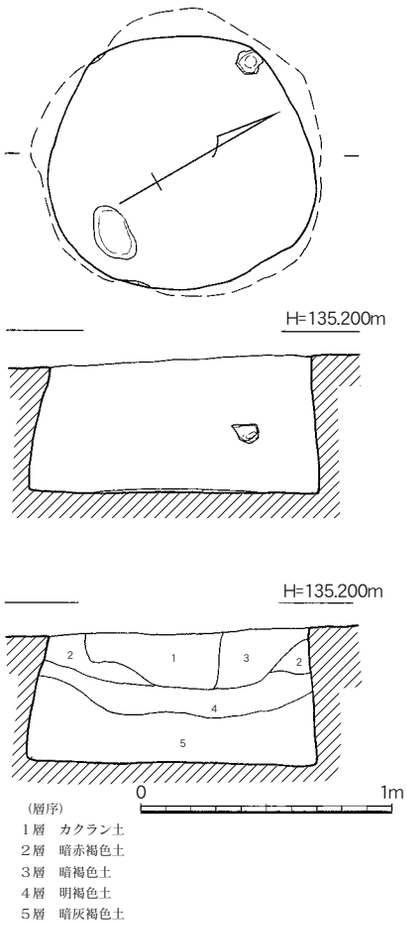
出土している土器が城ノ越式段階であるため、この遺構は中期初頭と考えられる。　（末國）



第 29 図　Ｂ地点８号貯蔵穴実測図（1/30）



第 30 図　Ｂ地点８号貯蔵穴出土遺物実測図（1/2・1/4）

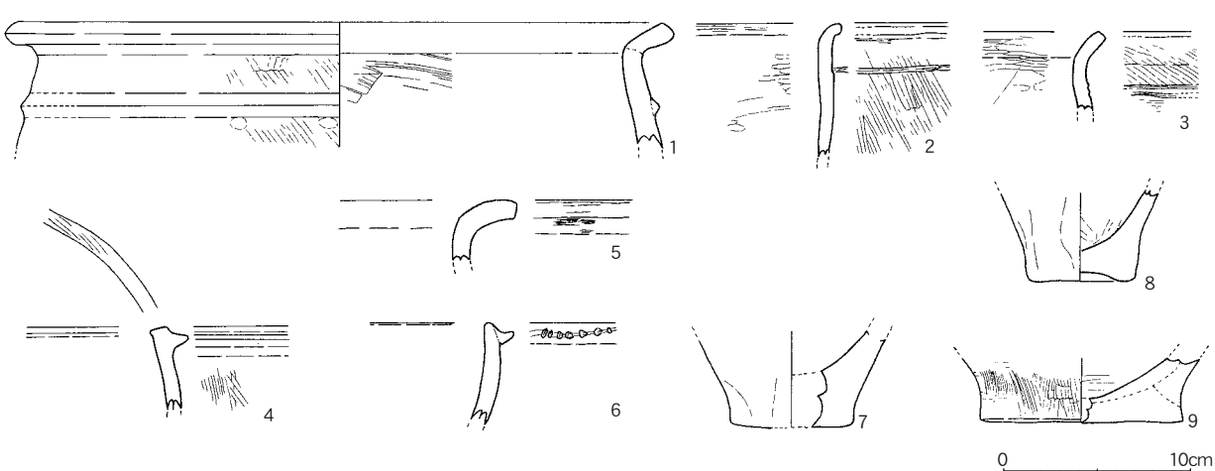


第 31 図　B地点 25 号貯蔵穴実測図（1/30）

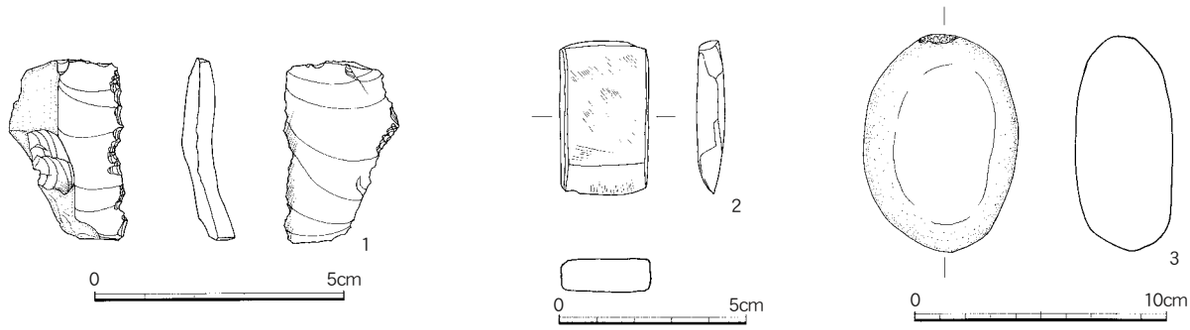
25号貯蔵穴（第31～33図、図版９）

調査区の北側中央部で検出された小型の袋状貯蔵穴である。遺構は107号木棺墓に切られており、上面は削平を受けている。規模は径1.05m、深さ0.49～0.55m、底径1.15mを測る。床面はおおむね平坦で柱穴は認められない。埋土は上層（１～３層）、中層（４層）、下層（５層）の３層群に分けられる。４層には若干だが炭化物が混入しており、５層では上～下部にかけて焼土ブロックがまだらに入っている。

第32図は出土した土器である。１～３・５・８が上層より、４・６・７が下層よりそれぞれ出土している。1はくの字状口縁を呈する甕である。胴部上位には１条の三角突帯を巡らしている。外面はナナメハケ、内面は工具ナデである。２・３は如意状口縁を呈する甕である。２は口縁部が短く外反し胴部上位に１条の沈線を巡らす。口縁部内面には横ハケ、胴部外面には斜め方向のハケ目調整を施している。胴部内面には横ハケの後にミガキ調整が見られる。３は胴部上位に２条の沈線を巡らしている。外面には斜め方向のハケ調整の後に横ナデで調整している。内面は横方向の工具ナデの後に横ミガキを加えている。５は壺の口縁部で強く外反し、端部は平坦に仕上げる。外面にヘラミガキによる調整が施されている。４はやや内湾する口縁で口縁端部を平坦に調整しハケ調整を施している。口縁直下には１条の三角突帯を施す。６はやや内湾し端部を丸く調整した口縁部である。口縁直下には突帯を１条巡らし、先端に刻目を施す。4･6はいわゆる下城式系の甕である。７～９は甕の底部である。７は厚みのある平底で不明瞭だがヘラでナデた様な稜が見られる。８は



第 32 図　B地点 25 号貯蔵穴出土遺物実測図（1）（1/4）



第 33 図　B地点貯蔵穴出土遺物実測図（2）（2/3・1/2・1/3）

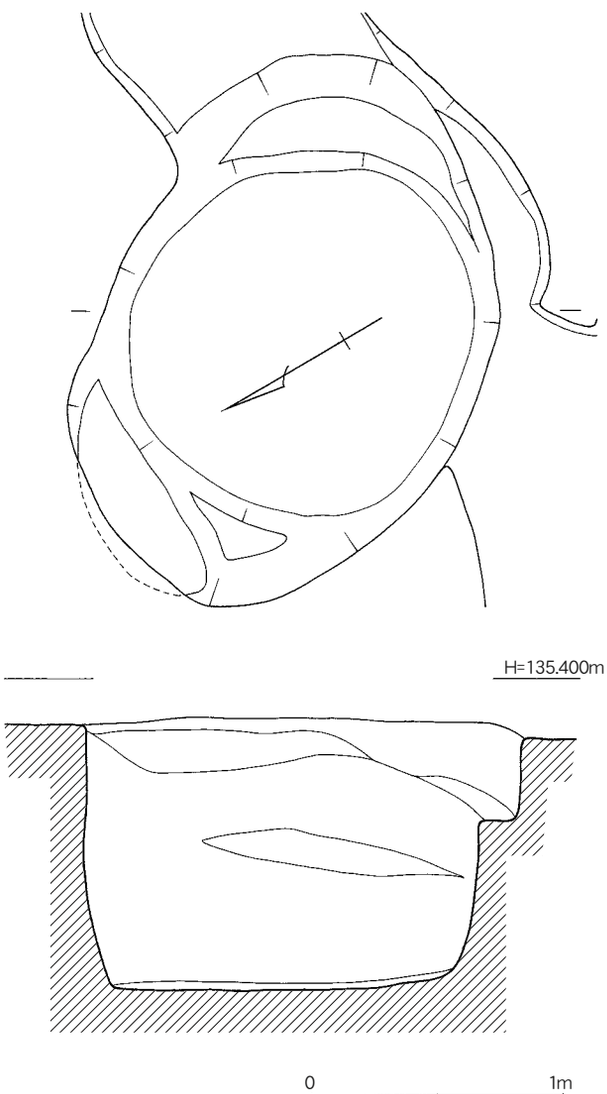
窪み底の底部である。内外面共にヘラナデによる稜線が確認できる。９は平底の底部である。底部直上の外面は縦ハケの後に横ナデによる調整が施されている。

33図の１は下層から出土した黒曜石製の二次加工剥片である。側縁に二次加工を施している。石材は漆黒色を呈し、透明度が高く、縞が確認できることから西北九州産の黒曜石と思われる。２は頁岩製の小型の扁平片刃石斧である。両側は節理面を利用し、全体に丁寧な研磨が加えられている。３は安山岩製の敲石兼磨石である。楕円礫を用い長軸の一端に敲打痕が確認できる。平坦面では顕著な磨痕は確認できないが、他の面より滑らかである。　（末國）

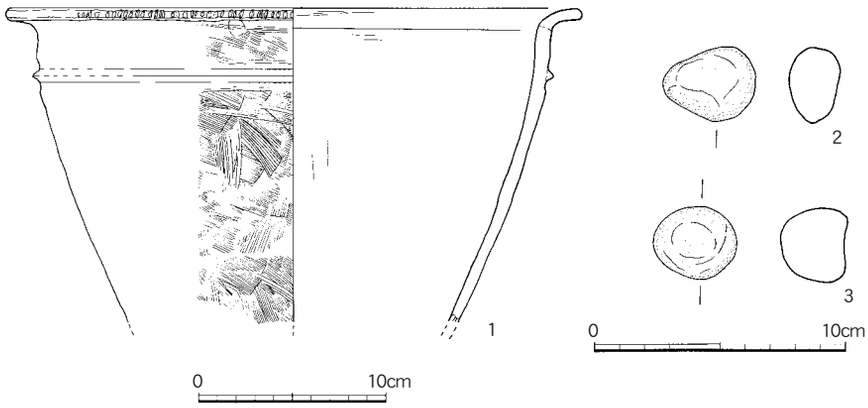
27号貯蔵穴（第34図、図版10）

９次調査区のほぼ中央より検出された貯蔵穴である。北側の一部を12号甕棺墓に、また、南東部分５分の１ほどを４号甕棺墓の遺構に切られた形で検出された。ほぼ円形の形状を成しており、残存している部分の径は、約1.55m、検出面からの深さは1.09mを測る。遺構の上位からほぼ垂直に掘り込まれている。床面はおおむね平坦であり、床面径は1.38mを測る。出土遺物としては、甕等の土器とともに石器が出土している。

第35図１は、強く外反する口縁を有し、胴部が膨らみを持たず直線的にのびる甕である。口縁端部に刻目を施し、胴部上位に三角突帯を１条貼り付ける。外面の調整は突帯の貼り付けに先行しておこなわれており、突帯の付近では貼り付け後に横方向のナデ調整が行われている。胴上部では横方向のハケ目調整後横方向のナデ調整を行う。また、胴部



第 34 図　B地点 27 号貯蔵穴実測図（1/30）



第 35 図　B 地点 27 号貯蔵穴出土遺物実測図（1/3・1/4）

中位では横方向のハケ目調整・横方向のナデ調整を行った後、部分的に縦方向のハケ目調整を行っている。ハケ目調整の単位は細かく0.1cm ほどの均一な幅を有している。原体は２種類あると思われる。内面は縦方向のハケ調整の存在が確認できるものの磨滅･剥離が著しい。胎土の特徴としては含まれる混和材の中で、白色粒子及び赤色粒子の多くが3mm から6mm と比較的大きいことが挙げられる。

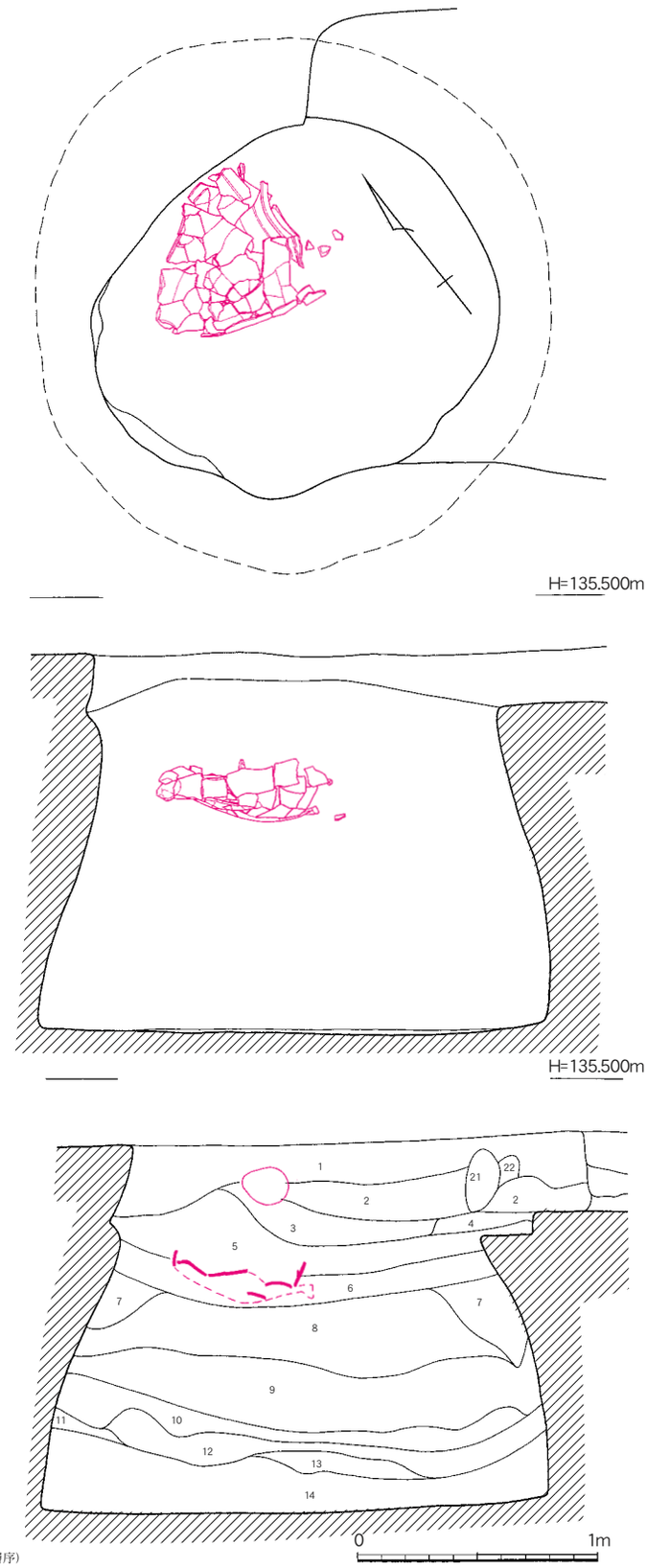
第35図２・３は石弾であろうか。円形の小礫で、特に加工は認められない。２は砂岩製でそれぞれ最大で長さ3.65cm、幅3.0cm、厚さ2.0cm、重さ25.1ｇを測る。３は安山岩製で同じく、長さ3.3cm、幅2.9cm、厚さ2.5cm、重さ35.65ｇを測る。（鶴田）

35号貯蔵穴（第36～38図、図版10）

35号貯蔵穴は、調査区東半側やや中央に位置している袋状貯蔵穴である。当初上面は６号土坑に切られていると考えられたが、その後、別遺構と切り合っていることが分かり、35号貯蔵穴と６号土坑との切り合いは確認できなかった。６層以上の出土遺物は別遺構の可能性が高いが、ここではまとめて報告しておきたい。貯蔵穴残存部の上面は径1.5m、最大径2.1m、深さ1.55m、底径2.1mを測る。床面はほぼ平坦で、柱穴等は見られない。埋土は計17層に分かれ、１～６・21・22層は別遺構に伴う層であるとみられ、以下が35号貯蔵穴の埋土層である。５・６層には完形に復元できる大甕が包含されていた。７層は黄褐色土であるため肩部の崩落土であるとみられる。

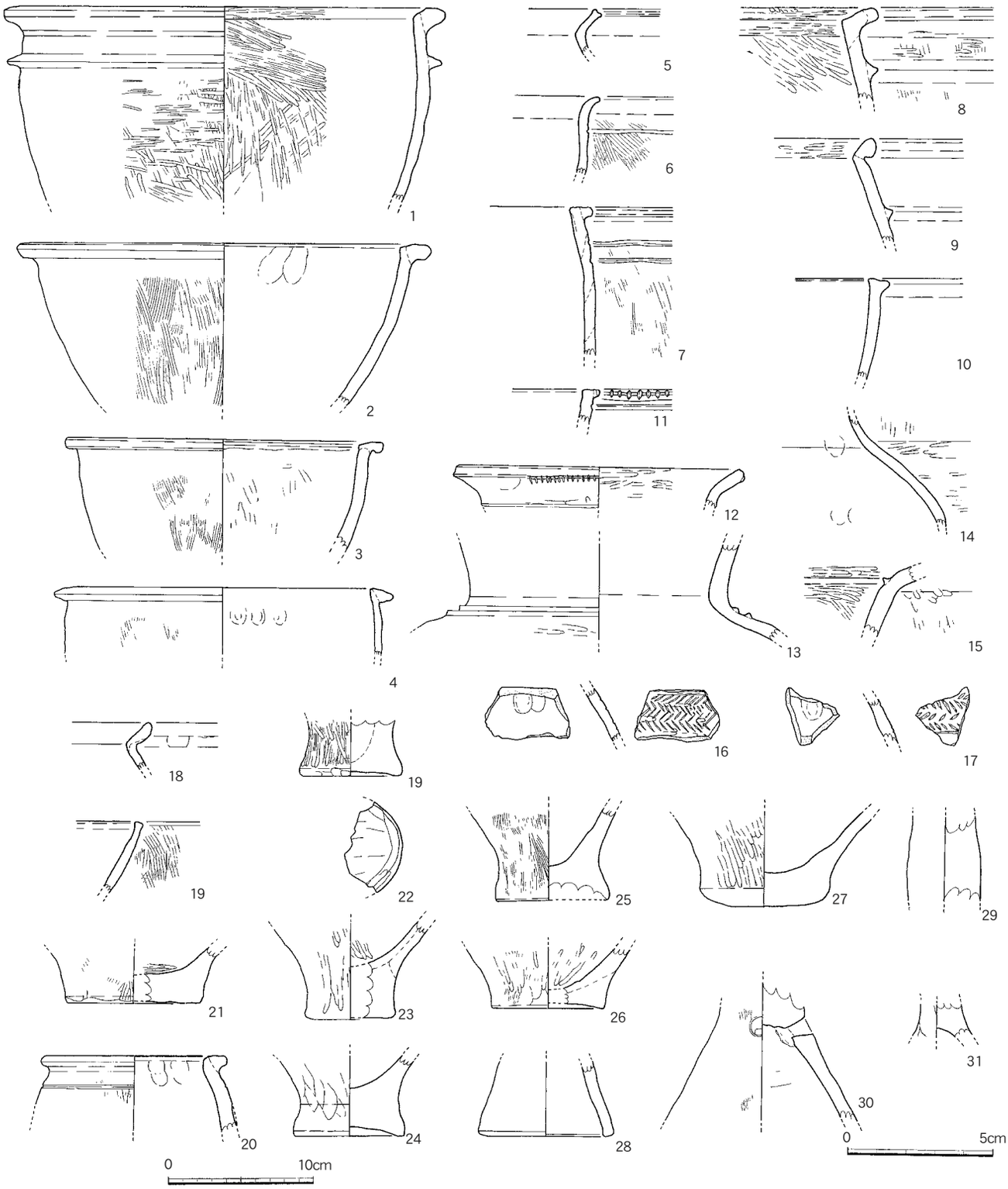
第37・38図は出土遺物実測図である。第37図、５・18は上層、６・13・14・16・22・29・31は中層、２・９・10・11・12・15・19・21・25・27・30は中層下位、１・３・４・７・20・23・24・26は下層、17は最下層、８・28は一括遺物として出土している。全体として、城ノ越式段階のものが主流を占める。１～４・７・８は逆Ｌ字状口縁を呈する甕である。１は丸みを持つ胴部を有し、口縁部は粘土帯を貼り付けて端部を肥厚させる。口縁部下位には大きい１条の三角突帯を貼り付ける。内外面ともミガキ調整が認められる。２は口縁端部を肥厚させる。外面にはタテハケ、内面には指頭圧痕が残る。３は口縁上面が平坦で、端部を丸く肥厚させる。胴部は張り出さず２と同様浅いタイプの甕である。４は口縁上面の平坦部がやや外側に傾斜する。胴部は張り出さず、直線的に窄まる形態である。５はくの字状口縁を呈する甕で、口縁端部を跳ね上げ、中窪みする端部を持つ。６は如意状口縁を呈する甕で、口縁部下位に１条の沈線が巡る。７は口縁上面が平坦で、口縁下位に２条の沈線が巡る。８は一括資料で、口縁部が逆Ｌ字状を呈し、平坦面が内傾する。口縁部下位に三角突帯を貼り付け､口縁端部と突帯の間に横方向のミガキ調整がみられる。また内面にも斜め方向のミガキ調整が施される。９は口縁部がくの字状に外反し、肥厚した端部を有する甕である。口縁下に三角突帯を１条巡らす。口縁部内面に横方向のミガキ調整が認められる。

10は口縁上面がやや窪み、外側につまみ出す端部を有する甕である。胴部は張り出さず、直線的に窄まる形態を呈す。11は口縁端部に刻目が施され、口縁直下に１条の沈線を巡らす。12～17は壺である。12は外反する口縁を持つ壺である。肥厚する口縁端部に刻目を巡らす。13は口縁部が欠損している壺の頸部である。頸部と肩部の接合部に、２条の三角突帯を巡らす。突帯部下位にミガキ調整が施されている。14は壺の肩部である。調整は、頸部に縦方向のミガキ、肩部に横方向のミガキ調整が施されている。外面は丹塗りである。15は頸部内面に三角突帯を貼り付けた壺である。内外面ともミガキ調整が施されている。内面の三角突帯から、周防灘沿岸地域の影響を受けた壺であると思われる。16・17は15同様、周防灘沿岸地域の影響を受けたと思われる壺で、肩部のみの破片である。外面に羽状文が施されているが、16は17に比べ施文が濃密で、17は下位に１条の沈線がみられる。18は５と同様くの字状口縁を呈する甕で、口縁端部を若干跳ね上げている。19は平坦な端部を呈する鉢形土器であろう。外面はハケ目調整が施されている。20は全体的に厚手の甕で、短い逆Ｌ字状を呈する。口縁部下位に１条の沈線が巡る。21～27は甕で、21は肥厚する平底を呈し、内面底にミガキ調整がみられる。22～25は厚味の強い底部で、底面がやや窪む。ハケ目及びミガキ調整が施される。22の底部内面にはケズリによる調



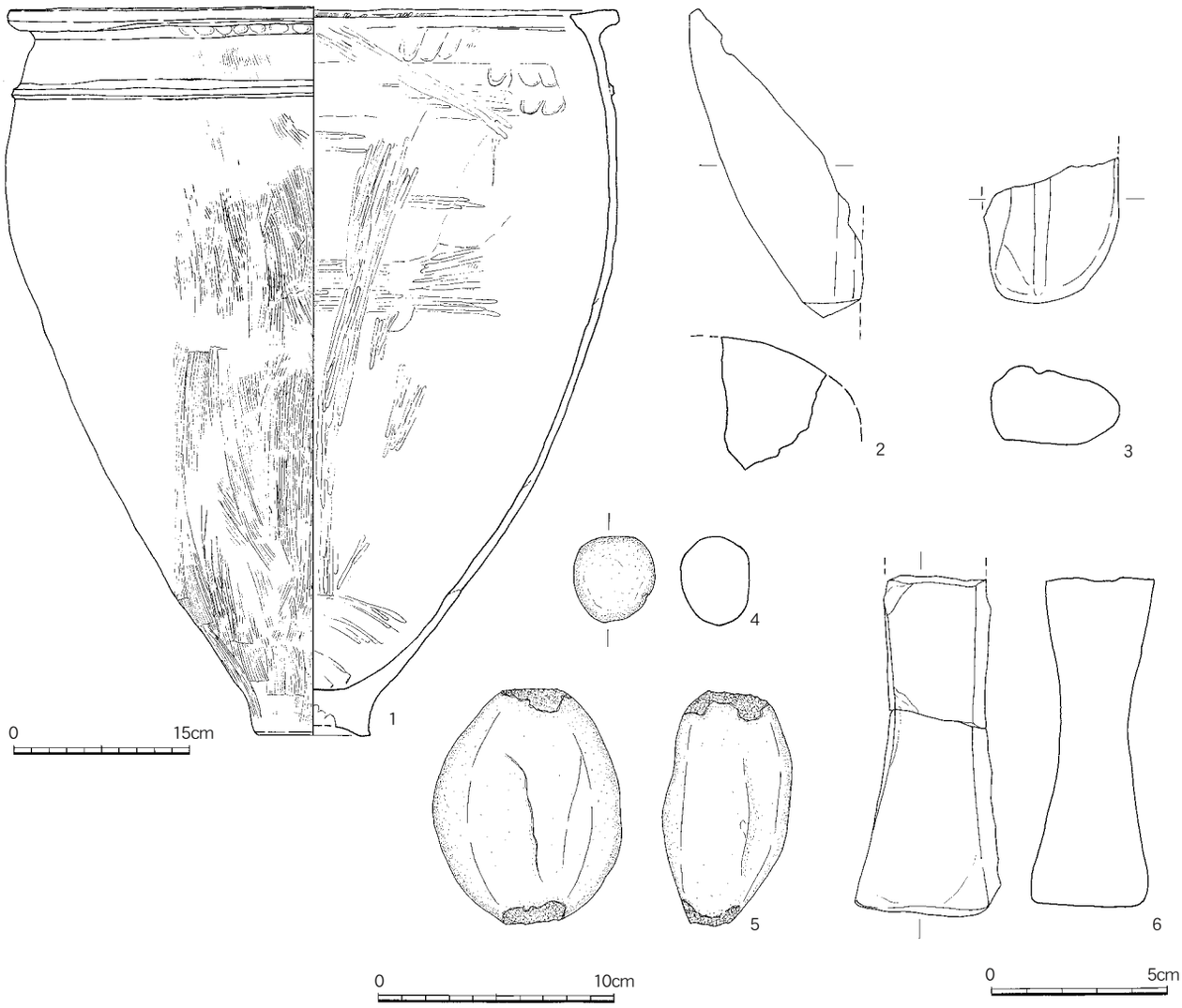
（層序）
１層　暗黄褐色土（灰色土混入）
２層　暗褐色土
３層　暗黄褐色土
４層　暗茶褐色土
５層　暗褐色土（2層より暗い）
６層　茶褐色土
７層　黄褐色土（崩落土）
８層　茶褐色土（焼土・炭化物若干含む）
９層　暗茶褐色土（焼土・炭化物若干含む）
10層　黄褐色土
11層　暗茶褐色粘質土
12層　暗茶灰色土（焼土･炭化物若干含む、下位に炭化物が堆積）
13層　暗茶褐色土（下位に炭化物が堆積）
14層　暗茶褐色土
21層　暗褐色土
22層　明褐色土

第 36 図　Ｂ地点 35 号貯蔵穴実測図（1/30）



第 37 図　B 地点 35 号貯蔵穴出土遺物実測図（1）（1/2・1/4）

整がみられる。26は平底でやや窪む形態を呈している。27は肥厚する底面が凸レンズ状を呈する甕である。28は器台の裾部である。内面に指頭圧痕が認められる。29は高坏の筒部の一部であろうか。30は高坏で、脚部上位に１箇所焼成後の穿孔が認められる。31はミニチュア土器で器種は

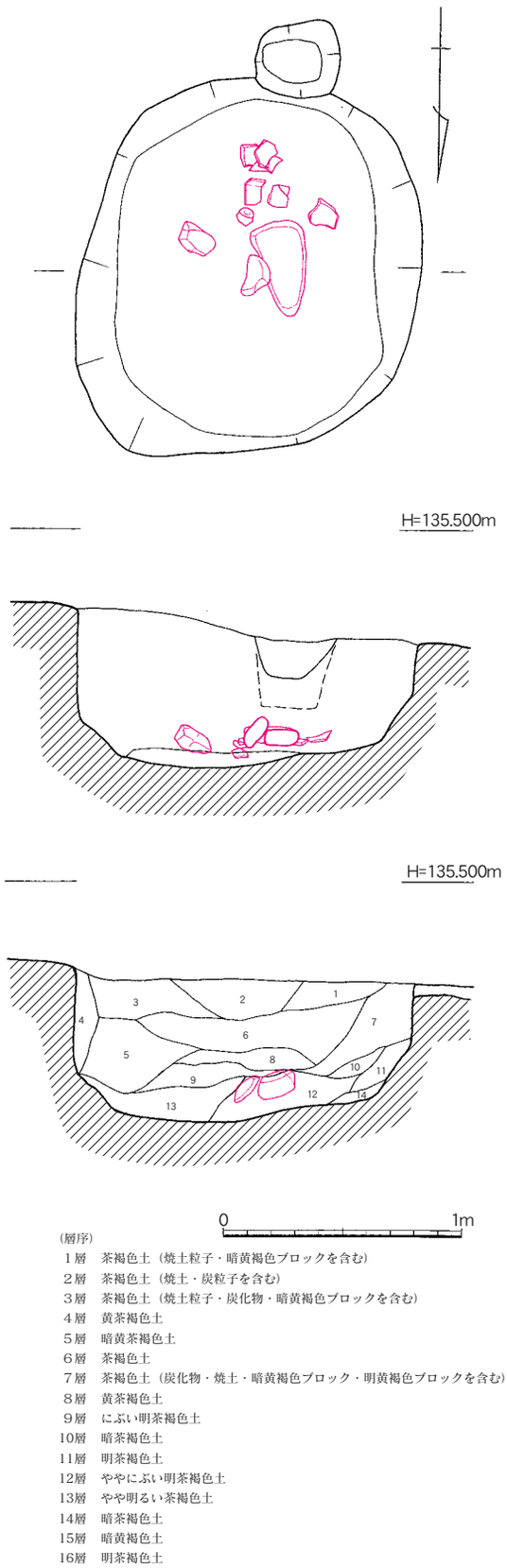


第 38 図　B地点 35 号貯蔵穴出土遺物実測図（1/2・1/3・1/6）

不明である。

第38図の１は、５・６層出土の甕である。Ｔ字に近い口縁を有し、口縁部下位には中窪みの台形突帯が１条巡る。ほぼ完形で、外面は縦方向のハケ目調整が施される。口径52.3cm、器高62.7cm を測る。城ノ越式から須玖Ⅰ式への移行期段階のものと考えられる。

２～６は出土石器である。２は中層から出土した今山産玄武岩製の太型蛤刃石斧である。敲打による痕跡が一部に残り、丁寧に研磨が加えられている。体部しか残存していないが、石材や形状などから規格品と思われる。３は中層下位から出土した砂岩製の砥石である。一面には研磨したと思われる溝が確認できる。４は一括資料である安山岩製の石弾であろうか。５は中層下位から出土した安山岩製の敲石である。長軸の両端に顕著な敲打痕が観察できる。６は中層下位から出土した砂岩製の砥石である。一端は損失しているが、中心部が凹むほどの使用の痕跡が窺える。また、写真のみの掲載だが、中層で安山岩製の扁平打製石斧が出土している。最大長10.1cm、最大幅5.7cm、最大厚0.95cm を測り、剥片の周縁部を両側からの２次加工により形成している。刃部には使用時のものと思われる磨滅が確認できる。なお、図版48に掲載している。



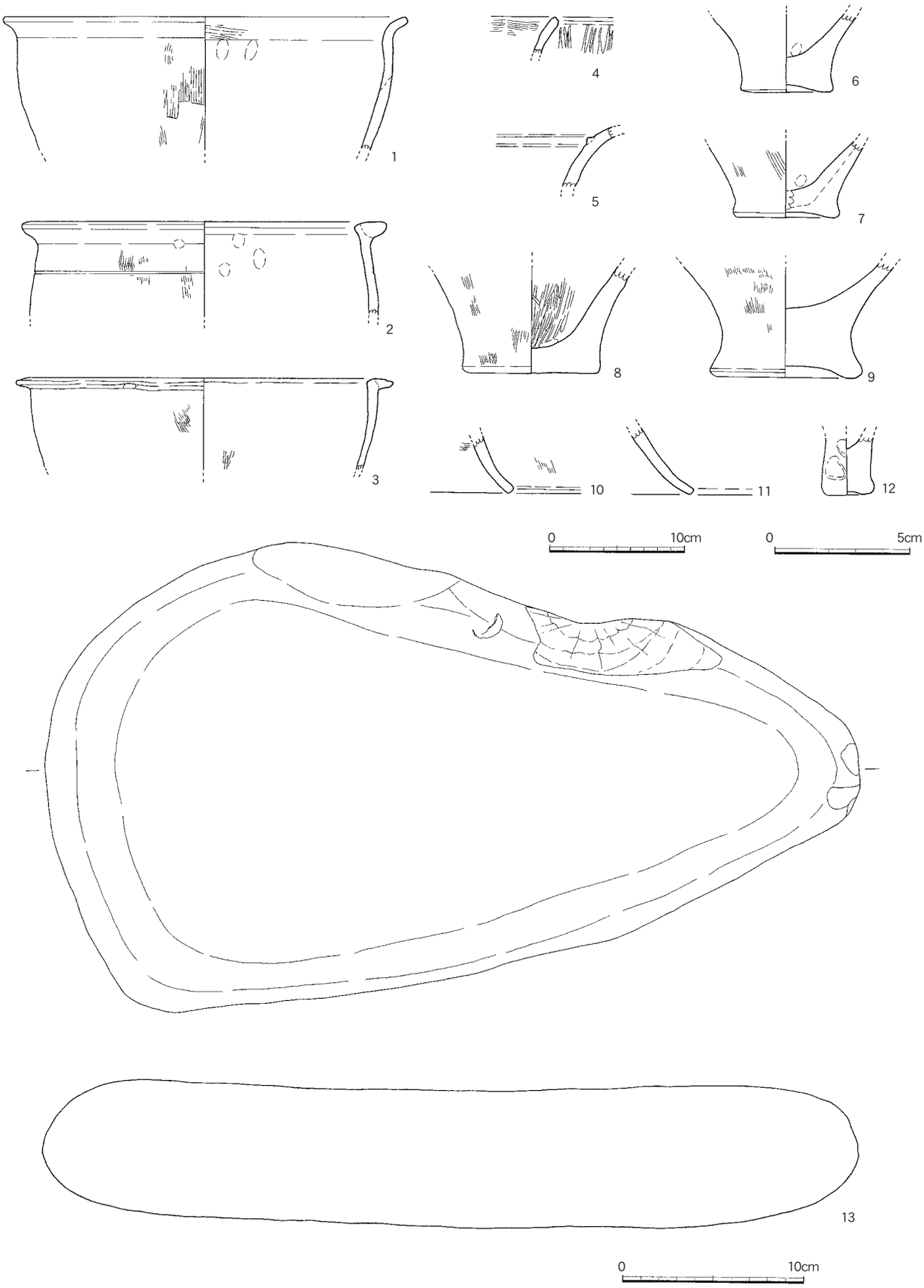
第 39 図　B地点 37 号貯蔵穴実測図（1/30）

以上35号貯蔵穴では、城ノ越式段階でもやや古い時期に貯蔵穴が廃絶されたと考えられる。中層でフラットに踏締められた６層と８層の境が存在し、別遺構の存在が考えられる。中期前半に属するものであろう。　（玉川）

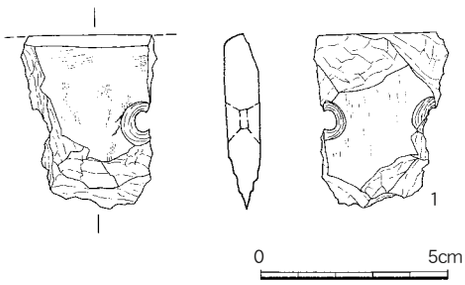
37号貯蔵穴（第39～41図、図版11）

調査区南部で検出された貯蔵穴である。28号土坑、19号竪穴住居址と切りあい関係をもち、両遺構に後出する。N5°Ｅでやや短い楕円形プランをとり、検出面の長軸は約1.6m、短軸は約1.4mを測る。検出面からの深さは約0.6mで、床面は水平でなく中央部がやや凹んでいる。床面も検出面に沿うかたちで、ほぼ南北方向に楕円形をなし、長軸は約1.4m、短軸は約1.2mを測る。埋土は１～14層まで分層され、１・２・８・10層は砂質土、他は粘質土であるが、上層から下層にかけて粘性が高くなる傾向にある。ほぼ全層とも、地山のブロックを含み、更に２・３・５・６・10層にはまばらに炭化物と焼土の粒子が含まれる。

第40･41図は出土遺物である。1･2･4・9・10は上層から、５と第41図の１は中層から、３・６～８・13は下層からそれぞれ出土している。11・12は一括出土である。１は如意状口縁をもつ甕であり、口縁下からやや直線的に窄まる形である。復元口径は29.9cm を測る。２は１層から出土した逆Ｌ字状口縁をもつ甕で、厚みのある口縁部は若干、内側端部が突出し、鋤先状口縁への移行段階とも考えられる。胴部はやや張り出し、口縁部下位に一条の沈線を持つ。復元口径は27.0cm を測る。３も逆Ｌ字

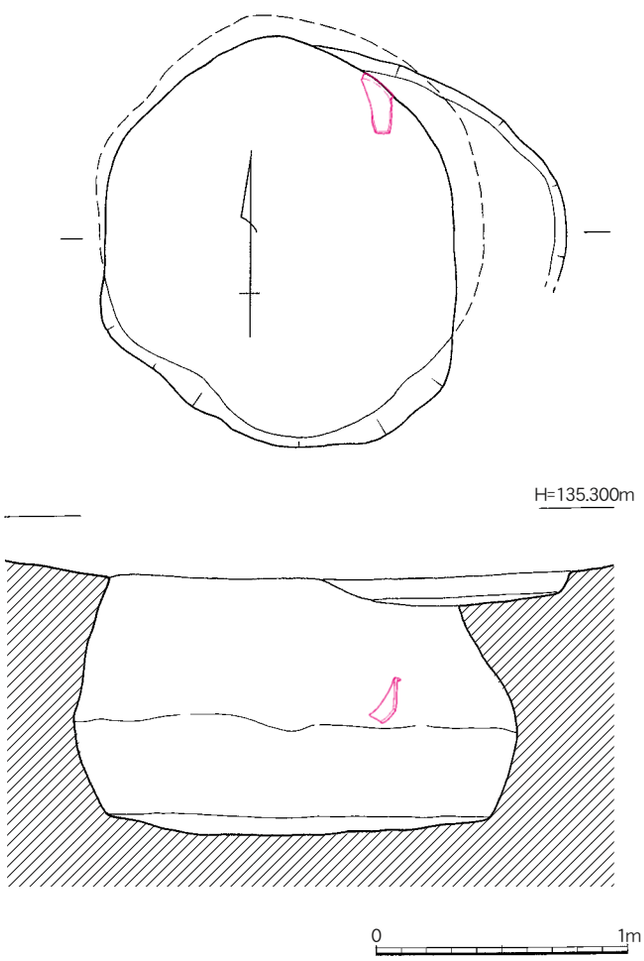


第40図　B地点37号貯蔵穴出土遺物実測図（1）（1/2・1/3・1/4）



第41図　B地点37号貯蔵穴出土遺物実測図（2）(1/2)

状口縁の甕であるが、口縁端部はさほど肥厚せず、また胴部は張らず直線的に窄まる形態である。復元口径は28.0cmを測る。４は広口壺の口縁部である。端部はさほど外反しない形態で、内面に丹塗り、外面に暗文を施した祭祀土器と考えられる。５は壺の頸部から口縁部への立ち上がりにあたる部分である。内面に一条の三角突帯を貼り付ける形態は、周防灘沿岸地域にみられる壺の特徴を有するが、胎土は一般的な角閃石・石英の他に赤色粒子と白色粒子を含んでおり、在地のものとほぼ変わらない。よって周防灘沿岸地域の影響をうけた在地産の土器と判断される。６～８は甕の底部である。６は底径6.8cmを測る窪み底の形態で、肥厚するタイプである。７も同じく窪み底である。底径は7.8cmを測る。８は底径10.2cmの座りの良い平底を呈する。９は上層から出土したやや窪み底の底部であるが、６・７よりも端部がさらに張り出した形態である。底径は11.25cmを測る。10・11は高杯の脚部である。11は胎土の肌理の細かさや、外面の一部に丹塗りの痕跡が認められることなどから、祭祀土器と考えられる。10･11ともに脚端部はさほど広がらない。12はミニチュア土器である。甕の脚部か。底径は1.9cmを測り、全体的に指押さえによる整形が施されている。出土土器の調整は、壺と一部の甕にミガキ・暗文が見られる他は、概して甕を中心に外面は縦方向のハケ目調整が、内面には指オサエによる整形が見受けられる。13は下層から出土した最大長約45cmを測る安山岩質の石皿である。両面ともに使用痕が確認され、特に上面はやや凹み、平滑である。



第42図　B地点38号貯蔵穴実測図（1/30）

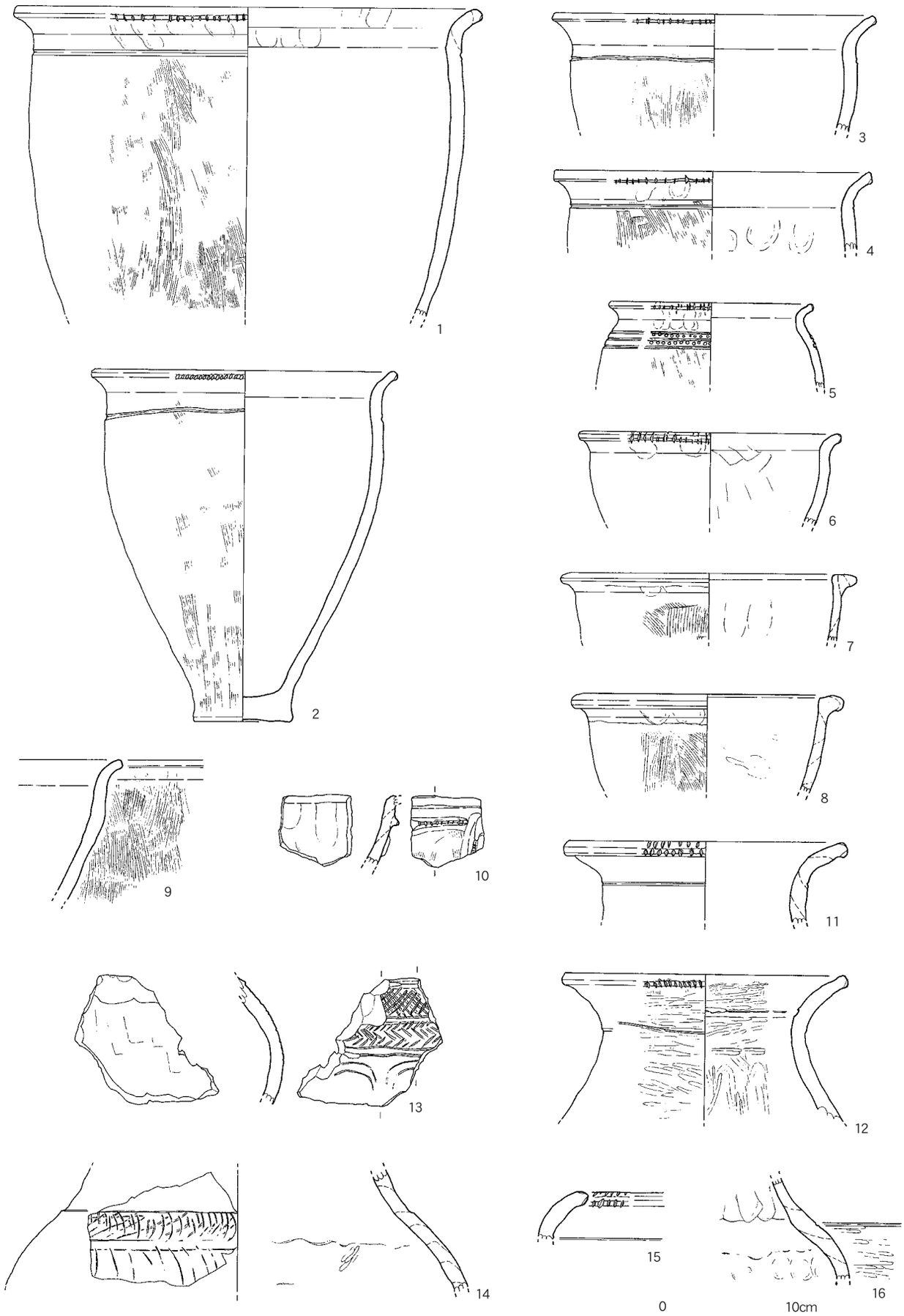
第41図１は５層から出土した輝緑凝灰岩製の石庖丁である。破片は中央部にあたり、２つの紐孔が確認できる。刃部は欠損しているが、残存の最大幅は3.7cmを測る。最大厚は0.8cm、重量は17.5gである。37号貯蔵穴の下層から出土する土器は、城ノ越式段階のものが主体を占め、中期初頭に属すると考えられる。また、37号貯蔵穴の上端は若干の削平を受けているものの、著しい削平とは考えられず、上端から底面までの深さは現状どおり比較的浅いタイプであったと考えられる。これは同遺跡から検出されている他の貯蔵穴と異なり、また使用期間を鑑みても、

同遺構が他の貯蔵穴とは性格の異なる機能を有していたという可能性も考えられる。　　（伊藤）

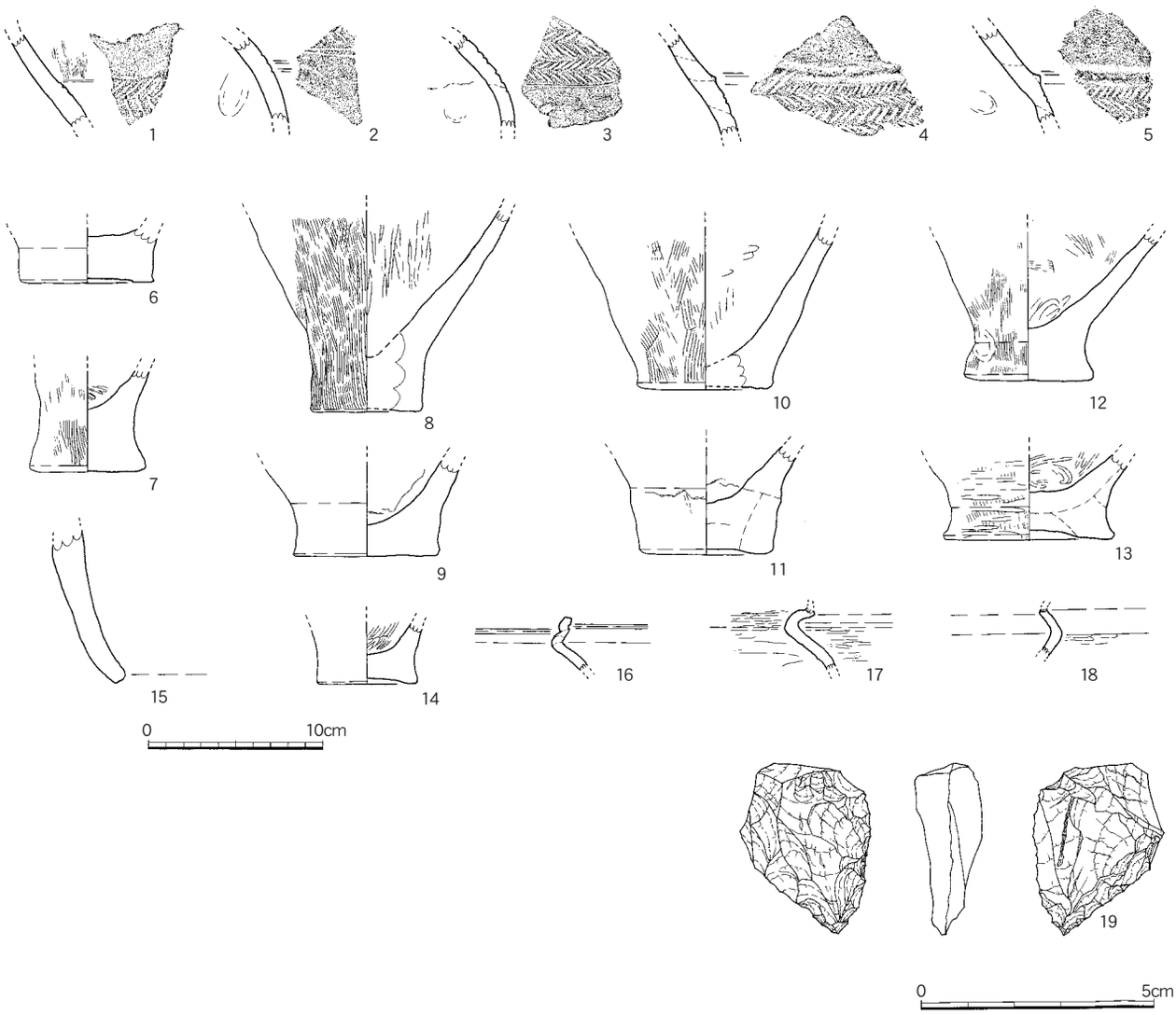
38号貯蔵穴（第42～44図、図版11）

38号貯蔵穴は中央部よりやや北側で検出された袋状貯蔵穴である。平面は径1.20～1.30mを測る略円形で、断面は袋状を呈す。床面はほぼ水平で径1.25m、深さは確認面より1.0mを測る。現存高の中位で最大径に達し径1.38mを測る。上面で20号木棺墓によって一部削平を受けている。

図43の１～６は如意形口縁を有する甕である。１は中層より出土。口縁部から胴部下半部まで残存している。口縁端部下端に刻目、口縁下に沈線を有する。外面はタテハケにより調整されている。２は上層より出土。一部分ではあるが、口縁部から底部まで残存している。口縁端部下端に刻目、口縁に若干の湾曲がある沈線を有する。外面は若干のタテハケが確認できる。３は上層より出土。口縁部から胴部上半部まで残存している。口縁端部下端に刻目、口縁下に沈線を有する。外面はタテハケにより調整されている。４は上層より出土。口縁部から胴部上半部まで残存している。口縁部は１～３までが端部を丸く整形しているのに対して、４は端部に若干の面を有している。口縁端部下端に刻目、口縁下に沈線を有する。外面はタテハケにより調整されている。５は上層と中層からの出土の接合遺物である。口縁部から胴部上半部まで残存している。口縁部端部に刻目、胴部上位に三条の沈線を有し、各沈線の間に円形の刺突を連続して施文している。胴部には若干のタテハケが確認できる。６は中層から出土。口縁下端部に刻目を有している。厚みのある作りで内面は工具ナデによる調整が行われている。７・８は中層から出土した。口縁部から胴部上半部にかけて残存している短い逆Ｌ字状口縁を有する甕である。7の胴部は縦方向から斜め方向のハケによって調整され、断面から接合痕が観察できる。８は口縁端部に粘土帯を貼り付けて肥厚させ、一部に横方向のミガキ、胴部にタテハケによる調整が行われている。内面では斜め方向のミガキが観察できる。９は下層から出土した口縁部から胴部上半部まで残存している甕である。口縁部は如意形に外反し胴部はタテハケにより調整されている。内面は口縁部から胴部上位でヨコハケが観察でき、胴部では指ナデと一部にミガキによる調整が行われている。10は中層から出土した口縁部から胴部上半部まで残存している甕である。口縁下で横方向と蕨手状もしくは鍵手状の刻目を有する突帯が施されている。11は中層から出土した口縁部から頸部まで残存している壺である。口縁部には二条の刻目が施文され、頸部には沈線を有している。12は下層から出土した口縁部から胴部上半部まで残存している壺である。口縁下端部に刻目を有し、端部が丸くおさまる。頸部で内外面共にやや段がつく。外面は口縁部から頸部にかけてタテハケ後に横方向のヘラミガキ、頸部から胴部にかけて縦方向のミガキ後に横方向のミガキにより調整されている。内面は口縁部から胴部上半部までは横方向のヘラミガキを主体とし、胴部下半部は縦方向のヘラミガキによって調整されている。13は遺構検出面より出土した壺胴部片である。三角突帯下方に二重沈線による区画が二箇所認められ、上方では斜格子目文、下方では羽状文が突帯と沈線の施文後に施され、区画の下方では重弧文が認められる。これらの施文は全てヘラ描きによるものと思われる。14は中層から出土した壺の頸部から胴部である。沈線による区画がなされ、乱れた斜格子目文と連続弧文が施文されている。内面と断面から粘土接合痕が観察できる。この遺物は10次調査区の102号貯蔵穴から出土した遺物（第15図８）と接合する。15は下層から出土した壺の口縁部である。口縁端部内外面に一条ずつの刻み目、頸部付近に沈線の痕跡が窺える。16は頸部から胴部上半部にかけて残存している壺である。



第43図　B地点38号貯蔵穴出土遺物実測図（1）（1/4）



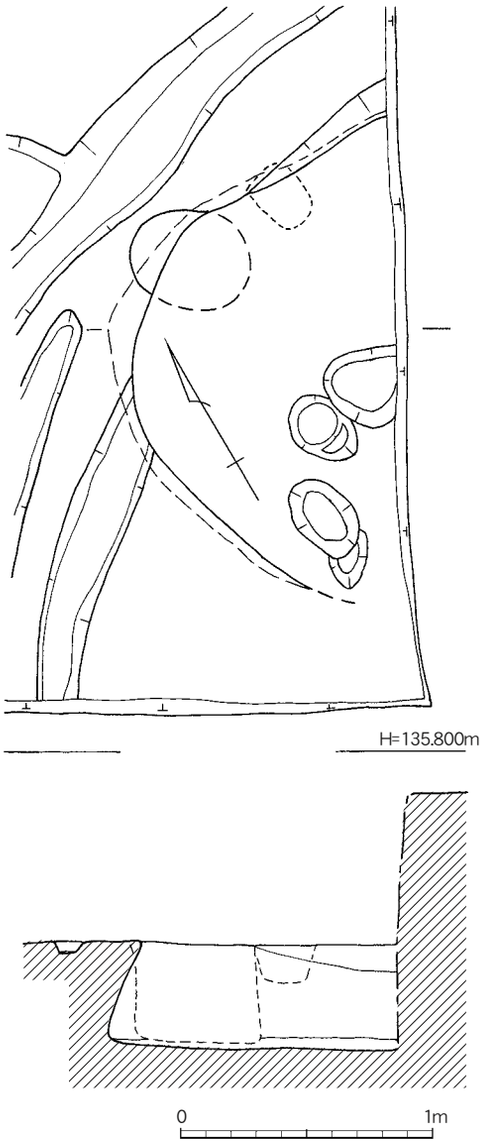
第 44 図　B 地点 38 号貯蔵穴出土遺物実測図（2）(2/3・1/4)

頸部と肩部の境に一条の沈線を有し、その下方では横方向のヘラミガキが確認できる。内面では頸部にケズリ状の工具ナデが施されている。

第44図６・16は上層、１・7～15・17・19は中層、2～５・18は下層から出土している。１～５は羽状文を有する壺胴部片である。４･５は羽状文の上方に突帯が付く。６は上層から出土した若干底部が窪む甕である。７は中層から出土した厚底の甕の底部である。外面はタテハケ、内面は不定方向のミガキにより調整されている。８は中層より出土した厚底の甕の底部である。外面はタテハケにより調整され､内面は縦方向にミガキが行われている。９は中層から出土した底部である。内面に接合痕が観察できる。10は中層から出土した甕の底部である。外面はタテハケによる調整が行われ、内面は上方で横方向のミガキ、下方で縦方向のミガキが若干観察できる。11は中層から出土している若干の窪みを有する甕の底部である。内外面ともに粘土接合痕が観察できる。12は中層から出土した甕の底部である｡下端が裾広がりになり外面はタテハケにより調整されている。内面は上方で斜め方向のハケ、下方でミガキが若干確認できる。13は中層から出土した窪み底を呈する壺の底部である。外面調整はタテハケの後に横方向のヘラミガキが行われている。内面は中

心部に螺旋状のミガキが入り、上方では縦方向にミガキが行われている。14は中層から出土した若干の窪みを有する甕の底部である。内面は下方で不定方向のミガキ、上方で縦方向のミガキが施されている。15は中層から出土した器台の裾部である。16～18は縄文晩期の浅鉢である。16・17は扁球状の胴部を持ち、18は屈曲部に稜を持つ。16は外面頸部下で横方向のミガキが施されている。17は外面頸部下で横方向のミガキ、内面頸部上で横方向のミガキ、下方で横方向のケズリが施されている。18は外面横方向のヘラミガキが施されている。19はサヌカイト製のスクレイパーである。端部に調整剥離を施し、スクレイパーエッジを形成している。

（下森）

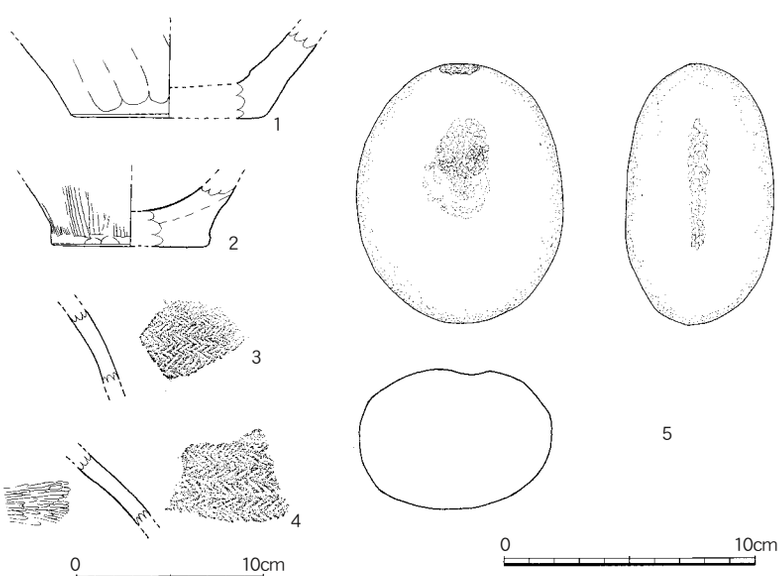


第45図　B地点42号貯蔵穴実測図（1/30）

42号貯蔵穴（第45・46図、図版12）

調査区の南東隅で検出され、上面は大幅に削平されているが、土層断面や平面プランから袋状貯蔵穴と思われる。遺構は10号竪穴住居の中に位置し、23号柱穴と65号柱穴と切り合い関係にあり、23号柱穴を切り、65号柱穴に切られている。径1.06m深さ0.42m、底径1.15mを測る。

第46図は出土遺物である。１～４とも全て下層から検出されている。１は壺の底部である。復元底径は10.4cmを測る。調整は内外面共にナデだが、外面は強いナデが施されている。２は甕の底部である。復元底径は8.3cmを測る。外面には指頭圧痕が残り、縦ハケが施される。内面は剥離欠損している。３・４は壺の胴部で、３は外面残存部先端に１条の沈線を有し、羽状文を施した後、丹を塗っている。４は外面に羽状文を施し、内面には横ミガキが施されている。５は安山岩製の敲石である。中央及び周辺部に顕著な敲打痕が窺える。　（末國）



第46図　B地点42号貯蔵穴出土遺物実測図（1/3・1/4）

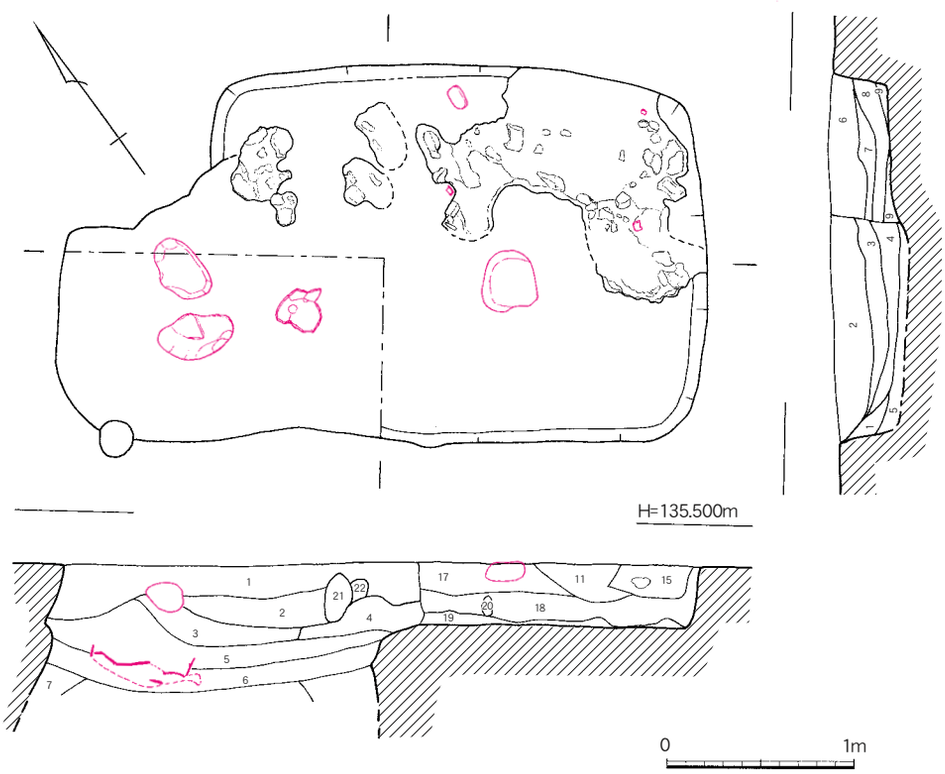
（3） 土坑

調査区全体から検出されているが、主に西側に集中する。長方形、方形、略円形、楕円形、不定形などの形態がある。東側の６号・９号土坑は長方形を呈し、他の土坑群と様相を異にするがここでは一括して報告しておきたい。なお、遺物のみ報告している土坑もある。

６号土坑（第47・48図、図版12・13）

16号竪穴住居と35号貯蔵穴と切り合って検出された長方形の土坑である。長さ2.70ｍ、幅2.04ｍ、検出面から床面までの深さは0.33～0.35ｍを測り、床面はほぼ平坦である。土層は最多で4層に分層され、北半分に固結した厚い焼土塊が広がる。主軸はN54°Ｗである。出土遺物は甕･鉢･器台などの土器のほか、砥石・石庖丁・石斧などの石器類がみられる。

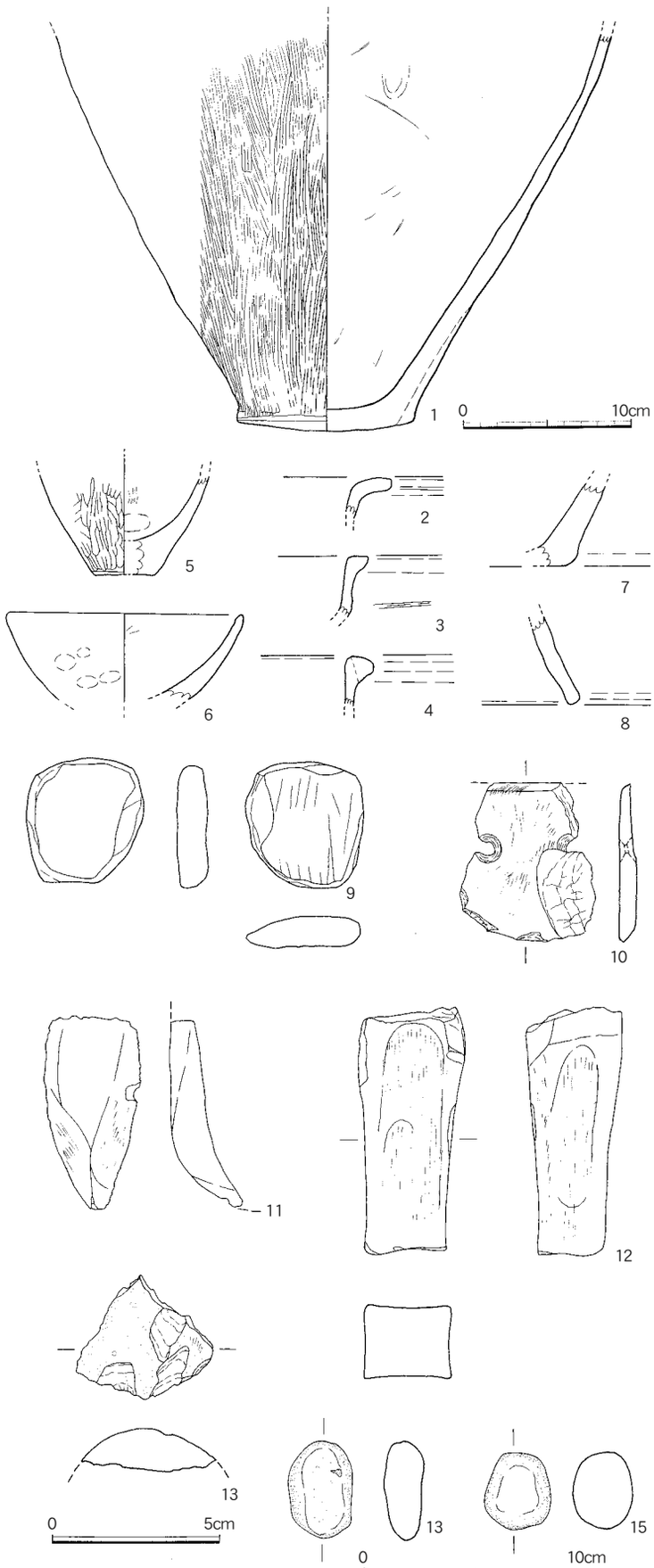
第48図の１はやや丸味をもつ甕の底部である。外面にはハケ目調整、内面は工具によるナデ調整が施される。なお、当初６号土坑に伴うものと考えていたが、その後の調査で別遺構に属する可



（層序）
１層　暗黄褐色土（灰色土混入）
２層　暗褐色土
３層　暗黄褐色土
４層　暗茶褐色土
５層　暗褐色土（2層より暗い）
６層　茶褐色土
７層　黄褐色土（崩落土）
15層　焼土ブロック
16層　暗褐色土（焼土若干含む）
17層　暗褐色土（灰色土混入）
18層　暗褐色土（17層より明るい）
19層　暗茶褐色土
20層　暗茶褐色土
21層　暗褐色土
22層　明褐色土

（層序）
１層　褐色土
２層　暗黄褐色土
３層　暗褐色土
４層　暗茶褐色土
５層　暗褐色土（３層より暗い）
６層　暗茶褐色土（焼土若干含む）
７層　暗褐色土（焼土含む）
８層　明黄褐色土
９層　黄褐色土

第47図　Ｂ地点６号土坑実測図（1/40）



第48図　B地点6号土坑出土遺物実測図（1/2・1/3・1/4）

能性がある。2・3・4は甕の口縁部で3のみ沈線が巡る。5は小型の甕で外面にミガキ調整、内面にハケ目調整が施される。同遺構から出土する他の土器と比較して胎土中の砂粒が少ない。6は小型の鉢である。外面に指頭圧痕が残る。7は甕の底部。8は器台の脚部である。9は土器片加工のメンコである。長さ3.7cm、幅3.5cm、厚さ1.0cm、重さ14.7gを測る。外縁は研磨によって仕上げられている。10は頁岩製の石庖丁である。両端は欠損しているが、背面と紐孔は一部残存する。11・13は太型蛤刃石斧の一部である。11は刃部で結晶片岩製、13は体部で今山産の玄武岩製である。12は砂岩製の砥石で、4面ともよく使い込まれている。14・15は安山岩製の石弾であろうか。

9号土坑（第49・50図、図版13）

8号貯蔵穴と切り合って検出された長方形の土坑である。東側は調査区域から外れているため、全容は不明であるが、長さ2.0＋αm、幅1.8m、検出面から床面まで深さ0.19～0.24mを測る。主軸はN79°Wである。出土遺物は上層から集中して出土した。

第50図1は甕の口縁部である。如意形を呈し、外面にタテハケが施される。2は甕の胴部

である。外面はタテハケ調整後、１条の沈線を巡らす。３は厚味のある平底の甕底部である。外面にタテハケが施されている。４は縄文晩期の浅鉢である。口縁端部に沈線を施し、内外面ともヘラミガキ調整である。

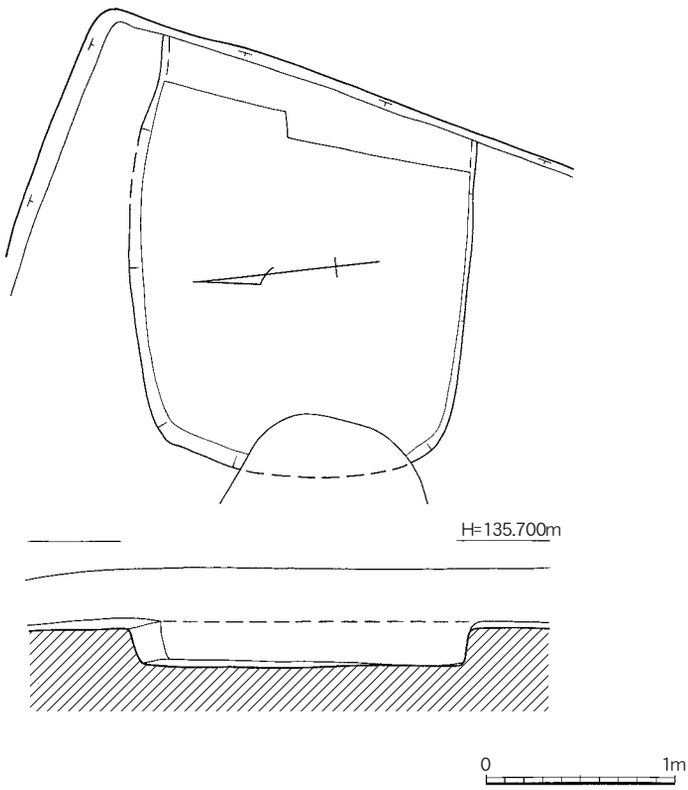
17号土坑（第51図、図版14）

26号土坑と切り合って検出された不定形の土坑である。一部は調査区外へ伸びる。深さ0.19～0.24mで、実測できる遺物は出土しなかった。

18号土坑（第51・53図）

西側で検出された径0.7m の円形土坑である。

第53図１～３は甕の口縁部である。１は如意状口縁、２は平坦口縁、３は逆Ｌ字状口縁を持つ。

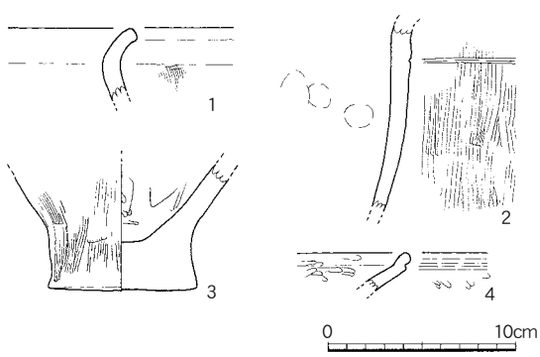


第 49 図　Ｂ地点９号土坑実測図（1/40）

26号土坑（第51・53図）

19号竪穴住居を切って検出された不定形土坑である。一部は調査区外へ伸びる。深さは0.34～0.38mである。

第53図４～６は鋤先状口縁を呈する壺である。６は外面にミガキ調整が施されている。９は壺の肩部でやや中窪みする台形突帯が巡る。外面はミガキ調整である。８は甕の口縁部で外面に断面三角形の貼り付け突帯が巡る。７は縄文晩期の深鉢の口縁部である。４条の沈線が巡る。

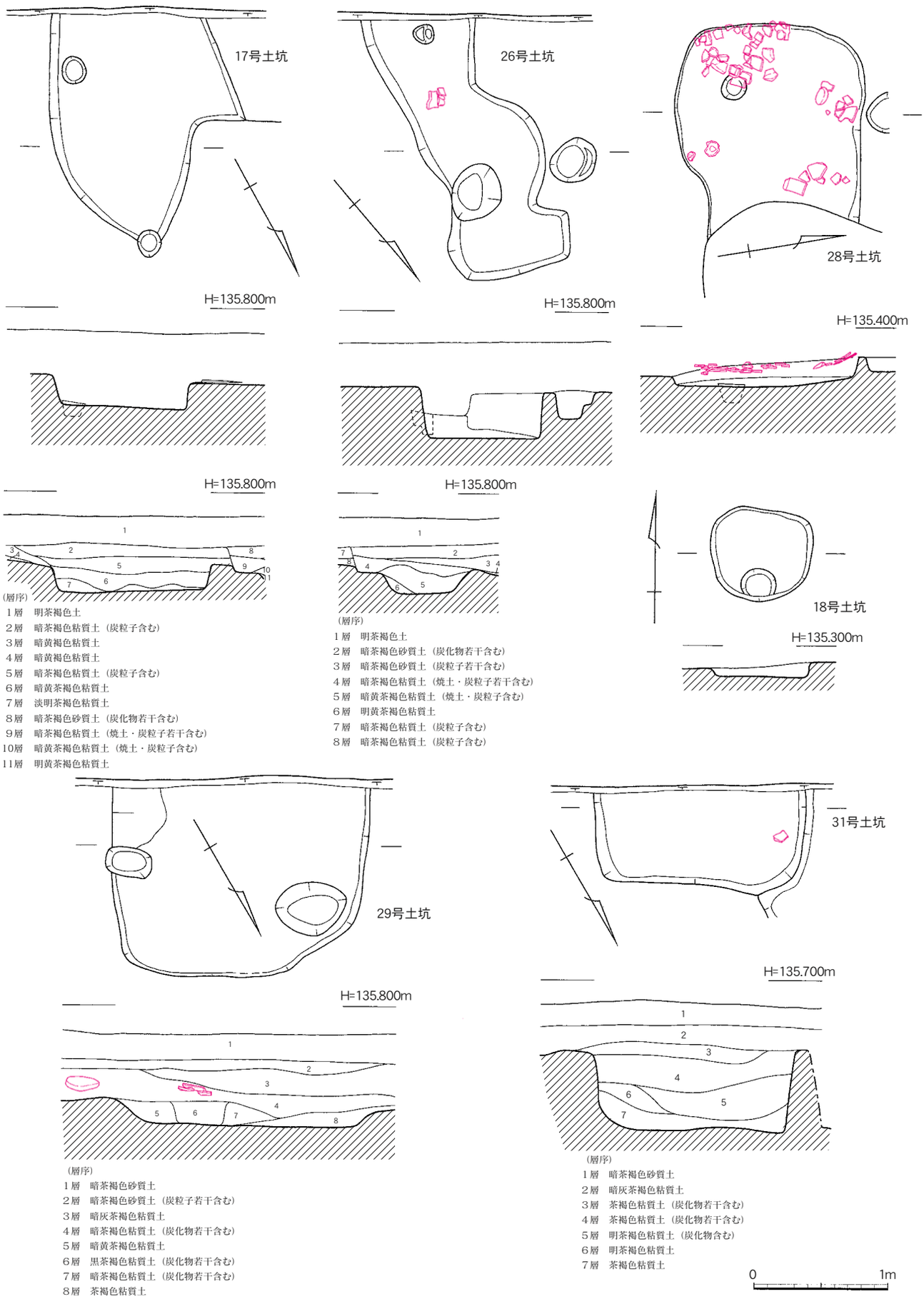


第 50 図　Ｂ地点９号土坑出土遺物実測図（1/4）

28号土坑（第51・53・54図、図版14）

37号貯蔵穴と切り合って検出された楕円形の土坑である。長さ1.3＋αm、幅1.4m、深さ0.07～0.18mを測る。主軸はN80°Ｗである。

第53図10～23は甕である。10は跳ね上げ口縁をもち、11・13は外面に１条の沈線を巡らす。12は口縁端部に刻目、口縁下位に２条の沈線を施す。14～16は短い逆Ｌ字状口縁を持つ。17は



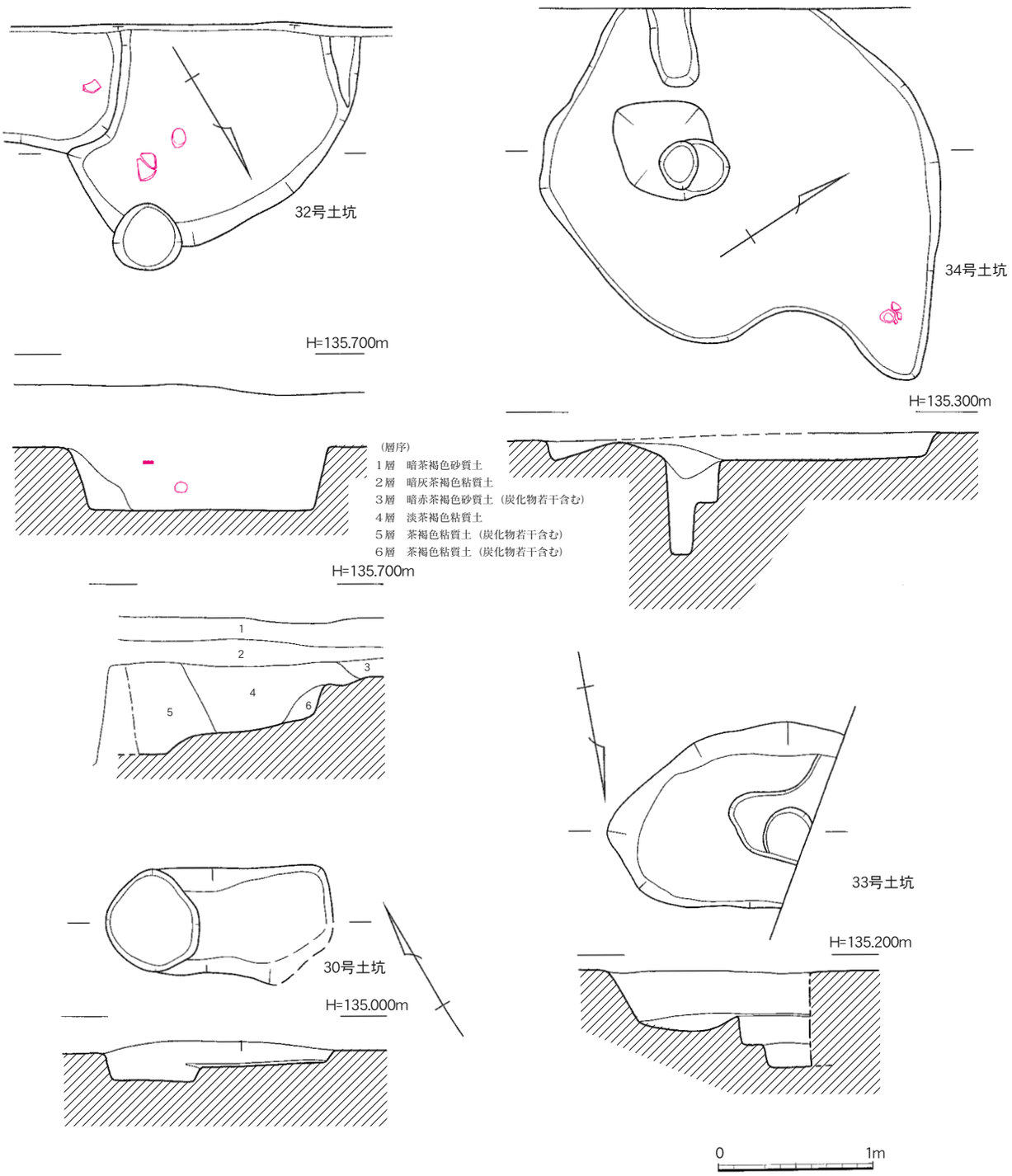
（層序）
1層　明茶褐色土
2層　暗茶褐色粘質土（炭粒子含む）
3層　暗黄褐色粘質土
4層　暗黄褐色粘質土
5層　暗茶褐色粘質土（炭粒子含む）
6層　暗黄茶褐色粘質土
7層　淡明茶褐色粘質土
8層　暗茶褐色砂質土（炭化物若干含む）
9層　暗茶褐色粘質土（焼土・炭粒子若干含む）
10層　暗黄茶褐色粘質土（焼土・炭粒子含む）
11層　明黄茶褐色粘質土

（層序）
1層　明茶褐色土
2層　暗茶褐色砂質土（炭化物若干含む）
3層　暗茶褐色砂質土（炭粒子若干含む）
4層　暗茶褐色粘質土（焼土・炭粒子若干含む）
5層　暗黄茶褐色粘質土（焼土・炭粒子含む）
6層　明黄茶褐色粘質土
7層　暗茶褐色粘質土（炭粒子含む）
8層　暗茶褐色粘質土（炭粒子含む）

（層序）
1層　暗茶褐色砂質土
2層　暗茶褐色砂質土（炭粒子若干含む）
3層　暗灰茶褐色粘質土
4層　暗茶褐色粘質土（炭化物若干含む）
5層　暗黄茶褐色粘質土
6層　黒茶褐色粘質土（炭化物若干含む）
7層　暗茶褐色粘質土（炭化物若干含む）
8層　茶褐色粘質土

（層序）
1層　暗茶褐色砂質土
2層　暗灰茶褐色粘質土
3層　茶褐色粘質土（炭化物若干含む）
4層　茶褐色粘質土（炭化物若干含む）
5層　明茶褐色粘質土（炭化物含む）
6層　明茶褐色粘質土
7層　茶褐色粘質土

第51図　B地点17号・18号・26号・28号・29号・31号土坑実測図（1/40）



第 52 図　B地点 30 号・32 号～ 34 号土坑実測図（1/40）

突帯に刻目はないが、下城式の甕であろう。18～23は甕の下半から厚底の底部である。24は壺の底部である。25は甕の蓋であろう。26は土器片加工のメンコで径4cm を測る。周縁は打ち欠き後、研磨されている。第54図の25は黒曜石製の石鏃である。26は安山岩製の石皿である。３面ともよく使い込まれている。写真のみの掲載であるが、一区からあまり処理は細かくないが砂岩製の砥石が出土している。最大長は7.2cm、最大幅は6.2cm、最大厚は4.0cm を測る。一面に平坦面を形

成するほどの使用が窺える。

29号土坑（第51・53図、図版15）

19号竪穴住居を切って検出された方形土坑である。南側は調査区外に伸びている。深さ0.12～0.15mを測る。

第54図の27は安山岩製の石弾であろうか。検出面から第53図27の甕の底部が出土している。

30号土坑（第52・53図）

南側で検出した楕円形土坑で、長さ1.1＋αm、幅0.7m、深さ0.15mを測る。主軸はN59°Wである。

第53図28は出土した高坏の脚部である。

31号土坑（第51・54図、図版15）

西側で検出された方形土坑である。南側は調査区外へ伸びる。深さは0.6mを測る。

第54図１～５は甕で、４は内傾する平坦口縁を持つ。６・７は壺で、６は外面に沈線が巡る。

32号土坑（第52・54図、図版16）

31号土坑に切られた略円形土坑である。南側は調査区外へ伸びる。深さ0.4mを測る。

第54図８・10・11は甕で、８は口縁端部に刻目を施し、外面には沈線が巡る。９は甕の蓋で、復元口径22.6cm、器高9.4cmを測る。10は平底、11は上げ底の底部である。12・13は壺で、13は外面に5条の沈線が巡る。

33号土坑（第52・54図、図版16）

西端部で検出された。２段のテラスを有し最深部は0.6mを測る。主軸はN83°Wである。

第54図14～16は甕で、14は口縁端部に刻目、外面には断面三角形の貼り付け突帯を有す。15は外面に１条の沈線が巡る。16は下城式の甕であろう。17・18は壺である。17は肩部に羽状文が施される。18は底面がやや窪む壺底部である。29は緑色片岩製の半月形の石庖丁である。30は安山岩製の磨石で、平坦面は使用により磨滅している。

34号土坑（第52・54図、図版17）

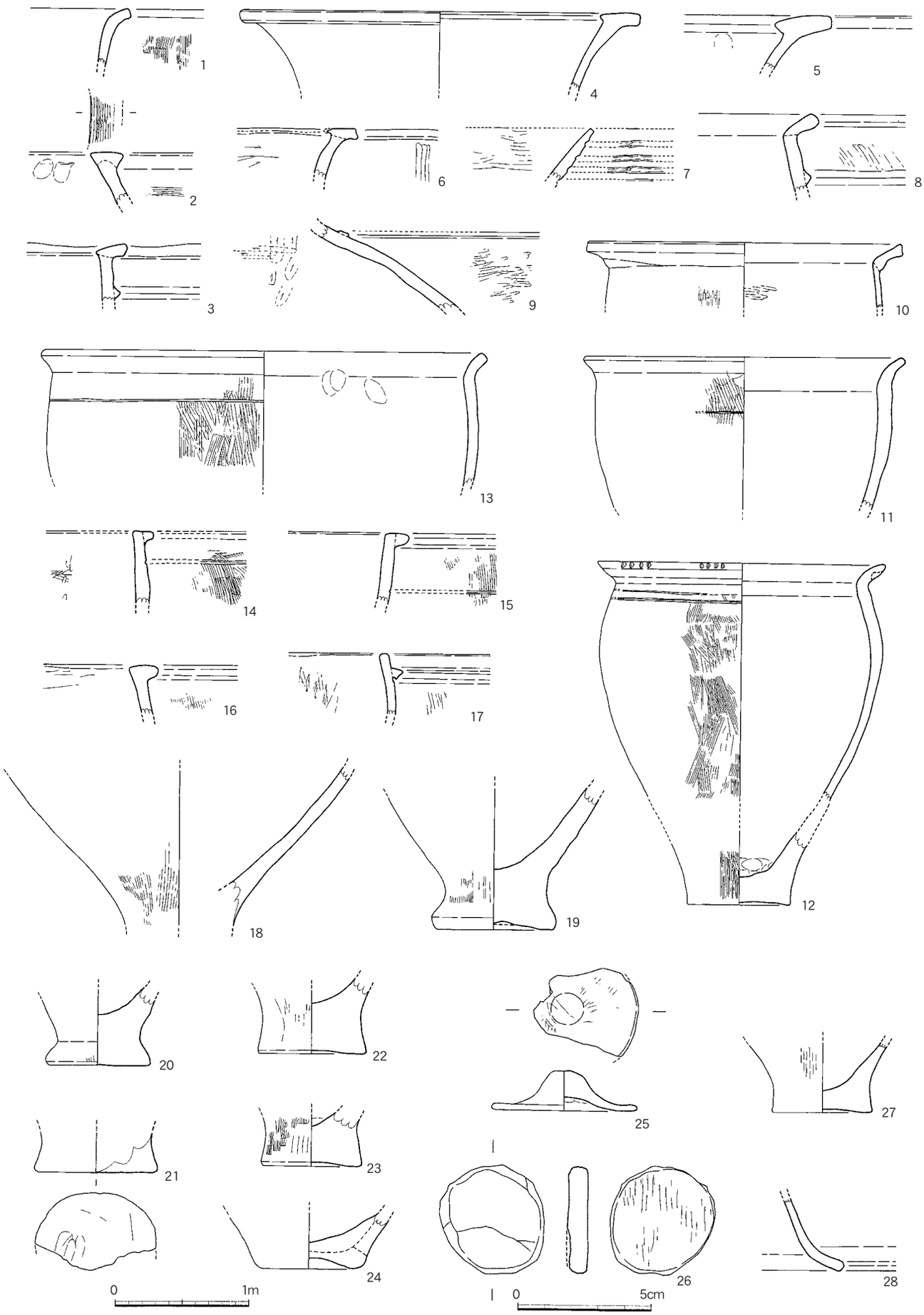
西側で検出した不整円形の土坑である。長さ2.5m、深さ0.15mを測る。

第54図19･20は甕である。19は逆Ｌ字状を呈する口縁部で、20は平底の底部である。28は安山岩製の石弾であろう。

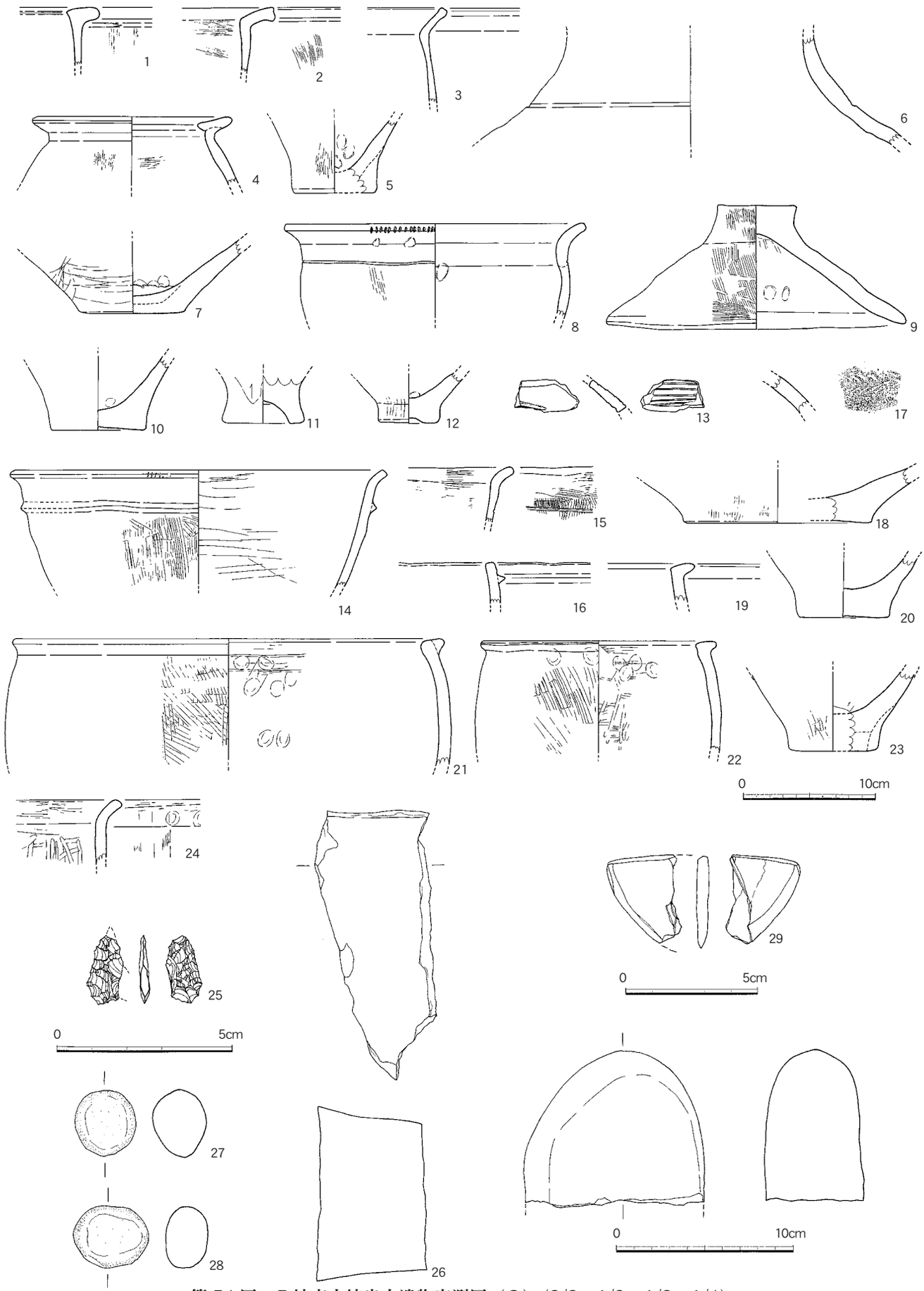
43号土坑（第52・54図）

25号貯蔵穴の北側部分にあたり、完掘していない。

第54図21～24の甕が出土した。21・22は平坦口縁でやや外側を突出させる。23は厚底の底部、24は如意状口縁を有する甕である。（手柴）



第 53 図　B 地点土坑出土遺物実測図（1）（1/2・1/4）



第 54 図　B地点土坑出土遺物実測図（2）（2/3・1/2・1/3・1/4）

（4）溝

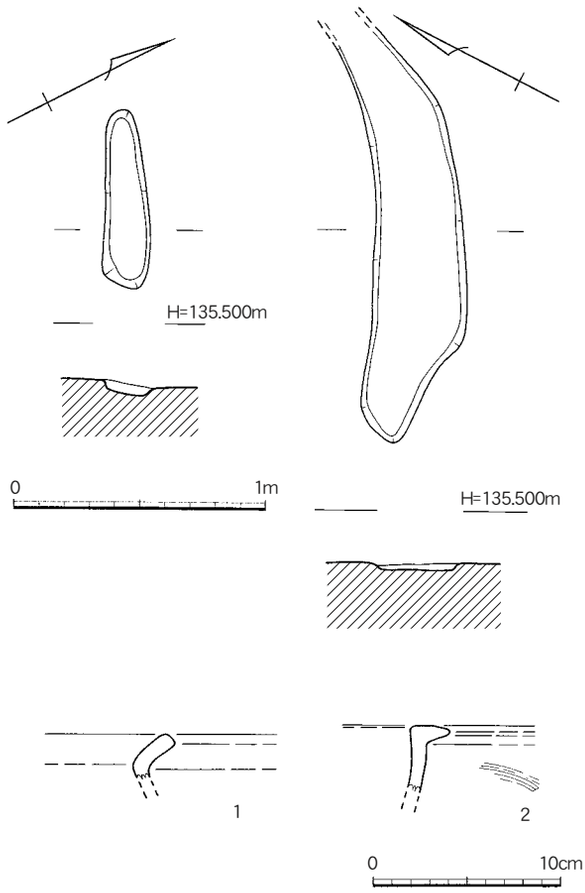
溝は２条出土した。ともに浅くて小規模なものである。削平された遺構の残りかもしれない。

21号溝（第55図）

調査区北西部から34号土坑と隣接して検出された。最大長0.72m、最大幅0.19m、深さ0.04mを測り、北西から南東に伸びる。図化できる出土遺物はみられなかった。

22号溝（第55図）

調査区北西部から21号溝と隣接して検出された。最大長約3.5m、最大幅0.5m、深さ0.03mを測り北から南西に弧状に伸びる。遺物は第55図１の甕の口縁部で、磨滅が著しく、内外面の調整は不明である。２は甕の口縁部が出土している。全体的に磨滅しているものの、外面に一部ヨコ方向のハケ目調整が確認できる。（手柴）



第55図　B地点21号・22号溝及び21号溝出土遺物実測図（1/30・1/4）

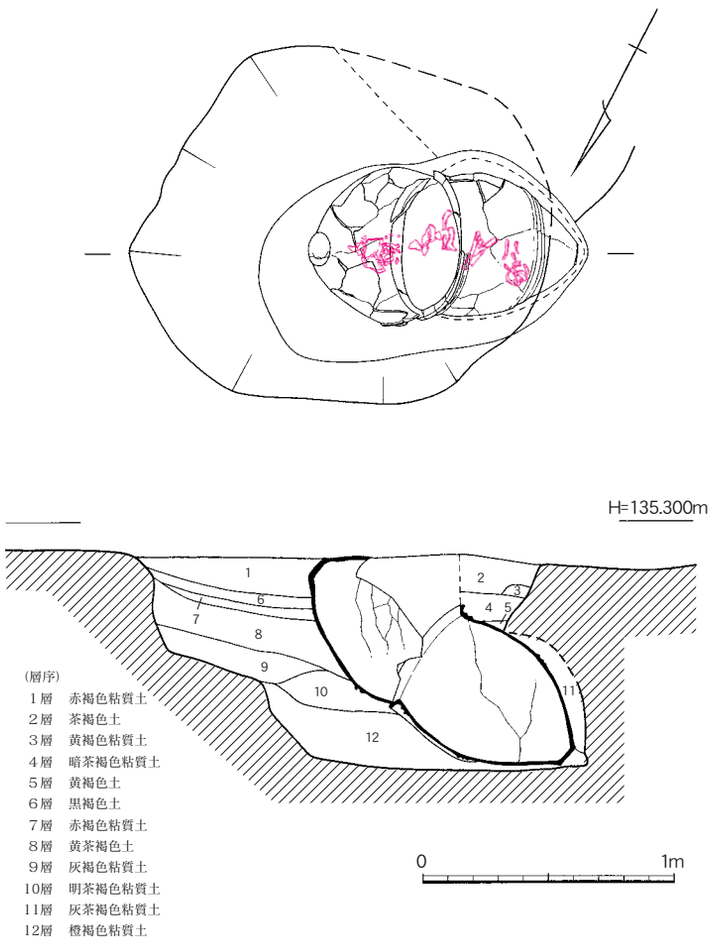
（5）成人用甕棺墓

成人用甕棺墓は４基出土した。調査区中央部に集中して分布している。４基とも壺や甕を組み合わせたものである。

１号甕棺墓（第56・57図、図版18・19）

調査区中央部北側に位置し、南側の３号甕棺墓の墓壙に一部切られ、東側の41号甕棺墓の墓壙を切る。墓壙は不整円形を呈し、長径1.65m、短径1.4m、深さは確認面から0.8mを測る。下甕を埋置する部分は西側に横穴を掘り窪めている。墓壙の埋土は明るい褐色系粘土と黒色系粘土を交互に埋めている。第11層の灰茶褐色粘質土が棺と墓壙の隙間につめられていた。主軸N65°E、埋置角度37°である。上甕は口縁打欠きで、跳ね上げ状口縁を有する下甕と接口式に組合わさる。棺内には人骨が残り、頭骨片が上甕及び下甕で、下顎骨、右上腕骨、大腿骨片、椎骨片が下甕から出土した。

第57図は、接口式成人用甕棺である。上甕１は口縁部を打ち欠いた甕形土器である。打ち欠いた二次口縁径は45.5cm、胴部最大径59.8cm、底径10.6cm、残存高62.9cmである。最大径にあたる突帯はコの字状を呈し、若干斜めに２条巡らす。突帯以下、胴部下半にかけてすぼまりながら底部に至る。胎土には角閃石、石英が含まれる。器壁は９mm程度で、胴部下位の厚みは1.2cm



第 56 図　B 地点 1 号甕棺墓実測図（1/30）

前後、底部の厚みは1.5cm 程度になる。焼成はやや良好である。色調は外面が褐色で、内面が淡黄褐色。外面はタタキ後ハケが施され、その後ナデ調整が加えられる。内面はタタキ後ハケ、その後ナデられミガキ調整が施されている。底部にはハケ目調整が残存する。突帯上下は強いヨコナデが施されている。下甕２は、口径53.3cm、胴部最大径55.3cm、底径11.8cm、器高68.7cm を測る。最大径は胴部上半にある。口縁部はくの字状に外反する跳ね上げ口縁で、口縁内側に稜をもつ。頸部には２条のシャープな三角突帯が巡る。胴部下半には垂れ気味の三角形に近いコの字状突帯を螺旋状に巻き付け、突帯の一部は４条をなす。胎土には石英、角閃石、白色粒子、赤色粒子を若干含むが精良である。器壁は0.6cm ～1.2cm、胴部下位の厚み1.2cm 前後 、底部の厚みは2.5cm 程度である。焼成は良好で胴部上半には黒斑がみられる。色調は外面が黄褐色、内面が淡黄褐色で、調整は外面にタタキ後タテハケ、内面はタタキ後ハケ、その後ナデ調整が施されている。底部にはハケ目痕が残存し、底部のハケ目は底部側から胴部下位の方向に施す。また、頸部のシャープな三角突帯内側に接合痕があり、内面には工具痕が残るが、方向は一定ではない。その他、突帯にヨコナデが施され、内面に指頭圧痕がみられる。

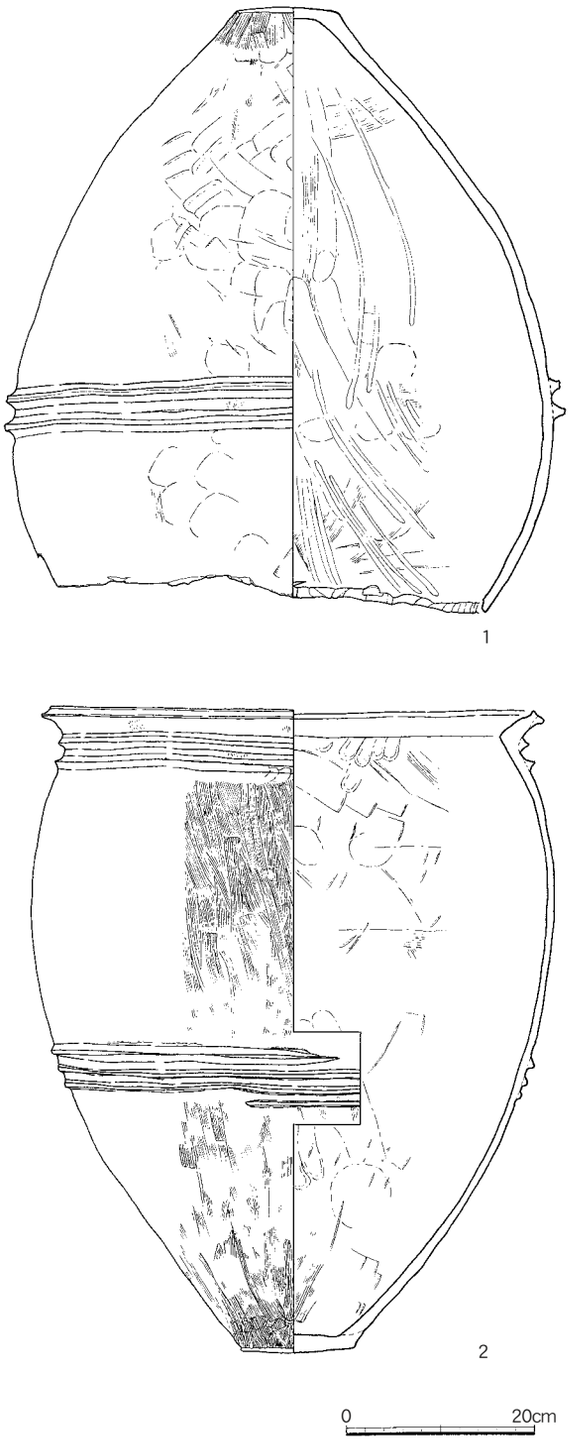
下甕はくの字状に外反する跳ね上げ口縁を有し、頸部に突帯２条、胴部に多条突帯を巡らすのが特徴である。この１号甕棺墓は大型棺に跳ね上げ口縁を採用している点で興味深く、胎土は在地産のものと考えられ、遠賀川上流域との強い繋がりの中で成立したものであろう。時期は中期後半から末とみられる。（米村）

２号甕棺墓（第58・59図、図版19・20）

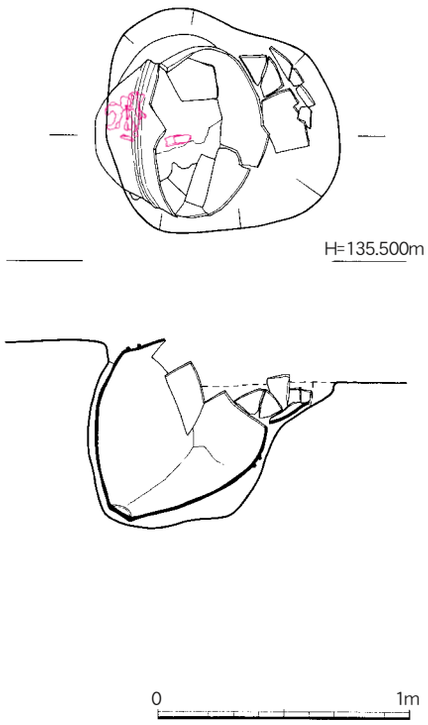
調査区のほぼ中央部に位置し、西側には１号・３号・４号・41号甕棺墓等が隣接しており、成人用甕棺墓が集中する部分の東端にあたる。墓壙の上面は大幅に削平されているとみられ、下半部のみしか残存していなかった。上甕も部分的にしか残存していない状況であった。現況での墓壙の大きさは、南北0.93m、東西0.98m、検出面からの深さは0.75mである。下甕を埋置する部分は

横穴状に掘り窪め、下甕を挿入できる大きさに合わせている。上甕と下甕はともに口縁部を打ち欠いた壺形土器を使用し、接口式に組み合わせる。上甕は現位置では一部しか残っていなかったが、大部分は下甕に流れ込んでおり、削平前に土圧等で破損したものと考えられる。整理の段階でほぼ完形に復元することができた。甕棺墓の主軸はN22°Eで、埋置傾斜角度は59°である。かなり急な傾斜角度になっている。棺内には、副葬品は見られなかったが、上甕で一部赤色顔料が、また下甕では人骨が残存していた。赤色顔料は出土した甕棺墓の中では最も量が多かった。

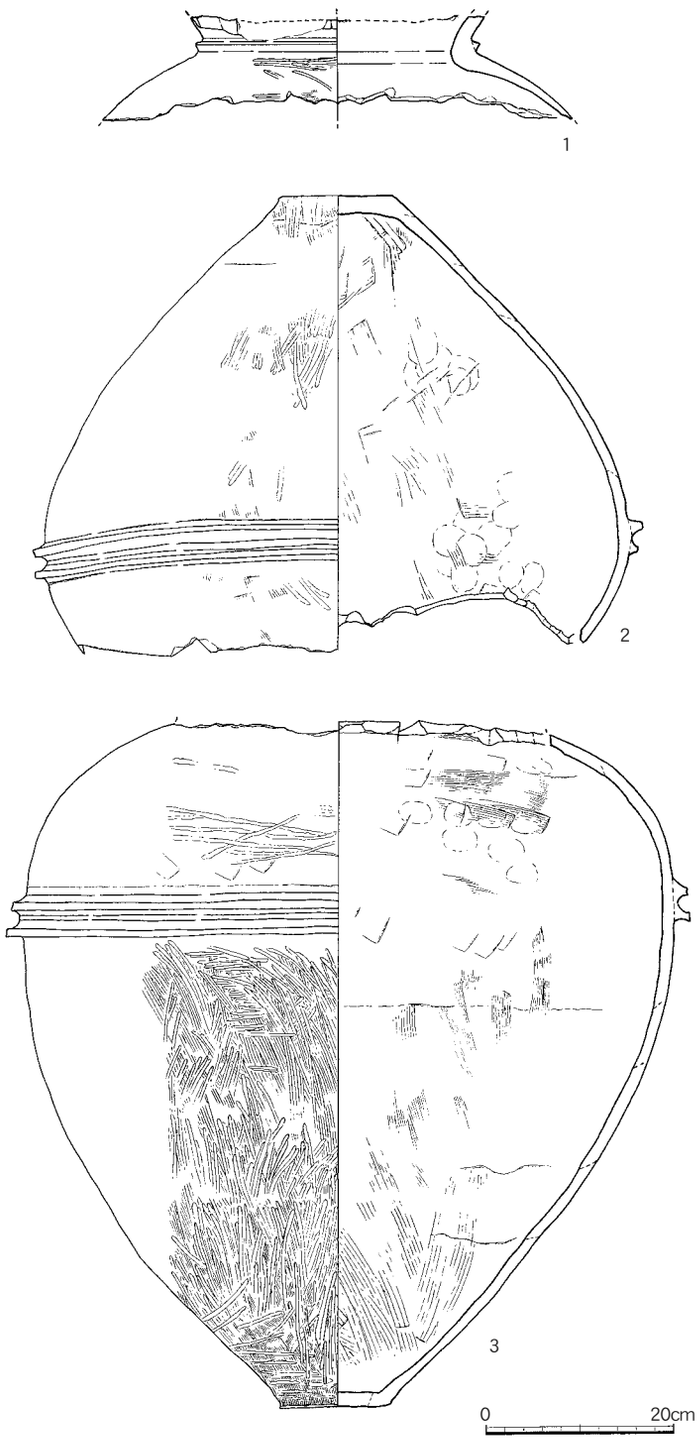
第59図は出土した甕棺である。１は上甕を打ち欠いた折の口縁部から肩部片で、接合の結果２分の１程度残存する。頸部径は30.2cmで、頸部に１条の三角形の貼付突帯が巡る。口縁端部は欠損するが短く立ち上がるものと考えられる。肩部は丁寧に打ち欠かれている。内外面にはハケ目調整が施され、外面にはさらにヘラミガキ調整が加えられる。外面は淡黄褐色を呈し、胎土には石英、角閃石、金雲母、白色粒子を含み、さらに１～５mm大の赤色粒子が含まれる。焼成は良好である。打ち欠かれた頸部片は、上甕と下甕の接合面を塞ぐために使用されたものであろう。２は上甕で、肩部から上（1）を打ち欠いている。やや寸胴のプロポーションで胴の張りが強い。胴部最大径にコの字状の貼付突帯を２条巡らす。胴部最大径から底部にかけては急に窄まり平底の底部へ移行する。残存器高49.0cm胴部最大径65.0cm、底部12.1cmを測る。外面は淡黄褐色、内面は暗黄褐色を呈し、胎土は１と同様である。外面はタタキの後ハケ調整が加えられ、さらにヘラミガキが施される。内面はタタキの



第57図　B地点１号甕棺実測図（1/8）



第 58 図　B 地点２号甕棺墓実測図（1/30）



第 59 図　B 地点２号甕棺実測図（1/8）

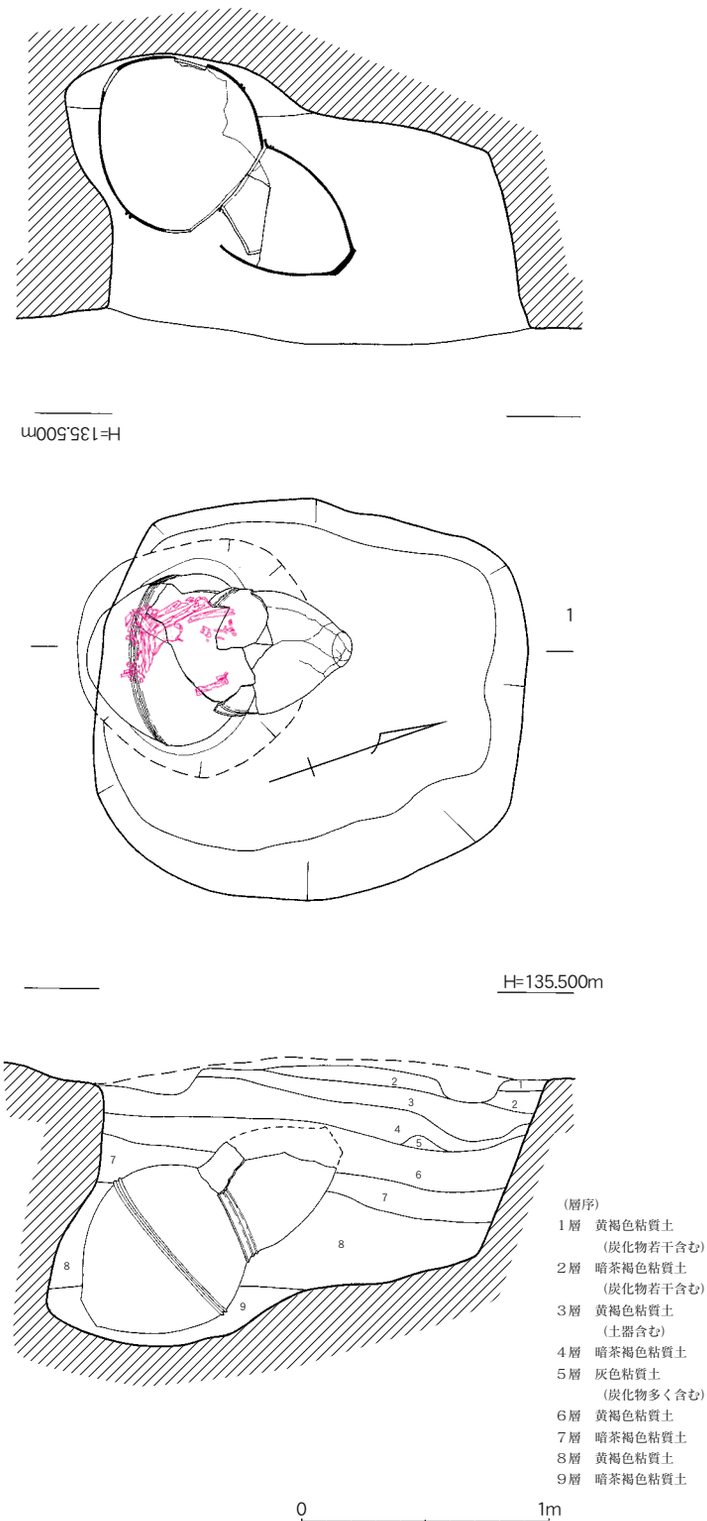
当て具痕が残り、その後ハケ調整、手ナデ調整が施される。3は下甕である。口縁部は丁寧に打ち欠かれる。倒卵形のプロポーションを有し、胴部最大径に２条の貼付突帯を巡らす。突帯の形は上段がコの字形、下段がやや外へつまみ出した細長いコの字形を呈する。突帯下は緩やかに窄まり、平底の底部へ移行する。残存器高は72.8cm、胴部最大径72.2cm、底径12.2cm を測る。外面は明黄褐色から淡黄褐色を呈し、胎土は２に似ている。調整は内外面とも上位に細かいハケ、下半に粗いハケが施される。突帯付近には横方向の工具ナデがみられる。また、内面の突帯裏側付近でタタキの当て具痕が観察されるので、タタキ調整で成形されたことが窺える。調整工程は内外面とも２の甕に類似している。上甕・下甕とも薄手のシャープな作りで、明瞭な突帯を持ち、しっかりした平底を呈するところから中期後半から末に属するものであろう。　（吉田）

３号甕棺墓（第60・61図、図版20・21）

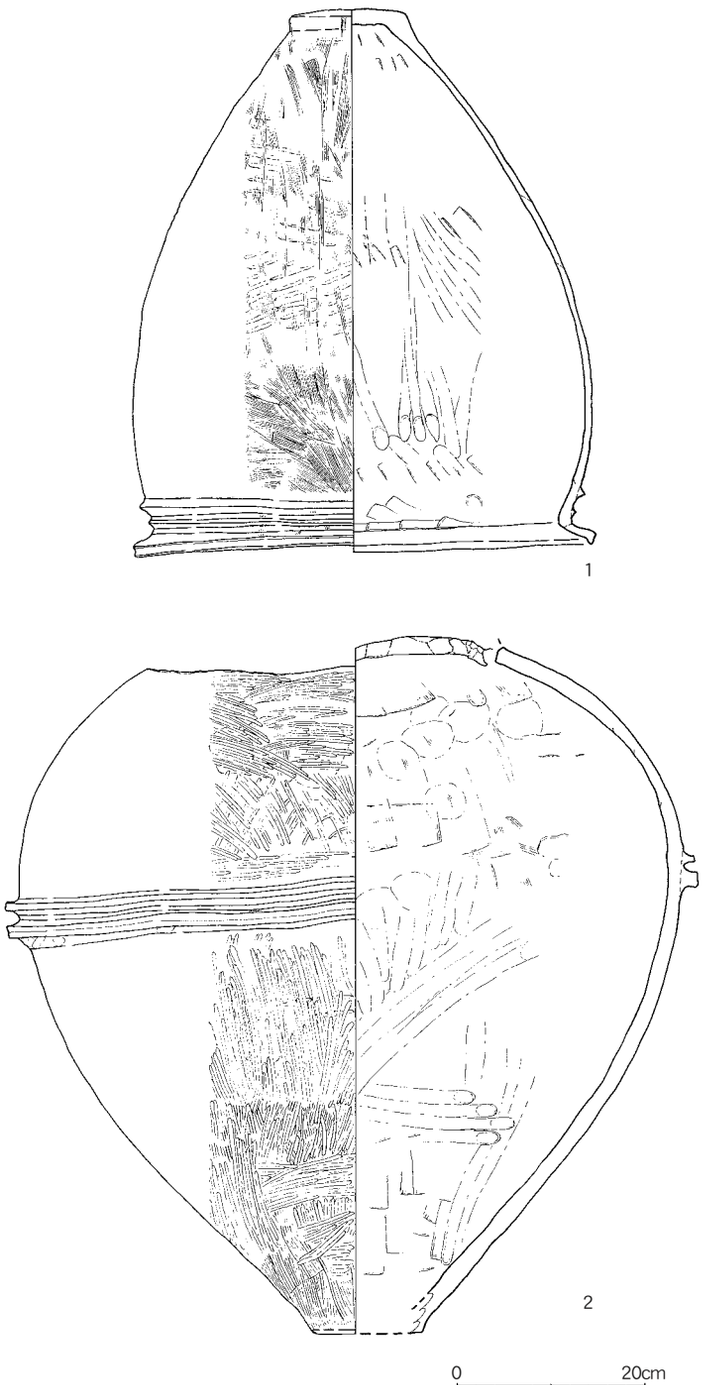
調査区中央部に位置し、北側の１号甕棺墓の墓壙の一部を切っている。東側には２号甕棺墓、南側には４号甕棺墓が分布し、成人用甕棺墓が集中した部分にあたる。

墓壙は隅丸長方形を呈し、南北1.75m、東西1.60m測る。墓壙の残存状態は良好で深さは確認面から1.05mである。下甕を埋置する部分は南側をさらに掘り窪めている。墓壙の中央部には、壺形土器の口縁部を打ち欠いた下甕と跳ね上げ口縁を有する上甕を覆口式に組み合わせて埋置する。主軸はN15°Eで、埋置角度は39°である。甕棺の現存状況は、土圧等の影響によって上甕の一部が破損し、棺内に崩落していた。また、下甕も底部近くの焼成があまく、底部は崩壊していた。棺内には四肢骨、歯、肋骨、大腿骨などの人骨が認められた。この出土状況により被葬者は屈葬されていたものと推察される。また、下甕には赤色顔料がわずかに認められた。副葬品は出土しなかった。ここで注目されることは、甕棺を埋める際に明るい黄褐色粘質土とやや黒っぽい暗茶褐色粘質土を交互に積み重ねて埋葬している点である。さらに、上甕がある程度埋まった段階で灰の層（第５層）の広がりが確認された。これにより、棺を埋める前段階に何らかの祭祀行為があったことを示すものではないかと推察されるのである。このような例は第６次調査の甕棺墓でもみられた。

第61図１・２は出土した甕棺である。上甕は跳ね上げ口縁を有し、頸部



第 60 図　B地点３号甕棺墓実測図（1/30）



第 61 図　B地点３号甕棺実測図（1/8）

に三角突帯を２条巡らす。最大径は口縁部にあり、頸部は内傾し、胴上半部に丸味をもつ。底部はややレンズ状を呈する平底である。調整は、胴部上位から底部までタタキが加えられ、タタキの後タテ方向のハケ目が施される。胎土には１～３mm 前後の石英、長石、角閃石その他の砂粒がやや多く含まれる。器壁は７mm 前後と薄い。焼成は良く、外面は暗黄茶褐色、内面は淡黄褐色を呈する。口径は48.6～49.9cm、器高58.2cm、底径12.5cm を測る。

下甕は、口縁部を打ち欠いた壺形土器である。打ち欠いた二次口縁径は43.2cm、胴部最大径73.9cm、残高74.3cm を測る。張りのある胴部には２条のコの字状突帯を巡らす。突帯端部の中央部はやや窪み、突帯自体は上部側が下部側よりも小さいものとなっている。胎土には３mm 前後の砂粒がやや多く含まれ、長石が混在する。器壁は１～1.5cm 程度でかなり厚い。焼成は底部付近が不充分であるが、他の部分は良好である。色調は内外面とも暗茶褐色を呈する。また、胴部外面には黒斑が認められる。調整は胴部外面にタタキ後ハケ、その後ヘラミガキが施され、内面はタタキ後ハケ、その後ナデ調整が施されている。底部には部分的にハケ目調整が残る。内面には工具痕が観察される。

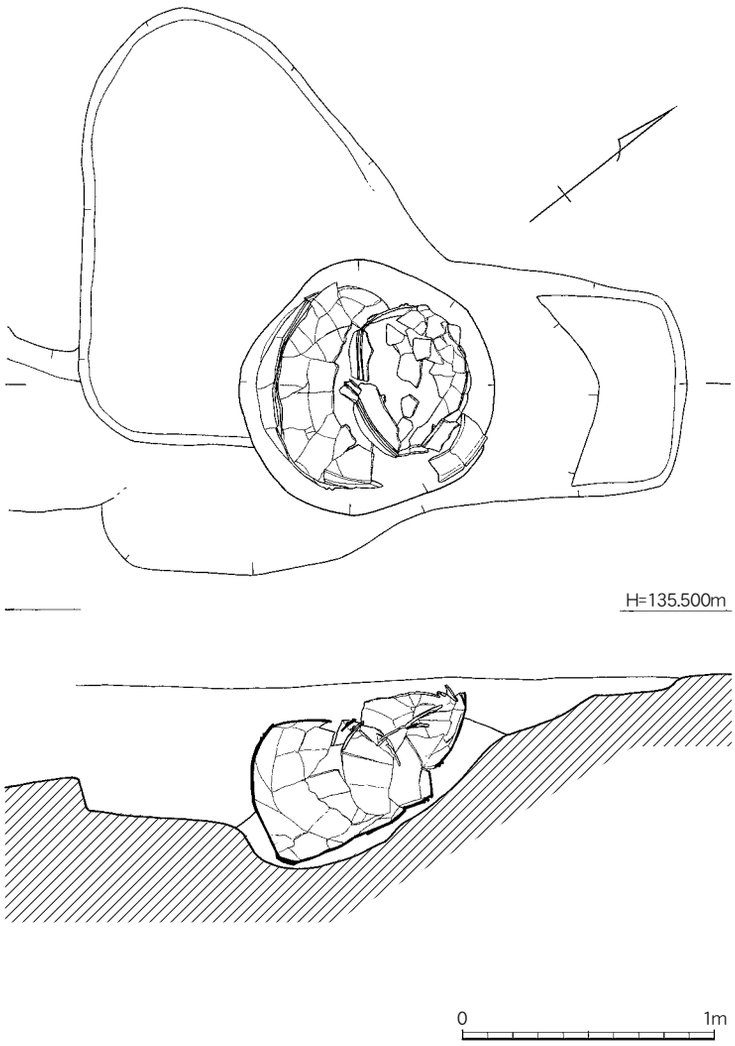
３号甕棺墓は甕と口縁部を打ち欠いた壺型土器との組み合わせで、当遺跡や周辺遺跡で確認された甕棺墓も同様のタイプが多い。上甕の跳ね上げ口縁に頸部２条突帯の甕は立岩遺跡の中・小型棺に認められ、遠賀川上流域との関係が注目される。時期的には中期末に属するものであろう。（田中聖）

４号甕棺墓（第62・63図、図版22）

調査区中央部に位置し、西側の27号貯蔵穴を切ってつくられている。東側には、２号甕棺が、北側には12号甕棺が、西側には14号甕棺が隣接し、成人用甕棺墓が集中する場所にあたる。

墓壙は大幅に削平されており、現状では、２段墓壙の上面が若干残存する程度である。下面は、27号貯蔵穴との切り合い関係で埋土が確認しづらかったため西側の墓壙は明確に確定できなかった。そのため西側の残りは良好ではなく、東側を主体に残存している。現状での墓壙の大きさは、東西1.77m、南北1.03mで、検出面からの深さは0.76mである。

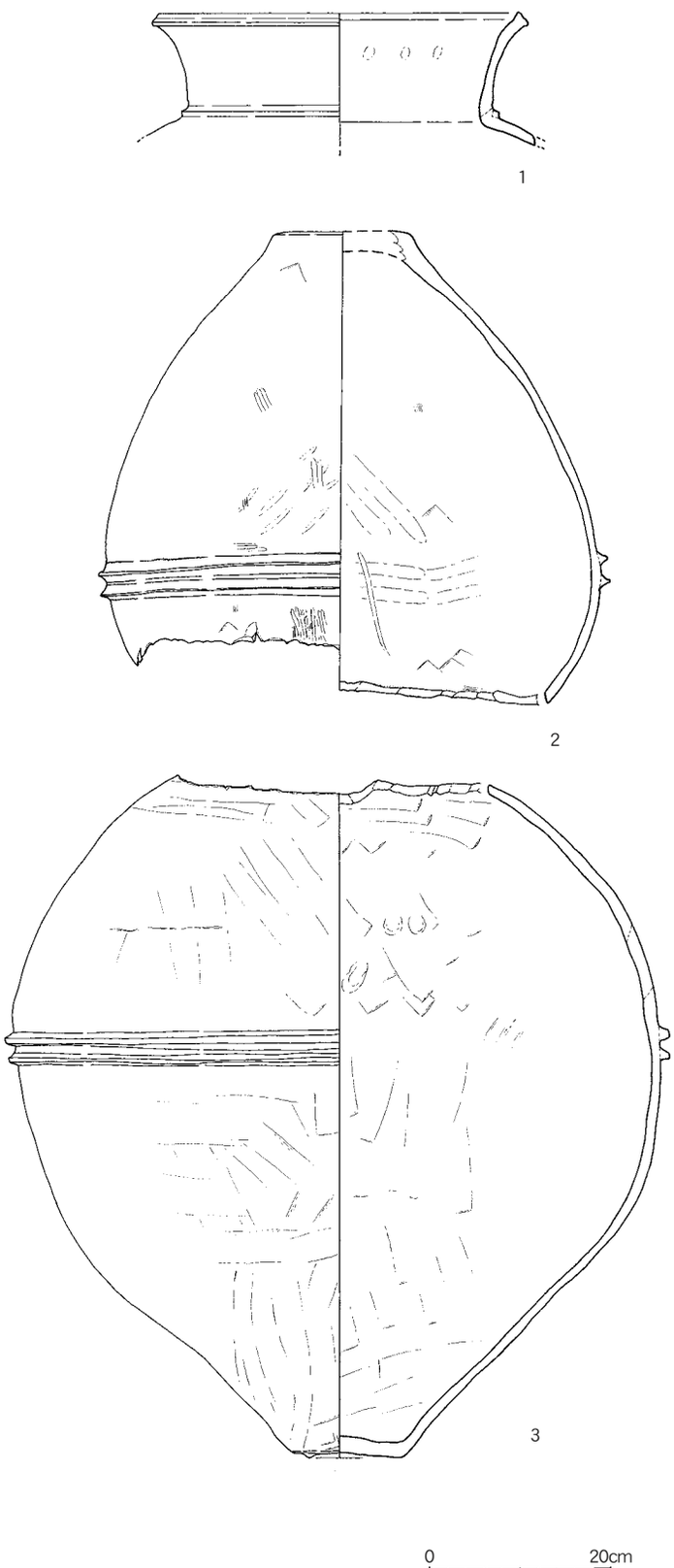
上甕・下甕とも口縁部から肩部を打ち欠いたものを、接口式で組み合わせて埋置していたと考えられる。下甕は他の甕棺と同様、横穴を掘って挿入されたものであろう。主軸はN86°Eで、埋置傾斜角度は50°である。また墓壙内より上甕の口縁から肩部片が２分の１弱残存して出土した。出土位置から接口部分を覆ったと推測される。棺内には、副葬品や人骨等は見られなかった。



第 62 図　B地点４号甕棺墓実測図（1/30）

第63図は、出土した甕棺である。１は上甕を打ち欠いた折の口縁から肩部片で、接合の結果、口縁は２分の１弱残存していた。口径41.0cm、残存高14.5cmを測る。口縁部は短く外反し、端部は窪む。外面は明茶褐色、内面は暗茶褐色を呈し、胎土には石英、角閃石、白色粒子、赤色粒子、砂粒を含む。頸部に１条の三角形の貼付突帯がめぐる。

２は上甕で、口縁部から頸部を打ち欠く。倒卵形のプロポーションで胴部最大径に２条の三角形の貼付突帯が巡る。底部は残存状況が良好でないが、平底であると思われる。残存高50.0cm、胴部最大径56.2cm、底径14.7cmを測る。器面調整は、外面がハケのちヘラミガキで、内面はナデである。３は下甕で、口縁部を打ち欠く。やや寸胴で丸みの強い下膨れのプロポーションを持つ。胴部最大径はほぼ中位にあり、やや退化したコの字形の貼付突帯を２条巡らす。突帯下は歪に窄まり平底の底部に移行する。底面は平滑ではなく、調整もヘラ状工具で大雑把に仕上げている。残存器高74.6cm、胴部最大径73.3cm、底径12.6cmを測る。色調は外面淡褐色、内面明黄褐色を呈し、



第63図　B地点４号甕棺実測図（1/8）

胎土には赤色粒子、白色粒子、角閃石、雲母等を含む。調整に関しては両者ともタタキを施していると思われるが、明瞭ではない。調整の順番は上甕が、タタキ→ハケ→ミガキ・ナデで、下甕がタタキ→工具ナデ→ナデと思われる。

時期に関しては、プロポーションが当遺跡で成人棺に主体的に見られる倒卵形ではなく、ずん胴で下膨れである点、上甕の突帯が三角形になり、下甕のコの字状突帯にシャープさがなくなること、下甕でミガキが使用されなくなった点、急な埋置角度などから、当遺跡のほかの甕棺に比べ後出する時期と考えられ、後期初頭から前半の範疇で考えたい。

以上のことから、本遺跡の成人甕棺の特徴をみてみると、一部の墓壙が切り合って隣接して立地し、時期的には中期後半から後期前半である。甕棺の上甕・下甕とも口縁部を打ち欠くものが主体的で、接口式で組み合わせている。埋置角度は30°後半台～50°台と比較的急であり、時期が下るにしたがって角度が急である。甕の形態に関しては、跳ね上げ口縁を持つ大型甕棺の存在が注目される。調整に関しては（後述する石棺甕棺併用墓も含む）、すべてにタタキの痕跡が見られ、その後、ハケもしくは工具ナデを行い、その上にミガキもしくはナデを施す。ミガキは時期が古いものほど密で、新しいものほど粗である。

（吉田）

（6） 小児用甕棺墓

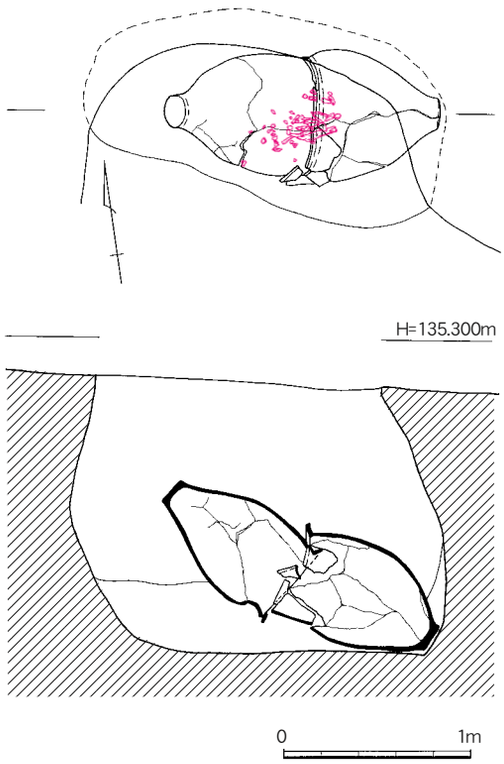
小児用甕棺墓は４基検出された。それぞれ成人用甕棺墓と同じ墓地群内に位置し、跳ね上げ口縁の甕を組み合わせたものと、須玖Ⅱ式の丹塗りの甕を組み合わせたものがある。

12号甕棺墓（第64・65図、図版23）

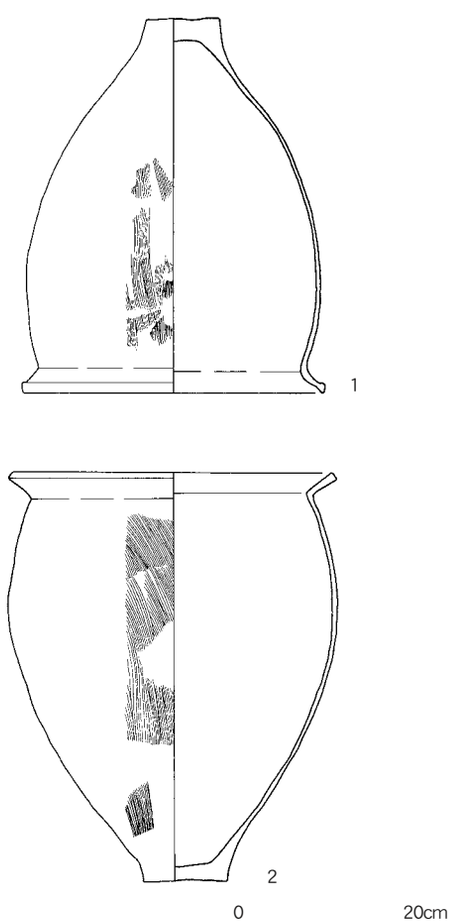
Ｂ地点のほぼ中央部に位置する合口の小児用甕棺墓である。墓壙は27号貯蔵穴を切って作られ、北側にややオーバーハングするように掘り窪められている。27号貯蔵穴との切り合いで埋土の区別がしづらく、やや下位で全体の墓壙を確認した。確認面での大きさは東西0.99m、南北0.5m、最上面からの深さは0.74mを測る。上甕と下甕は接口式で組み合わさり、主軸方向はN80°W、埋置角度は30°である。内部には小児の人骨が一部残存していた。

第65図１は上甕である。くの字形を呈する跳ね上げ口縁を有し、端部はやや角張って微妙に内側に引き出す。器壁は薄く、胴部最大径はやや上位に位置する。底部は平底で肥厚している。口径31.7cm、胴部最大径31.1cm、底径8.2cm、器高40.2cmを測る。口縁部内外面は横方向のナデ調整、胴部から底部にかけては縦方向のハケ目調整が施される。内面は丁寧なナデによって調整される。内面の色調は灰褐色、外面は暗茶褐色である。胎土には細かな角閃石、長石、赤褐色粒子などを含む。焼成は堅緻である。

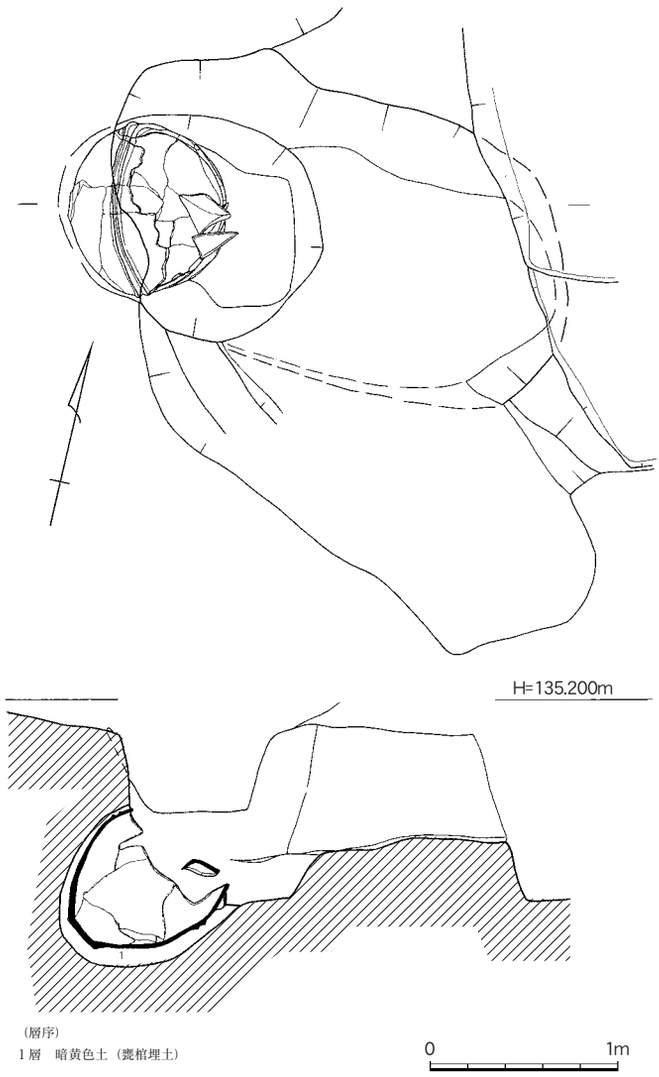
第65図２は下甕である。くの字形を呈する跳ね上げ口縁を有し、端部は角張り、わずかに内側に引き出す。器壁は薄く、胴部最大径はやや上位に位置する。底部は平底で肥厚しているが、上甕よりやや薄い。口径33.8cm、胴部最大径35cm、底径9.0cm、器高44.0cmを測る。口縁部内外面は横方向のナデ調整、胴部から底部にかけては縦方向のハケ目調整が施される。内面はハケ後ナデにより調整される。内面の色調は淡褐色、外面は暗茶褐色である。胎土は１～４mmの長石と角閃石、雲母を含む。焼成は堅緻である。小児用甕棺の口縁部や底部の形態から、時期は弥生時代中期後半と考えられる。（下東）



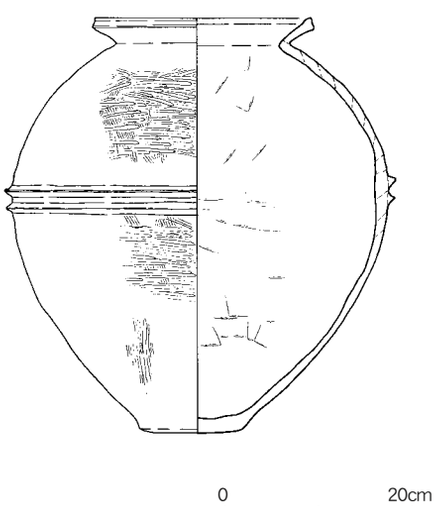
第 64 図　Ｂ地点 12 号甕棺墓実測図（1/20）



第 65 図　Ｂ地点 12 号甕棺実測図（1/8）



第 66 図　B地点 14 号甕棺墓実測図（1/20）



第 67 図　B地点 14 号甕棺実測図（1/8）

14号甕棺墓（第66・67図、図版24）

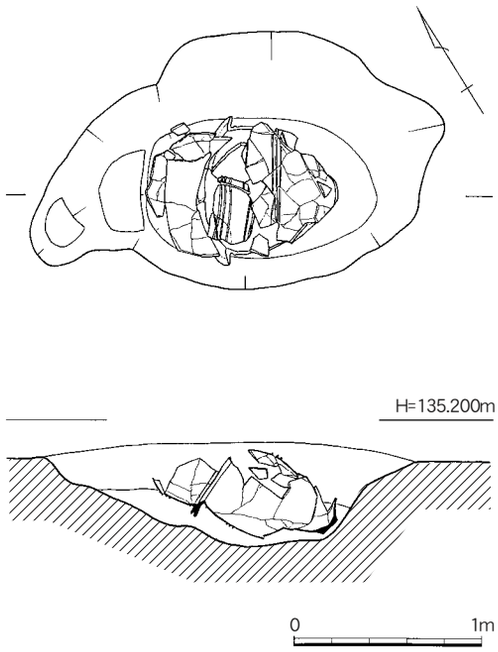
小児用甕棺で、調査区のほぼ中央に位置する。27号貯蔵穴を切り、細長い楕円形の墓壙を掘り込んでいる。甕は横穴を掘って埋置し、まわりは掘削時の黄褐色粘質土で固定している。主軸はN75°Wで、埋置角度は39°である。

棺の依存状態は、口縁部が削平され、正位置を保っていたのは肩部から下である。口縁部は遺構検出時に出土したものである。上甕があったかどうか調査では確認できなかった。

出土した甕棺は、口縁部が短く外反し、端部は肥厚する。口径23.0cm、胴部径41.5cm、底径11.5cm、器高44.2cmを測る。体部は倒卵形で、頸部はしまり、肩部は張る。底部はややレンズ状を呈す。また胴部中位の最大径に断面三角形の突帯を２条もつ。調整に関しては、外面は口縁部から頸部やや下までがヨコナデ、肩部はタテハケの後横位ヘラミガキである。胴部中位はタテ及びナナメハケの後ヨコナデであるが、突帯はハケ目調整の後に貼付され、下段の一部には貼付後のハケ目調整が部分的にみられる。胴部中位よりやや下はナナメハケの後、横位ヘラミガキである。底部付近は残りが悪く調整不明である。内面は口縁～頸部がヨコナデで、そこから胴部下位までが工具状のものでのナデ後手ナデである。底部付近は不明である。色調は外面が淡茶褐色、内面が黒褐色で、胎土は１mm以下の石英、角閃石、白色粒子などを多く含む。焼成は良好。時期は、甕棺の口縁がまだ強く外反する点、埋置角度が後期になると相対的により急角度になる点、４号甕棺墓、12号甕棺墓など中期後半から末の時期のものと同様な主軸をとることなどから中期末が妥当であろう。（吉田）

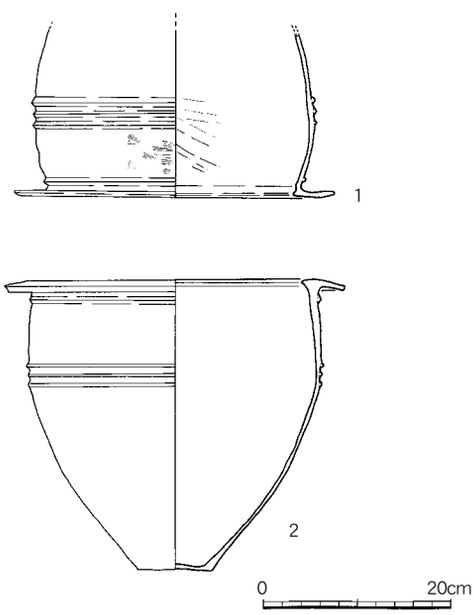
24号甕棺墓（第68・69図、図版24・25）

Ｂ地点の北西側に位置する合口の小児用甕棺墓である。確認面での墓壙の大きさは1.02m、南北0.69m、最上面からの深さは0.24mを測る。耕作面に接するために墓壙上位がやや削平されている。上甕と下甕は接口式で組み合わされるが、削平により上甕の胴部から底部にかけての部分は欠損している。主軸方向はN57°W、埋置角度は40°である。内部には土砂が多量に流れ込んでおり、人骨などは確認出来なかった。



第68図　Ｂ地点24号甕棺墓実測図（1/20）

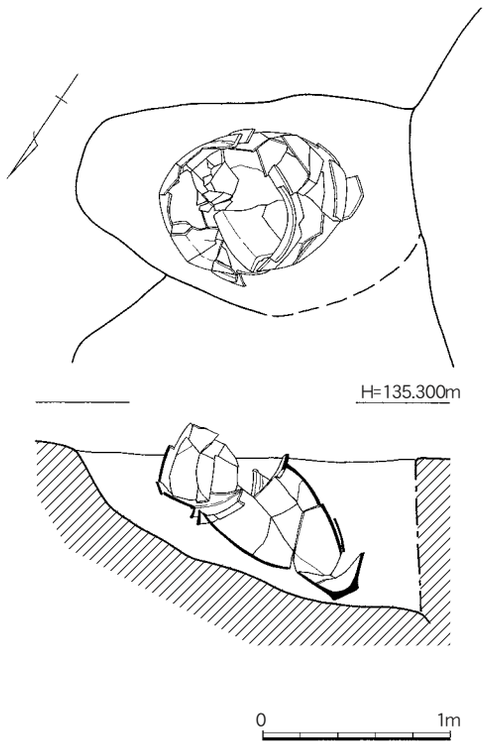
第68図１は上甕であり、欠損しているため、口縁部から胴部までの資料である。鋤先状を呈する口縁を有し、端部は薄く丸みを帯び、わずかに垂れ下がる。器壁は薄く、胴部最大径は上位に位置する。口縁部下位にM字突帯を１条、胴部に３条の三角形の貼り付け突帯を巡らす。口径34.0cm、胴部最大径29.7cm、残存部の高さ14cmを測る。土器表面は磨滅しており、調整は外面ハケ、内面は上位に工具によるナデが施される。色調は内外面ともに明褐色で、内外面にはわずかに丹塗りの痕跡を留める。もともと土器全体に赤色顔料が塗布されていたと考えられる。胎土が緻密であり、角閃石が多く１mm前後の長石、赤色粒子を少量含む。焼成は堅緻である。



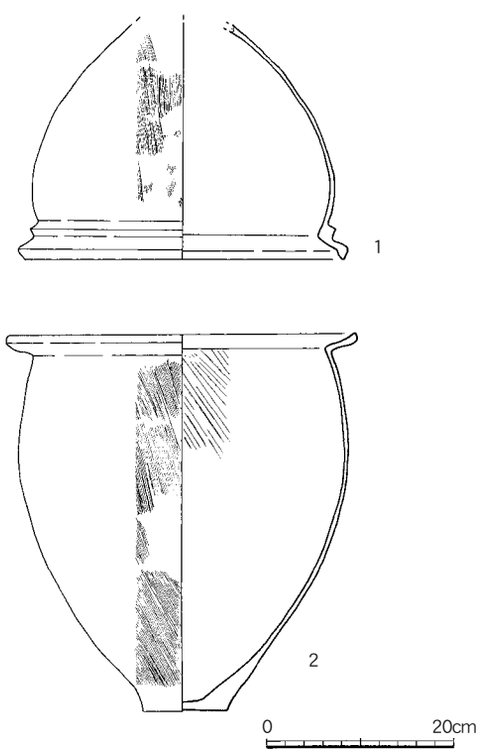
第68図　Ｂ地点24号甕棺実測図（1/8）

第69図２は下甕である。鋤先状を呈する口縁を有し、端部中央は窪み、わずかに垂れ下がる。器壁は薄く、胴部最大径はやや上位に位置する。口縁部下位にM字状の貼り付け突帯を１条、胴部にM字状の貼り付け突帯を３条巡らす。底部は薄く平底である。口径36.4cm、胴部最大径31.6cm、底径7.3cm、器高29.9cmを測る。口縁部外面は横方向のナデ調整、胴部から底部にかけてはヘラミガキにより調整される。内面はハケ後丁寧なナデにより調整される。色調は内外面ともに淡褐色で、口縁部から底部にかけての外面には全体的に赤色顔料が塗布されている。胎土は緻密であり、角閃石、雲母が多く、１mm前後の長石を含む。焼成は堅緻である。

小児用甕棺の口縁部、胴部、底部の形態から須玖Ⅱ式の新段階が想定され、時期は弥生時代中期終末に位置付けられるであろう。（下東）



第 70 図　B地点 41 号甕棺墓実測図（1/20）



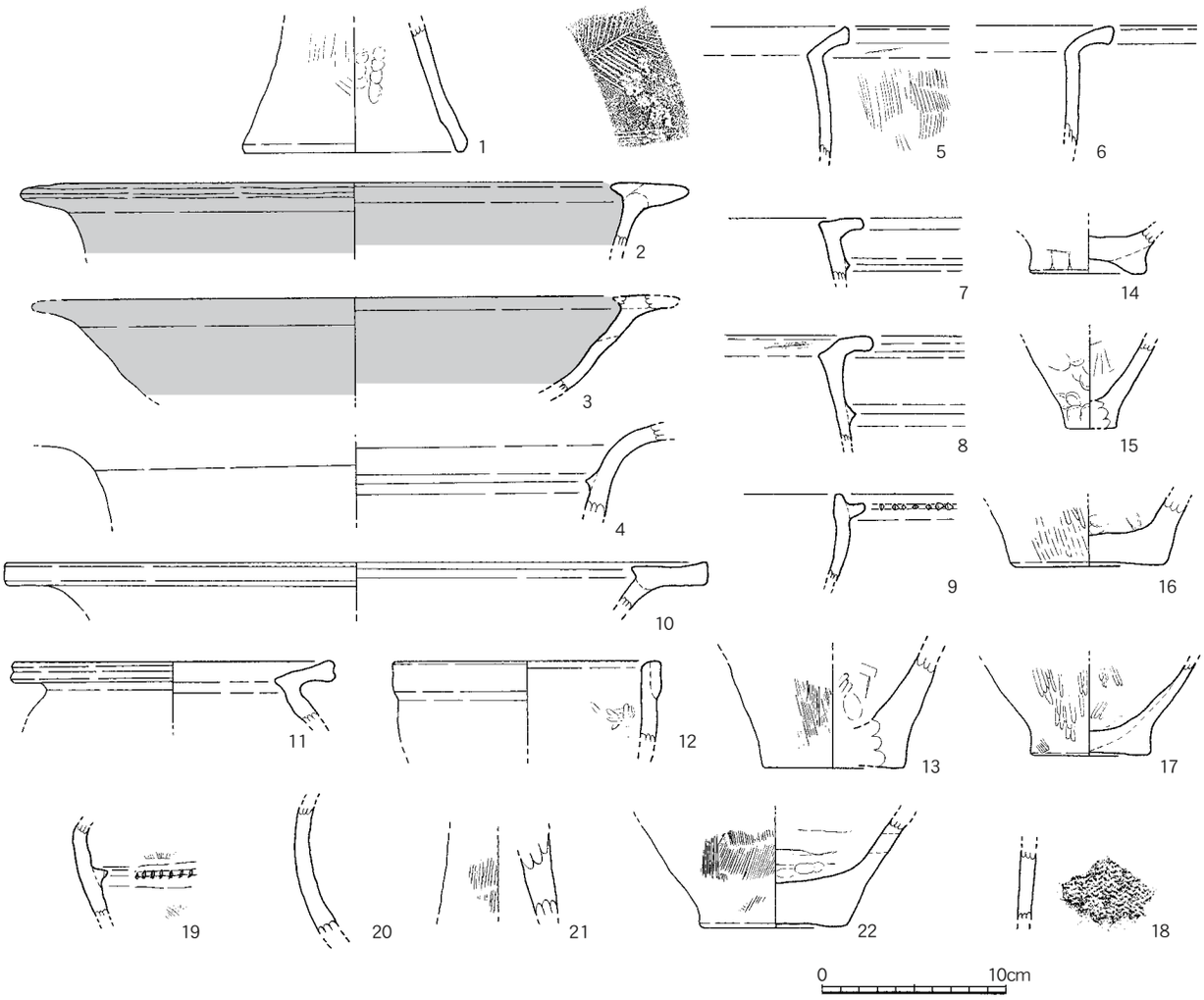
第 71 図　B地点 41 号甕棺実測図（1/8）

41号甕棺墓（第70・71図、図版25）

Ｂ地点中央部北側に位置する合口の小児用甕棺墓である。墓壙は北側を１号甕棺墓、西側を３号甕棺墓によって切られており、東から西にかけて斜面をなして掘り窪められている。確認面での大きさは東西約0.95ｍ（推定）、南北0.56ｍ、最上面からの深さは0.435ｍである。耕作面に接するために墓壙上位がやや削平されている。上甕と下甕は接口式で組み合わされるが、削平により上甕底部が欠損している。主軸方向はN46°Ｅ、埋置角度は54°を測る。内部には土砂が多量に流れ込んでおり、人骨等は確認できなかった。

第71図１は上甕である。くの字形を呈する跳ね上げ口縁を有し、端部は丸みを帯び大きく内側に引き出す。器壁は薄く、胴部最大径は上位に位置する。口縁部下位に三角形の貼り付け突帯を１条巡らす。底部は欠損しており不明である。口径35.0cm、胴部最大径31.2cm、残高24.9cmを測る。口縁部内外面は横方向のナデ調整、胴部から底部にかけては縦方向のハケ目調整が施される。内面は丁寧にナデ調整されている。色調は内外ともに淡褐色である。赤色顔料が内外面に部分的に付着しており、土器全体に赤色顔料が塗布されていたと考えられる。胎土は１～２mmの長石が多く、石英、角閃石を含む。焼成は堅緻である。

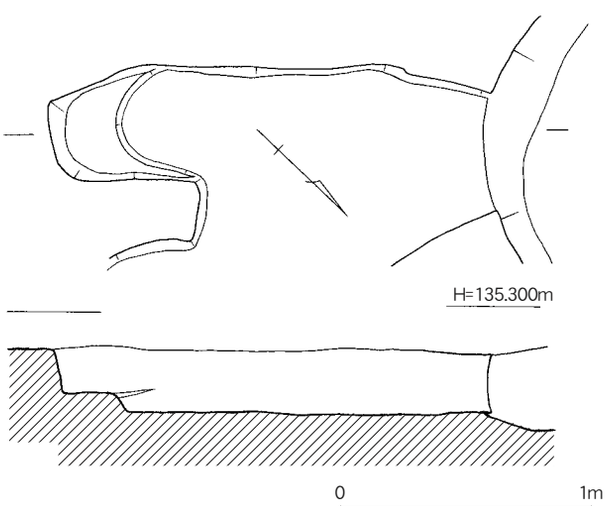
第71図２は下甕である。逆Ｌ字状に近く外反する跳ね上げ口縁を有し、端部は丸みを帯び内側に引き出す。器壁は薄く、胴部最大径はやや上位に位置する。底部は平底で、やや肥厚する。口径37.4cm、胴部最大径34.9cm、底径9.0cm、器高40.2cmを測る。口縁部内外面は横方向のナデ調整、胴部から底部にかけては縦方向のハケ目調整、内面は上位に工具によるナデ調整がみられる。胎土には長石、角閃石を含み、焼成は堅緻である。切り合い、小児用甕棺の口縁部、底部の形態から、時期は弥生時代中期後半に位置付けられるであろう。（下東）



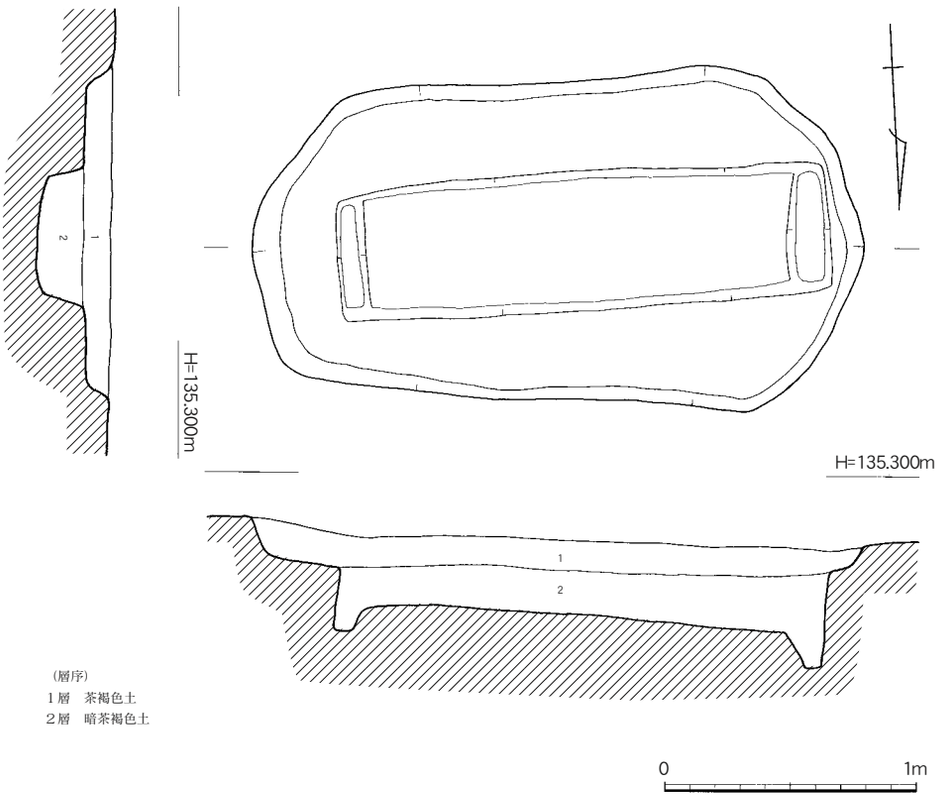
第 72 図　B地点甕棺墓壙出土遺物実測図（1/4）

甕棺墓壙出土遺物（第72図）

第72図は甕棺墓壙から出土した遺物である。１～４は１号甕棺墓から出土した。１は脚部、２・３は鋤先状口縁をもつ高坏の坏部で、２の口縁平坦部には有軸羽状文に近似した文様が見受けられる。４は周防灘沿岸系壺の頸部である。５～18は４号甕棺墓から出土した。５～８は甕の口縁部で、９は下城式の甕、10・11は鋤先状口縁壺、12は口縁端部に帯状の粘土を貼り付けて肥厚させた鉢である。また13・16・17は甕の、14は壺の、15はミニチュア土器の底部である。甕の底部は平底か若干の窪み底を呈する。18は山形押型文土器である。写真のみ掲載しているが、４号甕棺墓掘り込み内埋土から砂岩製の砥石が出土している。最大長は6.9cm、最大幅6.3cm、最大厚1.6cm を測る。ほとんどの面



第 73 図　B地点 13 号土壙墓実測図（1/30）



第 74 図　B地点 20 号木棺墓実測図（1/30）

が使用されているが、その形状、使用の痕跡などから手持ち砥石として使用されたと考えられる。19～22は12号甕棺墓から出土した。19は壺、20・21は高坏で、22は甕の底部である。２・３・11･17には丹塗りが施される。（伊藤）

（7） 土壙墓・木棺墓・石棺甕棺併用墓・石蓋土壙墓

甕棺墓以外に、土壙墓２基、木棺墓２基、石棺甕棺併用墓１基、石蓋土壙墓１基などが出土している。時期的な幅もあるが、一墓地群の中に多様な埋葬形態が認められる。

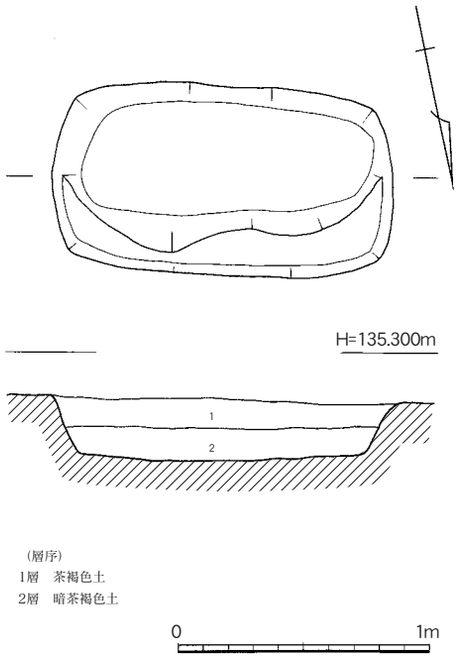
13号土壙墓（第73・81図）

調査区のほぼ中央で検出された土壙墓である。主軸はN45°Ｗで、北西部の一端は14号甕棺墓に切られている。同墓壙の平面形は残存する長軸が1.4m、短軸が0.4mの長方形で、南東部に一段のテラスをもつ。出土遺物（第81図10～12）より、中期中葉に位置づけられる。

20号木棺墓（第74・81図、図版26）

13号土壙墓のさらに北西約３mに位置する組み合わせ式木棺墓である。墓壙は、主軸がN90°Wの楕円形を呈しており、長軸は約2.8m、短軸は約1.6mを測る。38号貯蔵穴の南側を切るかた

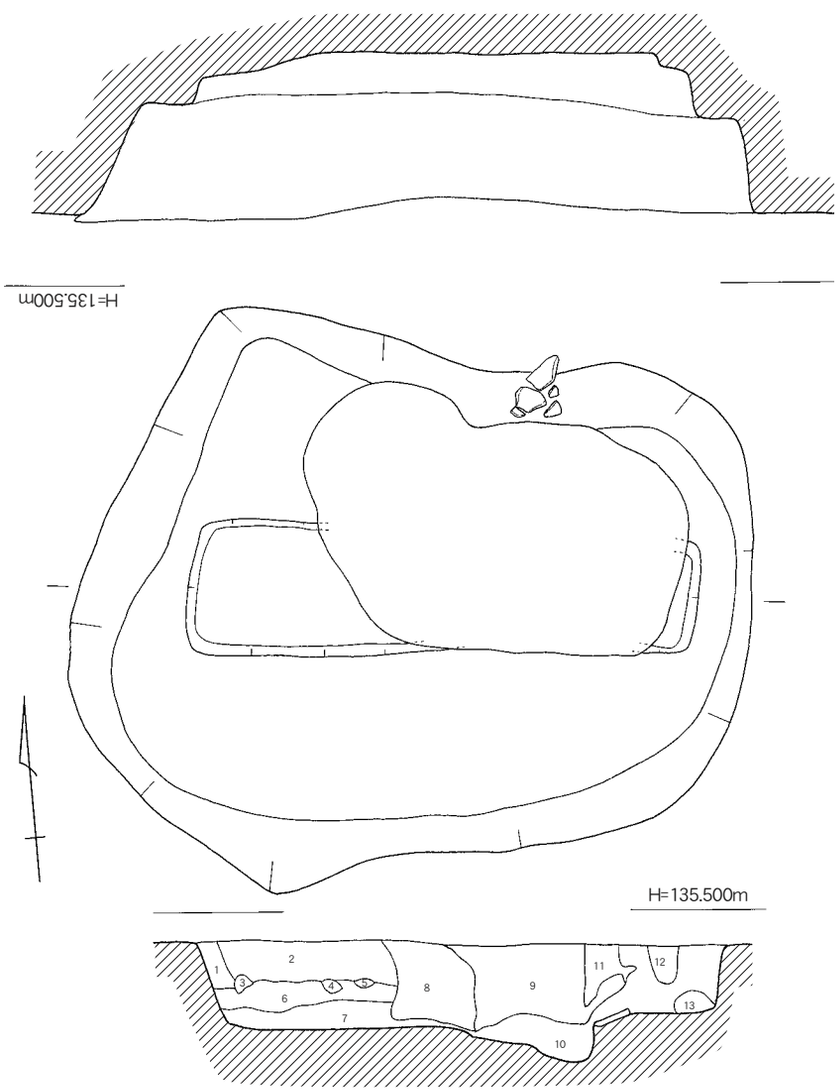
ちで、同遺構に後出する。検出面から約0.15m程掘り下げたところ、墓壙の西寄りの位置に木棺のプランが確認された。長軸1.95m、短軸0.55mの長方形で、検出面から床面までの深さは約0.3mを測り、小口側の掘り方はさらに0.15m下がる。棺内側壁および小口側の壁はともにほぼ垂直に立ち上がり、床面は平坦である。副葬品や木棺材は確認されていないが、少量の骨片が出土している。埋土は、第１層が茶褐色土で、第２層が黄褐色粘土質ブロックを少量含む暗茶褐色土である。いずれの層も土器を含む。出土土器（第81図14・15）からは在地の胎土でつくられた黒髪式の甕に類似した口縁があげられ、38号貯蔵穴との切り合いからも、埋葬時期は中期後半と考えられる。



第75図　B地点23号土壙墓実測図（1/30）

23号土壙墓（第75図、図版26）

20号木棺墓の東側に隣接する土壙墓で、北側に一段のテラスをもつ。主軸はN79°Wの隅丸方形で、長軸は1.35m、短軸は0.75mを測る。埋土は、水平に堆積した２層からなり、第１層が土器を少量含む茶褐色土で、第２層が暗茶褐色土である。出土土器はいずれも破片で、他遺構との切り合いもないため埋葬時期は定かでないが、配列



第76図　B地点44号木棺墓実測図（1/30）

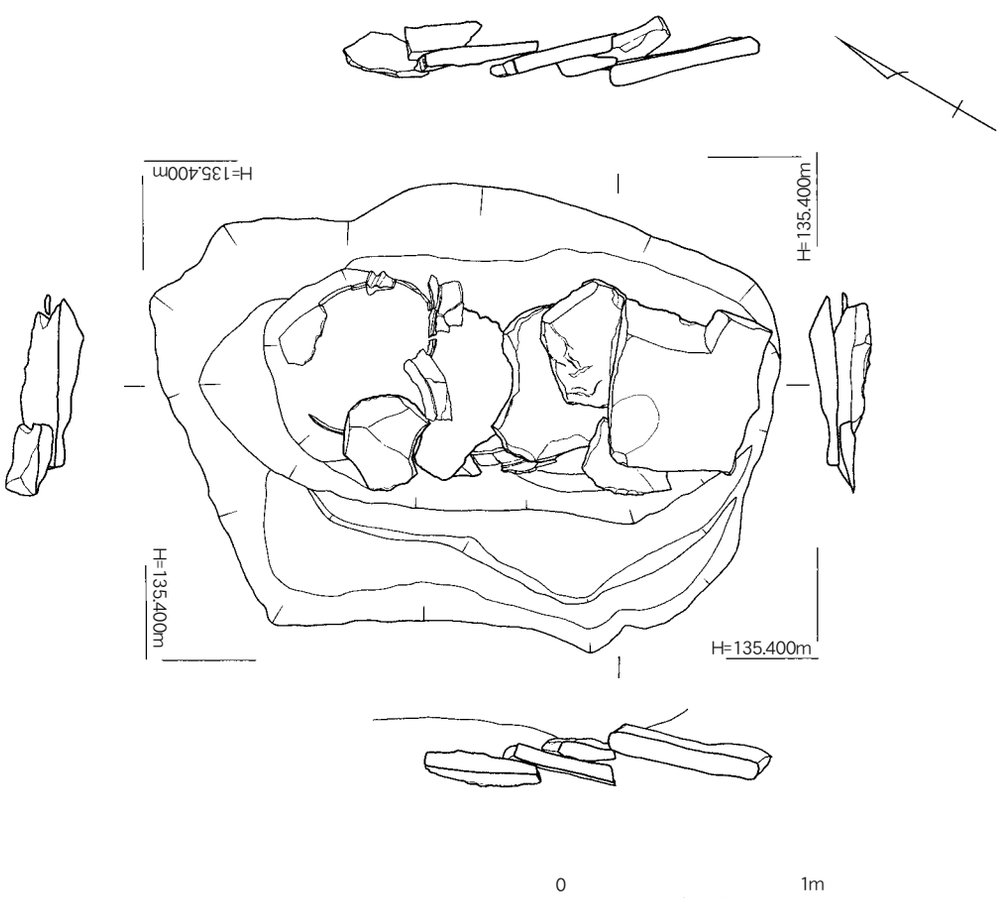
状況などから20号木棺墓とほぼ同時期であろう。

44号木棺墓（第76図）

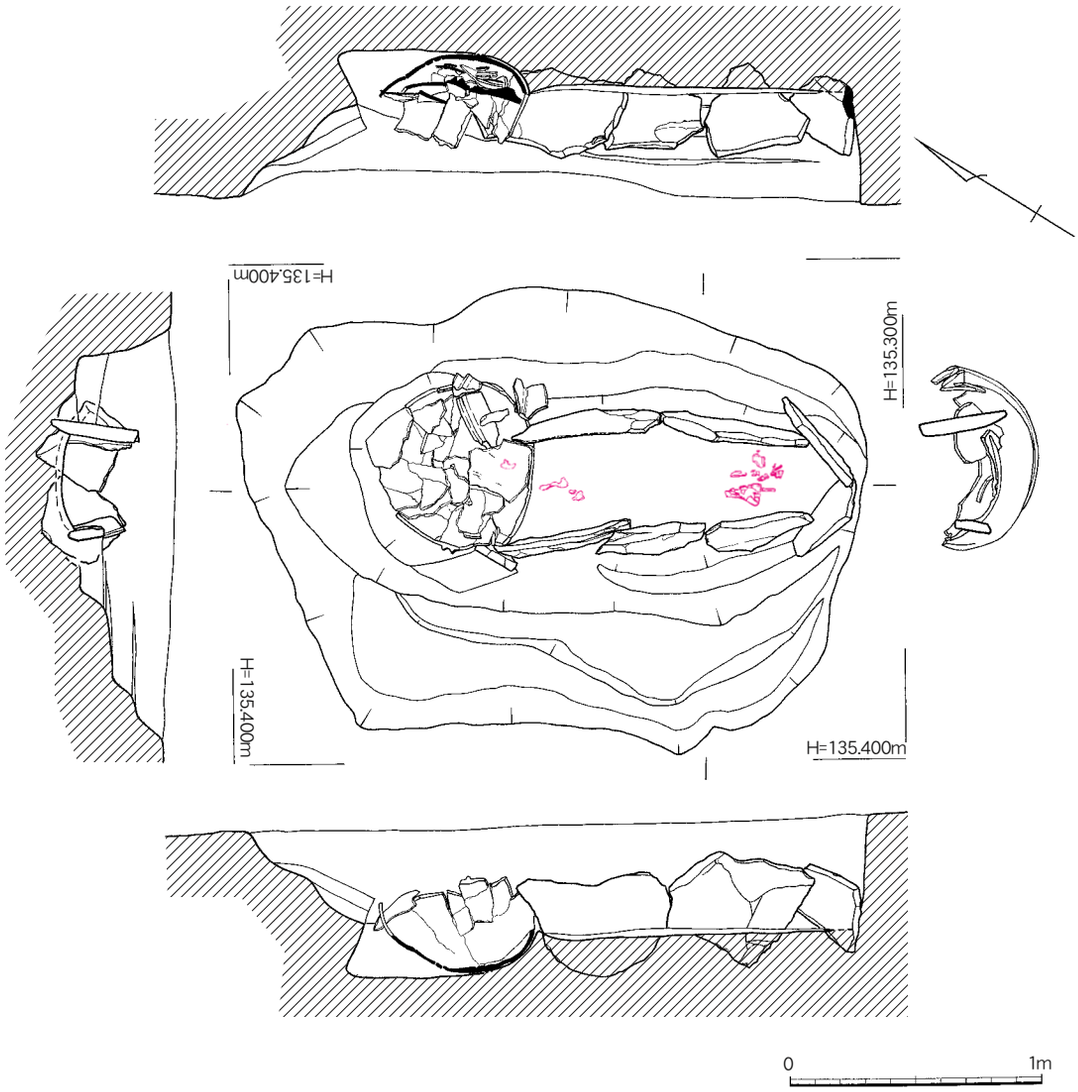
調査区の中央よりやや西側に位置する木棺墓で、15号石蓋土壙墓に切られる。周囲をめぐる11号土坑は同木棺墓の墓壙であり、44号木棺墓に沿うかたちでやや歪な隅丸方形をとる。木棺墓の主軸はN84°Wで、長軸は2.05m、短軸は約0.5mを測る。墓壙の長軸は2.45m、短軸は約1.5mで主軸は木棺墓とほぼ同方向である。検出面から約0.5m掘り下げたところで木棺のプランが確認され、さらに0.15m掘り下げたところで平坦な床面が検出された。両小口側は深く掘り下げていない。西側床面では頭蓋骨の一部が出土している。埋土は全13層が確認されたが、そのうち主要なものは１・２・６～11層であり、中でも８・９・11層は15号石蓋土壙墓に付随するものである。８～10・12層には土器が少量含まれ、第81図１～８の土器はこの層からのものと考えられるが、大半が15号石蓋土壙墓の土層に係っている。しかしこの土器群も、同木棺墓の掘り返しであると考えられ、最も新しい時期は須玖Ⅰ・Ⅱ式に相当することから、少なくとも埋葬時期はそれと同時期である可能性が高い。（伊藤）

５号石棺甕棺併用墓（第77～79図、図版27・28）

当遺構は、Ｂ地点の北西に位置する。主軸は、N19°Wである。掘り込みは楕円形を呈し、被葬者の上半身を口縁部打ち欠きの甕棺、下半身を石棺墓に埋葬する構造で、石蓋によって覆われる。



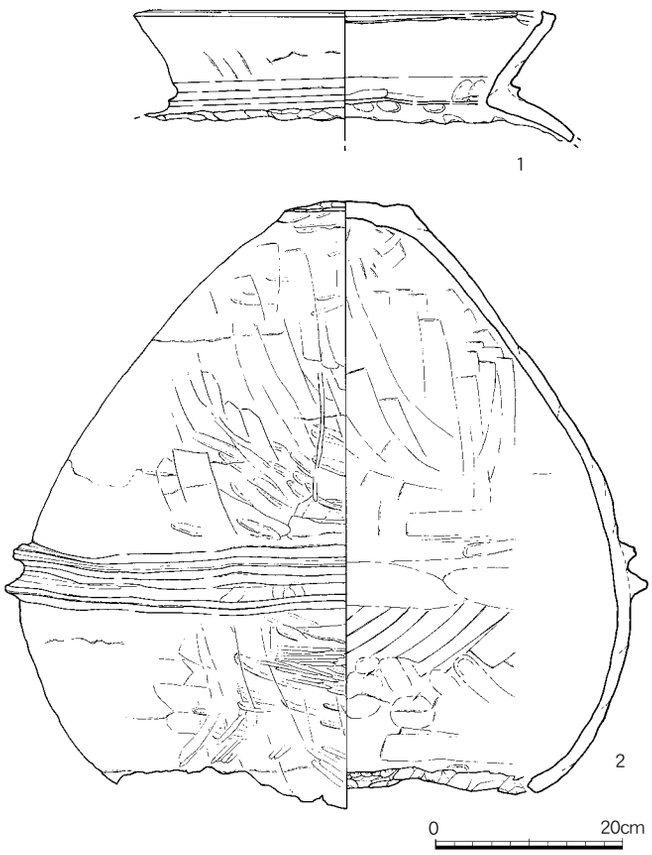
第77図　Ｂ地点５号石棺甕棺併用墓実測図（１）（1/30）



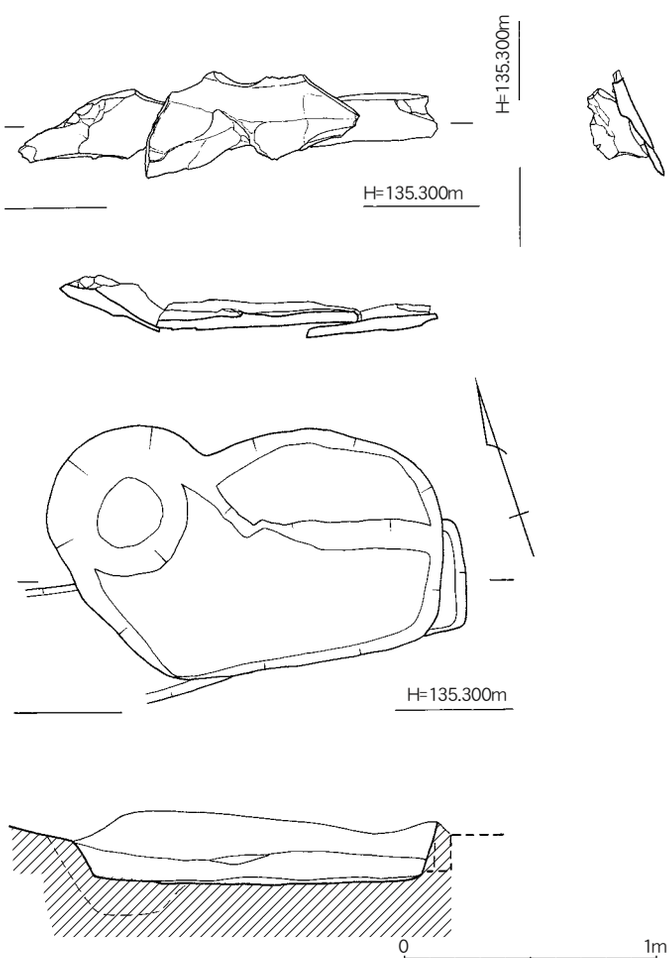
第 78 図　B地点５号石棺甕棺併用墓実測図（2）（1/30）

構築方法は、甕棺を若干オーバーハングした掘り込みに水平に埋置した後、下半身部分に石棺を構築する。石棺部分は、安山岩の薄い板材を地面に突き刺すようにして構築される。小口部分は矢羽根状に組まれている。蓋石は、石棺部分に頭位側から鍛葺きで重ね、所々支え石や打ち欠かれた甕棺の口縁部を配し、意図的に水平に葺かれている。また、残りの口縁部は、石蓋の上に配されていた。棺内より人骨が出土しており、甕棺内直上から腰椎、石棺頭位方向に骨盤、小口方向に踵骨が検出された。甕棺は口縁部打ち欠きであるが、石蓋の上に配されたり支えとして用いられた口縁部がその部分に該当する。

第79図１は口径約44.7cm、器高約60cm、胴部最大径は68.7cm を測る。口縁端部は面取りされ、内面に沈線が巡る。同様の口縁部成形は、天瀬町の宇土遺跡出土の甕棺にもみられ、筑後川上流域の土器様相の一つの特徴といえるであろう。２は胴部を大きく張り出し、重心は中心より上部に位置する。外面の器面調整は胴部下半において底部から突帯方向へタタキ後左上がりの工具ナデその後ミガキが施される。内面はタタキ後工具ナデ、その後手ナデ調整が施されている。突帯周辺には強いヨコナデが施され、胴部上半には、ミガキ調の工具ヨコナデが施されている。内面においては



第 79 図　B地点５号石棺甕棺併用墓甕棺実測図（1/8）



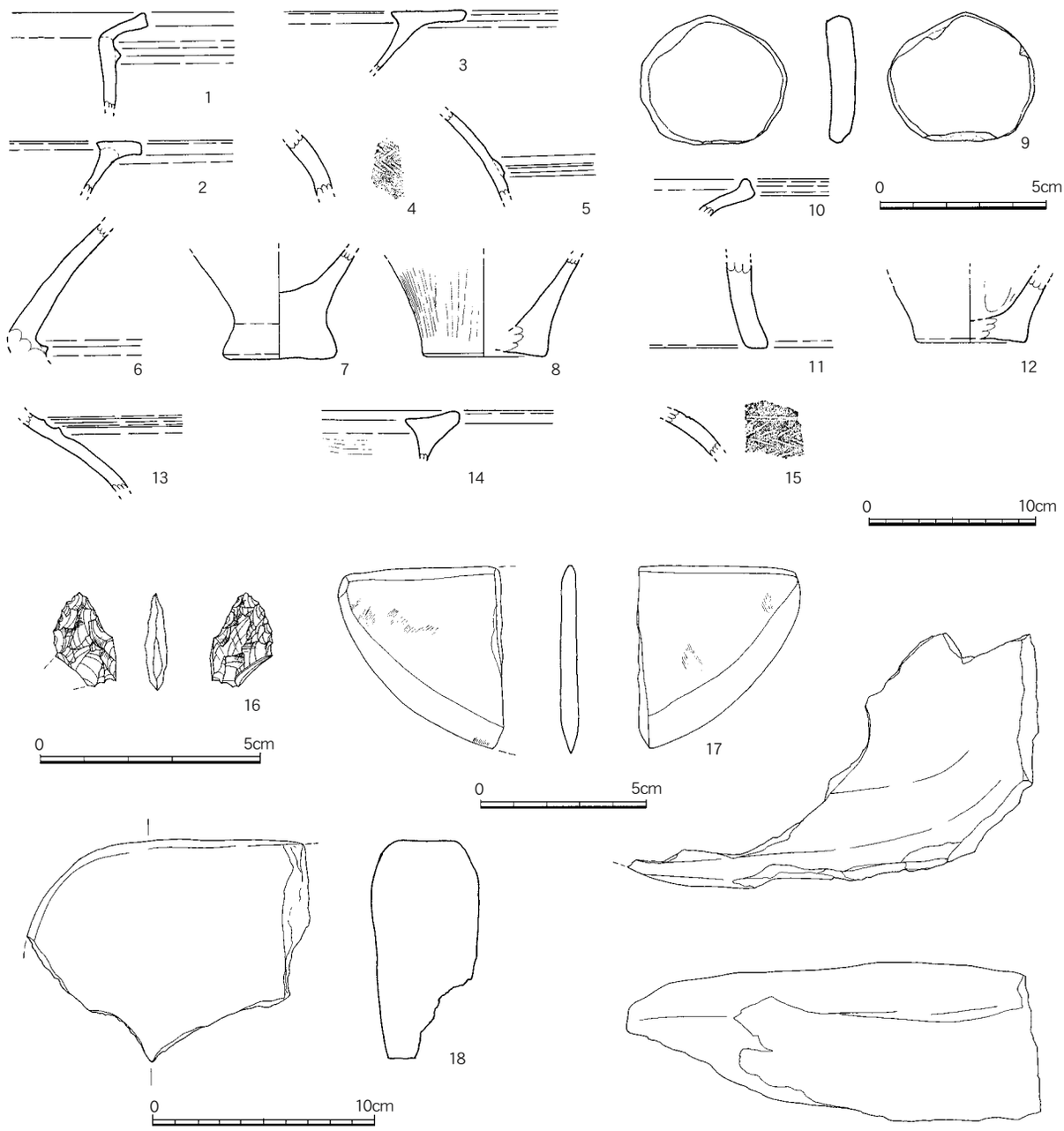
第 80 図　B地点 15 号石蓋土壙墓実測図（1/30）

当具痕が確認できる。器面装飾は、頸部に１条の三角突帯、胴部にコの字状突帯が２条施される。底部は指頭圧痕が確認できる。

当遺構は、「甕棺」と「石棺」という両墓葬を併用した「併用墓」ともいうべき墓葬形態をとる。これらの「併用墓」と呼称して支障のないと思われる墓葬形態は、佐賀市増田遺跡群内津留遺跡の「木棺甕棺併用墓」などが挙げられ、類例の墓葬が朝倉･飯塚地域にも散見されるようである。（上野）

15号石蓋土壙墓（第80・81図、図版29）

中央よりやや西側に位置する石蓋土壙墓で、44号木棺墓の一部を切っている。現状での土壙墓のプランは、ほぼ東西に向いた方形であるが、その一端がさらに下層にある44号木棺墓の長方形プランと重複しているため、元来の平面形とは考えにくく、石蓋の主軸であるN45°Wが本来の主軸であったものと考えられる。床面も現状では44号木棺墓と同レベルであるが、本来は北側テラス部分の一段高いレベルで床面が伸びていた可能性が高い。また石蓋の位置や配列された方位などから、主軸上に位置する円形プランの掘込みが頭位を示している可能性もある。しかしそのレベルは床面より0.1～0.2m 低いため頭部埋置のための掘込みとは考えにくく、同墓壙に付随するものかは定かでない。また出土遺物（第81図13）から埋葬時期を判断することは難しいが、前出する

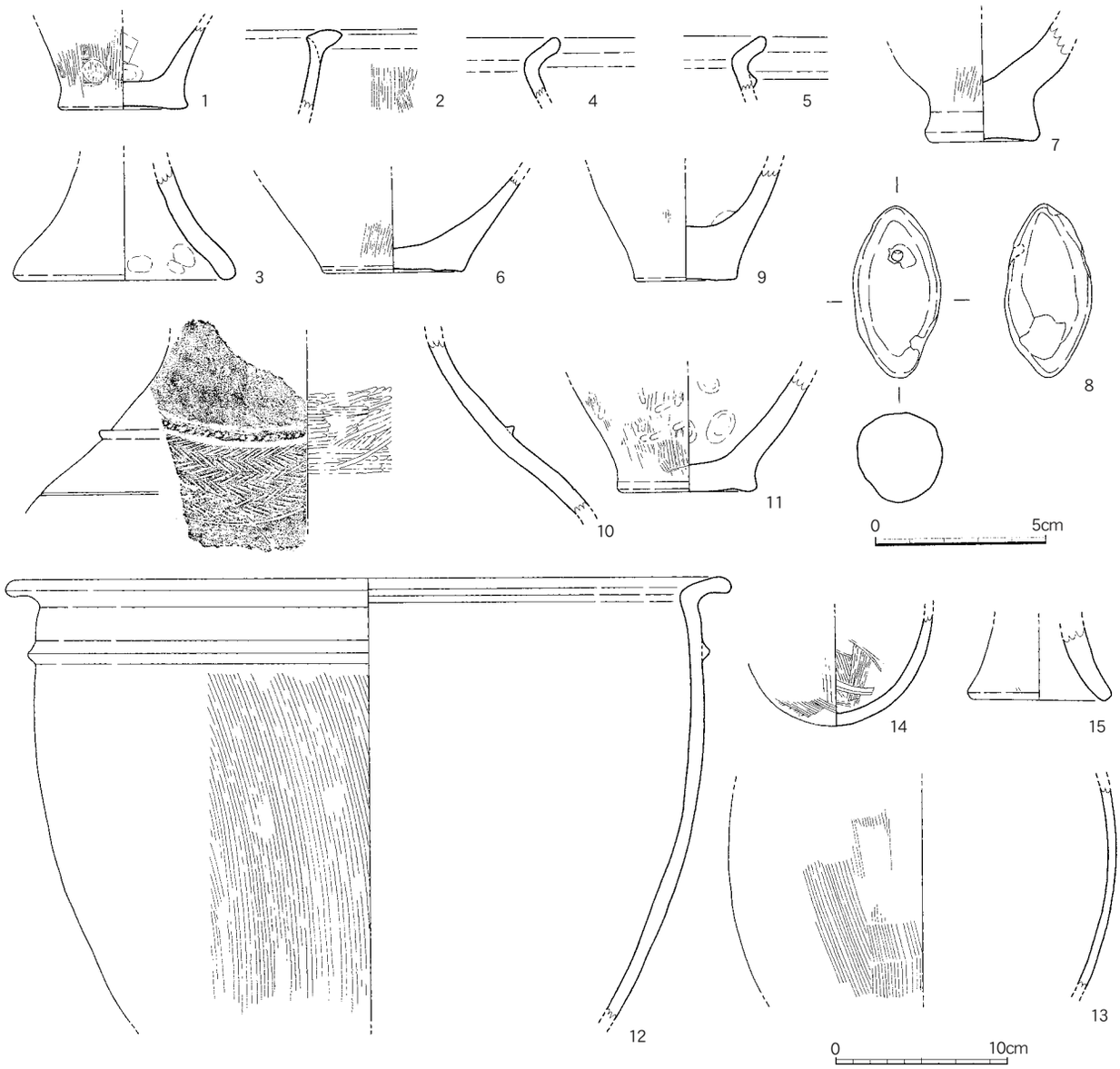


第 81 図　B地点土壙墓・木棺墓等墓壙出土遺物実測図（2/3・1/2・1/3・1/4）

44号木棺墓が中期後半までには埋置されたと判断できるため、切り合い関係から同遺構には古くとも後期初頭から前半の埋葬時期があてられるものと考えられる。またこれにともなう副葬品は一切出土していない。（伊藤）

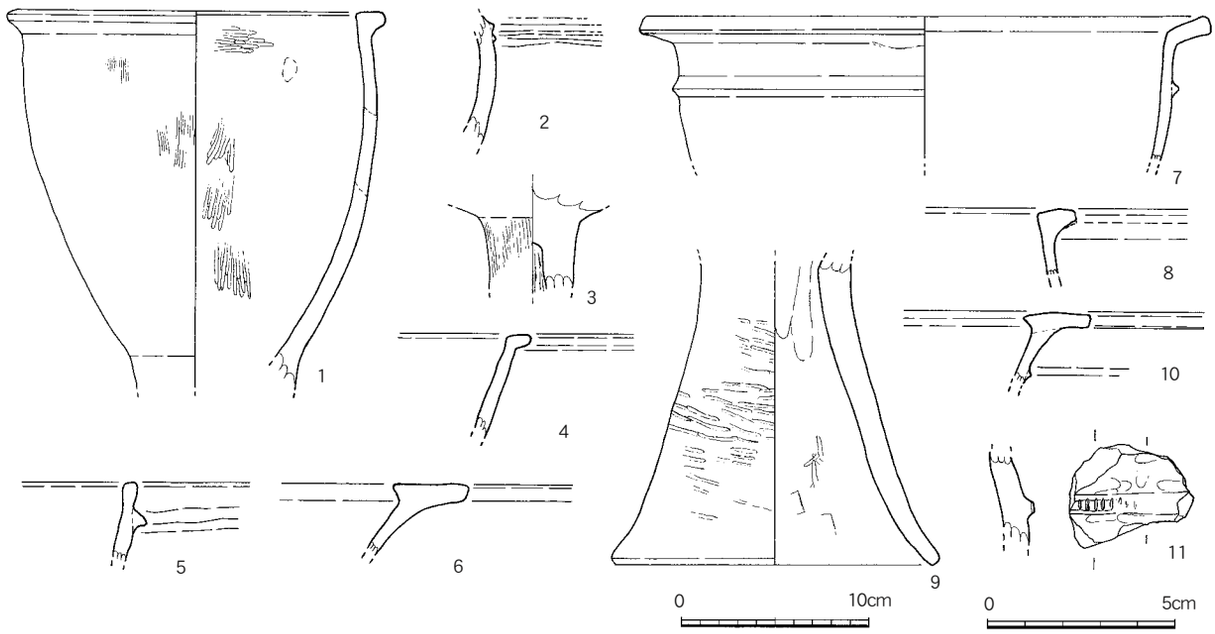
土壙墓・木棺墓等墓壙出土遺物（第81図）

１～９は44号木棺墓より出土。1は跳ね上げ状の甕の口縁部で、下部に１条の突帯を巡らす。一部黒班あり。２・３は壺の口縁部で鋤先状を呈する。４は壺の胴部で外面に羽状文を施す。５は壺の胴部で一条のM字突帯を巡らす。一部黒班あり。６は壺の頸部で１条の突帯を巡らし、外面にナデ調整を施す。７は甕の底部で底径5.5cm を測り、城ノ越式に属するものと思われる。８は



第 82 図　B地点柱穴他出土遺物実測図（1）（1/2・1/4）

甕の底部で復元底径7.1cm を測り、外面にハケ目調整を施す。９は土製加工品で長さ3.85cm、幅4.4cm、厚さ0.85cm、重さ17.7ｇを測り周囲を研磨して仕上げる。10～12は13号土壙墓より出土。10は甕の口縁部で跳ね上げ状を呈する。外面、内面にナデ調整を施す。11は器台の脚裾部である。12は甕の底部で復元底径6.6cm を測り、外面にハケ目調整、内面にナデ調整を施す。13は15号石蓋土壙墓より出土した壺の肩部で２条の突帯を巡らす。14～16・18・19は20号木棺墓より出土。14は甕の口縁部で、外面にナデ調整、内面にハケ目調整後ナデ調整を施す。15は壺の肩部で2条の沈線と羽状文を施す。16は石鏃である。良質な黒曜石を使用し、長さ2.1cm、幅1.5cm、厚さ0.4cm、重さ1.1ｇを測る。一面は丁寧な剥離を行うが他面は雑な感じがする。17は44号木棺墓の掘り方内より出土した頁岩製の石庖丁で、長さ5cm、幅5.4cm、厚さ0.5cm、重さ18.2ｇを測る。大部分は欠損し、薄いつくりで丁寧な研磨が行われている。18・19は安山岩製の石皿で

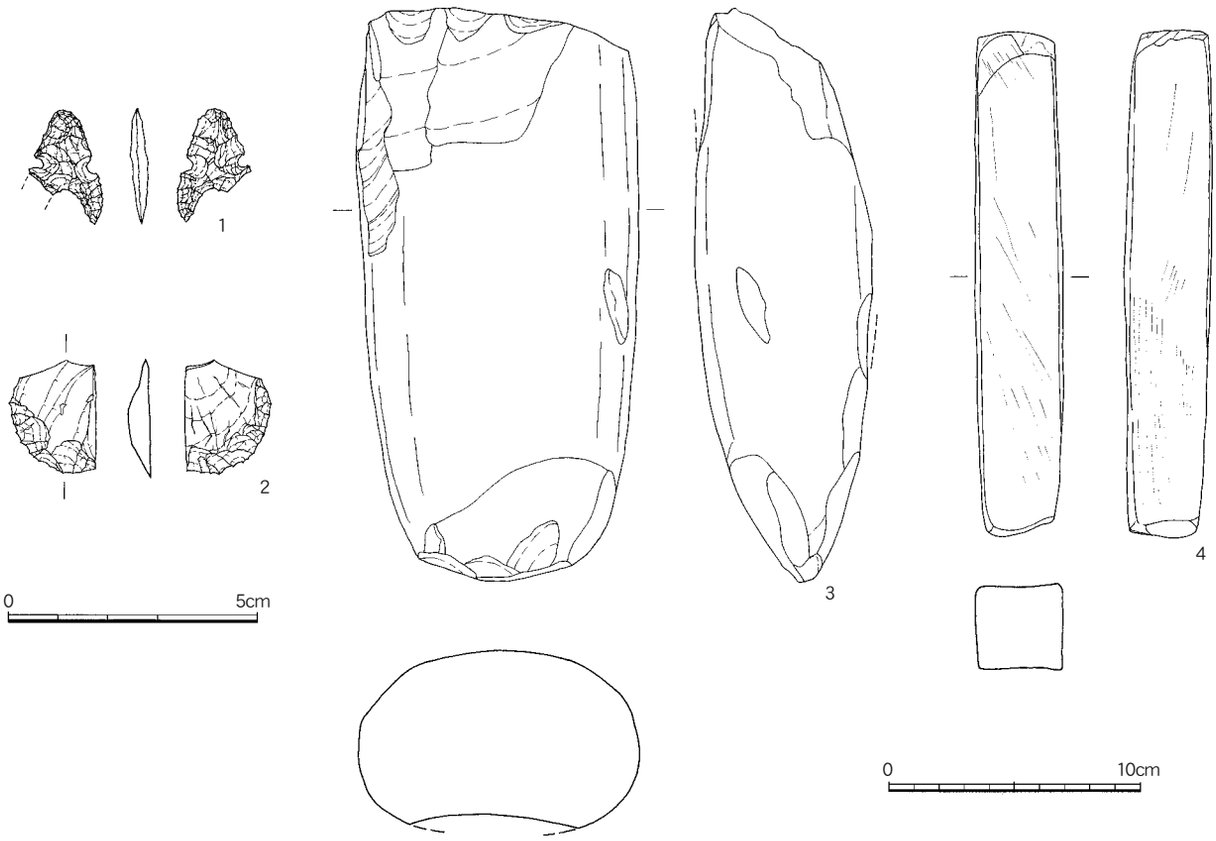


第 83 図　B地点柱穴他出土遺物実測図（2）（1/2・1/4）

ある。破損しているが、18は長さ10cm、幅12.6cm、厚さ4.9cm、重さ734.4ｇを測る。19は長さ18.4cm、幅11.3cm、厚さ7.1cm、重さ1039.1ｇを測り、一面がほぼ平らになるまで使用されている。

柱穴・遺構検出出土遺物（第82・83図）

第82図１は８号柱穴より出土した甕の底部である。復元底径7.6cm で、外面にハケ目調整およびナデ調整、内面に工具によるナデ調整を施し、内外面に指オサエが確認できる。２は25号柱穴より出土した逆Ｌ字状を呈する甕の口縁部である。外面にハケ目調整を施す。３は26号柱穴より出土した高坏の脚部で、復元脚部径は13cm を測り、内面に指オサエが確認できる。４～７は28号柱穴から出土。４・５は如意状を呈する甕の口縁部である。外面、内面ともにナデ調整が施されており、５は口縁下に1条の突帯を巡らす。６は甕の底部で、復元底径は8.2cm を測る。７は甕のミニチュア土器である。底径3.4cm を測り、外面にハケ目調整、内面にナデ調整を施す。8は36号柱穴より出土した投弾で、長さ5.05cm、幅2.6cm、厚さ2.6cm、重さ25.3ｇを測る。ナデ調整で一端に穿孔を施す。９は37号柱穴より出土した甕の底部である。復元底径6.1cm を測り、外面にハケ目調整を施し、内面に指オサエが見られる。10は42号柱穴より出土した壺の肩部である。胴部径は33cm を測り、１条の刻目突帯を巡らし、羽状文及び沈線を施す。外面にミガキ、内面にナデ調整後ミガキを施す。11・12は46号柱穴より出土。11は甕の底部で復元底径8.2cm を測る。外面はハケ目調整後ミガキ、内面にナデ調整と指オサエが確認できる。12は逆Ｌ字状を呈する甕の口縁部で、復元口径42.6cm を測る。口縁下に１条の突帯を巡らし、外面にハケ目調整、内面にナデ調整を施し指オサエも確認できる。13は48号柱穴より出土した壺の胴部で、復元胴径22.6cm を測る。外面にハケ目調整、内面にナデ調整を施す。14・15は53号柱穴より出土。14は丸底の壺の底部で、内外面ともハケ目調整を施す。15は器台の脚部である。復元裾部径8.4cm を



第 84 図　B地点出土石器実測図（2/3・1/2）

測り、外面にハケ目調整を施す。

第83図１は20号木棺墓と44号木棺墓の掘り方との間より出土した甕である。口径22.6cm、器高22cm を測る。外面にハケ目調整、内面にミガキを施し、粘土接合痕も確認できる。2～6は遺構検出面より出土。２は丹塗りの壺の胴部で２条の突帯を巡らし、内外面にナデ調整を施す。一部外面にスス付着。３は丹塗りの高坏の脚部である。外面にハケ目調整、内面にシボリ痕が確認できる。４は甕の口縁部である。５は甕の口縁部で１条の突帯を巡らす。外面､内面にナデ調整を施し、一部外面にススが付着する。６は鋤先状を呈する壺の口縁部で、内面にナデ調整を施す。須玖Ⅰ式に属するものと思われる。７・８は遺構検出面上層より出土。7は甕の口縁部で口縁端部は肥厚し口縁下に１条の突帯を巡らす。復元口径30.6cm、復元胴部径26.6cm を測る。外面に横方向のハケ目調整を施す。８は短い逆Ｌ字状を呈する甕の口縁部である。剥離欠損が著しい。９は表採した器台の脚部で復元裾部径17.4cm を測る。外面にタタキを施し、内面にナデ調整、ミガキ、工具による工具ナデ痕が確認できる。全体的に丁寧なつくりである。10は周辺より表採した丹塗りの壺の口縁部である｡鋤先状を呈し口縁部下に1条の突帯を巡らす｡11は攪乱土中より出土したミニチュア土器の胴部である。１条の刻目突帯を巡らす。内外面にミガキを施す。　（田中健）

第 84 図１は３号柱穴から出土したホルンフェルス製の打製石鏃である。全長 2.3cm、残存幅 1.5cm、最大厚 0.3cm、重さ 0.7g を測る。基部には抉りが入り、両側縁にも抉りを入れる。調整剥離は両面から丁寧に施されるが、先端部には片側から細かなリタッチが加えられ丸く仕上げられる。刺突に適する鋭さはなく石鏃以外の用途も考えておかなければならない。片脚を欠損する。２

は 22 号柱穴から出土したサヌカイト製のスクレイパーである。全長 2.3cm、幅 1.7cm、最大厚 0.5cm、重さ 2.0g を測る。剥片を素材として端部に両面から調整剥離を加え、刃部を形成している。３は 34 号柱穴の上層から出土した太型蛤刃石斧である。基部を折損しており、残部長 15.3cm、最大幅 7.4cm、最大厚 4.8cm を測る。刃部は使用によって潰れ、粗い剥離痕が残る。基部側にも上方からの粗い剥離痕が認められる。全体に風化が激しく、基面は剥離しザラついている。剥離の稜線も不明瞭になっている。ただ、裏面の一部に本来の研磨面が残存しており、それからみれば丁寧な作りであったことが窺われる。風化面は淡灰褐色を呈するが新しい剥離面は黒色を呈している。使用石材は玄武岩質安山岩であろうか。今山産の定型化した太型蛤刃石斧とはやや様相を異にするが、今山産をモデルにして在地で製作使用されたものであろう。４は 45 号柱穴出土の砥石である。最大長 13.5cm、最大幅 2.3cm、最大厚 2.2cm、重さ 141.7g を測る。4 面とも砥面としてよく使い込まれている。石材は乳白色を呈した石英長石斑岩であろう。北部九州で青銅器鋳型に使用される石材によく類似している。

掘立柱建物

遺構説明の順序が前後してしまったが、ここで掘立柱建物について説明しておきたい。掘立柱建物は２棟検出している。他にも柱穴群が出土しているので掘立柱建物が建つ可能性がある。

49 号掘立柱建物（第 17 図）

調査区東側で検出された梁行 1 間、桁行 1 間の建物である。主軸は N58° W である。関係する柱穴は 24 号柱穴、25 号柱穴、28 号柱穴、46 号柱穴である。梁行長 3.1m、桁行長 4.4 mを測り、現状では束柱などは認められない。柱間隔がきわめて長い掘立柱建物である。柱穴掘方も大きく径 0.6 ～ 0.9m、深さ 0.4 ～ 0.9m を測る。柱痕は径 0.2m 程度である。この掘立柱建物は 6 号土坑と主軸方向と位置が重なり、ともに関係する遺構と考えられる。６号土坑は塊状に固結した焼土が多量に詰まった遺構で、いわば特殊な遺構である。遺物の出土は少なく、性格を判別し難いが、土器焼成遺構との関連も考慮しておく必要があろう。いずれにしても６号土坑の上には掘立柱建物が建っていた可能性が高い。出土遺物は第 83 図にみるように中期初頭から前半代に属するものである。掘立柱建物の時期もほぼ同時期に属すると考えて差しつかえなかろう。

50 号掘立柱建物（第 17 図）

49 号掘立柱建物と一部重複して北側に位置する掘立柱建物である。関係する柱穴は 15 号柱穴、27 号柱穴、30 号柱穴、68 号柱穴である。主軸は N66° W で側柱のみの建物であり、梁行 1 間、桁行 1 間となる。梁行長 3.0m、桁行長 4.0m を測り、49 号建物に比べ梁行はほぼ同じで、桁行はやや短くなっている。ともに柱間隔の長い建物である。現状では束柱などは確認されていない。柱穴掘方は径 0.4 ～ 0.5m で、深さは 0.3 ～ 0.5m である。遺物は各柱穴から甕、壺、高坏、丹塗土器などが出土している。逆Ｌ字状口縁、跳ね上げ口縁、鋤先状口縁を呈することから中期前半代に属するものであり、建物の時期もほぼ同時期であろう。

小　結

Ｂ地点は、第２・４次調査区の近くに位置し、吹上台地の南西部にあたる。検出された遺構は竪穴住居、掘立柱建物、袋状貯蔵穴、土坑などの生活関連遺構と、甕棺墓、木棺墓、土壙墓、石棺甕棺併用墓、石蓋土壙墓などの墓地遺構とに大別することができる。

先ず、弥生時代の遺構、遺物群にふれる前に弥生時代以前の遺物について簡単に説明しておきたい。吹上遺跡では後期旧石器時代から生活の営みが確認できる。ナイフ形石器や三稜尖頭器などがこれまで数点採集されている。今回の調査では、弥生時代以前の包含層は削平によって全く確認されなかったが、弥生時代の遺構に伴って縄文早期の押型文土器と縄文後期のいわゆる黒色磨研土器が出土している。押型文土器は以前の調査でも出土しており、早期の遺跡が存在したことを示している。破片は小さいが丁寧に施文された横位の山形押型文土器が出土している。石鏃の中にはいわゆる鍬形鏃も出土しており、押型文土器に伴う可能性が高い。一方、縄文晩期の土器は黒色磨研の浅鉢形土器と口縁部を肥厚させた深鉢形土器が主体を占める。小破片ではあるがある程度の点数が出土している。浅鉢形土器は口縁部を広く外反させるタイプと、口縁部が短く立ち上がり扁球形の胴部を持つものとがある。ともに内外面は黒色を呈し丁寧なヘラミガキが施されている。深鉢は口縁部が幅広でやや肥厚し、外面に数条の沈線を施す。時期的には晩期中葉に属し黒川式に相当すると考えられる。打製石鏃の一部や石匙、扁平打製石斧などはこれらの土器群に伴うものであろうか。時期的には短期間にまとまり、これ以降の刻目突帯文系の土器は出土していない。

弥生時代の遺構では、竪穴住居が１次調査に次いで検出された。数は少ないが集落の広がりを考える上では重要であろう。方形プランと円形プランが存在し、円形プランが時期的に後まで残る。10 号竪穴住居は円形プランで、４分の１しか検出していないが復元径は８m を超える。壁溝が３条巡っており、建て増しされたことが窺える。須玖Ⅰ式土器が出土していることから中期前半に属するものであろう。19 号竪穴住居は１辺が 5.6m で、半分は未調査区へ伸びているので明確なことはいえないが、方形もしくは長方形のプランになるものと考えられる。この住居からは城ノ越式土器がまとまって出土している。吹上遺跡における竪穴住居の変遷の一端が明らかになった。

竪穴住居と共に掘立柱建物が２棟検出された。梁行１間、桁行１間の建物で、49 号建物が 50 号建物より若干桁行が長い。２棟ともよく類似した規格を持ち、梁行、桁行の柱間隔が長い。49 号建物の桁行は 4m を超える。柱穴の堀方は大きく、径 0.2m 程度の柱が使用されたものと考えられる。50 号建物の柱穴は 49 号建物に比べやや小さく、掘方も浅い。現状では２棟とも束柱などは確認できなかった。49 号建物の内部には長方形の６号土坑が軸を揃えて位置する。６号土坑には固結した焼土塊が詰まっており特殊な遺構と考えられる。建物に伴う可能性が高いが、今後さらに検討が必要であろう。各柱穴内からは最も新しい時期の遺物として須玖Ⅰ式に相当する甕、壺、高坏などが出土していることから中期前半代に属するものと考えられる。６号土坑との関係や柱間隔が長いという問題もあるが、袋状貯蔵穴が終焉した後に建てられていることから高床の倉庫ではなかろうか。

袋状貯蔵穴は調査区の中央部から東側に分布している。径が大きくて掘方の深い７号・35 号貯蔵穴とそれ以外の小型で浅い貯蔵穴に分けることができる。西側は分布の空白地帯になっている。貯蔵穴は使用されなくなると廃棄物処理に利用されたとみられ、特に７号貯蔵穴からはまとまって遺物が出土している。板付Ⅱ式土器の新相段階が中心で甕・壺が主体を占める。中でも第 26 図１

の大型壺形土器は注目される。口径 67.6cm、胴部最大径 77.3cm、残高 47.0cm を測り、復元器高は 80cm を超えるとみられる。口縁部内面には粘土帯を貼り付けて肥厚させ、端部に一条の沈線を施し、下端部には刻目を入れる。いわゆる北部九州の金海式甕棺に酷似する。日田市域内ではこの時期の大型壺形土器の出土は初めてであり、しかも生活遺構からの出土である。器面は強い熱を受けて溶変している部分が認められる。薄手の作りで胎土は日田産のものとは異なる。本来北部九州で甕棺用に製作されたものが日田地域に持ち込まれ、別な用途に使用されたものであろう。日田地域での甕棺葬は城ノ越式段階で小児棺が出現し、大型成人棺は汲田タイプになってからである。

また、貯蔵穴の下部には灰の層が認められるものが幾つか存在する。炭化したカシなどが含まれ堅果類が貯蔵されていたことを窺わせる。吹上遺跡ではこれまで数多くの貯蔵穴が確認されているが、推定で数百基から千基を超える貯蔵穴が営まれたと考えられる。夥しい数の貯蔵穴には米以外に多くは堅果類などが貯蔵されていたと推測される。中には大型の貯蔵穴が 10 基に 1 基程度あり、共同管理された貯蔵穴が存在したかもしれない。

土坑は調査区全体に分布しているが、主に調査区西側に集中している。６号土坑と９号土坑はいわば長方形竪穴で、他の土坑とは性格を異にするものであろう。城ノ越式段階の時期から存在し最も新しい時期の土坑は 26 号と 36 号で、須玖Ⅰ式の鋤先状口縁を有する壺形土器が出土している。生活関連の遺構群は一応中期中葉で終焉を迎え、その後中期後半代になって墓地が形成され始める。

吹上遺跡からはいわゆる大陸系磨製石器群が出土する。太型蛤刃石斧、柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、石庖丁、石剣、石戈などである。形態的には大小があり変化に富んでいる。太型蛤刃石斧は今山産が多く、それとともに在地産も使用される。石庖丁はいわゆる立岩産が主体を占める。これまでの採集資料も含めると一遺跡で出土する数としては異常に多い。肥後や直入など南や東に流通する中継地的な性格を持っていたのであろうか。ただ、在地産の石を使用して地元でも石庖丁の製作が行なわれていたことを示す資料も出土している。

次に、墓地関連遺構としては成人用甕棺墓、小児用甕棺墓、木棺墓、土壙墓、石蓋土壙墓、石棺甕棺併用墓などがある。甕棺墓は、これまで第１・２・４・６次調査で出土している。地元耕作者の談によれば他地点からも甕棺墓が出土したということであり、甕棺墓地群はさらに増加すると考えられる。大型成人用甕棺墓は台地南側に位置する第６次調査と台地西よりの第２・４次調査で発見されている。第６次調査の甕棺墓は大型の成人用８基で構成され、２号甕棺墓からは棺外副葬の中細銅戈が出土している。４号甕棺墓は口縁打ち欠きの甕棺３基を合口に組み合わせたもので、細形銅戈１、鉄剣１、ゴホウラ製貝輪 15、硬玉製勾玉１、ガラス製管玉 480 以上が検出された。5 号甕棺墓からは硬玉製勾玉１、イモガイ製貝輪 17 がそれぞれ出土している。その他、同墓地群の１号木棺墓からは細形銅剣１とそれに伴う十字形把頭飾１も出土している。これらは中期後半代に属し、特定集団の墓地と考えられている。甕棺の形状が在地的ではなく、特定集団の在り方を考える上で興味深い。２次調査の甕棺墓は、口縁部を打ち欠いた胴部に丸みを持つ壺形土器を使用したもので、在地的な甕棺墓である。大きく分けて西側のグループに属し、1 号甕棺墓からは鉄刀と砥石が、2 号甕棺墓からは硬玉製の勾玉がそれぞれ副葬品として出土している。在地的な甕棺墓からも少数ではあるが副葬品が出土することは重要である。

今回出土した甕棺墓も西側に位置するグループで、第２・４次調査に連なるグループのひとつと考えられる。北部九州地方のように密集して連続はしないが、集落西側に帯状に分布するかどう

か今後の確認が必要である。今回発見された成人用甕棺で注目される点が幾つかある。先ず、甕棺を埋置する際、黄褐色系の明るい色調の粘質土と黒色から暗茶褐色系の黒っぽい粘質土を交互に埋めていることである。そして、上甕が埋まった段階で火を焚いて何らかの祭祀行為を行なったとみられる灰層が認められる 。灰層の上にはさらに明るい土と黒っぽい土を交互に埋め戻し墓壙全体を覆っている。次に、跳ね上げ口縁を有する多条突帯の大甕を使用することである。１号甕棺墓の下甕がそれにあたり、胴部に３条の突帯を螺旋状に貼り付け、部分的には４条になっている。４号甕棺墓の上甕は跳ね上げ口縁を呈するが､中型棺である。これには胴部突帯は認められない。さらに、成人棺には口縁打ち欠きの壺形土器を使用するものが多い。この壺形土器は外傾する短めの口縁部を有し、胴部上位に最大径がある。口縁端部はやや窪み、内側を突線状につまみ出す。胎土には褐色粒子や凝灰岩風化土に含まれる軽石粒子などがみられ、在地で製作されたことが考えられる。祖型は須玖Ⅱ式系統の広口壺であろう。また、調整に関しては多くの甕棺でタタキ調整痕が粗く残っている。胴部上位から底部にかけては、幅１cm、長さ７～８cm 前後のタタキ痕がみられる。内面には丸石状の当具痕が観察される。以上のような特徴の甕棺墓は日田盆地を中心にみられ、甕棺墓文化圏の一地方色を示している。

甕棺墓の他に木棺墓と土壙墓が出土している。20 号木棺墓と 44 号木棺墓はほぼ方向を揃えて並列している。20 号木棺墓は両小口板を深く埋け込み両側板が挟むタイプである。44 号木棺墓は箱形に組み合わせるものであろう。23 号土壙墓は 20 号木棺墓の東側に隣接する。小型であり小児用であろうか。３基とも副葬遺物や伴出土器はみられず時期を決め難いが、配置や切り合い関係などから甕棺墓より古く遡る可能性がある｡中期後半代の古い段階に属するものとみておきたい。

石棺甕棺併用墓は被葬者の頭部を甕に、体部を石棺に埋置した墓葬で、これも地方色のある埋葬法とみてよかろう。甕棺は器面調整、胴部突帯の形状、底部の状況から口縁部打ち欠き甕棺の中では最も後出的である。後期前半代の古い段階のものと考えておきたい。この様な埋葬形態は甕棺墓地帯の周辺部に散発的にみられるようである。後期前半代に属する墓葬としては石蓋土壙墓が１基出土している。44 号木棺墓を切って作られ、３枚の板石を縦方向に並べる。これ以後墓地は終焉する。

Ｂ地点では、ひとつの墓地に多種類の墓葬が営まれ、甕棺墓地帯周辺部の様相が明らかになった。今後、筑後川流域、遠賀川上流域との関係も含め、墓葬の成立と展開について検討していきたい。

写真３　Ｂ地点発掘作業風景②

第１表　９次調査出土土器観察表

挿図番号	区名	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
					口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第５図　1	１号　貯蔵穴	上層	弥生	甕	(35.2)	－	－	－	ハケ	ナデ	AEFGH	良	暗褐色	茶褐色	
第５図　2	１号　貯蔵穴	上層一括	弥生	甕	(28.2)	－	－	－	ハケ	ミガキ	ABCFG	不良	暗茶褐色	暗茶褐色	沈線
第５図　3	１号　貯蔵穴	上層	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ後ナデ	ナデ	ABCFH	良	暗茶褐色	淡黄褐色	口唇部に刻み
第５図　4	１号　貯蔵穴	上層一括	弥生	甕	－	－	－	－	ナデ	ナデ	HF	良	淡褐色	灰褐色	刻みつき突帯
第５図　5	１号 １区　貯蔵穴	上層	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	ナデ	ABGHF	良	暗褐色	淡褐色	緑石片岩を含む
第５図　6	１号　貯蔵穴	上層	弥生	甕	－	－	－	－	ナデ・ハケ	－	CFGH	不良	暗茶褐色	茶褐色	沈線
第５図　7	１号 １区　貯蔵穴	上層	弥生	甕	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ABFGH	良	淡灰褐色	淡黄褐色	
第５図　8	１号　貯蔵穴	上層	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ後ミガキ	ミガキ	ABCFH	良	淡黄褐色	淡黒灰色	
第５図　9	１号　貯蔵穴	上層	弥生	甕	－	－	7.6	－	ハケ	ナデ	ABFG	良	淡褐色	淡褐色	
第５図　10	１号　貯蔵穴	上層	弥生	甕	－	－	(8.0)	－	－	－	ABFHG	良	明茶褐色	明茶褐色	
第５図　11	１号　貯蔵穴	上層	弥生	甕	－	－	8.2	－	ハケ	ミガキ	ABH	良	赤褐色	黒褐色	
第５図　12	１号　貯蔵穴	上層	弥生	甕	－	－	(8.8)	－	－	－	ABFGH	不良	鈍い茶褐色	鈍い茶褐色	
第５図　13	１号　貯蔵穴	上層	弥生	甕	－	－	10.6	－	ハケ	ナデ	ABH	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第５図　14	１号　貯蔵穴	上層	弥生	壺	－	－	(6.9)	－	ナデ	ナデ	ABFGH	良	暗茶褐色	暗茶褐色	
第５図　15	１号　貯蔵穴	上層	弥生	壺	－	(18.7)	－	－	ミガキ	ナデ	ABCEFGH	良	淡黄褐色	黄灰褐色	三角突帯
第５図　16	１号　貯蔵穴	上層	弥生	壺	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ABFGH	良	暗黄褐色	灰茶褐色	羽状文
第５図　17	１号 ２区　貯蔵穴	上層	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	ミガキ	ABCDF	良	暗茶褐色	灰褐色	
第５図　18	１号 ２区　貯蔵穴	上層	弥生	甕	－	－	－	－	－	工具ナデ	ABCDFH	良	暗淡褐色	褐色	
第５図　19	１号 ２区　貯蔵穴	上層	弥生	甕	－	－	6.6	－	ハケ後ナデ	－	ABFGH	良	淡褐色	黒褐色	
第５図　20	１号 ２区　貯蔵穴	上層	弥生	甕	－	－	15.6	－	ハケ	－	ABGHF	良	茶褐色	－	
第５図　2	１号 ２区　貯蔵穴	上層	弥生	甕	－	－	(6.5)	－	ハケ	－	ABCF	良	橙褐色	灰褐色	
第５図　22	１号 ２区　貯蔵穴	上層	弥生	壺	－	－	－	－	工具ナデまたはハケ	ミガキ	ABCF	良	淡褐色	褐色	
第５図　23	１号 ２区　貯蔵穴	上層	弥生	壺	－	－	－	－	ナデ	－	ABCFH	良	茶褐色	黒褐色	貼り付け突帯
第５図　24	１号 １区　貯蔵穴	中層	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	ナデ	ABEFH	良	茶褐色	明黄褐色	ハケ後沈線（３条）
第５図　25	１号 ２区　貯蔵穴	上層	弥生	甕	－	－	－	－	ナデ後ハケ	ナデ	ABFGH	良	橙褐色	淡黄褐色	如意形口縁
第５図　26	１号 １区　貯蔵穴	中層	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	ナデ	ADEH	良	黄白色	灰白色	ハケ後沈線
第５図　27	１号　貯蔵穴	中層	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	ナデ	ABCDF	良	赤褐色	灰褐色	
第５図　28	１号 ２区　貯蔵穴	中層	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	ナデ	AFGH	良	暗灰褐色	黒褐色	L字状口縁
第５図　29	１号 ２区　貯蔵穴	中層	弥生	甕	(25.0)	－	－	－	ハケ後ナデ	ミガキ	ABDFH	良	橙褐色	橙褐色	三角突帯
第５図　30	１号 ２区　貯蔵穴	中層	弥生	甕	－	－	－	－	ナデ後ハケ	ナデ	ABFGH	良	暗灰褐色	暗褐色	沈線
第５図　31	１号　貯蔵穴	中層	弥生	壺	－	－	－	－	ハケ・ナデ	ナデ	ABCDFG	良	淡茶褐色	淡茶褐色	
第５図　32	１号 １区　貯蔵穴	中層	弥生	甕	－	－	6.6	－	ナデ	－	ABFGH	良	赤褐色	暗褐色	
第５図　33	１号 ２区　貯蔵穴	中層	弥生	甕	－	－	(7.8)	－	ハケ	ミガキ	ABEFH	良	明赤褐色	明赤褐色	
第５図　34	１号 ２区　貯蔵	中層	弥生	甕	－	－	(8.8)	－	ハケ	－	ABCDFH	良	明橙褐色	黒褐色	
第５図　35	１号 ２区　貯蔵穴	中層	弥生	甕	－	－	(10.0)	－	ハケ	ミガキ	ADEFH	良	明褐色	暗赤褐色	丹塗り残存
第５図　36	１号 ２区　貯蔵穴	中層	弥生	壺	－	－	－	－	ナデ	ミガキ	AFGH	良	暗黄灰色	暗黄灰色	口唇部に刻目
第５図　37	１号 １区　貯蔵穴	中層	弥生	高坏	－	－	－	－	ミガキ	ナデ	ABFGH	良	褐色	灰褐色	
第５図　38	１号 １区　貯蔵穴	中層	弥生	甕蓋	－	－	－	－	ナデ	ハケ後ナデ	ABDEFH	良	黄白色	黒褐色	
第６図　1	１号 １区　貯蔵穴	下層	弥生	甕	10.8	－	－	－	ハケ	ナデ	ABFGH	良	淡灰褐色	淡灰褐色	
第６図　2	１号　貯蔵穴	落ち込み	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	－	ABCGH	良	淡褐色	茶褐色	
第６図　3	１号　貯蔵穴	Ｐ１２	弥生	甕	－	－	－	－	－	ナデ	ABFGH	良	灰褐色	暗灰色	沈線
第６図　4	１号　貯蔵穴	Ｐ１	弥生	壺	－	－	11.8	－	ハケ後ミガキ	－	ABFGH	良	黒褐色	橙褐色	
第６図　5	１号　貯蔵穴	Ｐ６	弥生	壺	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ABCDFH	不良	赤褐色	赤褐色	
第６図　6	１号　貯蔵穴	Ｐ１１	弥生	甕	－	－	8.0	－	ハケ・ナデ	ナデ	BEFG	良	褐色	淡褐色	
第６図　7	１号 １区　貯蔵穴	下層	弥生	甕	－	－	8.4	－	ヘラミガキ	－	ABFGH	良	赤褐色	淡褐色	
第６図　8	１号　貯蔵穴	落ち込み	弥生	甕	－	－	8.0	－	ハケ	ミガキ	BEFGH	良	赤褐色	黒褐色	
第６図　9	１号　貯蔵穴	Ｐ８	弥生	甕	－	－	10.8	－	ハケ	ナデ	ABCEFGH	良	茶褐色	黄褐色	
第６図　10	１号 １区　貯蔵穴	下層	弥生	甕	－	－	10.4	－	ハケ	ナデ	BCFG	良	黄褐色	黒褐色	
第６図　11	１号　貯蔵穴	最上層	弥生	甕	－	－	(8.8)	－	ナデ後ハケ	ナデ	ABCFGH	良	赤褐色	淡褐色	
第６図　12	１号　貯蔵穴	Ｐ７	弥生	甕	－	－	7.7	－	ハケ	ナデ	ABEFGH	良	赤褐色	暗褐色	
第６図　15	２号　貯蔵穴	上層一括	弥生	甕	－	－	7.4	－	ハケ後ナデ	－	ABDFG	良	暗黒褐色	茶褐色	もろい
第６図　16	２号　貯蔵穴	上層一括	弥生		－	－	(3.8)	－	－	-	ADF	良	黄灰色	黄灰色	ミニチュア
第６図　17	２号 ２区　貯蔵穴	中層	弥生	壺	－	－	－	－	－	－	ABCDFH	良	赤褐色	明黄褐色	
第６図　18	２号 ２区　貯蔵穴	中層	弥生	壺	－	－	－	－	ナデ	ナデ・工具ナデ	ABCDFH	良	明淡黄褐色	明黄褐色	沈線５条・弧文２条
第６図　19	２号　貯蔵穴	Ｐ２	弥生	蓋	(21.2)	－	－	－	ハケ	ハケ	ABCDH	良	明黄褐色	明黄褐色	
第９図　1	２号 １区　貯蔵穴	上層	弥生	甕	(22.8)	(21.0)	－	－	ハケ	－	ABCDFH	良	暗褐色	黄褐色	スス付着
第９図　2	２号 ２区　貯蔵穴	Ｐ３	弥生	甕	(24.4)	－	－	－	ハケ	ナデ	ABEFH	良	赤褐色	灰赤褐色	口唇・突帯に刻目、沈線
第９図　3	２号　貯蔵穴	Ｐ６	弥生	甕	(24.5)	(21.1)	－	－	ナデ	ナデ	ABCEFG	良	黄褐色	黄褐色	沈線
第９図　4	２号 １区　貯蔵穴	中層	弥生	甕	(20.5)	－	－	－	ナデ	ナデ	ABFH	良	暗褐色	暗褐色	
第９図　5	２号　貯蔵穴	Ｐ６	弥生	甕	(32.2)	(32.2)	－	－	ハケ後ケズリ	－	ABCDFH	良	茶褐色	明黄褐色	刻目突帯、黒斑
第９図　6	２号 ２区　貯蔵穴	中層	弥生	甕	(15.4)	(15.3)	－	－	ハケ	ナデ・工具ナデ	ABCDFH	不良	暗赤褐色	暗赤褐色	黒斑
第９図　7	２号 ２区　貯蔵穴	中層	弥生	壺	－	7.6	－	－	－	ナデ	ABH	良	赤褐色	黄褐色	
第９図　8	２号 １区　貯蔵穴	上層	弥生	甕	－	7.2	－	－	ハケ	ミガキ	ABGH	良	赤褐色	黄褐色	

挿図番号	区名	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
					口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第９図　９	２号　貯蔵穴	Ｐ６	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	ナデ	ABCFH	良	橙褐色	茶褐色	沈線
第９図　10	２号 ２区　貯蔵穴	中層	弥生	甕	－	－	-8.4	－	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	ABFH	良	黄褐色	黄褐色	
第９図　11	２号　貯蔵穴		弥生	甕	(22.6)	－	－	－	ハケ	ナデ	ABDFH	良	赤褐色	茶褐色	
第９図　12	２号 ２区　貯蔵穴	中層	弥生	甕	(21.6)	－	－	－	ハケ・ヘラ削後工具ナデ	工具ナデ	ABCDFH	良	橙褐色	暗橙褐色	口唇部に刻目、沈線２条
第９図　13	２号 ２区　貯蔵穴	上層	弥生	壺	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ABCDFH	良	淡褐色	淡褐色	張り突帯２条、羽状文、丹塗り
第９図　14	２号 ２区　貯蔵穴	中層	弥生	壺	－	－	－	－	ナデ	工具ナデ	ABCDFH	良	茶褐色	黄褐色	
第９図　15	２号 ２区　貯蔵穴	中層	弥生	壺	(14.5)	(20.0)	－	－	ハケ・ナデ	ナデ	ABEFGH	良	淡茶褐色	黄褐色	
第９図　16	２号　貯蔵穴	Ｐ３	弥生	甕	－	20.8	7.4	20.1+	ハケ・ミガキ	ナデ・ミガキ	ABCFG	良	黄褐色	灰黄色	口縁打ち欠き
第９図　17	２号　貯蔵穴		弥生	甕	－	－	(11.0)	－	ナデ後ハケ	ナデ	ABC	良	黄褐色	灰褐色	
第９図　18	２号 ２区　貯蔵穴	中層	弥生		－	－	(3.0)	－	－	－	ABH	良	赤褐色	赤褐色	ミニチュア
第13図　１	３号　貯蔵穴	一括	弥生	鉢	－	－	－	－	ハケ	－	ABFGH	良	明黄褐色	明黄褐色	
第13図　２	３号　貯蔵穴	６層	弥生	壺	－	－	－	－	ミガキ	ナデ・ミガキ	ABFGH	良	明黄褐色	明黄褐色	
第13図　３	６号　貯蔵穴	Ｐ５	弥生	甕	(24.8)	－	－	－	ナデ	ナデ	ABCFH	良	淡褐色	茶褐色	
第13図　４	６号　貯蔵穴	最上　層	弥生	甕	(46.5)	－	－	－	－	ハケ後ナデ	ABCFGH	良	赤褐色	暗褐色	
第13図　５	６号　貯蔵穴	Ｐ５	弥生	甕	(22.4)	－	－	－	ハケ	ナデ	ABCFGH	良	暗褐色	茶褐色	口唇・帯に刻目
第13図　６	６号　貯蔵穴	下層　一括	弥生	甕	(30.2)	－	－	－	ナデ	ナデ	ABDFGH	良	暗褐色	黄褐色	
第13図　７	６号　貯蔵穴	中層	弥生	壺	(27.4)	－	－	－	ナデ	ナデ	ABF	良	淡褐色	淡褐色	突帯、丹塗り
第13図　８	６号　貯蔵穴	上層	弥生	壺	－	－	－	－	ハケ	－	ABCFH	良	黒褐色	黄褐色	
第13図　９	６号　貯蔵穴	下層	弥生	壺	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ADFGH	良	茶褐色	赤褐色	突帯
第13図　10	６号　貯蔵穴	上層　一括	弥生	甕	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ABFG	良	赤褐色	赤褐色	丹塗り
第13図　１	６号　貯蔵穴	上層	弥生	壺	－	－	－	－	ナデ	－	ABCFG	良	茶褐色	暗褐色	口唇に刻目
第13図　12	６号　貯蔵穴	下層　一括	弥生	甕	－	－	6.8	－	ハケ	－	ABDFH	良	赤褐色	淡褐色	
第13図　13	６号　貯蔵穴	中層	弥生	甕	－	－	(7.4)	－	ナデ	ナデ	ABH	良	赤褐色	赤褐色	
第13図　14	６号　貯蔵穴	中層　一括	弥生	甕	－	－	5.8	－	ハケ	ナデ	A	不良	淡黄褐色	淡黄褐色	黒斑
第13図　15	６号　貯蔵穴	中層　一括	弥生	壺	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ABFH	良	暗褐色	灰褐色	
第13図　16	６号　貯蔵穴	下層　一括	弥生	壺	－	－	5.8	－	ハケ	ミガキ	ABDFH	良	橙褐色	黒褐色	
第13図　17	６号　貯蔵穴	Ｐ２	弥生	壺	－	(35.0)	－	－	ナデ	ナデ	AH	良	明茶褐色	暗黄褐色	内面に張り突帯
第13図　18	６号　貯蔵穴	中層	弥生	高坏	－	5.2	－	－	ハケ	ナデ	ABFG	良	赤褐色	橙褐色	
第13図　19	６号　貯蔵穴	中層　一括	弥生	高坏	－	－	(11.0)	－	ナデ	ナデ	AGH	不良	淡黄褐色	灰褐色	
第13図　20		表採	弥生	甕	－	－	－	－	－	ナデ	ABCDFGH	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第13図　21	Ａ－１	表土	弥生	甕	－	－	－	－	－	ナデ	ABCDH	良	淡黄褐色	淡黄褐色	丹塗り
第13図　22	Ｂ－３	表土	弥生	甕	－	－	－	－	－	－	ABDF	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第13図　23		表採	弥生	壺	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ABCDG	良	淡赤褐色	淡黄褐色	外面に文様
第19図　１	10号　竪穴住居	埋土　一括	弥生	鉢	(16.0)	－	－	－	－	ナデ	BCD	良	赤褐色	赤褐色	両面丹塗り
第19図　２	10号　竪穴住居	埋土　一括	弥生	甕	－	－	－	－	－	－	ABCDF	良	暗褐色	黄褐色	
第19図　３	10号　竪穴住居	埋土　一括	弥生	壺	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ABCDH	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第19図　４	10号　竪穴住居	埋土　一括	弥生	高坏	－	－	－	－	ハケ後ミガキ	ハケ後ナデ	ABFGH	不良	淡褐色	淡褐色	両面丹塗り丁寧なつくり
第19図　５	10号　竪穴住居	壁溝Ｃ SP24・77内	弥生	甕	－	－	(7.6)	－	－	ナデ	ABCDFG	良	赤褐色	暗褐色	内面にスス
第19図　６	10号　竪穴住居	埋土一括	弥生	甕	－	－	(8.6)	－	ナデ	ナデ	ABCDFG	良	赤褐色	赤褐色	外面に接合痕
第19図　７	10号　竪穴住居	埋土一括	弥生	高坏	－	－	－	－	－	ナデ	ABCDFH	良	赤褐色	赤褐色	器台の可能性あり、
第21図　１	16号 １区　竪穴住居	上層	弥生	甕	－	－	－	－	－	－	ABCDFH	良	暗褐色	赤褐色	
第21図　２	16号 １区　竪穴住居	上層	弥生	壺	－	－	(7.4)	－	ナデ	ナデ	ABCDFG	良	黒色	赤褐色	外面に黒斑
第23図　１	19号 Ａ区　竪穴住居	Ｐ５	弥生	甕	(25.6)	－	(8.2)	(28.0)	ハケ後ミガキ	ハケ	ABEFGH	良	黄褐色	暗黄褐色	黒斑
第23図　２	19号 Ａ区　竪穴住居	Ｐ２	弥生	甕	(23.6)	－	－	－	ハケ・ナデ	－	ABEFGH	良	暗茶褐色	黄褐色	沈線
第23図　３	19号　竪穴住居	土器　集中部Ａ	弥生	甕	(20.8)	－	－	－	ナデ	－	ABFH	良	暗褐色	灰褐色	沈線が存在するが摩滅により浅い
第23図　４	19号 Ａ区　竪穴住居	Ｐ２	弥生	甕	23.6	－	－	－	ハケ	－	ABFGH	良	暗黄褐色	黄褐色	
第23図　５	19号　竪穴住居	土器　集中部Ａ	弥生	甕	(21.2)	－	－	－	ハケ	－	ABDFH	良	赤褐色	黒褐色	
第23図　６	19号 Ａ区　竪穴住居	Ｐ５	弥生	甕	－	(27.5)	－	－	ハケ	－	ABEFGH	良	黒褐色	黒褐色	
第23図　７	19号　竪穴住居	土器　集中部Ｃ	弥生	甕	(31.0)	－	－	－	ハケ・ナデ	ハケ	ABDFG	良	茶褐色	茶褐色	黒斑
第23図　８	19号　竪穴住居	土器　集中部Ｃ	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	ナデ	ABDF	良	淡褐色	淡褐色	
第23図　９	19号　竪穴住居	土器　集中部Ｂ	弥生	高坏	－	－	－	－	－	ナデ	ABFG	良	赤褐色	黒褐色	口縁部上面ナデ
第23図　10	19号　竪穴住居	土器　集中部Ｄ	弥生	高坏	－	5.0	－	－	－	ナデ（脚内面）	AB	良	淡褐色	淡褐色	
第23図　11	19号　竪穴住居	土器　集中部Ｄ	弥生	甕	－	－	(11.4)	－	ミガキ	ヘラミガキ	AFG	良	赤茶褐色	赤茶褐色	黒斑
第23図　12	19号　竪穴住居	土器　集中部Ａ	弥生	甕	－	－	(7.4)	－	ハケ	ハケ	ABDFH	良	赤褐色	赤褐色	
第23図　13	19号 Ａ区　竪穴住居		弥生	甕	－	－	(11.0)	－	ハケ	－	ABEFH	不良	茶褐色	灰褐色	
第23図　14	19号　竪穴住居	土器　集中部Ｃ	弥生	甕	－	－	(7.0	－	ハケ・ナデ	ナデ	ABF	良	赤褐色	灰褐色	
第23図　15	19号　竪穴住居	土器　集中部Ｄ	弥生	甕	－	－	7.8	－	ハケ	－	ABFH	良	赤褐色	暗褐色	
第23図　16	19号 Ａ区　竪穴住居	Ｐ４	弥生	壺	－	－	7.95	－	ハケ・ハケ後ナデ	ミガキ	ABEFGH	良	暗黄褐色	黄褐色	黒斑
第25図　１	７号　貯蔵穴	埋土一括	弥生	甕	30.6	－	－	－	ハケ	ナデ	ADEFG	良	淡暗黄褐色	淡暗黄褐色	沈線
第25図　２	７号　貯蔵穴	下層	弥生	甕	25.6	－	－	－	ハケ・ナデ	－	ABDEG	良	明黄褐色	暗黄褐色	中層と接合、沈線刻目口縁、
第25図　３	７号　貯蔵穴	中層	弥生	甕	(28.0)	－	－	－	ハケ	－	ABDEFG	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第25図　４	７号　貯蔵穴	中層	弥生	甕	(31.8)	－	－	－	ハケ後ミガキ	ハケ	ABDEG	良	明黄茶褐色	明黄茶褐色	
第25図　５	７号　貯蔵穴	下層　(11層)	弥生	甕	28.4	－	－	－	ハケ	－	AEFG	良	黄茶褐色	淡黄褐色	スス
第25図　６	７号　貯蔵穴	14層	弥生	甕	24.2	－	－	－	ハケ	－	ABDEFG	良	暗茶褐色	明黄褐色	13層と接合、刺突目にハケ目
第25図　７	７号　貯蔵穴	13層	弥生	甕	(26.5)	－	－	－	ハケ後ミガキ	ミガキ	ABEFG	良	暗茶褐色	暗黄褐色	ミガキ幅が広くケズリに近い

挿図番号	区名	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
					口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第25図　8	7号　貯蔵穴	上層	弥生	甕	20.8	－	－	－	ハケ	－	ABDEFG	良	茶褐色	茶褐色	刻目口縁、沈線
第25図　9	7号　貯蔵穴	上層	弥生	甕	13.7	－	－	－	ハケ	ミガキ	ABEFG	良	暗茶褐色	黄茶褐色	スス、刻目口縁、沈線
第25図　10	7号　貯蔵穴	P 11層	弥生	壺	18.9	－	－	－	ハケ後ミガキ	ミガキ	ABCDEG	良	明黄茶褐色	茶褐色	刻目口縁、内面に沈線
第25図　11	7号　貯蔵穴	中層	弥生	壺	23.2	－	－	－	ハケ後ミガキ	ミガキ	ABDEFG	良	黄褐色	黄褐色	刻目口縁、沈線
第25図　12	7号　貯蔵穴	11層P－5	弥生	壺	－	4.9	－	－	ミガキ	ナデ	ABEFG	良	茶褐色	黄褐色	底面不定ミガキ
第25図　13	7号　貯蔵穴	11層	弥生	甕	－	8	－	－	ハケ後ミガキ・ナデ	－	ADEFG	良	明黄茶褐色	淡黒褐色	
第25図　14	7号　貯蔵穴	11層P－5	弥生	甕	－	7.7	－	－	ハケ	ナデ	AEFG	良	淡褐色	淡暗褐色	
第25図　15	7号　貯蔵穴	14層	弥生	甕	－	7.6	－	－	ハケ	ミガキ	ABDEFG	良	明黄茶褐色	暗茶褐色	黒斑
第25図　16	7号　貯蔵穴	14層	弥生	甕	－	-7.6	－	－	ハケ後ミガキ・ナデ	ミガキ	ADEFG	良	淡黄褐色	淡暗黄褐色	
第25図　17	7号　貯蔵穴	11層P	縄文	浅鉢	－	－	－	－	ミガキ	ミガキ	ABDEG	良	暗茶褐色	淡茶褐色	沈線（内外一条づつ）
第25図　18	7号　貯蔵穴	下層一括	縄文	鉢	－	－	－	－	－	ミガキ	ADEF	良	暗黄褐色	暗黄褐色	沈線（外面口縁下１条）
第25図　19	7号　貯蔵穴	下層一括	縄文	浅鉢	－	－	－	－	ミガキ	ミガキ	AEG	良	暗茶褐色	暗茶褐色	
第26図　1	7号　貯蔵穴	下層	弥生	甕	67.6	－	－	－	ヘラミガキ	ミガキ	ABEFG	良	明橙褐色	暗茶褐色	沈線（２条）、刻目口縁
第26図　2	7号　貯蔵穴		弥生	壺	－	46.6	－	－	ヘラミガキ	ヘラミガキ	AEF	良	明黄茶褐色	明黄褐色	スス付着
第30図　1	8号　貯蔵穴１区	上中層	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ・ナデ	－	ABH	良	淡褐色	黄褐色	沈線
第30図　2	8号　貯蔵穴２区	下層	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ後ナデ	ナデ	ABFG	良	黄褐色	黄褐色	突帯
第30図　3	8号　貯蔵穴２区	下層	弥生	器台	－	(8.2)	－	－	ヘラ削	ナデ	BCDH	良	明橙褐色	淡灰黄色	10ｃｍ程度、搬入品か
第30図　4	8号　貯蔵穴	下層	弥生	甕	－	－	－	－	ナデ後ハケ	ナデ	ABF	良	暗褐色	淡褐色	
第32図　1	25号　貯蔵穴	№２	弥生	甕	(35.6)	－	－	－	ハケ後ナデ	工具ナデ	ABCDFH	良	茶褐色	赤褐色	突帯、丁寧なつくり
第32図　2	25号　貯蔵穴	上層一括	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	ハケ後ミガキ	ABFGH	良	赤褐色	淡赤褐色	沈線
第32図　3	25号　貯蔵穴	上層一括	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ後ナデ	工具ナデ後ミガキ	ABFGH	良	黒褐色	暗茶褐色	沈線（２条）、企画性ある調整
第32図　4	25号　貯蔵穴	下層一括	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ・ナデ	ナデ	ABFGH	良	茶褐色	黄褐色	突帯
第32図　5	25号　貯蔵穴	上層一括	弥生	壺	－	－	－	－	ナデ	ミガキ	ABFGH	良	暗茶褐色	暗茶褐色	甕の可能性あり
第32図　6	25号　貯蔵穴	下層一括	弥生	甕	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ABFG	良	黒褐色	黄褐色	刻目口縁、刻目にハケあり
第32図　7	25号　貯蔵穴	下層一括	弥生	甕	－	－	(6.5)	－	－	－	ABDFGH	不良	赤褐色	淡褐色	外面にハケの陵あり
第32図　8	25号　貯蔵穴	上層一括	弥生	甕	－	－	5.6	－	ヘラ削	ヘラ削・ナデ	ABCDFGH	不良	赤褐色	茶褐色	
第32図　9	25号　貯蔵穴	上層一括	弥生	甕	－	－	(10.8)	－	ハケ後工具ナデ	ナデ	ABCDFH	良	暗茶褐色	淡褐色	壺の可能性あり
第35図　1	27号　貯蔵穴	確認面より-70ｃｍ一括	弥生	甕	(30.6)	(27.5)	－	－	ナデ後ハケ	ハケ	ABCEFH	良	暗茶褐色	淡赤褐色	１２号甕棺と接合、１ミリ程度の均一なハケ　原体２種類
第37図　1	35号　貯蔵穴	下層	弥生	甕	(30.4)	－	－	－	ハケ後ミガキ	ミガキ	AEFG	良	暗茶褐色	茶褐色	中層下一括と接合、突帯
第37図　2	35号　貯蔵穴	中層一括	弥生	甕	(28.5)	－	－	－	ハケ	ナデ	ABDEG	良	暗茶褐色	明黄茶褐色	鉢の可能性あり
第37図　3	35号　貯蔵穴	下層	弥生	甕	(21.8)	－	－	－	ハケ	ミガキ	ABEFG	良	暗黄褐色	淡黄茶褐色	中層下一括と接合、スス
第37図　4	35号　貯蔵穴	下層	弥生	甕	23.3	－	－	－	ハケ	ナデ	ABDEFG	良	黄褐色	黄褐色	中層下一括と接合
第37図　5	35号　貯蔵穴	最上層	弥生	甕	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ABDEG	良	茶褐色	暗黄褐色	スス付着
第37図　6	35号　貯蔵穴	中層上	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	ナデ	AEFG	良	淡茶褐色	淡黄褐色	沈線、スス付着
第37図　7	35号　貯蔵穴	下層	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ・ナデ	ナデ	ABEFGH	良	明橙褐色	明黄褐色	沈線２条
第37図　8	35号　貯蔵穴		弥生	甕	－	－	－	－	ハケ後ミガキ	ミガキ	AEFG	良	濃茶褐色	暗黄褐色	黒斑、突帯
第37図　9	35号　貯蔵穴	中層下一括	弥生	甕	－	－	－	－	－	ミガキ	ABEFH	良	淡暗黄褐色	明黄褐色	突帯
第37図　10	35号　貯蔵穴	中層下	弥生	甕	－	－	－	－	－	－	ABDEFG	良	淡茶褐色	淡黄褐色	
第37図　11	35号　貯蔵穴	中層下一括	弥生	甕	－	－	－	－	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	AEFG	良	明黄茶褐色	明黄茶褐色	刻口縁、沈線
第37図　12	35号　貯蔵穴	中層下	弥生	壺	20.0	－	－	－	ミガキ	ミガキ	BEFG	良	黄褐色	黒褐色	中層一括と接合、刻口縁、黒斑
第37図　13	35号　貯蔵穴	中層一括	弥生	壺	－	－	－	－	ナデ・ミガキ	ナデ	ABDEFH	良	淡茶褐色	淡黄褐色	突帯２条、二次被熱か
第37図　14	35号　貯蔵穴	中層一括	弥生	壺	－	－	－	－	ミガキ	－	BEG	良	明黄茶褐色	灰黄褐色	外面に赤彩
第37図　15	35号　貯蔵穴	中層下一括	弥生	壺	－	－	－	－	ハケ後ミガキ	ミガキ	ABCEH	良	黄褐色	濃茶褐色	内面突帯、黒斑
第37図　16	35号　貯蔵穴	中層一括	弥生	壺	－	－	－	－	ミガキ後施文	－	BDEFG	良	淡茶褐色	暗黄褐色	羽状文
第37図　17	35号　貯蔵穴	最上層一括	弥生	壺	－	－	－	－	－	－	ABEFG	良	褐色	明黄褐色	綾杉文、高欄式の壺、沈線
第37図　18	35号　貯蔵穴	最上層	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ・ナデ	ナデ	ABDEG	良	濃茶褐色	淡橙色	
第37図　19	35号　貯蔵穴	中層下	弥生	鉢？	－	－	－	－	ハケ	ナデ	ABEG	良	暗茶褐色	茶褐色	外面にスス
第37図　20	35号　貯蔵穴	下層	弥生	甕	(12.8)	－	－	－	ハケ	ナデ	ABDEFG	良	茶褐色	淡茶褐色	沈線、外面にスス
第37図　21	35号　貯蔵穴	中層下	弥生	甕	－	－	(9.2)	－	ハケ	ナデ後ミガキ	ADEG	良	黄茶褐色	淡茶褐色	甕の可能性あり
第37図　22	35号　貯蔵穴	中層一括	弥生	甕	－	－	(7.1)	－	ハケ後ミガキ	－	ABDEFG	良	暗茶褐色	暗黄褐色	底部にケズリ調整、黒斑
第37図　23	35号　貯蔵穴	下層	弥生	甕	－	－	(6.2)	－	ミガキ	ミガキ	BEFG	良	淡黄褐色	淡黄褐色	黒斑
第37図　24	35号　貯蔵穴	下層	弥生	甕	－	－	7.7	－	－	ナデ	ABCEFG	良	明黄褐色	暗灰黄褐色	
第37図　25	35号　貯蔵穴	中層下	弥生	甕	－	－	(7.9)	－	ハケ後ナデ	－	ABEFG	良	明黄褐色	暗茶褐色	
第37図　26	35号　貯蔵穴	下層	弥生	甕	－	－	-7.9	－	ハケ後ミガキ	ミガキ	AEFGH	良	淡茶褐色	淡黄褐色	
第37図　27	35号　貯蔵穴	中層下一括	弥生	甕	－	－	8.9	－	ヘラミガキ	ナデ	ABDFGH	良	暗茶褐色	淡茶褐色	黒斑
第37図　28	35号　貯蔵穴	中層一括	弥生	器台	－	－	-9.3	－	－	－	ABG	良	明黄褐色	明橙褐色	
第37図　29	35号　貯蔵穴	中層一括	弥生	高坏	－	－	－	－	－	－	ABEFG	良	黄茶褐色	黄茶褐色	中層下と接合、スス
第37図　30	35号　貯蔵穴	中層一括	弥生	高坏	－	－	－	－	ハケ	ケズリ後ナデ	ABDEFGH	良	明黄茶褐色	暗茶褐色	焼成後穿孔（１つ）
第37図　31	35号　貯蔵穴		弥生	ミニ	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ABEFG	良	暗茶褐色	暗茶褐色	
第38図　1	35号　貯蔵穴	上層	弥生	甕	－	－	(10.6)	(27.3)	ハケ	ナデ	ABEFG	良	黄褐色	明黄褐色	黒斑あり，外面一部炎黄褐色暗茶褐色
第40図　1	37号　貯蔵穴２区	1層	弥生	甕	(29、9)	－	－	(9,9)	ハケ	ハケ	ABEFGH	良	暗茶褐色	黄褐色	黒斑（内・外）二次焼成
第40図　2	37号　貯蔵穴	12層	弥生	甕	(27.0)	－	－	(7,0)	ハケ	ナデ（一部）	ABFGH	良	淡褐色	淡褐色	沈線
第40図　3	37号　貯蔵穴	上層	弥生	甕	(28.0)	－	－	(6,80)	ハケ	ハケ、ミガキ（一部）	ABEFGH	良	暗茶褐色	黄褐色	二区上層と十二層で同一個体、
第40図　4	37号　貯蔵穴２区	中層	弥生	壺	－	－	－	(2,75)	暗文	ハケ	AEG	良	赤褐色	赤褐色	両面丹塗り、外面に縦の暗文（濃褐色）
第40図　5	37号　貯蔵穴１区		弥生	壺	－	－	－	(4,4)	－	－	ABFGH	良	明黄褐色	淡黄褐色	内面に突帯、瀬戸内系か

挿図番号	区名	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
					口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第 40 図　6	37 号　貯蔵穴	P-7	弥生	甕	－	－	6.8	(5.8)	－	－	ABFGH	良	黄茶褐色	暗茶褐色	
第 40 図　7	37 号　貯蔵穴	12 層	弥生	甕	－	－	7.8	(5.75)	ハケ（一部）ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	ABEFG	良	白褐色	灰黄色	内面に工具痕（ハケメ）
第 40 図　8	37 号 1 区　貯蔵穴	下層	弥生	甕	－	－	10.2	-8	ハケ	ミガキ	ABFGH	良	黄褐色	暗黄褐色	
第 40 図　9	37 号 1 区　貯蔵穴	上層一括	弥生	甕	－	－	11.25	(8.2)	ハケ	－	ABCGH	良	明茶褐色	灰黄色	
第 40 図　10	37 号 2 区　貯蔵穴	上層	弥生	高坏	－	－	－	(4.20)	ハケ・ナデ	ハケ	ABFGH	良	明褐色	明褐色	ハケまたはナデ
第 40 図　11	37 号　貯蔵穴	一括	弥生	高坏	－	－	－	(5.0)	－	－	ABGH	良	淡黄褐色	淡黄褐色	外面に一部朱、胎土の混入物は全て極端に少ない
第 40 図　12	37 号　貯蔵穴	一括	弥生	ミニ	－	－	1.9	－	ナデ	－	BFG	良	橙褐色	橙褐色	指押さえによる整形
第 43 図　1	38 号　貯蔵穴	P-1	弥生	甕	34.1	－	－	－	ハケ	ナデ	ABDEFG	良	明黄褐色	黄褐色	沈線・刻目口縁・黒斑
第 43 図　2	38 号　貯蔵穴	上層一括	弥生	甕	(22.2)	－	7.3	(26.6)	ハケ	工具ナデか	ABDFG	良	黒茶褐色	暗黄褐色	遺構検出面一括と接合沈線、刻目口縁
第 43 図　3	38 号　貯蔵穴	上層一括	弥生	甕	(23.6)	－	－	－	ハケ	ナデ	ABDEFG	良	明茶褐色	明茶褐色	沈線、刻目口縁
第 43 図　4	38 号　貯蔵穴	上層一括	弥生	甕	(23.6)	－	－	－	ハケ	ナデ	ABCDEFG	良	暗褐色	茶褐色	沈線、刻目口縁
第 43 図　5	38 号　貯蔵穴	中層一括	弥生	甕	(15.0)	－	－	－	ハケ	ナデ	ABEFG	良	淡茶褐色	淡茶褐色	刻目口縁　沈線３条、後条間に連点
第 43 図　6	38 号　貯蔵穴	中層一括	弥生	甕	(19.1)		－	－	ナデ	工具ナデ	ADEFG	良	濃茶褐色	茶褐色	刻目口縁、スス
第 43 図　7	38 号　貯蔵穴	中層一括	弥生	甕	21.5	－	－	－	ハケ	ナデ	ABEFG	良	黒茶褐色	茶褐色	
第 43 図　8	38 号　貯蔵穴	中層一括	弥生	甕	(19.8)	－	－	－	ハケ	ミガキ	ABEFG	良	淡黒茶褐色	明黄褐色	口縁上面にミガキ
第 43 図　9	38 号　貯蔵穴	下層一括	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	ハケ・ミガキ（一部）	ABEFG	良	黒茶褐色	茶褐色	
第 43 図　10	38 号　貯蔵穴	中層一括	弥生	甕	－		－	－	ハケ後ナデ	ナデ	ABEFG	良	淡暗茶褐色	淡暗茶褐色	特異な文様、刻目突帯
第 43 図　11	38 号　貯蔵穴	中層一括	弥生	壺	20.6		－	－	ミガキ	－	ABFG	良	淡黄褐色	淡黄褐色	刻目口縁、沈線
第 43 図　12	38 号　貯蔵穴	下層一括	弥生	壺	(20.8)	－	－	－	縦ミガキ後横ミガキハケ	ミガキ	ABFG	良	淡黄褐色	茶褐色	刻目口縁、二次被熱
第 43 図　13	38 号　貯蔵穴	遺構検出面一括	弥生	壺	－	－	－		－	工具ナデケズリ	ABDEFG	良	淡橙色	淡黄褐色	突帯、格子文、羽状文、連弧文
第 43 図　14	38 号　貯蔵穴	中層一括	弥生	壺	－	33.4+	－	－	－	ミガキ	ABEFG	良	明黄褐色	淡黄褐色	文様
第 43 図　15	38 号　貯蔵穴	下層一括	弥生	壺	－	－		－	ナデ	－	ABEFG	良	淡暗黄褐色	淡暗黄褐色	刻目口縁、沈線
第 43 図　16	38 号　貯蔵穴	中層一括	弥生	壺	－	－	－	－	ハケ後ナデヘラミガキ	工具ナデケズリ・ナデ	ABEFG	良	暗黄茶褐色	暗黄茶褐色	沈線
第 44 図　1	38 号　貯蔵穴	中層一括	弥生	壺	－	－	－	－	ハケ	ナデ	ABEFG	良	暗黄茶褐色	灰黄褐色	綾杉文
第 44 図　2	38 号　貯蔵穴	下層一括	弥生	壺	－	－	－	－	ナデ後ヘラミガキ	ナデ	AEFGH	良	明茶褐色	淡黄褐色	沈線２条、綾杉文
第 44 図　3	38 号　貯蔵穴	下層一括	弥生	壺	－	－	－	－	ミガキ	ナデ	AEFG	良	淡茶褐色	淡黄褐色	沈線１条、綾杉文
第 44 図　4	38 号　貯蔵穴	下層一括	弥生	壺	－	－	－	－	－	ミガキ	ABDEFG	良	淡黄褐色	淡黄褐色	突帯、綾杉文、同図５と同一個体の可能性
第 44 図　5	38 号　貯蔵穴	下層一括	弥生	壺	－	－	－	－	－	ミガキ	ABDEG	良	淡黄褐色	淡黄褐色	突帯、綾杉文、同図４と同一個体の可能性
第 44 図　6	38 号　貯蔵穴	中層一括	弥生	甕	－	－	7.6	－	－	ナデ	ABEFGH	良	明黄茶褐色	淡黄褐色	
第 44 図　7	38 号　貯蔵穴	中層一括	弥生	甕	－	－	6.8	－	ハケ	ミガキ	ABCDEG	良	褐色	黒茶褐色	つぼの可能性
第 44 図　8	38 号　貯蔵穴	中層一括	弥生	甕	－	－	6.3	－	ハケ	ミガキ・ナデ	ABDEFG	良	明黄橙茶褐色	淡黒茶褐色	黒斑
第 44 図　9	38 号　貯蔵穴	中層一括	弥生	甕	－	－	8.2	－	ナデ（一部）	－	ABEFG	良	明橙褐色	淡暗黄褐色	つぼの可能性あり
第 44 図　10	38 号　貯蔵穴	中層一括	弥生	甕	－	－	(7.7)	－	ハケ	ミガキ	AEFG	良	明茶褐色	淡暗茶褐色	
第 44 図　11	38 号　貯蔵穴	中層一括	弥生	甕	－	－	(7.8)	－	ハケ	ナデ	ABCDEG	良	暗褐色	淡暗橙褐色	
第 44 図　12	38 号　貯蔵穴	中層一括	弥生	甕	－	－	7.4	－	ハケ後ナデ	ハケ，ミガキ・ナデ	ABEFG	良	黄褐色	淡黄褐色	
第 44 図　13	38 号　貯蔵穴	中層一括	弥生	壺	－	－	(9.8)	－	ハケ後ミガキ	ミガキ	ABDEG	良	暗黄褐色	茶褐色	黒斑
第 44 図　14	38 号　貯蔵穴	中層一括	弥生	甕	－	－	5.7	－	ハケ	ミガキ	ABCEG	良	褐色	濃茶褐色	
第 44 図　15	38 号　貯蔵穴	中層一括	弥生	器台	－	(8.6)	－	－	－	－	AEFG	良	淡黄褐色	明黄茶褐色	
第 44 図　16	38 号　貯蔵穴	上層一括	縄文	浅鉢	－	－	－	－	ミガキ（一部）・ナデ	ナデ	ABEG	良	淡黄褐色	淡暗黄褐色	
第 44 図　17	38 号　貯蔵穴	中層一括	縄文	浅鉢	－	－	－	－	ナデ、ミガキ	ケズリ・ミガキ	ABCEG	良	黒褐色	黒褐色	
第 44 図　18	38 号　貯蔵穴	下層一括	縄文	浅鉢	－	－	－	－	ミガキ・ナデ	－	ABEG	良	淡黄褐色	黄褐色	
第 46 図　1	42 号　貯蔵穴	下層一括	弥生	壺	－	－	(10.4)	－	ナデ（強）	ナデ	ABCFGH	良	黄茶褐色	黄茶褐色	
第 46 図　2	42 号　貯蔵穴	下層一括	弥生	甕	－	－	(8.4)	－	ハケ	－	ABFGH	良	淡暗褐色	淡白褐色	規格性のある調整
第 46 図　3	42 号　貯蔵穴	下層一括	弥生	壺	－	－	－	－	－	ミガキ	ABFGH	不良	黄褐色	淡赤褐色	沈線、丹塗り、羽状文
第 46 図　4	42 号　貯蔵穴	下層一括	弥生	壺	－	－	－	－	－	－	ABFH	良	橙褐色	橙褐色	羽状文
第 48 図　1	6 号　土坑	最上層一括	弥生	甕	－	－	10.6	－	ハケ	工具ナデ	ABEFG	良	暗茶褐色	黄褐色	黒斑
第 48 図　2	6 号　土坑	2 区埋土一括	弥生	甕	－	－	－	－	－	－	ABF	良	茶褐色	茶褐色	
第 48 図　3	6 号　土坑	4 区一括	弥生	甕	－	－	－	－	－	－	ABFH	良	淡灰褐色	淡灰褐色	沈線
第 48 図　4	6 号　土坑	2 区埋土一括	弥生	甕	－	－	－	－	－	－	BH	良	淡茶褐色	淡茶褐色	
第 48 図　5	6 号　土坑	1 区上層	弥生	甕	－	－	(3.6)	－	ハケ後ミガキ	ハケ（一部）・ナデ	ABCFG	良	黒色	淡茶褐色	砂粒がすくない
第 48 図　6	6 号　土坑	1 区上層一括	弥生	壺	(14.0)	－	－	－	－	－	ABDF	良	白茶色	白茶色	
第 48 図　7	6 号　土坑	6 区一括	弥生	甕	－	－	－	－	－	－	H	良	淡橙色	灰白色	
第 48 図　8	6 号　土坑	2 区埋土一括	弥生	器台	－	－	－	－	ナデ	ナデ	AFH	良	黄茶褐色	黄茶褐色	
第 50 図　1	9 号　土坑	上層埋土一括	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	－	ABCDFH	不良	黒褐色	明褐色	
第 50 図　2	9 号　土坑	上層埋土一括	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ		ABCDEFH	良	淡褐色	淡暗褐色	沈線
第 50 図　3	9 号　土坑	上層埋土一括	弥生	甕	－	－	7.9	－	ハケ	ハケ後ミガキ	ABCDFH	良	黒褐色	淡赤褐色	
第 50 図　4	9 号　土坑	上層埋土一括	縄文	浅鉢	－	－	－	－	ミガキ	ハケ後ミガキ	BCH	不良	茶褐色	茶褐色	つくりは丁寧
第 53 図　1	18 号　土坑	一括	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	ナデ	ABCDFGH	良	暗黄褐色	暗黄褐色	
第 53 図　2	18 号　土坑	一括	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ・ナデ	ナデ	ABCDFG	良	暗黒褐色	明黒褐色	口縁上面にハケ
第 53 図　3	18 号　土坑	一括	弥生	甕	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ABCDFH	良	淡赤褐色	赤褐色	突帯
第 53 図　4	26 号　土坑	№1	弥生	壺	(29.9)	－	－	－	ナデ	－	ABEFH	不良	淡黄褐色	淡茶褐色	ミガキ様光沢（単位不明）丁寧なつくり、外面塗布（非丹塗）
第 53 図　5	26 号　土坑	一括	弥生	壺	－	－	－	－	－	ナデ（一部）	ABCDEFGH	不良	淡赤褐色	淡茶褐色	
第 53 図　6	26 号　土坑	一括	弥生	壺	－	－	－	－	ナデ後一部ミガキ	工具ナデ	ABFGH	不良	淡暗褐色	淡褐色	
第 53 図　7	26 号　土坑	一括	縄文	深鉢	－	－	－	－	ナデ	工具ナデ	ABFGH	良	赤褐色	赤褐色	細くやや丸みのある原体による沈線（4 条）
第 53 図　8	26 号　土坑	一括	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ後ナデ	ナデ	ABDFGH	良	淡橙褐色	暗赤褐色	丁寧なつくり、突帯

挿図番号	区名	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
					口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第 53 図　9	26 号　土坑	一括	弥生	壺	－	－	－	－	ミガキ	ヘラ・指ナデ後指ナデ	ACEFH	不良	橙褐色	灰褐色	突帯
第 53 図　10	28 号　土坑	一括	弥生	甕	(23.6)	－	－	－	ハケ	ミガキ	ABCDF	良	黄褐色	黄褐色	
第 53 図　11	28 号　土坑	P 3	弥生	甕	(23.4)	－	－	－	ハケ	－	ABCDFGH	良	赤褐色	暗褐色	黒斑、沈線
第 53 図　12	28 号　土坑 1 区	一括	弥生	甕	(22.8)	(21.1)	9.6	(23.1+)	ハケ	ナデ	BEFH	良	橙褐色	茶褐色	刻目口縁、沈線（2 条）
第 53 図　13	28 号　土坑		弥生	甕	(33.4)	－	－	－	ハケ	－	ABH	良	淡茶褐色	淡茶褐色	黒斑
第 53 図　14	28 号　土坑 1 区	一括	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ・ナデ	ミガキ	ABFGH	良	暗茶褐色	明茶褐色	沈線
第 53 図　15	28 号　土坑		弥生	甕	－	－	－	－	ハケ・ナデ	－	ABFGH	良	淡褐色	淡暗褐色	沈線
第 53 図　16	28 号　土坑 1 区	一括	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	ナデ	ABEFGH	良	淡褐色	淡褐色	口縁上面ハケ後ナデ
第 53 図　17	28 号　土坑 1 区	一括	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ・工具ナデ	ナデ	ABDFGH	良	淡赤褐色	淡赤褐色	甕の可能性あり、突帯下部に工具エグリ
第 53 図　18	28 号　土坑	一括	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	ナデ	ABCDFGH	良	明赤褐色	暗黄褐色	
第 53 図　19	28 号　土坑	P 4	弥生	甕	－	－	8.5	－	ハケ	ナデ	ABCDFGH	良	赤褐色	暗黄褐色	
第 53 図　20	28 号　土坑	一括	弥生	甕	－	－	12.3	－	ハケ	－	ABDFH	良	赤褐色	暗黄褐色	
第 53 図　21	28 号　土坑	一括	弥生	甕	－	－	(9.2)	－	－	－	ABCDFGH	良	赤褐色	赤褐色	底部にナデ（一部ミガキ）を
第 53 図　22	28 号　土坑 1 区	上層	弥生	甕	－	－	8.1	－	ハケ・ヘラケズリ	－	ABFGH	不良	明赤褐色	黒褐色	火山砕析物を含む
第 53 図　23	28 号　土坑	一括	弥生	甕	－	－	6.9	－	ハケ	ナデ	ABCDFGH	良	茶褐色	暗褐色	
第 53 図　24	28 号　土坑	一括	弥生	壺	－	－	(6.6)	－	－	－	ABCDFG	良	赤褐色	淡赤褐色	
第 53 図　25	28 号　土坑 1 区	一括	弥生	甕蓋	－	－	(11.0)	－	ハケ・工具ナデ	－	ABFGH	良	明淡黄褐色	明淡黄褐色	丁寧なつくり、丹がわずかに残存
第 53 図　27	28 号　土坑 29 号　土坑		弥生	甕	－	－	7.2	－	ハケ	－	ABCDFGH	良	明赤褐色	暗褐色	
第 53 図　28	30 号　土坑 2 区	一括	弥生	高坏	－	－	－	－	－	－	ABCGH	良	明茶褐色	明茶褐色	
第 54 図　1	31 号　土坑		弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	－	ABEGH	良	暗黄褐色	暗黄褐色	
第 54 図　2	31 号　土坑	一括	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	ハケ後ナデ	ABEF	良	暗黄褐色	明黄褐色	
第 54 図　3	31 号　土坑	一括	弥生	甕	－	－	－	－	－	－	AH	良	暗黄褐色	茶褐色	
第 54 図　4	31 号　土坑	一括	弥生	甕	15.2	－	－	－	ハケ	ハケ後ナデ	ABH	良	黒褐色	黒褐色	
第 54 図　5	31 号　土坑	一括	弥生	甕	－	－	(6.4)	－	ハケ後ナデ	ナデ	ABEFG	良	淡茶褐色	黒褐色	
第 54 図　6	31 号　土坑		弥生	壺	－	(31.6+)	－	－	－	－	ABEFGH	良	明茶褐色	白黄色	沈線
第 54 図　7	31 号　土坑	上層一括	弥生	壺	－	－	(7.9)	－	ナデ	－	ABCFH	良	暗灰褐色	淡黄褐色	底部に粘土を追加して貼り付ける
第 54 図　8	32 号　土坑		弥生	甕	(22.8)	－	－	－	ハケ、ナデ	ナデ	ABCEFGH	良	黄褐色	黄褐色	二次焼成、沈線、刻目口縁、スス
第 54 図　9	32 号　土坑		弥生	甕蓋	(22.6)	－	(5.9)	9.4	タテハケ後ヨコハケ一部ミガキ	ナデ　ナデ後ミガキ（一部）	AEFGH	良	茶褐色	茶褐色	黒斑
第 54 図　10	32 号　土坑		弥生	甕	－	－	7.2	－	－	－	ABFGH	良	赤褐色	黄褐色	
第 54 図　11	32 号　土坑		弥生	甕	－	－	6.2	－	ハケ	－	ABGH	良	赤褐色	赤褐色	
第 54 図　12	32 号　土坑	一括	弥生	壺	－	－	4.55	－	ハケ	ナデ	ABCEGH	良	黄白色	黒褐色	
第 54 図　13	32 号　土坑	一括	弥生	壺	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ABEG	良	茶褐色	茶褐色	沈線５条
第 54 図　14	33 号　土坑	一括	弥生	甕	(2.84)	－	－	－	ハケ・ナデ	工具ナデ	ABFGH	良	暗褐色	淡褐色	突帯、刻目口縁
第 54 図　15	33 号　土坑		弥生	甕	－	－	－	－	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	ABFGH	良	暗茶褐色	暗橙褐色	沈線、調整にやや規格性あり、口縁部の幅が一定でない、
第 54 図　16	33 号　土坑	一括	弥生	甕	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ABFGH	良	暗茶褐色	淡赤褐色	三角突帯
第 54 図　17	33 号　土坑	一括	弥生	壺	－	－	－	－	－	－	ABFGH	不良	淡灰茶褐色	暗茶褐色	羽状文
第 54 図　18	33 号　土坑	一括	弥生	壺	－	－	(14.2)	－	ハケ	－	ABFGH	良	明褐色	明灰茶褐色	
第 54 図　19	34 号　土坑	一括	弥生	甕	－	－		－	－	－	ABCDFGH	良	暗茶褐色	茶褐色	
第 54 図　20	34 号　土坑	一括	弥生	甕	－	－	6.5	－	－	ナデ	ABCDFH	良	淡赤褐色	暗褐色	
第 54 図　21	43 号　土坑	(上層) 一括	弥生	甕	(32.7)	(33.8)	－	－	ハケ後ナデ	ハケ	ABFGH	良	淡褐色	明淡褐色	
第 54 図　22	43 号　土坑	(上層) 一括	弥生	甕	(17.8)	(18.6)	－	－	ハケ	ハケ後ミガキ	ABFGH	良	明淡褐色	淡褐色	
第 54 図　23	43 号　土坑	(上層) 一括	弥生	甕	－	(6.6)	－	－	ハケ	工具ナデ	ABEFGH	不良	茶褐色	明褐色	
第 54 図　24	43 号　土坑	(上層) 一括	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ後ナデ	ミガキ	ABFGH	良	赤褐色	黒色	口縁がヨコハケ後ミガキミガキ、ナデで消す、丁寧なつくり
第 55 図　1	21 号　溝	1 区	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	－	ABDFGH	良	淡褐色	黒褐色	
第 55 図　2	21 号　溝	1 区	弥生	甕	－	－	－	－	ヨコナデ･ヨコハケ	－	ABFGH	良	暗褐色	褐色	
第 57 図　1	1 号　甕棺墓		弥生	上甕	45.5	59.8	10.6	62.9	タタキ後ハケ後後ナデ	タタキ後ハケ後ナデ後ミガキ	BEFGH	良	褐色	淡黄褐色	コの字型突帯胴部２条
第 57 図　2	1 号　甕棺墓		弥生	下甕	51.5	55.3	11.8	68.7	タタキ後ハケ	タタキ後ハケ後ナデ	ABCDEFG	良	黄褐色	淡黄褐色	三角突帯・頭部２条・胴部螺旋状３～４条
第 59 図　1	2 号　甕棺墓		弥生	上甕	－	頭部 30.2	－	－	ミガキ	ハケ後ナデ	ABEFG	良	淡黄褐色	暗黄褐色	上甕の打ち欠き頭部に三角突帯
第 59 図　2	2 号　甕棺墓		弥生	上甕	－	65	12.1	49	タタキ後ハケ後ミガキ	タタキ後ハケ後ナデ	ABEFG	良	淡黄褐色	暗黄褐色	コの字形突帯、頭部１条、胴部２条口縁から頭部を打ち欠き
第 59 図　3	2 号　甕棺墓		弥生	下甕	－	72.2	12.2	(72.8)	タタキ後ハケ後ミガキ	タタキ後ハケ後ナデ	AEG	良	明黄褐色	暗黄褐色	コの字形突帯、胴部２条口縁から頭部を打ち欠き
第 61 図　1	3 号　甕棺墓		弥生	上甕	48.6	48.7	12.5	58.2	タタキ後ハケ	工具ナデ後ナデ	ABDEF	良	暗黄茶褐色	淡黄褐色	三角突帯、頭部２条
第 61 図　2	3 号　甕棺墓		弥生	下甕	43.2	73.9	11.8	74.3	タタキ後ハケ後ミガキ	タタキ後ハケ後ナデ	ABDFG	不良	暗茶褐色	暗褐色	ややＭ字形突帯、胴部に２条口縁から頭部を打ち欠き
第 63 図　1	4 号　甕棺墓		弥生	上甕	41	－	－	－	－	－	ABFGH	良	明茶褐色	暗茶褐色	上甕の打ち欠き頭部に台形突帯１条
第 63 図　2	4 号　甕棺墓		弥生	上甕	45.3	56.2	(14.7)	50	タタキ後ハケ後ミガキ	タタキ後ハケ後ミガキ・ナデ	ABEFG	良	淡褐色	明黄褐色	三角突帯、頭部１条、胴部２条
第 63 図　3	4 号　甕棺墓		弥生	下甕	34.1	73.3	12.6	74.6	タタキ？後工具ナデ	タタキ？後工具ナデ後ナデ	ABEFG	良	淡褐色	明黄褐色	コの字形突帯、胴部２条口縁から頭部を打ち欠き
第 65 図　1	12 号　甕棺墓		弥生	上甕	31.7	31.1	8.2	40.2	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	ABFGH	良	暗茶褐色	淡褐色	黒斑
第 65 図　2	12 号　甕棺墓		弥生	下甕	33.8	35	9	44	ハケ	ハケ後ナデ	ABFGH	良	暗茶褐色	淡褐色	黒斑
第 67 図　1	14 号　甕棺墓		弥生	下甕	23	41.5	11.5	44.2	ハケ後ミガキ	ミガキ	ABFGH	良	淡茶褐色	黒褐色	胴部三角突帯２条
第 69 図　1	24 号　甕棺墓		弥生	上甕	34	29.7	－	14	ハケ	工具ナデ後ナデ	ABFH	良	明褐色	明褐色	口縁下１条、胴部３条
第 69 図　2	24 号　甕棺墓		弥生	下甕	36.4	31.6	7.3	29.9	ミガキ	ハケ後ナデ	ABEFG	良	淡褐色	淡暗褐色	Ｍ字突帯１条（口縁下）、３条（胴部）外面丹塗り、内面水滴状に付着
第 71 図　1	41 号　甕棺墓		弥生	上甕	35	31.2	－	24.9	ハケ	ハケ後ナデ	ABFGH	良	淡褐色	明褐色	三角突帯１条内外面丹塗り
第 71 図　2	41 号　甕棺墓		弥生	下甕	37.4	34.9	9	40.2	ハケ	ハケ	ABFGH	良	暗茶褐色	淡茶褐色	黒斑
第 72 図　1	1 号　甕棺墓	墓壙内	弥生	脚部	－	－	(12.4)	－	ハケ	ナデ	ABGH	良	橙褐色	橙褐色	砂粒がすくない
第 72 図　2	1 号　甕棺墓	墓壙内	弥生	高坏	(36.4)	－	－	－	ナデ	ナデ後ミガキ	BF	良	白橙褐色	白橙褐色	混和物殆どなし、塗分（外面三角文）口縁上面ミガキ（不明瞭）
第 72 図　3	1 号　甕棺墓	墓壙内	弥生	高坏	(34.0+)	－	－	－	－	ミガキ	EH	良	淡茶褐色	淡茶褐色	丹塗（全面塗布と思われるが外面一部残存）

挿図番号	区名	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		
					口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	備考
第72図 4	1号 甕棺墓	切り合い 遺構（古）	弥生	壺	－	－	－	－	－	－	ABCH	良	淡黄褐色	淡黄褐色	内側突帯
第72図 5	4号 甕棺墓	掘方内	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	ナデ	BCDFH	良	淡暗褐色	淡赤褐色	
第72図 6	4号 甕棺墓	掘方内 一括	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	－	ADFG	良	赤褐色	淡褐色	
第72図 7	4号 甕棺墓		弥生	甕	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ABCDFGH	良	淡黄褐色	淡黄褐色	貼付突帯
第72図 8	4号 甕棺墓	掘込内 埋土	弥生	甕	－	－	－	－	ナデ	ナデ・ミガキ（一部）	ABCEFG	良	暗黄褐色	暗黄褐色	口縁上面ハケ後ナデ、突帯
第72図 9	4号 甕棺墓	掘方内 一括	弥生	甕	－	－	－	－	ハケ後ナデ	ナデ	ABFH	良	茶褐色	淡褐色	刻目口縁
第72図 10	4号 甕棺墓	掘方内 一括	弥生	壺	(38.2)	－	－	－	ナデ	ハケ後ナデ	ABF	良	茶褐色	茶褐色	口縁上面ナデ
第72図 11	4号 甕棺墓	掘込内 埋土	弥生	壺	(17.5)	－	－	－	ナデ	ナデ	ABFGH	良	黄褐色	黄褐色（地）	内面丹塗、口縁上面・外面ハケ接合痕なく頸部で曲げ整形か
第72図 12	4号 甕棺墓	掘込内 埋土	弥生	鉢？	(14.6)	－	－	－	ナデ	ミガキ	BD	良	暗褐色	黄褐色	
第72図 13	4号 甕棺墓	掘込内 埋土	弥生	甕	－	(7.6)	－	－	ハケ	工具ナデナデ後ミガキ	AB	良	橙褐色	暗茶褐色	
第72図 14	4号 甕棺墓	掘込内 埋土	弥生	壺	－	6.4	－	－	ハケ後ナデ	ミガキ	ABGF	良	黒褐色	黒褐色	
第72図 15	4号 甕棺墓	掘方内	弥生	ミニ	－	(2.6)	－	－	ナデ	工具ナデ	ABCDFGH	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第72図 16	4号 甕棺墓	掘込内 埋土	弥生	甕	－	－	(8.5)	－	ハケ後ミガキ	指オサエまたは工具による整形痕	ABFGH	良	暗茶褐色	黄褐色	黒斑、低部ナデ
第72図 17	4号 甕棺墓	掘込内 埋土	弥生	甕	－	－	6.5	－	ミガキハケ後ナデ	ミガキ	ABEG	良	暗黄褐色	明黄褐色	丹塗、外面・内面で工具が異なる
第72図 18	4号 甕棺墓	掘込内 埋土	縄文		－	－	－	－	－	－	AD	良	橙褐色	橙褐色	
第72図 19	12号 甕棺墓	掘方	弥生	壺	－	－	－	－	ハケ後ナデ	ナデ	BH	良	黒茶褐色	黒茶褐色	刻目突帯、突帯より上部は淡い色調
第72図 20	12号 甕棺墓	掘方	弥生	器台	－	－	－	－	－	－	ABGH	良	暗褐色	茶褐色	
第72図 21	12号 甕棺墓	掘方	弥生	器台	－	－	－	－	ハケ	ナデ	ABFH	良	茶褐色	灰茶褐色	
第72図 22	12号 甕棺墓	掘方	弥生	甕	－	－	8.0	－	ハケ	ナデ	ABGH	良	茶褐色	黒褐色	内面に輪積み痕残存
第79図 1	5号 石棺甕棺併用墓		弥生	甕棺	44.7	－	－	－	タタキ後工具ナデ後ミガキ	タタキ後工具ナデ後ナデ	ABCDEFG	不良	茶褐色	暗茶褐色	打ち欠き部分
第79図 2	5号 石棺甕棺併用墓		弥生	甕棺	45	68.7	13.5	60	タタキ後工具ナデ	タタキ後工具ナデ後ナデ	ABDFG	不良	暗黄褐色	暗黄褐色	打ち欠き、頸部三角突帯１条胴部不整コの字突帯２条
第81図 1	44号 木棺墓	一括	弥生	甕	－	－	－	－	－	－	ABCD	良	淡黄褐色	淡黄褐色	突帯、黒斑、砂粒すくない
第81図 2	44号 木棺墓	東側 1区	弥生	壺	－	－	－	－	－	－	ABCDFH	良	赤褐色	淡赤褐色	
第81図 3	44号 木棺墓	一括	弥生	壺	－	－	－	－	－	ナデ	ABCDF	不良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第81図 4	44号 木棺墓	一括	弥生	壺	－	－	－	－	－	－	ABCDF	良	赤褐色	赤褐色	羽状文
第81図 5	44号 木棺墓 2区	上層	弥生	壺	－	－	－	－	ナデ	－	ABCDF	不良	茶褐色	灰褐色	突帯、黒斑
第81図 6	44号 木棺墓 1区	中層	弥生	壺	－	－	－	－	ナデ	－	ABCDFH	良	赤褐色	暗黄褐色	突帯
第81図 7	44号 木棺墓	一括	弥生	甕	－	－	5.5	－	－	－	ABCDE	良	赤褐色	茶褐色	
第81図 8	44号 木棺墓	上層	弥生	甕	－	－	(7.1)	－	ハケ	－	ABCDGH	良	赤褐色	黄褐色	
第81図 10	13号 土壙墓	埋土 一括	弥生	甕	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ACFH	良	淡褐色	淡褐色	
第81図 11	13号 土壙墓	埋土 一括	弥生	器台	－	－	－	－	－	－	ABCDFH	良	明黄褐色	明黄褐色	
第81図 12	13号 土壙墓	埋土 一括	弥生	甕	－	－	(6.6)	－	ハケ	ナデ	BCDH	良	淡褐色	淡灰褐色	
第81図 13	15号 石蓋 土壙墓	上層 一括	弥生	壺	－	－	－	－	－	－	ABCFGH	良	明黄褐色	明黄褐色	突帯２条
第81図 14	20号 土壙墓１区	上層 一括	弥生	甕	－	－	－	－	ナデ	ハケ後ナデ	ABCDFGH	良	暗褐色	暗褐色	
第81図 15	20号 土壙墓１区	上層	弥生	壺	－	－	－	－	－	－	ABCFH	良	黄褐色	黄褐色	沈線（２条）、羽状文
第82図 1	8号 柱穴		弥生	甕	－	－	(7.6)	－	ハケ・ナデ	工具ナデ	ABFGH	不良	淡褐色	淡褐色	
第82図 2	25号 柱穴		弥生	甕	－	－	－	－	ハケ	－	ABDFH	良	淡褐色	淡黄褐色	
第82図 3	26号 柱穴	上層	弥生	高坏	－	－	(13.0)	－	ナデ	ナデ	ABF	良	茶褐色	茶褐色	
第82図 4	28号 柱穴	上層	弥生	甕	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ABFH	良	淡褐色	淡茶色	
第82図 5	28号 柱穴	上層	弥生	甕	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ABF	良	淡黄褐色	淡黄褐色	突帯
第82図 6	28号 柱穴	上層	弥生	甕	－	－	(8.2)	－	ハケ・ナデ	－	ABF	良	淡茶褐色	淡褐色	
第82図 7	28号 柱穴	上層	弥生	ミニ	－	－	3.4	－	ハケ	ナデ	AB	良	暗褐色	灰褐色	
第82図 9	37号 柱穴	一括	弥生	甕	－	－	(6.1)	－	ハケ	－	ABDFH	不良	赤褐色	暗褐色	
第82図 10	42号 柱穴	一括	弥生	壺	－	33.0+	－	－	ミガキ	ナデ後ミガキ	ABCFH	良	橙褐色	橙褐色	突帯、羽状文
第82図 11	46号 柱穴	№2	弥生	甕	－	－	(8.2)	－	ハケ後ミガキ	ナデ・ミガキ	ABFGH	良	暗茶褐色	橙褐色	
第82図 12	46号 柱穴	№1	弥生	甕	(42.6)	－	－	－	ハケ	ナデ	ABDFH	良	茶褐色	灰褐色	突帯
第82図 13	48号 柱穴	№1	弥生	壺	－	(22.6 O	－	－	ハケ	ナデ	AB	良	灰褐色	淡茶褐色	
第82図 14	53号 柱穴	一括	弥生	壺	丸底	－	－	－	ハケ	ハケ	AH	良	暗茶色	茶褐色	
第82図 15	53号 柱穴	一括	弥生	脚部	－	－	(8.4)	－	ハケ？	－	AGH	良	橙褐色	橙褐色	
第83図 1	A2区	ＳＫ11と ＳＫ20の間	弥生	甕	22.6	－	－	22.0+	ハケ	ミガキ	ABCEFGH	良	黒褐色	黄褐色	
第83図 2		遺構 検出面	弥生	壺	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ABCDFH	良	暗褐色	茶褐色	丹（外面）、突帯２条、スス
第83図 3		遺構 検出面	弥生	高坏	－	－	－	－	ハケ	シボリ	ABCFH	良	淡赤褐色	暗褐色	丹塗り、内面にしぼり調整
第83図 4		遺構 検出面	弥生	甕	－	－	－	－	－	－	ABCDFH	良	淡暗褐色	淡褐色	
第83図 5		遺構 検出面	弥生	甕	－	－	－	－	ナデ	ナデ	ACDF	良	暗褐色	暗褐色	外面にススあり
第83図 6		遺構 検出面	弥生	壺	－	－	－	－	－	ナデ	ABCDFGH	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第83図 7		遺構 検出面 上層	弥生	甕	(30.6)	(26.6)	－	－	ハケ	－	ABFGH	不良	淡白褐色	淡白褐色	突帯
第83図 8		遺構 検出面 上層	弥生	甕	－	－	－	－	－	－	ABFGH	良	淡白褐色	淡橙褐色	
第83図 9		表採	弥生	器台	－	－	(17.4)	－	タタキ	ナデ、工具ナデ、ミガキ	ABFGH	良	淡暗褐色	淡暗褐色	丁寧
第83図 10		周辺 表採	弥生	壺	－	－	－	－	－	－	BCEFH	良	淡橙褐色	暗橙褐色	突帯
第83図 11		撹乱 土中	弥生	ミニ	－	－	－	－	ミガキ	ミガキ	ABFGH	良	黒褐色	淡暗褐色	刻目の断面、は台形でない可能性あり

胎土：Ａ角閃石　Ｂ石英　Ｃ長石　Ｄ輝石　Ｅ雲母　Ｆ赤色粒子　Ｇ白色粒子　Ｈ砂粒
法量の単位はｃｍ。「()」書きは、残存と復原を示す

第２表　９次調査出土土製品観察表

挿図番号	区名	遺構名	器種	胎土	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第6図　13	1 号　貯蔵穴	中層	土器加工品	ABCDF	5.2	4.7	0.9	25	周囲を打ち欠く、両面にハケ
第 6 図　14	1 号　貯蔵穴 1 区	中層	土器加工品	ABDF	4.3	4.5	1.4	30	甕または壺の底部付近を再加工、周囲を研磨、外面にハケ
第 19 図　8	10 号　竪穴住居	埋土一括	投弾	ABFGH	4.65	2.95	2.6	25.5	
第 19 図　9	10 号　竪穴住居	埋土一括	投弾	ABFGH	4.7	2.9	2.35	22.65	つぶれによる割れ
第 28 図　6	7 号　貯蔵穴	13 層	土製品		4.4	5.1	1.3	22	草の茎でつけたような沈線をＶ字状に施す、沈線中に条線　熱をうけており表面は黒変し裏面は赤変している
第 48 図　9	6 号　土坑 4 区	上層	メンコ	ABCFGH	3.7	3.5	1	14.7	土器再加工品、ハケ目が残存する。周囲を打ち欠くが、他件は磨耗により判然としない
第 53 図　26	28 号　土坑	一括	メンコ	ABFG	4.1	4	0.8	14	土器再加工品、ハケ目が残存する。周囲を打欠き研磨している
第 81 図　9	44 号　木棺墓	一括	メンコ	ABCDFH	3.85	4.4	8.5	17.7	周囲を研磨
第 82 図　8	36 号　柱穴	一括	投弾	ABFGH	5.05	2.6	2.6	25.3	穿孔あり、ハケ後ナデ調整を行なう、丁寧なつくり

胎土：A角閃石　B石英　C長石　D輝石　E雲母　F赤色粒子　G白色粒子　H砂粒

第３表　９次調査出土石器観察表

挿図番号	区名	遺構名	器種	胎土	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第 6 図　15	1 号　貯蔵穴	上層一括	スクレイパー	サヌカイト	1.6+	2.3	0.9	2.5	一端欠損
第 6 図　16	1 号　貯蔵穴	中層一括	スクレイパー	黒曜石	2.4	2.1	1	4.1	端部に二次加工、一部に自然面残存
第 6 図　17	1 号　貯蔵穴 2 区	上層	敲石	安山岩	(6.6+)	-3.6	-3.3	155.2	一部欠損
第 6 図　18	1 号　貯蔵穴	下層	砥石	砂岩	8.7	5.2	6	399.9	全体の面のうち、3 面を砥石として使用
第 7 図　1	1 号　貯蔵穴		太型蛤刃石斧	今山産玄武岩	11.1	7.2	5.2	607.5	下半部は折損、残存部も二つに割れる、表面に調整剥離痕が残存するが概ね平滑
第 7 図　2	1 号　貯蔵穴	上層　一括	偏平磨製石斧	頁岩	(1.6+)	(3.3+)	0.6	3.1	上・下端ともに欠損し一部のみ残存、残存部は丁寧な研磨がなされている
第 7 図　3	1 号　貯蔵穴	Ｐ 1	敲石	安山岩	15.5	7.8	4.3	840.3	打面が一部欠損、剥離状の欠損個所あり
第 7 図　4	1 号　貯蔵穴	Ｐ 10	磨石・台石	安山岩	18.3	17.1	4.6		両面とも磨石として使用、一面を台石として使用
第 7 図　5	1 号　貯蔵穴 2 区	中層	台石・砥石	角閃石安山岩	9.8	11.1	5.9		一面を敲石・砥石として使用、ほか３面を砥石として使用
第 10 図　6	1 号　貯蔵穴	Ｐ 14	敲石兼磨石	安山岩	10.6	8.6	4.7	684.2	敲石・磨石として使用
第 10 図　7	1 号　貯蔵穴	中層	敲石	ホルンフェルス	7.2	6.35	4.7	355.3	端部が敲打として使用されている
第 10 図　8	2 号　貯蔵穴ベルト	下層	剥片	黒曜石	3	1.4	0.6	1.8	背面端部に自然面が残存、西北九州産の黒曜石と思われる
第 10 図　9	2 号　貯蔵穴	上層一括	石庖丁	頁岩	3.6	(3.8+)	0.7	11.3	半分に欠損、刃部が使用により鈍化している
第 14 図　1	3 号　貯蔵穴	一括	投弾	安山岩	3.1	2.9	2.4	25.3	
第 14 図　2	3 号　貯蔵穴	一括	投弾	安山岩	3.9	2.9	2.7	37.4	
第 14 図　3	4 号　貯蔵穴	下層	剥片	サヌカイト	4.6	2.4	1	9.1	サイドの細かな剥離は使用痕の可能性あり
第 14 図　4	6 号　貯蔵穴	中層	石鏃	黒曜石	2.2	1.5	0.4	0.9	先端部を若干欠損、不純物を多く含むものの透明感のある黒曜石を使用
第 14 図　5	4 号　貯蔵穴	中層一括	磨石	安山岩	8.9	12	3.1	496.6	
第 14 図　6	4 号　貯蔵穴	中層一括	磨石	安山岩	8	11.5	1.8	290.7	両面を磨石として使用
第 14 図　7	6 号　貯蔵穴	Ｐ 4	敲石	安山岩	8	6.45	5	337.8	
第 15 図　1		一括	石鏃	姫島産黒曜石	(1.9+)	(1.3+)	0.4	0.5	先端・脚部が欠損
第 15 図　2	表採		石鏃	サヌカイト	1.7	1.6	0.2	0.4	脚部欠損
第 15 図　3	表採		石鏃	サヌカイト	1.7	1.5	0.4	0.6	脚部欠損
第 15 図　4	周辺表採		敲石	安山岩	10.1	4.3	3.4	240.7	上端および下端に顕著な打痕
第 15 図　5	第 1　トレンチ	撹乱	石庖丁未製品？	頁岩	5.8	4.1	0.6	15.7	穿孔途中の凹みあり
第 19 図　10	10 号　竪穴住居	埋土一括	石鏃	サヌカイト	2	1.5	0.4	0.6	一方の面は主要剥離面を使用し周辺のみを整形
第 19 図　11	10 号　竪穴住居	壁溝Ｃ　ＳＰ 24・77 内	砥石	石英・長石瑪岩	5.1+	2.3	1.9	40.9	一部欠損、両面ともよく使用している
第 21 図　3	16 号　竪穴住居	3 区　№ 1	石皿	安山岩	21.5	19.5	6.7		一部に熱を受けた形跡がある
第 27 図　1	7 号　貯蔵穴	13 層	石鏃	サヌカイト	1.8	2.1	0.4	0.5	
第 27 図　2	7 号　貯蔵穴	中層	スクレイパー	サヌカイト	5.2	5.6	1.1	23.1	一部に自然面を残す
第 27 図　3	7 号　貯蔵穴	中層一括	二次加工剥片	黒曜石	4.8	4.2	0.8	14.1	自然面を大きく残しサイドに二次加工を加えるスクレイパーとしての可能性が強い
第 27 図　4	7 号　貯蔵穴	掘方内	スクレイパー	姫島産黒曜石	2.5	2.6	0.9	3.7	
第 27 図　5	7 号　貯蔵穴	中層	剥片	黒曜石	3.9	2.1	0.4	2.9	
第 27 図　6	7 号　貯蔵穴	13 層	石核	黒曜石	2.2	2.9	1.8	11.8	小さな黒曜石の礫を使い剥片を剥離する一端に古いパティナがある
第 28 図　1	7 号　貯蔵穴	上層	敲石	安山岩	6.2	5.6	4.6	211.7	
第 28 図　2	7 号　貯蔵穴	中層一括	敲石	安山岩	7.2	5.2	4.2	186.7	上端および下端に顕著な打痕
第 28 図　3	7 号　貯蔵穴	中層	石弾	安山岩	5.1	4	1.8	66.6	
第 28 図　4	7 号　貯蔵穴	11 層	石弾	安山岩	3.25	4.3	2.8	62.9	
第 28 図　5	7 号　貯蔵穴	Ｐ	石弾	安山岩	3.9	2.8	2.9	35.7	
第 30 図　5	8 号　貯蔵穴 2 区	下層	柱状片刃石斧か	頁岩	2.8+	2.8	0.8+	6.1	刃部以外は欠損する
第 30 図　6	8 号　貯蔵穴 1 区	下層	石庖丁	頁岩	3.7+	4.3	0.3	6.1	
第 33 図　1	25 号　貯蔵穴	下層一括	二次加工剥片	黒曜石	3.6	2.3	0.6	4.2	透光すると縞が確認できることから、西九州産の黒曜石と思われる
第 33 図　2	25 号　貯蔵穴		偏平片刃石斧か	頁岩（シェール）	4.1	2.4	0.8	17.2	表裏両面ともよく研磨されている、節理の部分を利用した整形を行い研磨を行なっている
第 33 図　3	25 号　貯蔵穴	下層　一括	磨石兼敲石	安山岩	8.6	6.2	3.8	236.5	一端に敲打痕、平坦面は２面とも条痕は確認できないが他面に比してなめらか
第 35 図　2	27 号　貯蔵穴		石弾	砂岩	3	3.65	2	25.1	

挿図番号	区名	遺構名	器種	胎土	長さ	幅	厚さ	重量	備考
第35図　3	27 号　貯蔵穴		石弾	安山岩	3.3	2.9	2.5	35.65	
第 38 図　2	35 号　貯蔵穴	中層一括	太型蛤刃石斧	玄武岩	8.6	5	3.9	126.7	今山産、体部の破片、丁寧な研磨がなされている復元幅は 7.0 ～ 7.5 ほど規格品と思われる
第 38 図　3	35 号　貯蔵穴	中層下	砥石	砂岩	3.3	4.2	2.1	31.4	全面が使用されている、特に一面に関しては棒状の物を研いだと思われる溝がある
第 38 図　4	35 号　貯蔵穴	一括	石弾	安山岩	3.6	3.4	2.9	52.4	
第 38 図　5	35 号　貯蔵穴	中層下一括	敲石	安山岩	10	8	5.3	525	上端・下端ともに顕著な打痕
第 38 図　6	35 号　貯蔵穴	中層下一括	砥石	砂岩	(9.6+)	4.1	3.2	148.8	欠損した一面を除いた５面に使用の痕跡が見られる
第 40 図　13	37 号　貯蔵穴	Ｐ 10	石皿	安山岩	45.1	26	8.8		両面ともよく使用されている、上面はやや凹み、よく使い込まれている
第 41 図　1	37 号　貯蔵穴	５層	石庖丁	輝緑凝灰岩	(5.6+)	(3.7+)	0.8	17.5	
第 44 図　19	38 号　貯蔵穴	中層一括	スクレイパー	サヌカイト	3.7	2.8	1.5	12.4	
第 46 図　5	42 号　貯蔵穴	下層一括	敲石	安山岩	-10.4	-8.2	-5.8	712.6	敲痕がある
第 48 図　10	6 号　土坑	焼土直上　№ 1	石庖丁	頁岩	(5.7+)	(4.1+)	(0.4+)	9.8	
第 48 図　11	6 号　土坑	1 区　埋土一括	太型蛤刃石斧	結晶片岩	(5.75+)	(2.85+)	(1.2+)	-21.8	
第 48 図　12	6 号　土坑	2 層　埋土一括	砥石	砂岩	(7.4+)	(3.2+)	2.2	95.7	４面すべてを砥石として使用、折れによる欠損あり
第 48 図　13	6 号　土坑	4 区　一括	太型蛤刃石斧	玄武岩	3.7	4	1.3	11.8	今山産、片側はよく研磨され平坦、整形時の剥離痕が残存左側の剥離痕は破損時のものと思われる
第 48 図　14	6 号　土坑	2 区　一括	石弾	安山岩	4.4	2.8	1.7	28.6	
第 48 図　15	6 号　土坑	4 区　一括	石弾	安山岩	3.4	3	2.7	38.4	
第 54 図　25	28 号　土坑	1 区　一括	石鏃	黒曜石	(1.9+)	(1.0+)	0.2	0.5	透明感の強い黒曜石が使用されている
第 54 図　26	28 号　土坑	2 区	石皿	安山岩	(6.3+)	(15.2+)	9.9		３面が残存し、ともに使用の痕跡がうかがえる
第 54 図　27	29 号　土坑	1 区　一括	投弾	安山岩	3.6	3.4	3.1	48.5	
第 54 図　28	34 号　土坑	一括	石弾	安山岩	4.2	3.65	2.4	51.7	
第 54 図　29	32 号　土坑		石庖丁	緑色片岩	3.3	2.7	0.4	4.4	半月型外湾刃端部残存、立岩産を模した在地産か？
第 54 図　30	32 号　土坑		磨石	安山岩	8.4	10.1	5.5	708.7	特に一面は平坦面が形成されるまで使用される
第 81 図　16	20 号　土壙墓 1 区	上層　一括	石鏃	黒曜石	2.1	(1.5+)	0.4	1.1	良質の黒曜石を使用
第 81 図　17	20 号　土壙墓	一括	石庖丁	頁岩	5.0+	5.4	0.5	18.2	大部分は欠損、薄いつくり、丁寧な研磨がなされる
第 81 図　18	20 号　土壙墓	墓壙内一括	石皿	安山岩	10	12.6	4.9	734.4	
第 81 図　19	20 号　土壙墓	墓壙内一括	石皿	安山岩	-18.4	-11.3	-7.1	1039.1	一面がほぼ平らになるまで使用されている
第 84 図　1	3 号　柱穴		石鏃	ホルンフェルス	2.3	1.5	0.3	0.7	アメリカ式石鏃と思われる・先端部は鋭さに欠ける感あり脚部の欠損はパティナから使用時のものと思われる
第 84 図　2	22 号　柱穴		スクレイパー	サヌカイト	2.3	1.7	0.5	2	剥片端部に両面から二次加工を加えスクレイパーエッジをつけている
第 84 図　3	34 号　柱穴	上層	太型蛤刃石斧	玄武岩質安山岩？	15.3	7.4	4.8	834.4	基部欠損、刃部にも剥離痕があり、全面が風化している、裏面一部に旧研磨面が残存、現表面は一枚表皮が剥けている
第 84 図　4	45 号　柱穴	一括	砥石	石英長石斑岩	13.45	2.3	2.2	141.7	４面すべてを砥石として使用、

法量単位　長さ・幅・厚さ　cm
重量　g

A 地点全景（西から）

A 地点１号貯蔵穴土層堆積状況（東から）

図版２

Ａ地点１号貯蔵穴出土状況（東から）

Ａ地点Ｄ３区遺構検出状況（西から）

Ａ地点２号貯蔵穴出土状況（北から）

Ａ地点３号（右）・４号（左）貯蔵穴出土状況（西から）

図版４

Ａ地点６号貯蔵穴出土状況（西から）

Ａ地点６号貯蔵穴出土状況（南から）

B 地点及び吹上原台地全景（西上空から）

B 地点全景（上空から）

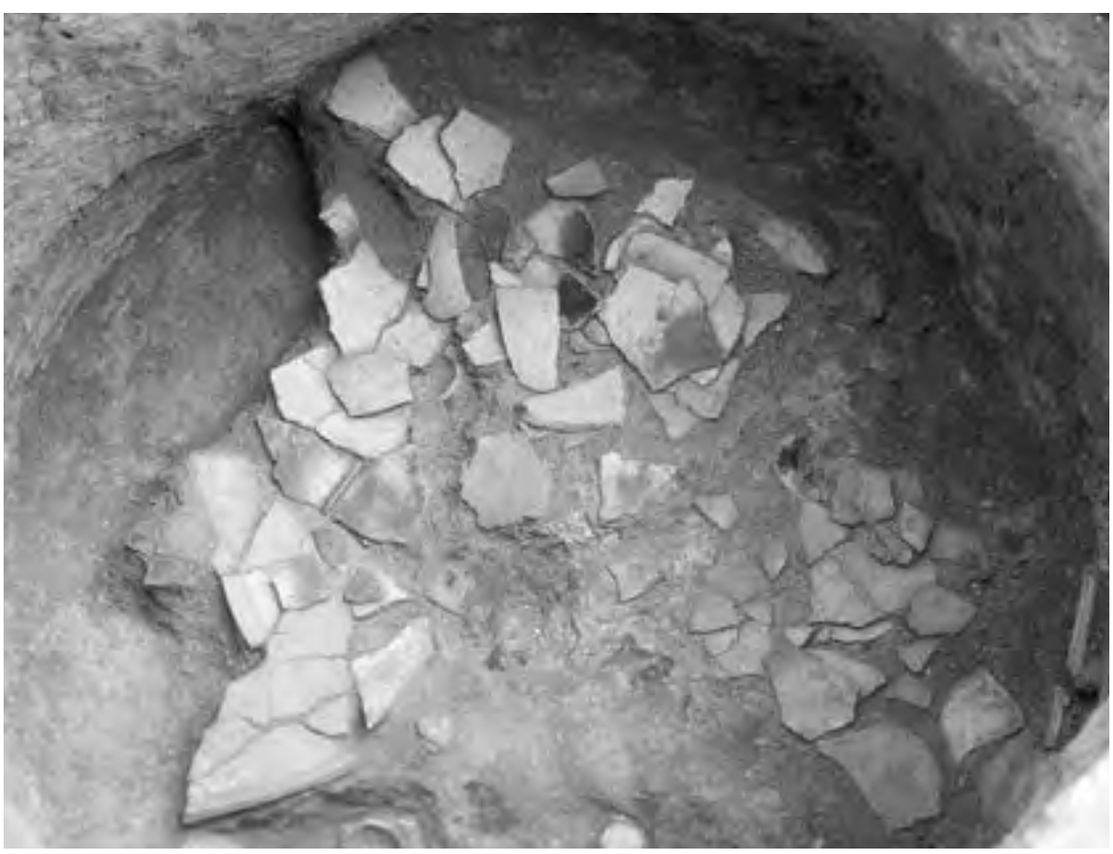
B 地点 10 号竪穴住居出土状況（北から）

B 地点 16 号竪穴住居出土状況（北から）

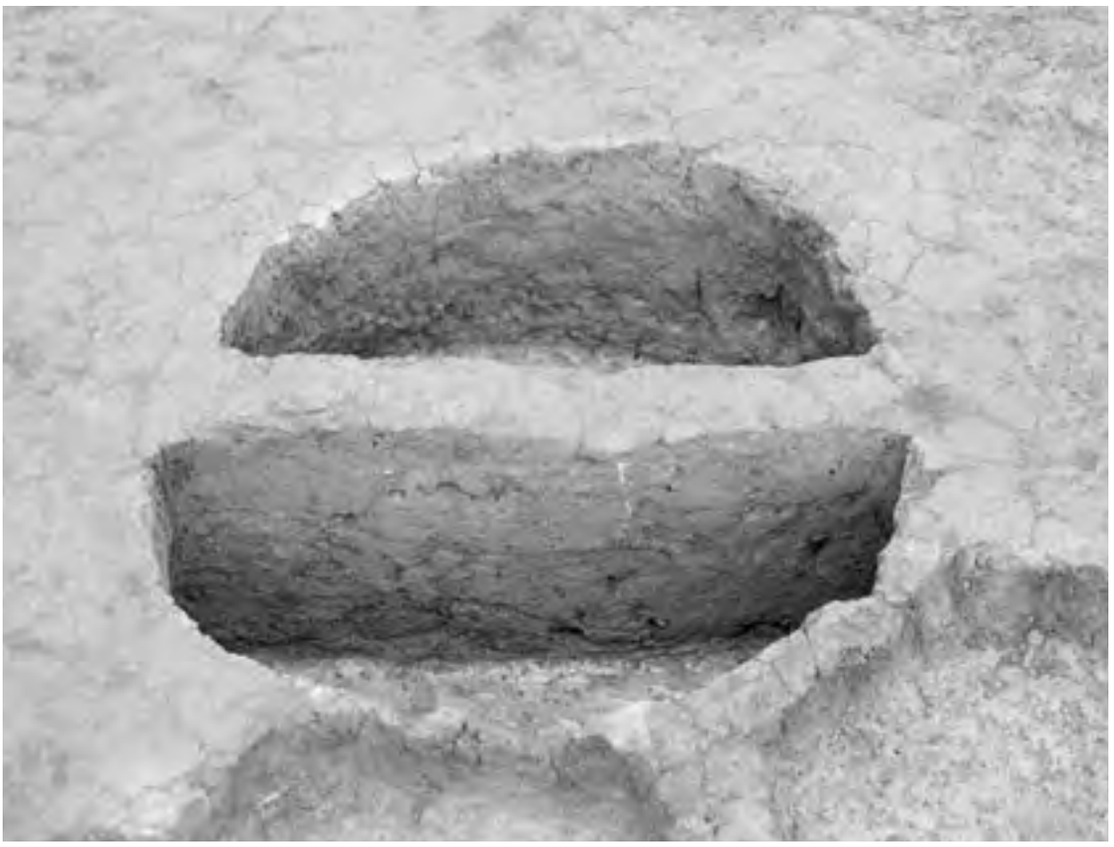
B 地点 19 号竪穴住居出土状況（西から）

B 地点 19 号竪穴住居遺物出土状況（南から）

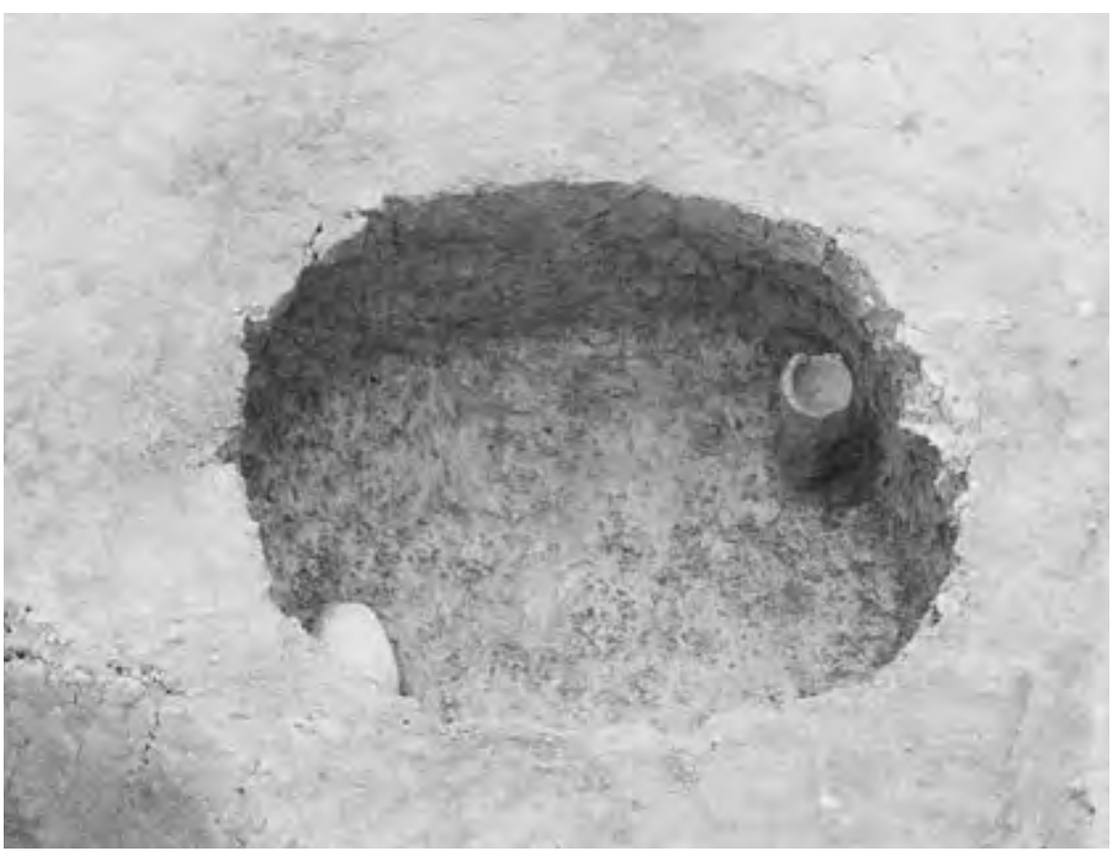
B 地点７号貯蔵穴出土状況（北から）



B 地点７号貯蔵穴遺物出土状況（北から）



B 地点８号貯蔵穴出土状況（東から）



B 地点 25 号貯蔵穴出土状況（東から）

図版 10

B 地点 27 号貯蔵穴出土状況（東から）

B 地点 35 号貯蔵穴出土状況（東から）

B 地点 37 号貯蔵穴出土状況（南から）

B 地点 38 号貯蔵穴出土状況（南から）

図版 12

B 地点 42 号貯蔵穴出土状況（南から）

B 地点６号土坑遺物出土状況（東から）

B 地点６号土坑出土状況（西から）

B 地点 9 号土坑出土状況（西から）

B 地点 17 号土坑出土状況（北から）

B 地点 28 号土坑遺物出土状況（東から）

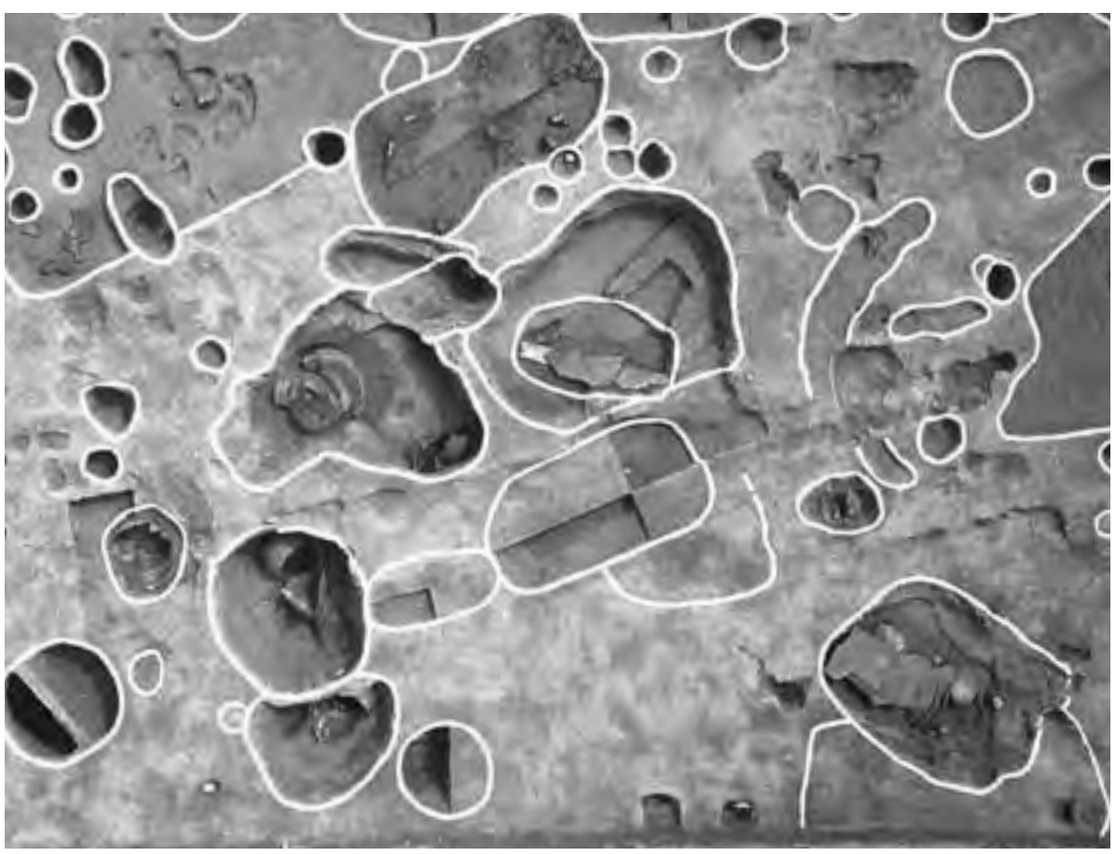
B 地点 29 号土坑出土状況（東から）

B 地点 31 号土坑出土状況（北から）

B 地点 32 号土坑出土状況（北から）

B 地点 33 号土坑出土状況（東から）

B 地点 34 号土坑出土状況（東から）



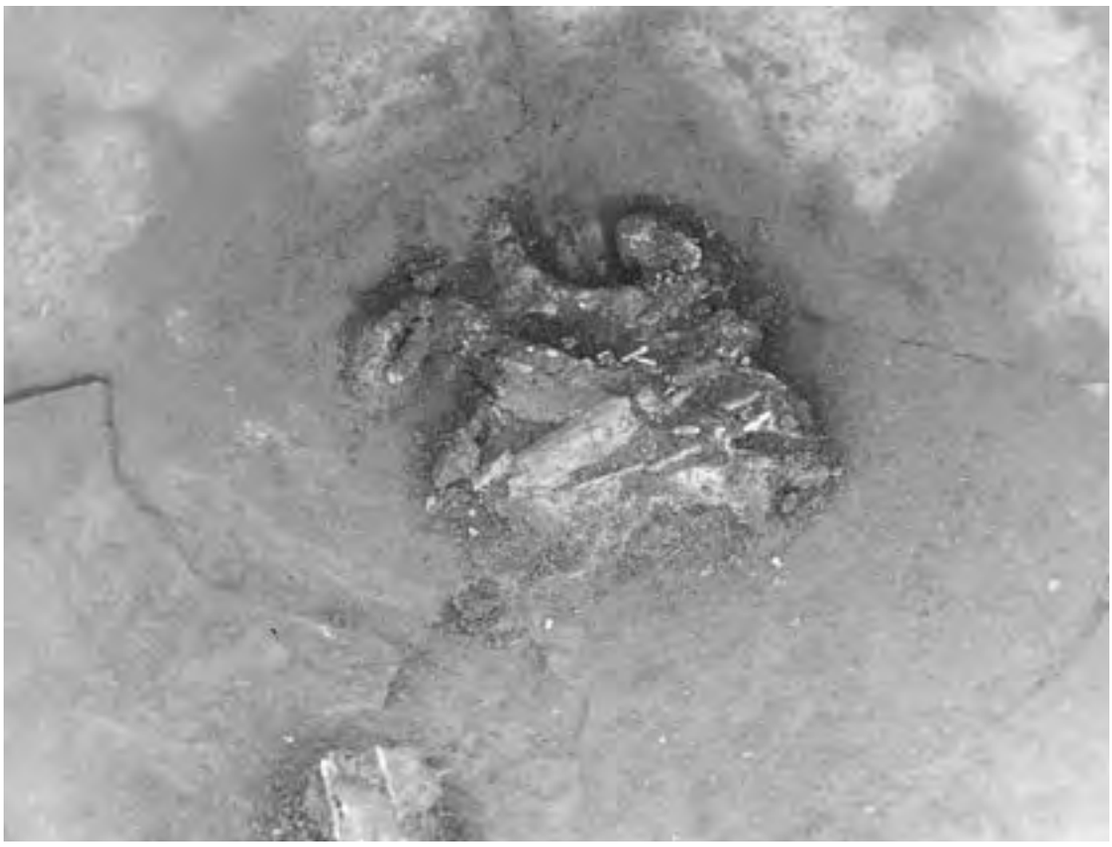
B 地点墓地群出土状況（上空から）

B 地点 1 号甕棺墓土層堆積状況（北から）

B 地点 1 号甕棺墓出土状況（北から）

B 地点１号甕棺墓人骨出土状況（北から）

B 地点２号甕棺墓出土状況（北から）



B 地点２号甕棺墓人骨出土状況（北から）

B 地点３号甕棺墓土層堆積状況（東から）

B 地点３号甕棺墓出土状況（北から）

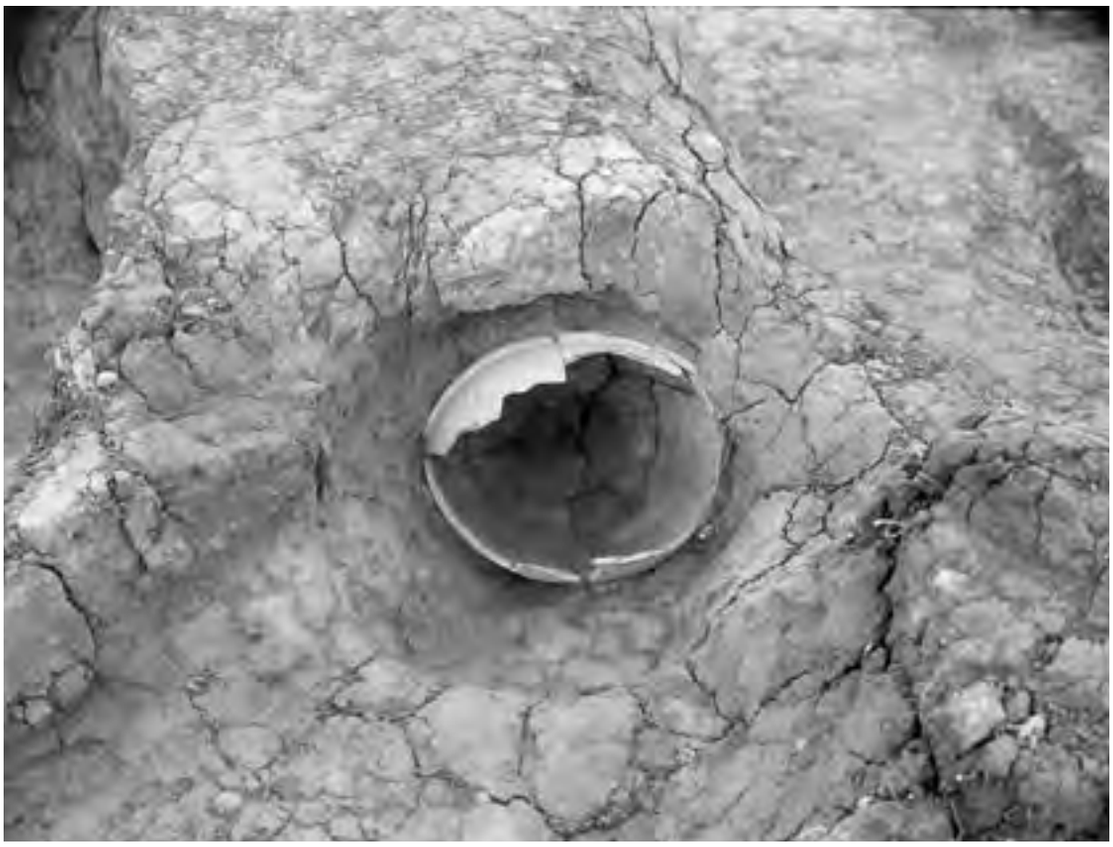
B 地点３号甕棺墓人骨出土状況（北から）

B 地点４号甕棺墓出土状況（西から）

B 地点４号甕棺墓出土状況（北から）

B 地点 12 号甕棺墓出土状況（南から）

B 地点 12 号甕棺墓人骨出土状況（南から）



B 地点 14 号甕棺墓出土状況（東から）

B 地点 24 号甕棺墓出土状況（東から）

B 地点 24 号甕棺墓出土状況（北から）

B 地点 41 号甕棺墓出土状況（西から）

B 地点 20 号木棺墓出土状況（東から）

B 地点 23 号土壙墓出土状況（東から）

B 地点５号石棺甕棺併用墓蓋石出土状況（西から）

B 地点５号石棺甕棺併用墓出土状況（東から）

B 地点５号石棺甕棺併用墓甕棺部分出土状況（南から）

B 地点５号石棺甕棺併用墓石棺部分出土状況（東から）

B 地点 15 号石蓋土壙墓、44 号木棺墓出土状況（南から）

B 地点 15 号石蓋土壙墓蓋石出土状況（西から）

図版 30

B 地点扁平片刃石斧出土状況

B 地点太型蛤刃石斧出土状況

5-1

5-9

5-22

5-2

5-11

5-24

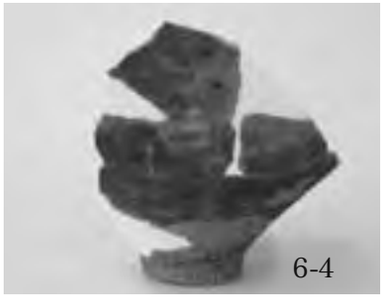
5-3

5-12

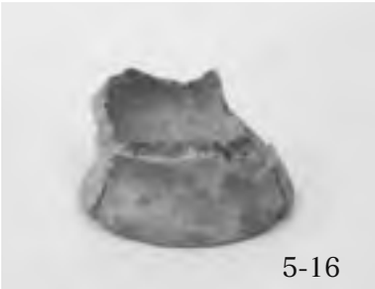
5-33

5-4

5-15


6-4

5-6


5-16

6-6

5-8

5-20

6-9

図版 32

6-12

6-19

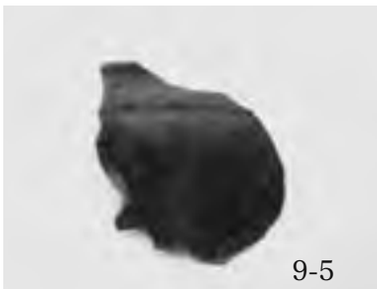
9-11

6-13

9-2

9-12

6-14


9-5

9-13

6-16

9-6

9-15

6-17

9-7

9-16

6-18

9-9

13-5

13-12

1 号貯蔵穴

19-1

13-15

7-4

19-8

13-17

7-3

19-9

13-18

6-18

23-1

13-23

10-7

23-3

7-1

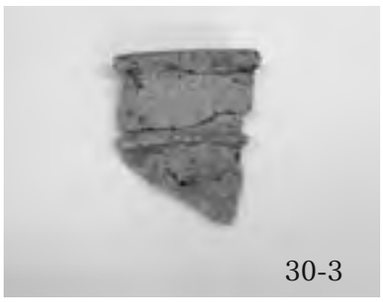
10-9

23-16

図版 34

25-1

25-10


30-3

25-5

25-11

30-4

25-6

25-12

32-1

25-7

25-14

32-2

25-8

25-15

32-4

25-9

30-1

32-6

32-8

37-11

37-20

32-9

37-12

37-24

35-1

37-13

37-27

37-1

37-15

37-30

37-2

37-16

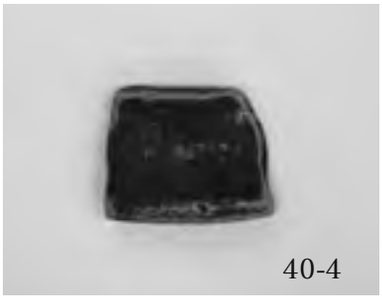
40-1

37-7

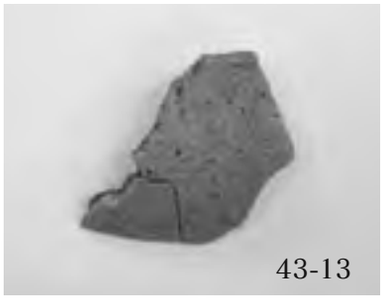
37-17

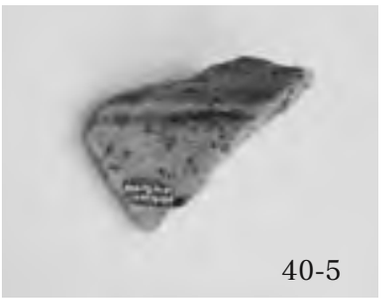
40-2

図版 36


40-4

43-2


43-13


40-5

43-3

43-14

40-9

43-5

44-1

40-10

43-8

44-3

43-1

43-10

44-4

43-2

43-11

44-8

44-13

53-3

53-20

44-16

53-4

53-25

44-17

53-8

53-26

46-4

53-16

53-27

48-1

53-17

54-1

48-5

53-19

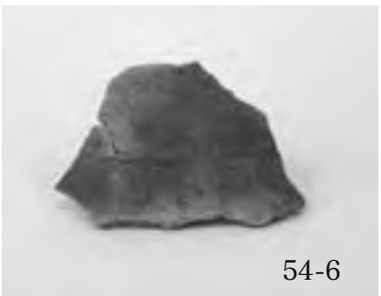
54-2

図版 38

54-4

54-11

72-8


54-6

54-12

72-9

54-7

54-13

72-11

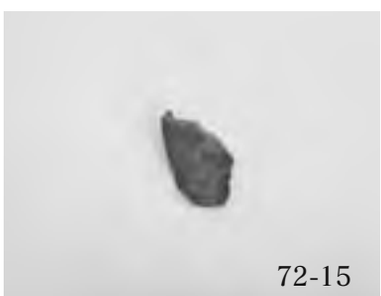
54-8

72-2

72-12

54-9

72-4


72-15

54-10

72-5

72-18

72-22

81-15

82-8

81-1

82-1

82-10

81-7

82-3

82-12

81-8

82-5

82-14

81-9

82-6

83-1

81-14

82-7

83-3

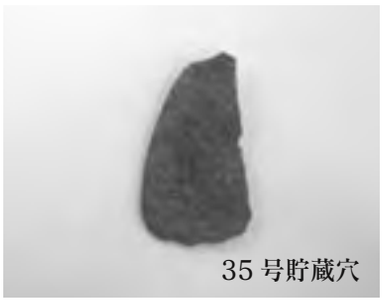
図版 40

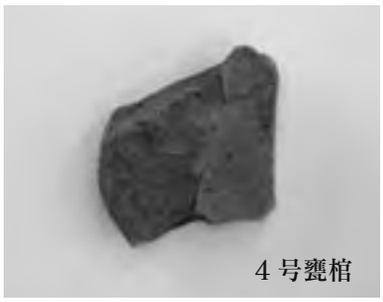
83-5

38-6

28 号土坑

83-9


35 号貯蔵穴


4 号甕棺

19-11

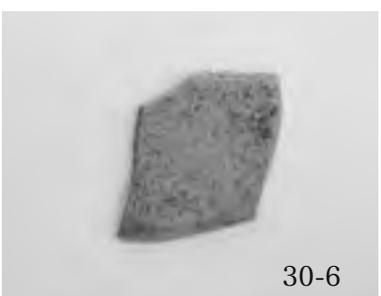
41-1

81-17

21-3

40-13

84-4


30-6

48-10

84-3

33-2

48-12

表採

57-1

57-1

57-2

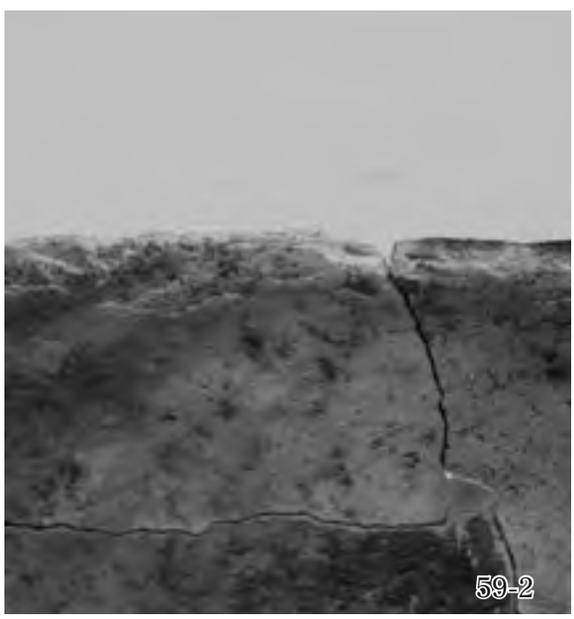
57-2

57-2

図版 42

59-2

59-1


59-2

59-3

59-3

61-1

61-1

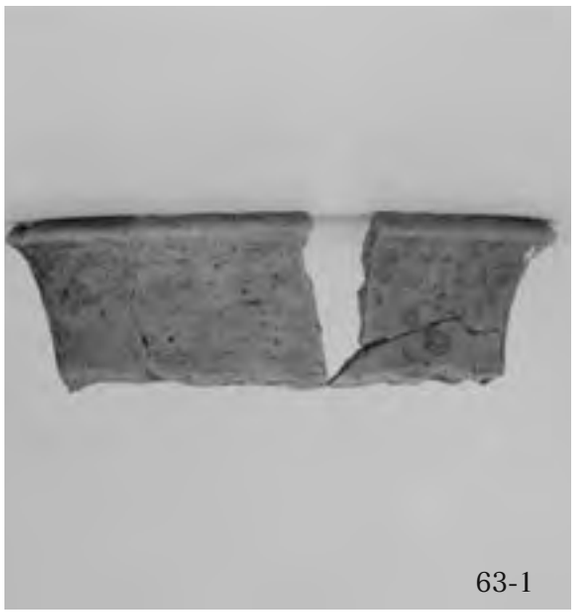
61-1

61-2

61-2

図版 44

63-2


63-1

63-2

63-3

63-3

65-1

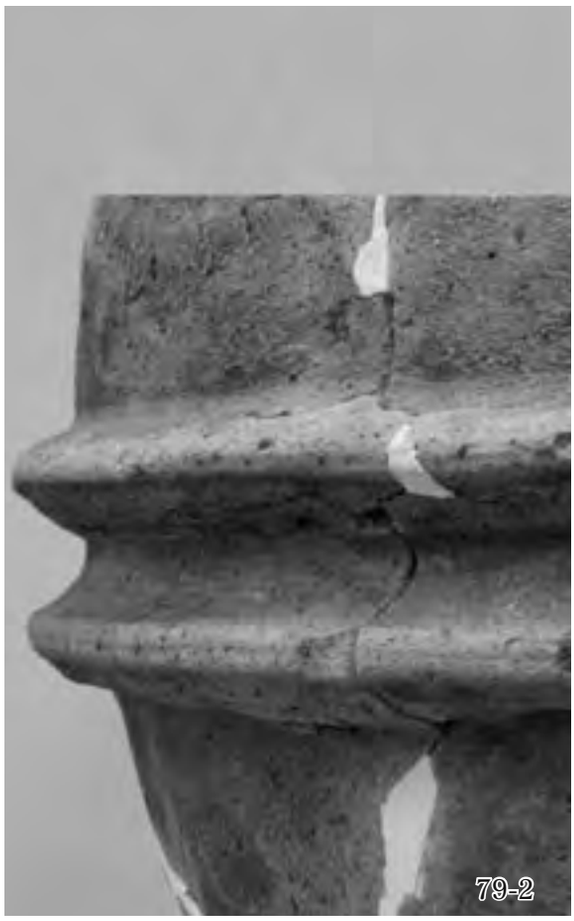
69-1

65-2

69-2

図版 46

79-2


79-2

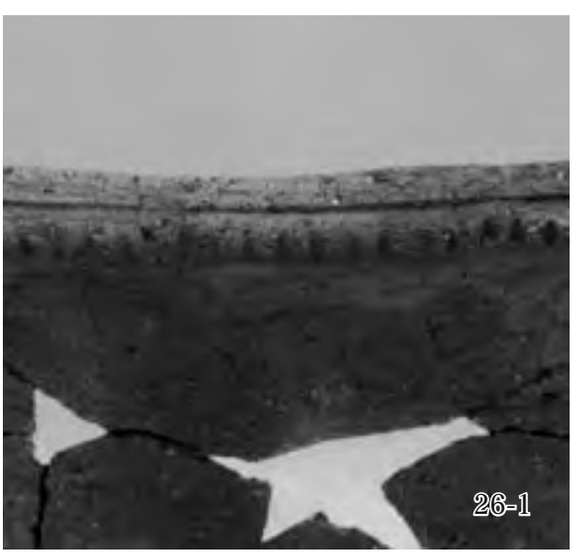
79-1

79-2

図版 48

26-1

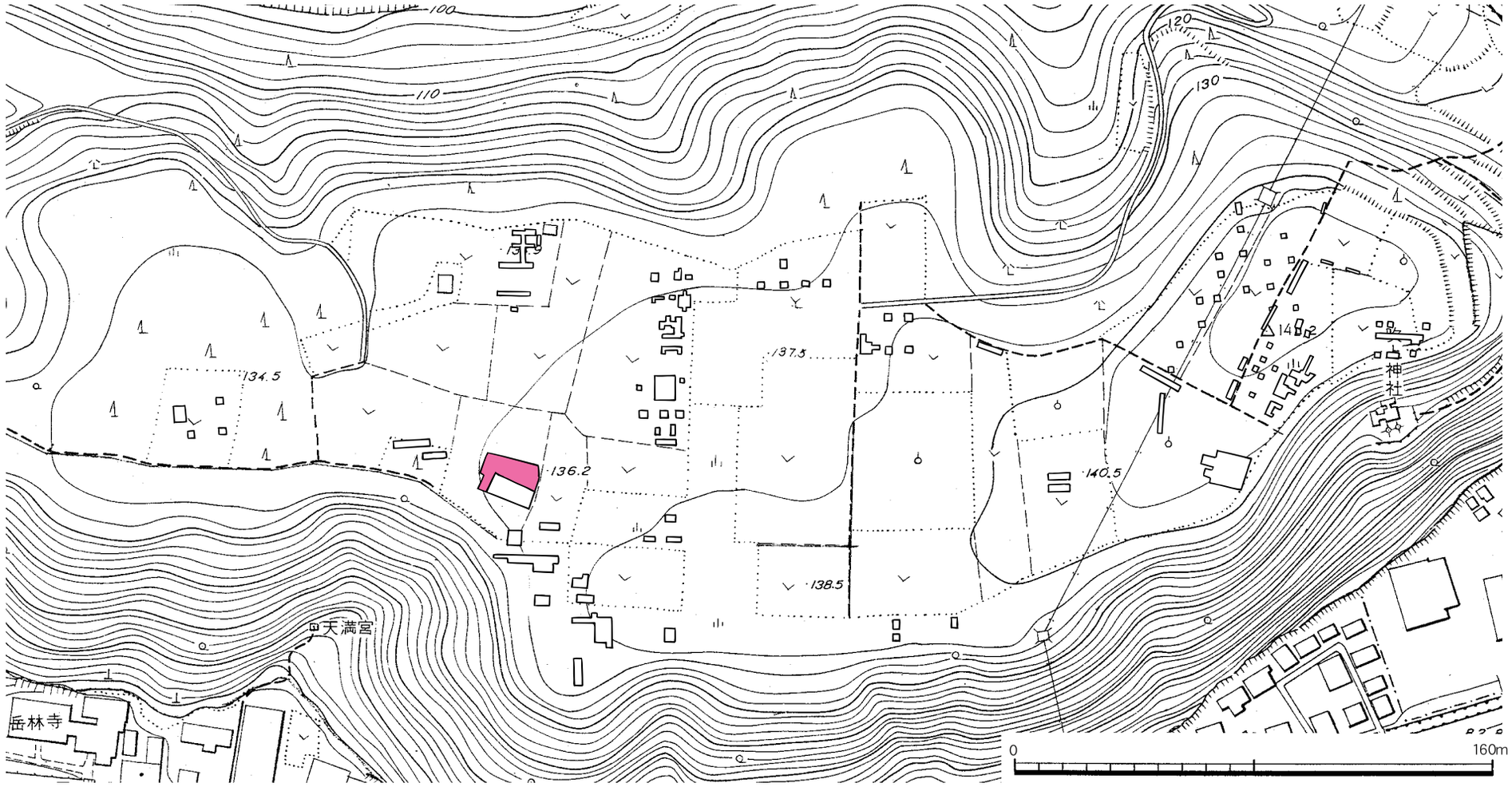
26-2


26-1

38-1

第７章　10 次調査の記録

吹上原台地空中写真（白印は調査位置）



第1図　10 次調査の位置（1/2500）　10次

調査の概要（第1図）

10次調査は９次調査Ｂ地点の遺跡群がどの様に広がるか検証するため、Ｂ地点の北側及び西側を拡張する形で実施した。今回は道路際まで掘り広げたので変形したＬ字状の調査区になった。面積は約330㎡である。平成11年７月26日に着手して８月31日に終了した。

表土は重機によって除去し、その後、人力による遺構検出作業を行った。遺構面は、表土から0.4～0.5m 掘り下げたところで確認された。遺構面は、場所によってかなり削平されており、ゴボウ栽培による攪乱も数多くみられた。中には列状に黄褐色ローム層まで掘り込まれていた部分もある。

検出された遺構群は、9次調査と同様に連続した遺構群と新たに10次調査で確認された弥生後期後半から終末にかけての遺構群がある。内訳は、円形竪穴住居１軒、方形竪穴住居３軒、袋状貯蔵穴13基、土坑21基、溝１条、掘立柱建物２棟、小児用甕棺墓２基、木棺墓１基、土壙墓５基、柱穴群などである。袋状貯蔵穴をはじめ遺構群はプラン確認のみでとどめたものも多くあり、数はさらに増加するものと思われる。９次調査では確認できなかった後期後半から終末にかけての遺構は３軒の方形竪穴住居と大溝１条である。この時期の竪穴住居は１・２次調査区の台地中央部で多く検出されているので、集落の構造を考える上で重要な発見となった。一方、断面Ｖ字形の大溝が新たに検出された。これまで吹上遺跡のような独立した台地上の集落には環濠はもたないとされていたが、大溝は環濠か集落を区画する条溝の一部になるものであろう。調査内容についてはすでに概要報告にまとめているので本報告もそれを踏襲しているが、変更が生じた部分については本報告をもって正式な報告としたい。

10次調査の報告に関する平成15年度の組織体制は、以下のとおりである。

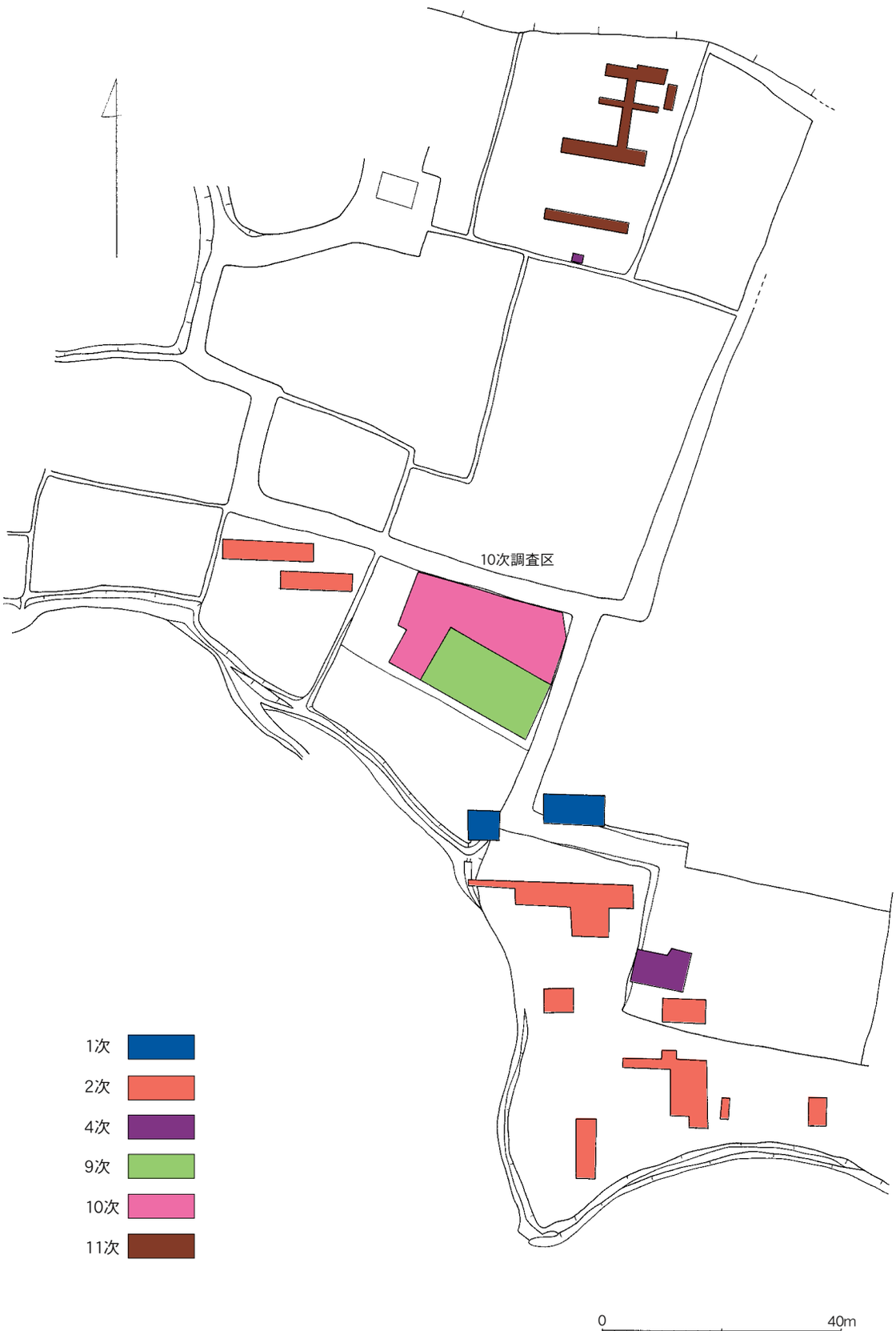
調査責任者　諫山康雄（日田市教育委員会教育長）

調査　事務　後藤　清（同文化課長）、佐藤　晃（同文化課文化財係長兼埋蔵文化財係長）、園田恭一郎（同文化課主査）

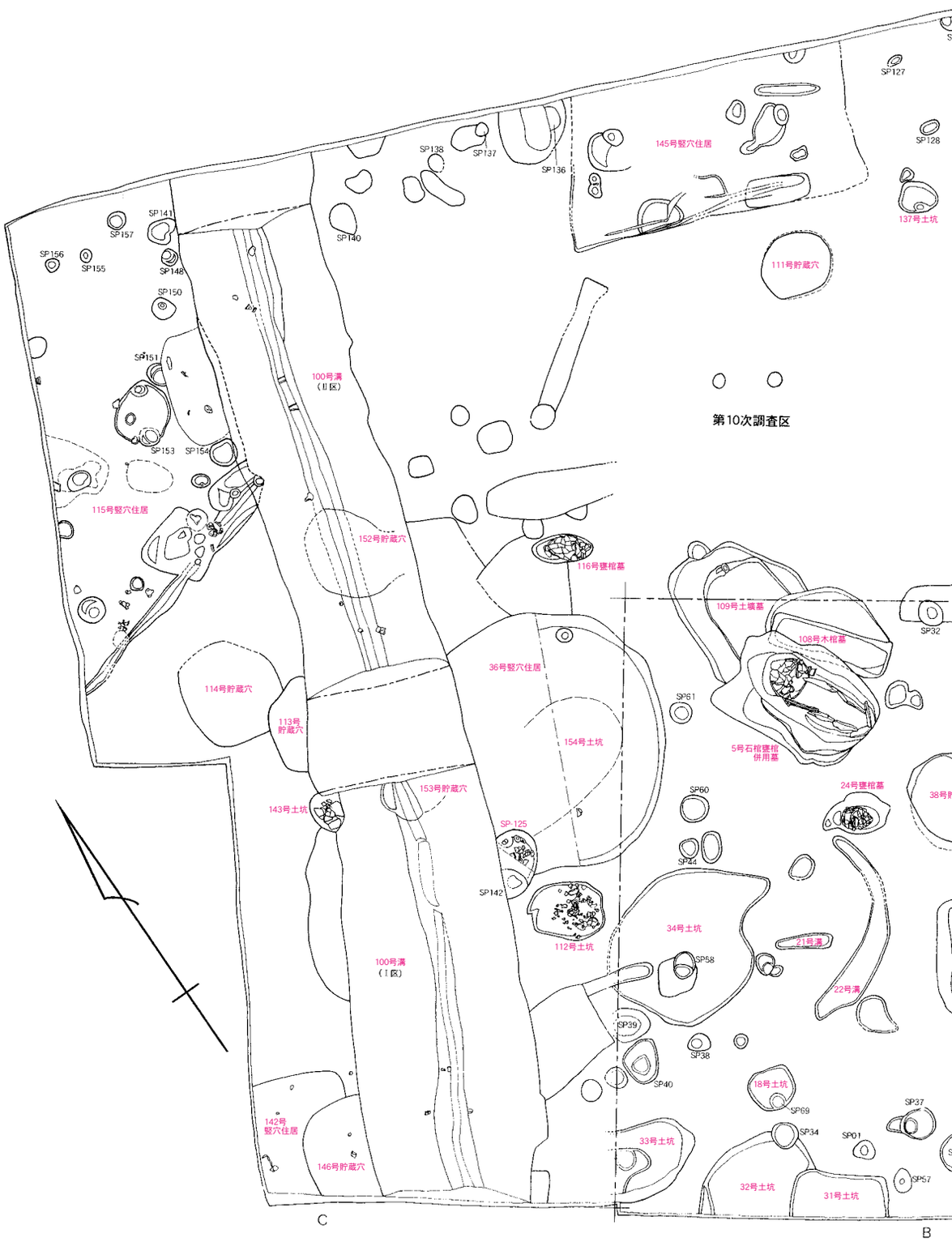
報告書担当　土居和幸（同文化課主査）、下村　智（別府大学文学部助教授）

整理　作業　玉川剛司、井上誠二、北川貴洋、下森弘之、伊藤友美子、末國琢也、田中健一郎、鶴田貴大、手柴智晴（文化財学専攻大学院生）、豊田沙和美、谷山こず恵、嘉村哲也（文化財学科学生）

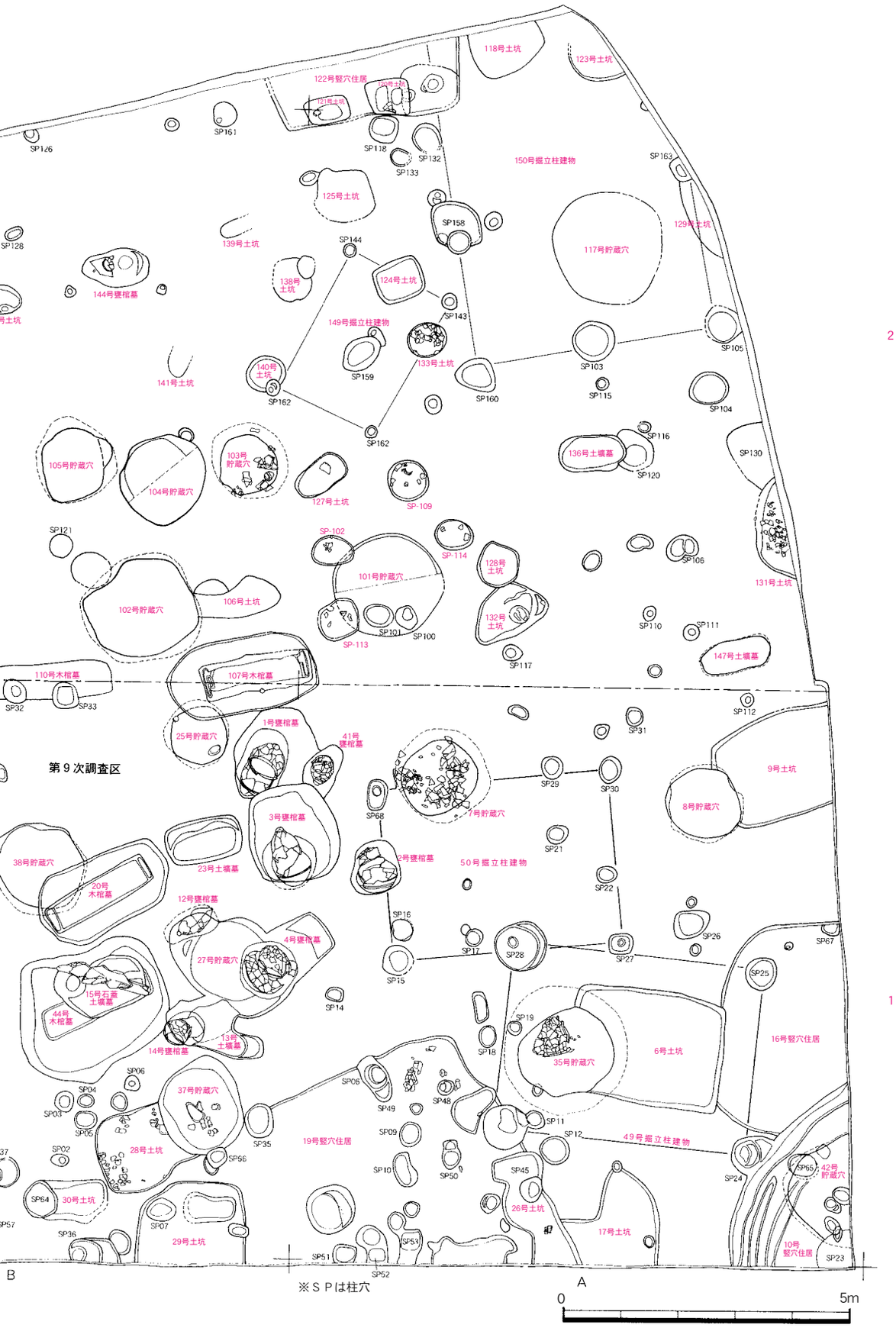
写真１　現地説明会風景



第２図　10 次調査区の位置図（1/1000）


第10次調査区
145号竪穴住居
137号土坑
111号貯蔵穴
100号溝
（Ⅱ区）
115号竪穴住居
152号貯蔵穴
116号甕棺墓
109号土壙墓
108号木棺墓
5号石棺甕棺
併用墓
24号甕棺墓
36号竪穴住居
154号土坑
114号貯蔵穴
113号
貯蔵穴
143号土坑
153号貯蔵穴
112号土坑
34号土坑
21号溝
22号溝
100号溝
（Ⅰ区）
142号
竪穴住居
146号貯蔵穴
33号土坑
32号土坑
31号土坑
18号土坑
C
B

第３図　９・10 次調査区



査区遺構配置図（1/100）

なお、報告書に記載した挿図、図版作成に携った関係者は、次のとおりである。

遺物　実測　吉田和彦、玉川剛司、井上誠二、北川貴洋、下森弘之、伊藤友美子、末國琢也、田中健一郎、鶴田貴大、手柴智晴（文化財学専攻大学院生）、豊田沙和美、（文化財学科学生）

製　　図　吉田和彦、北川貴洋、下森弘之、伊藤友美子、末國琢也（文化財学専攻大学院生）江上正高（大分市教育委員会嘱託）、藤野美音（日田市教育委員会調査補助員）

遺物　写真　玉川剛司（文化財学専攻大学院生）

調査の内容

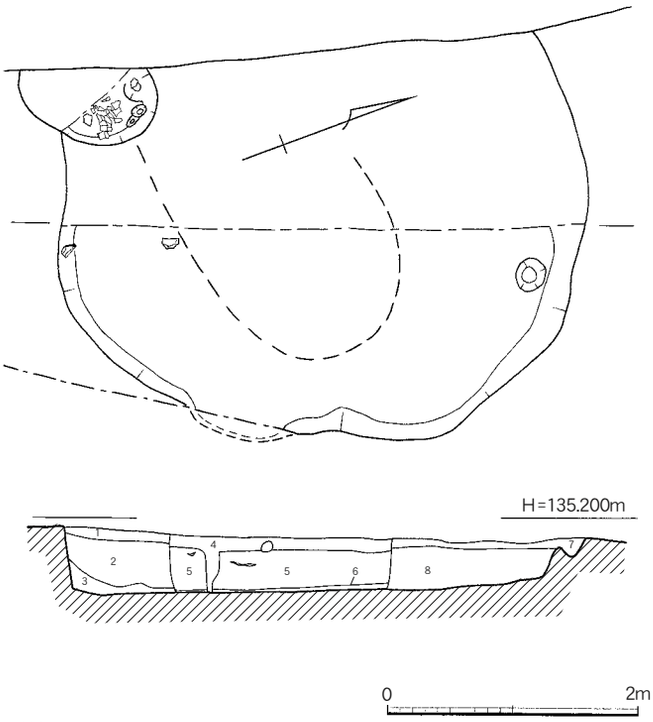
（1）　竪穴住居

竪穴住居は４基検出された。円形プラン１基と方形プラン３基である。円形プランの36号竪穴住居は100号溝に切られており、東側の約半分を掘り下げた。方形プランの竪穴住居は３基とも未調査区へ伸び、一部は別の遺構に切られているため全容が把握できなかった。

36号住居（第4･5図、図版４）

Ｃ１区の北東部で検出された円形の竪穴住居址である。９次調査では36号土坑として調査したが、10次調査で全体のプランが明らかになった。保存の関係で遺構の東半部しか掘っていないが、現状では床面に柱穴・炉址などは検出されていない。154号土坑が中央部を掘り込んでおり西側を143号柱穴と100号溝に切られている。規模は径４ｍ、深さは検出面より0.29～0.54m を測る。床面はほぼ平坦であるが南側のレベルがやや低くなっている。土層の堆積状況をみると、第３層が床面に薄く広がり、第２層と第８層が厚く堆積し、第１層と第７層がそれらの上に堆積する。その後に、154号土坑が中央部に掘り込まれ、第６層と第５層が堆積し、さらに第４層が第５層の上に堆積する。出土遺物は、甕・壺・器台などの土器の他、砥石などの石器がみられる。遺物は上層に多くみられ、下層になるにつれて少なくなる。また、掘り下げ中に154号土坑の存在が確認されたが、別遺構としての遺物取り上げは行っていない。

第5図は出土遺物である。３～７・10は上層、８は中層、１・２は下層より出土している。その他は一括出土である。上層は第２層と第８層の上半部、中層は同層の中位、下層はそれ以下である。遺物の取り上げは厳密には土層と対応していない。また、５と８は調査及び整理の過程で154号土坑に含まれることが明らかになったがここでは一括して報告しておきたい。１～３は如意状口縁を呈する甕である。１は口縁部下に１条の沈線を巡らす。復元口径は25.8cm を測る。調整は外面にタテハケ後ナナメハケ、内面にナデを施す。３は復元口径20cm を測り、口縁端部を水平に引き伸ばす。調整は外面にタテハケ、内面にナデを施す。２も口縁部下に１条の沈線を巡らす。復元口径は24.4cm を測る。調整は外面にタテハケ、内面にナデを施し、一部に指頭圧痕が残る。胎土に１～２㎜の金雲母を含む。４･５は鋤先状口縁を持つ壺である。４は口縁部が内傾し、上面は平坦で、口縁端部はわずかに跳ね上げ状になる。復元口径は31.4cm を測る。調整は、外面にヨコナデ、ヘラミガキの後、縦方向への５本単位の暗文を施す。内面にはヨコ方向へのヘラミガキが施されている。５も鋤先状を呈する口縁部である。上面はやや窪み、口縁端部はわずかに跳ね上げ状になる。復元口径は33.2cm を測る。外面調整は摩耗のため不明、内面はナデ調整が施されている。



（層序）
1層　暗茶褐色土（4より砂質）
2層　褐色粘質土（1cm前後の地山ブロックや炭をまばらに含む）
3層　褐色粘質土（1cm以下の地山ブロックや炭が混入する。2よりやや暗い）
4層　暗茶褐色砂質土（炭がまばらに混入する。）
5層　茶褐色粘質土（2cm以下の地山ブロックを濃密に含み5mm以下の炭がまばらに混入する）
6層　暗黄茶褐色土（2cm以下の地山ブロックを含む）
7層　黒茶褐色砂質土
8層　淡茶褐色砂質土（2cm以下の地山ブロックが混入する）

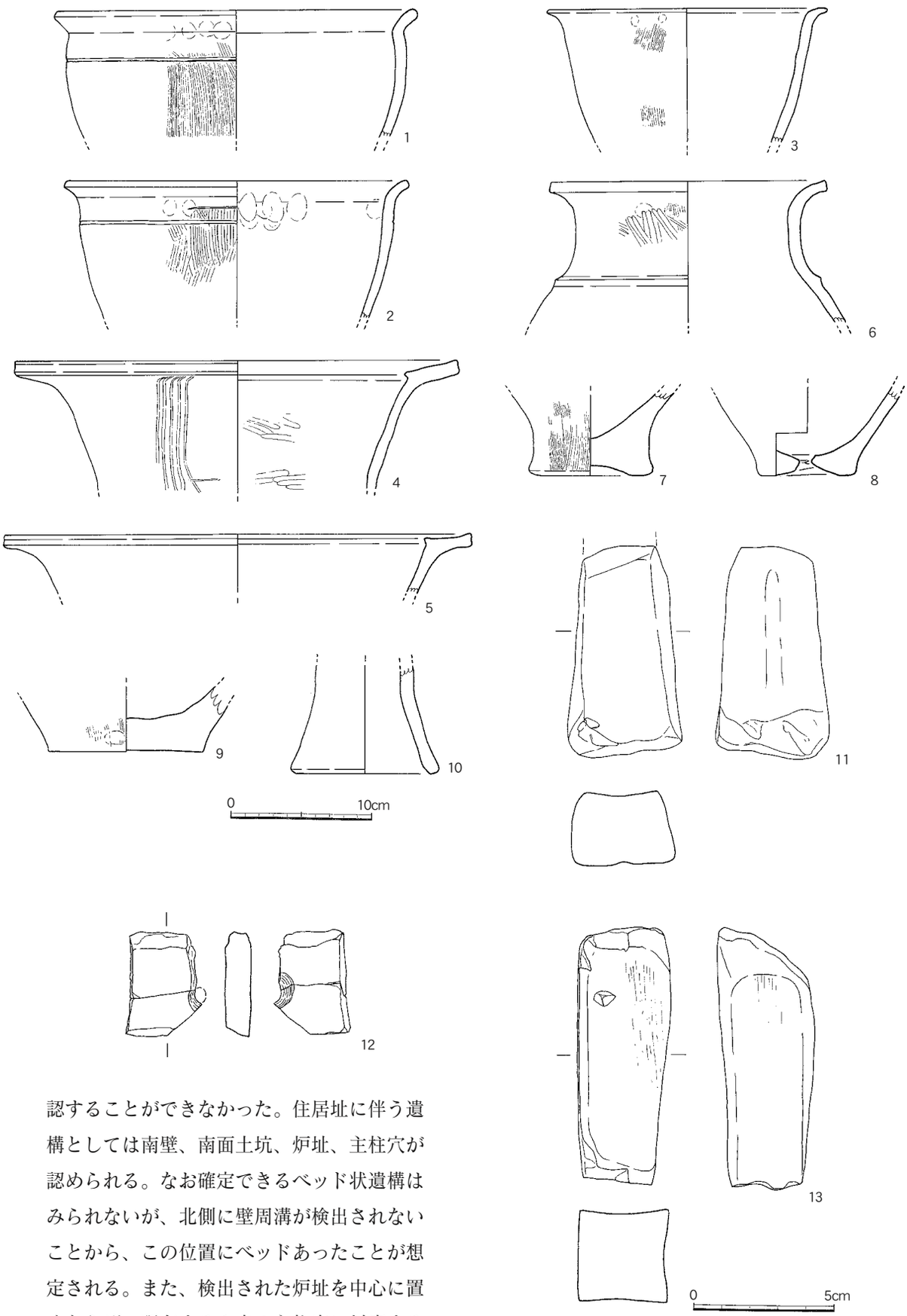
第4図　36号竪穴住居実測図（1/60）

6は壺で、口縁部から胴部にかけての破片である。頸部の締まりは弱く、外反する口縁端部は平坦に仕上げる。胴部上位には1条の三角突帯を巡らす。復元口径19.8cmを測る。調整は外面にタテハケ後ヘラミガキを施す。内面は摩耗のため不明である。胎土に1～2mmの金雲母を含む。154号土坑の上層に含まれる遺物である。7は甕の底部で上げ底を呈す。復元底径は8.8cmを測る。調整は外面にタテハケ、内面にナデを施している。8は甕の底部で、底の中央部に径9mmの焼成後の穿孔が認められる。底径は7.1cmを測る。調整は内外面とも摩耗のため不明である。胎土に石英を含む。9は甕の底部で平底を呈する。復元底径は11cmを測る。調整は外面にタテハケ後ナデを施しており、一部に指頭圧痕が残る。内面は摩耗のため不明である。この底部は154号土坑の中層から出土したものである。10は器台の下半部であり、復元底径は10.6cmを測る。調整は内外面とも摩耗のため不明である。11･13は砂岩製の砥石である。11･13ともに全面に研磨した痕跡が残るが、11は片面に棒状のものを研磨したような凹みが確認できる。12は周辺部が全て欠損しているが、穿孔の一部が残存していることから、絹雲母片岩製の石庖丁であろう。

36号竪穴住居からは、上層で須玖Ⅰ式、中層から下層にかけて板付Ⅱ式土器の新相段階や城ノ越式土器が出土している。下層では、1・2など如意状口縁を呈し、端部下半に刻み目を施す甕も出土している。城ノ越式土器も含まれることから、時期的には弥生前期末から中期初頭に位置づけられよう。切り合い関係にある154号土坑は中期初頭以降の時期と考えられる。須玖Ⅰ式土器は154号土坑が埋没する段階で混入したものであろう。36号竪穴住居は、円形プランを有し、周壁もほぼ垂直に立ち上がるが、炉址や主柱穴などは検出されていない。住居址としての要素に欠けるが、全体の形状から竪穴住居址としての可能性を考えておきたい。（内藤・松竹）

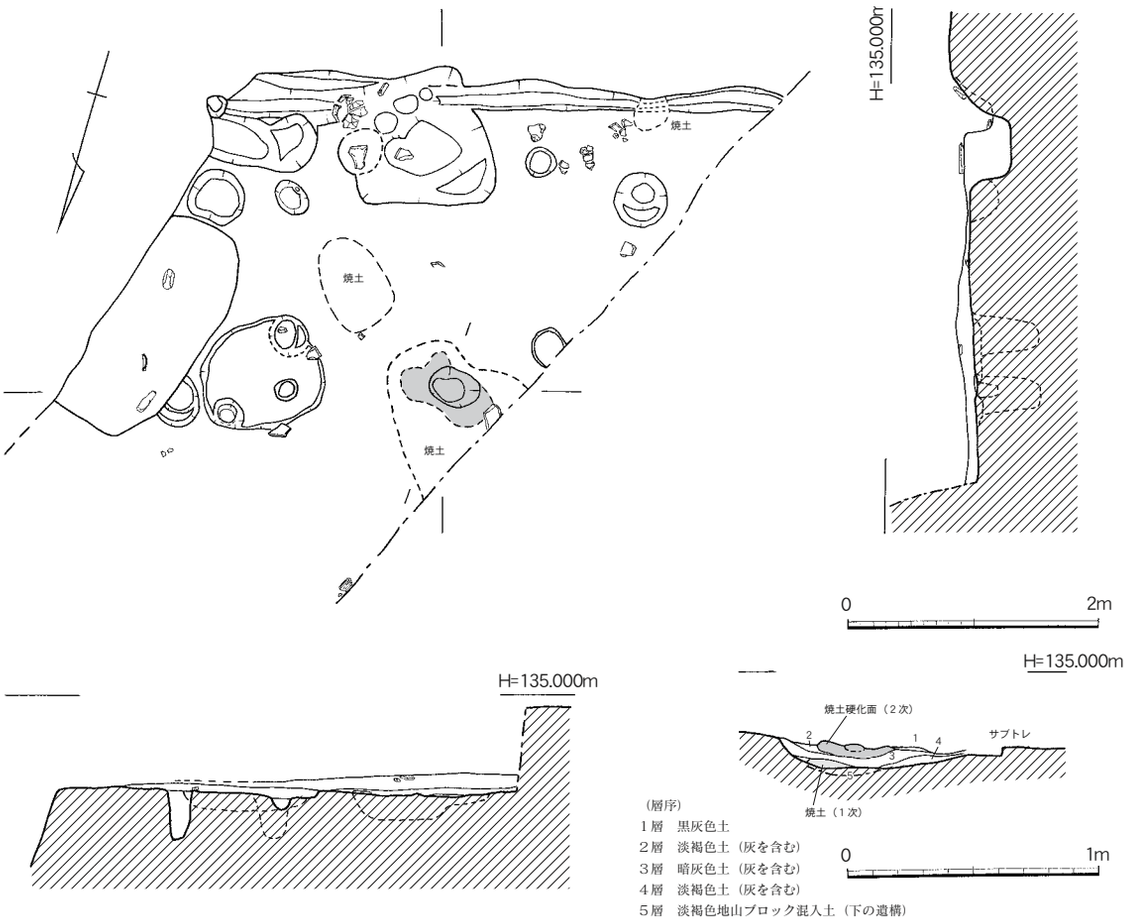
115号住居（第6・7・44図、図版5～7）

C2区の西側で検出した竪穴住居趾である。本住居址は、100号溝に東部を切られ、西半部は調査区域外に広がっている。また、削平や撹乱を受け遺存状況は悪く、住居址の全体的なプランを確

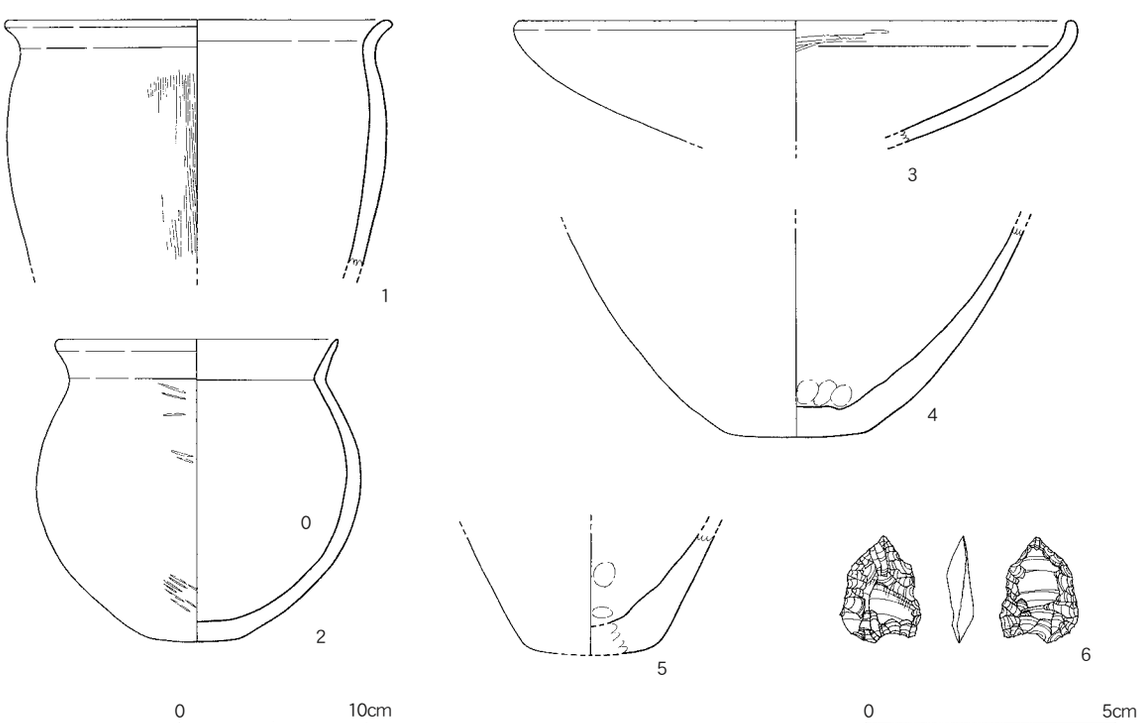


認することができなかった。住居址に伴う遺構としては南壁、南面土坑、炉址、主柱穴が認められる。なお確定できるベッド状遺構はみられないが、北側に壁周溝が検出されないことから、この位置にベッドあったことが想定される。また、検出された炉址を中心に置くならば、現存する１本の主柱穴に対応する

第５図　36 号竪穴住居出土遺物実測図（1/2・1/4）



第6図　115号竪穴住居実測図(1/60)、 炉址土層断面図(1/30)



第7図　115号竪穴住居出土遺物実測図（2/3・1/4）

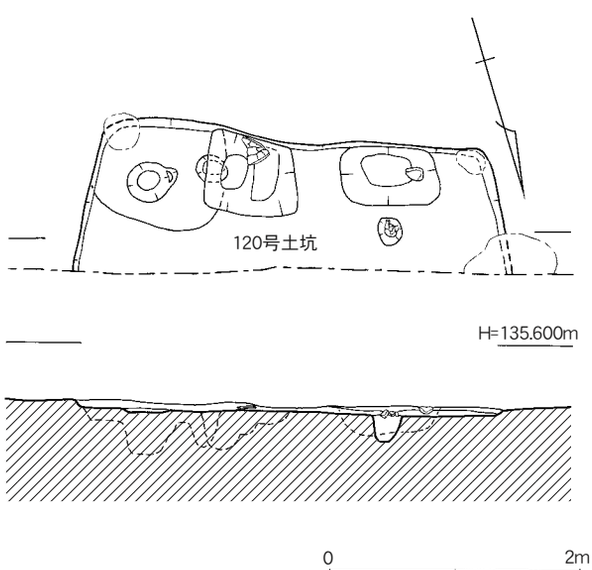
もう１本は、調査区外に位置するものと考えられる。さらに壁周溝、南面土坑の位置関係から、２本柱の長方形プランが想定される。炉址は焼土の硬化面の下に暗灰色灰層を挟み、その下に焼土が認められることから炉を作り替えた事がわかる。炉周辺では焼土や炭が検出された。また、北壁が想定される付近には、凝灰岩質の砂が床面に敷かれているのを確認した。これは、別の住居址の床面の可能性がある。

出土遺物では甕、壺、高坏などの土器や数点の石器がみられる。第７図１は復元口径20.8cm を測る甕である。外面にタテ方の向ハケメ調整を施し、内面はナデ調整を施す。２は口縁部が緩いくの字状に屈曲し、胴部に丸みを帯びる小型の甕である。最大径は胴部中位にあり、凸レンズ状の底部を有する。口径15cm、器高16.1cm、底部径６cm を測る。外面にはタタキが施され、その後ヘラミガキが加えられている。胎土に赤色粒子を多く含む。３は坏部先端が内側に若干丸みをもち屈曲する豊前系の高坏である。復元口径30cm を測り、内面にヘラミガキが施されている。４は凸レンズ状の底部から体部にかけ、内弯ぎみに立ち上がる甕である。底径6.8cm を測る。内外面ともにナデ調整が施され、内底面に指頭圧痕が残る。５は甕の底部で、底面は凸レンズ状を呈する。底径７cm を測り、内面に指頭圧痕が残る。６は埋土内より出土した駒形を呈する黒曜石製の打製石鏃である。主要剥離面を残し、周縁から調整剥離が加えられている。115号住居出土の甕は底部が残存し､やや凸レンズ状を呈することから下大隈式土器の新段階に位置付けられよう。したがって、弥生後期後半と考えることができる。115号竪穴住居は後期後半から終末に近い時期の100号溝に切られており、時期的にも齟齬しない。（松竹・米村）

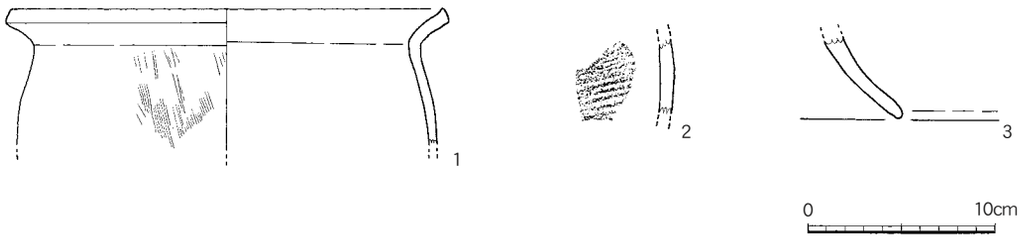
122号住居（第８・９図、図版７）

Ａ２区の北西部で検出した。規模は調査区内で東西3.2ｍ、南北1.1ｍを測り全体の約３分の１弱を確認することができた。プランは方形であろうと考えられる。削平が激しく、また、後世の柱穴・撹乱によって切られているため遺存状況は悪く、住居址に伴う主柱穴は確認されなかった。また、南面土坑として確定できるものもみられなかった。

出土遺物は、甕形土器の破片がみられ、検出面近くに、ややまとまっていた。第９図１はくの字状を呈し、跳ね上げの口縁端部を有する甕である。復元口径22cm を測る。調整は器面の摩耗が激しいが、わずかに認められ、外面にタテハケ、内面にナデを施す。１は住居址床面下で検出された120号土坑から出土した破片と同一固体であることから、この甕は本来120号土坑に属するものと考えられる。口縁部の形態的特徴から中期末に位置づけられよう。２は検出面から出土した甕の胴部で、外面にタタキが施されている。この他にも床面近くで出土したタタキを施す在地



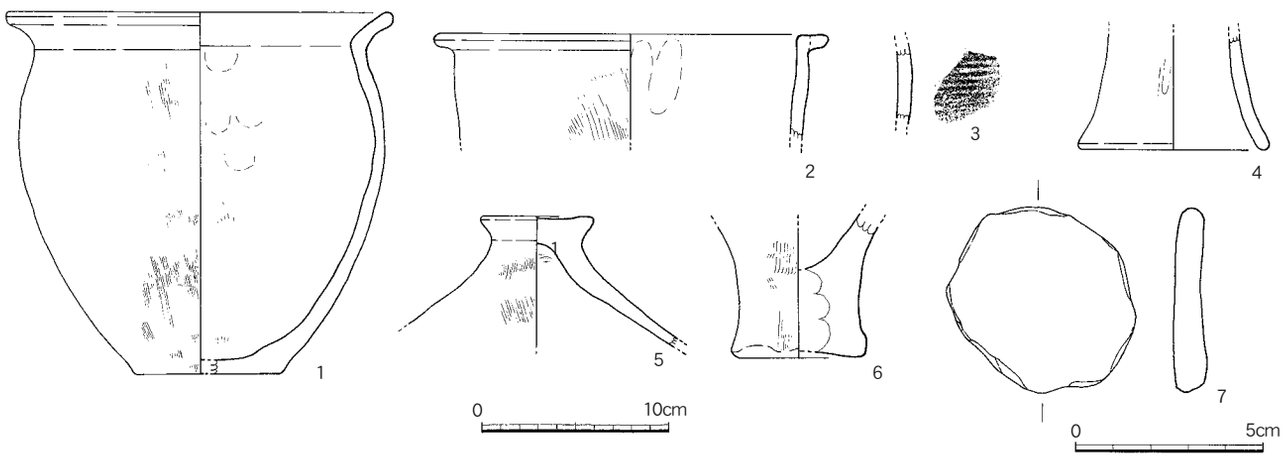
第８図　122 号竪穴住居実測図（1/60）



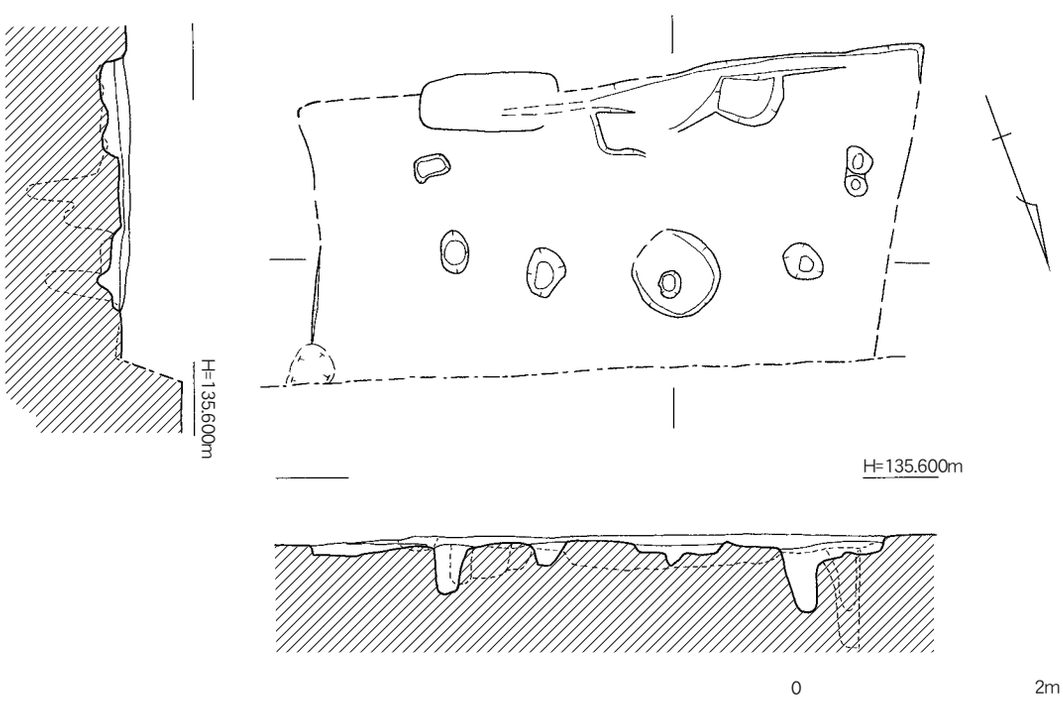
第９図　122 号竪穴住居出土遺物実測図（1/4）

産の長胴甕片が出土している。３は高坏の脚部である。内外面ともにナデ調整が施される。122号竪穴住居は、タタキを施す長胴甕が出土することから、後期終末に近い時期と考えることができる。

（松竹）



第 10 図　142 号竪穴住居出土遺物実測図（1/2・1/4）



第 11 図　145 号竪穴住居実測図（1/60）

142号住居（第10図）

Ｃ１区の南西隅で、住居址と考えられる方形のプランを確認した。大部分は調査区外へ広がるため、約３分の１程度を確認したにすぎない。また、検出面の半分を146号貯蔵穴に切られている。未掘であるため柱穴など住居址に伴う遺構は確認できなかった。

遺物は検出面から、甕形土器などが出土している。第10図１はくの字状を呈する口縁を持つ甕である。復元口径20.6cm、底径7.８cm、器高19.2cm を測る。２・６は城ノ越式段階の甕口縁部と底部、３はタタキの残る長胴甕片、４は器台、５は摘み端部が張りだす甕蓋、７は土製加工品である。調整は概して外面はタテハケ、内面はナデ調整で指頭圧痕が残るものが多い。これらの遺物は形態的特徴から弥生時代中期初頭から後期後半までの範囲を含んでいる。（松竹）

145号住居（第11図、図版８）

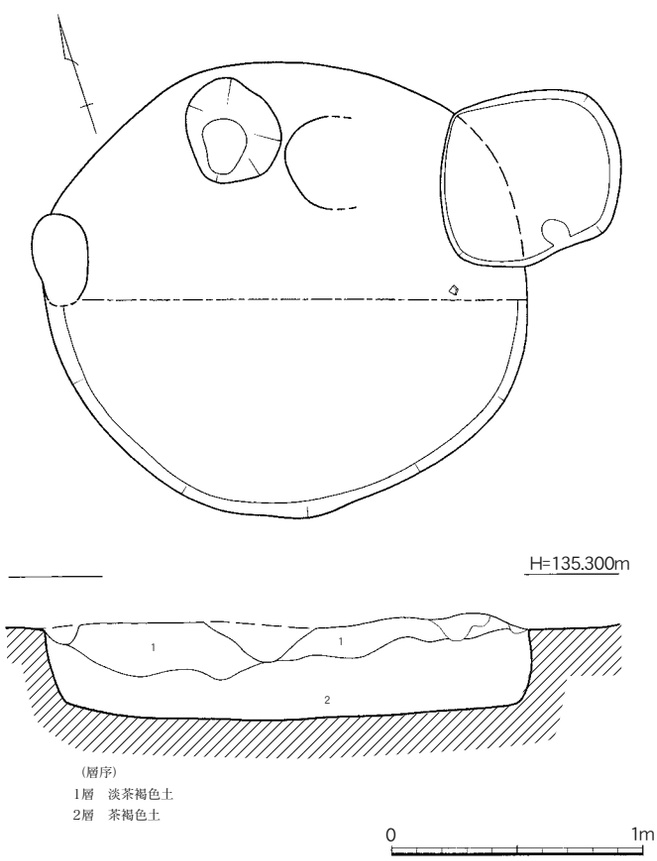
Ｂ２区及びＣ２区の北側で検出された竪穴住居址である。規模は調査区内で東西５ｍ、南北2.2～2.6ｍを測り、全体の約２分の１の大きさを確認できた。遺存状態は遺構検出面から0.05m 前後と悪く、また、残存する多くの部分も後世の柱穴や撹乱によって切られている。住居址に伴う遺構では炉址、壁周溝が確認されている。炉址は径0.7m、深さ0.07m で皿状に浅く窪み、周縁は赤変している。炉址を中心に置けば、約５ｍの方形プランが想定できる。壁周溝は南壁面に沿って、東西方向にのびているのが確認されており、残存部は長さ約３ｍ、幅約0.16m を測る。また、北側の調査区境界に接する断面に落ち込みがみられることから東壁面の周溝の存在が想定できる。南面土坑は径0.4～0.5m の不整形で南側の周溝に接する。時期については、図示できる遺物がないことと数も限られているため断定できないが、そのなかで後期後半代から終末に近い時期の遺物が散見されることから、145号住居も同時期に位置づけられるのではなかろうか。（松竹）

(2) 貯蔵穴

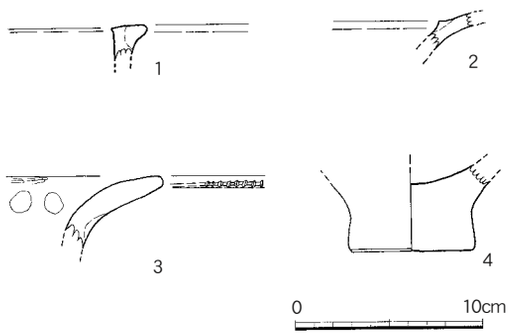
貯蔵穴は13基検出された。９次調査の続きで調査区中央部から東側にかけてと空白地帯を挟んで西側に分布している。保存を前提とした確認調査のため、プランのみ確認したものが幾つかある。

101号貯蔵穴（第12・13図、図版８）

調査区の東側で検出された貯蔵穴である。遺構は上面を削平され、さらに100・101号柱穴、102・113号貯蔵



第 12 図　101 号貯蔵穴実測図（1/30）



第13図　101号貯蔵穴出土遺物実測図（1/4）

穴に切られ、遺構の南半分は未掘である。規模は上面径1.29m、深さ0.23m、底径1.23mを測る。埋土は上層（1層）、下層（2層）に分けられる。

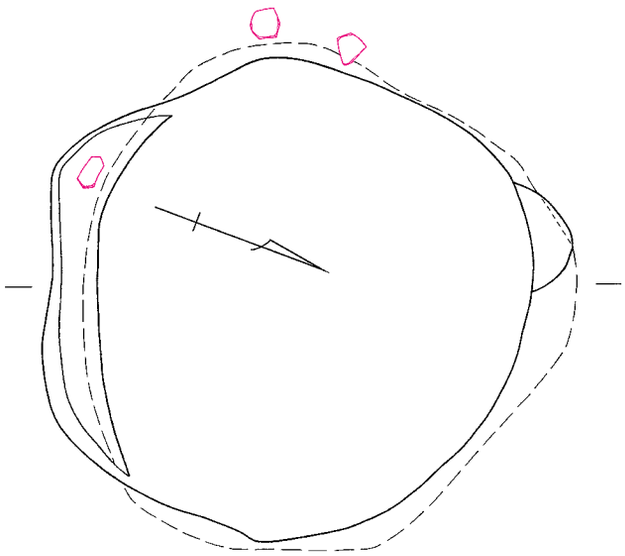
13図1は甕の口縁部で短い逆L字状を呈する。口縁部には粘土接合痕が見られ、外面には横ナデによる調整が確認できる。2は周防灘沿岸の影響を受けた壺の口縁部である。口縁端部を欠き、内面に1条の突帯を巡らしている。また突帯の接合痕が確認できる。3は如意状口縁を持つ甕である。外面はナデによる調整があり、口縁下端部には刻目が施されている。内面上部には横方向のミガキによる調整、下部には指頭圧痕が確認できる。4は甕の底部で復元底径は6.4cm、残存器高4.6cmを測る。平底で器壁が厚く外面には縦ハケによる調整が確認できる。胎土には黒曜石が混入している。（末國）

102号貯蔵穴（第14・15図、図版9）

B2区の南側中央部で検出された大型の袋状貯蔵穴である。平面は略円形を呈し、上面径は1.5m前後である。掘り下げ後、上面が崩落したので、実測図は径1.8m前後になっている。遺構の形態は上位が窄まり、オーバーハングしながら中位で最大径（2.2×2.4m）をとり、再度、ゆるやかに窄まりながら床面に移行する。床面の径は、1.8×2.2mを測る。検出面からの深さは2.35mで、床面はほぼ水平である。埋土は、上層（1～4層）、中層（5～13層）、下層（14～21層）、最下層（22～27層）のほぼ4層群に分けられる。第22層の灰茶褐色粘質土は床面近くに堆積し、最大の厚さは約80cmを測る。炭化物は認められないが、中層から獣骨片が出土している。また、他の遺構に比べ、黒色磨研土器や条痕文を有する縄文土器がやや多く混入する。

第15図は出土土器と石器である。2～6・10～12・15～17が上層から、1・7～9・13・14が中層よりそれぞれ出土している。1は外傾する口縁を有し、胴部は膨らみをもたず直線的にのびる甕である。復元口径は21.4cm、残存器高7cmを測る。2・3は口縁部外面を短く逆L字状に肥厚させた甕で、胴部上位に沈線を1条巡らす。2は復元口径21.8cmを測る。3は復元口径20.3cm、胴部径22cmを測る。4は逆L字状の口縁部を呈する甕である。外面には縦方向のハケの後に横方向のミガキによる調整を、内面には口縁部付近に指頭圧痕、胴部には横方向の磨き調整が施されている。5はくの字状口縁を呈する甕である。胴部上位には1条の三角突帯を巡らす。6は頸部が締まり、外反する口縁部をもつ壺である。口縁端部は僅かに窪み、頸部下位に1条の三角突帯を巡らす。復元口径は12.8cmを測る。7・9は肥厚した甕の底部である。底部は窪み、外面には縦方向のハケが施されている。7は復元底径6.9cm、残存器高7.5cmを測る。9は底径8cm、残存器高9.8cmを測る。8は壺の肩部で沈線により区画がなされ、乱れた斜格子目文と連続弧文が施文されている。なお、8は整理の段階で9次B地点の38号貯蔵穴出土遺物（第43図14）と接合することが判明した。10・12は平底を呈する甕である。10は薄い平底で、僅かにくびれがあり、復元底径8cm、残存器高9.2cmを測る。外面に縦方向のハケ調整が施される。12は底径9.4cm、残存器高5.8cmを測る。11は甕の胴部から底部にかけての部分である。外面には縦方向

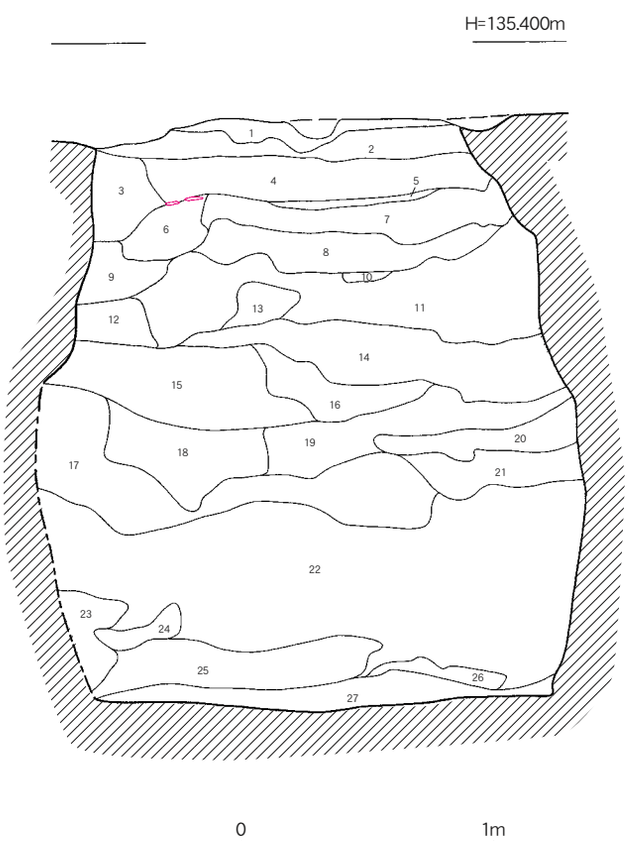
のハケ、内面にはヘラケズリの後、ミガキ・ナデが施されている。13は上げ底で甕の底部であろう。以上の土器の器面調整は、甕が縦方向のハケ、壺にはヘラミガキが施される。14は凝灰岩製の円盤形を呈す紡錘車である。欠損により中央部の穿孔の痕跡は窺えない。15はサヌカイト製の小型打製石鏃、16は頁岩製の抉入柱状片刃石斧の破片、17は緑色片石製の磨製石斧である。
(米村・末國)



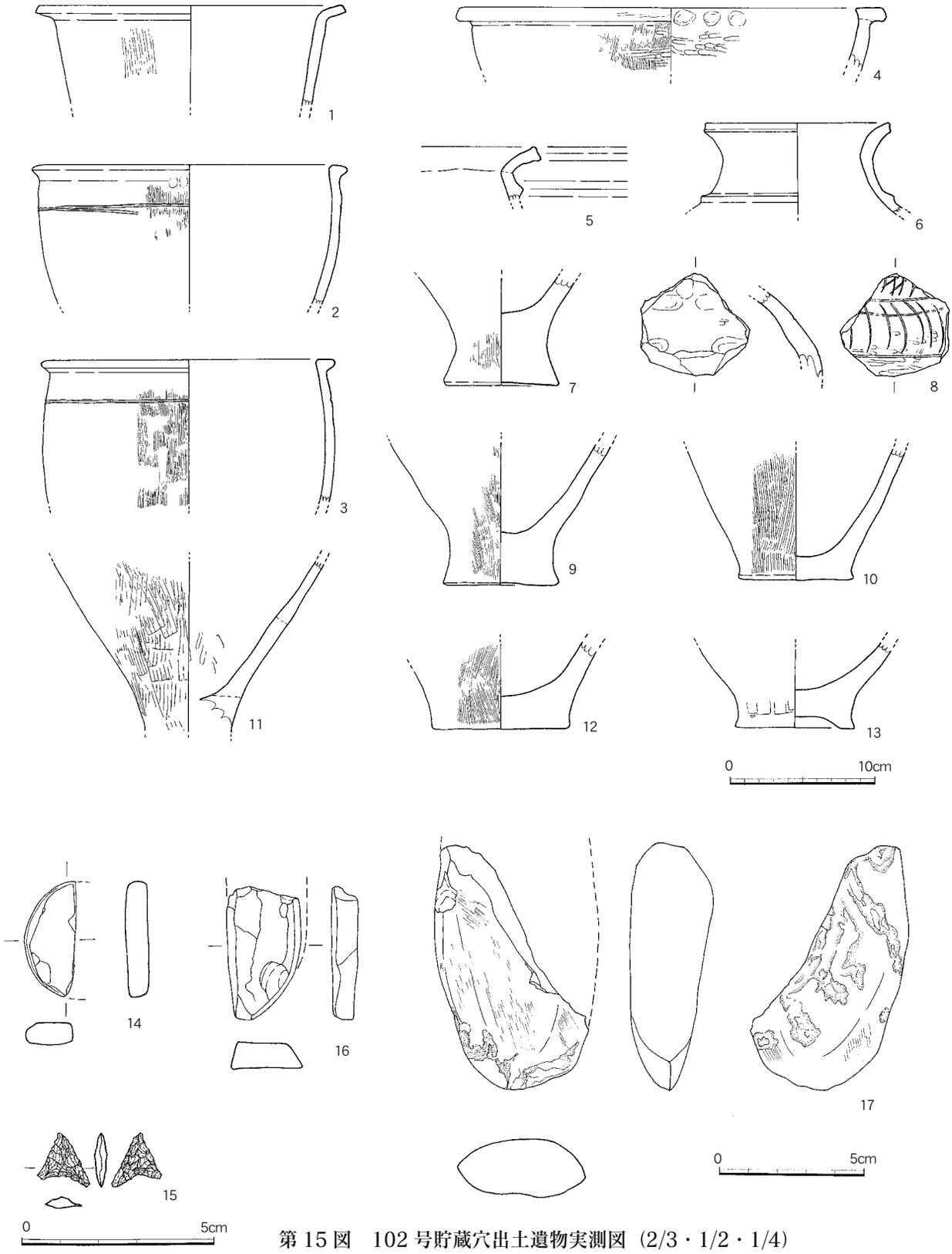
103号貯蔵穴
(第16･17・20図、図版10・11)

Ｂ２区の中央部で検出した袋状貯蔵穴である。

(層序)
1層　暗褐色粘質土
2層　茶褐色粘質土
3層　茶褐色粘質土
4層　橙褐色粘質土
5層　橙色粘質土
6層　灰褐色粘質土
7層　明茶褐色粘質土
8層　明茶褐色粘質土
9層　暗灰褐色粘質土
10層　茶褐色粘質土
11層　黄灰褐色粘質土
12層　灰褐色粘質土
13層　褐色土
14層　明褐色粘質土
15層　明灰褐色粘質土
16層　明灰褐色粘質土
17層　暗灰褐色粘質土
18層　暗褐色粘質土
19層　灰褐色粘質土
20層　暗灰褐色粘質土
21層　灰茶色粘質土
22層　灰茶褐色粘質土
23層　橙褐色粘質土
24層　明褐色粘質土
25層　茶褐色粘質土
26層　明茶褐色粘質土
27層　明茶灰色粘質土



第 14 図　102 号貯蔵穴実測図（1/30）

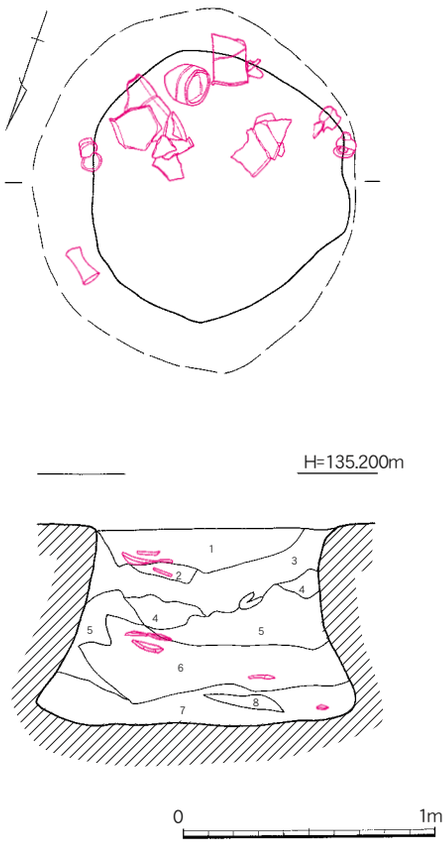


第15図　102号貯蔵穴出土遺物実測図（2/3・1/2・1/4）

上面は削平を受けているが、径1.1m、深さ0.8m、底径1.25mを測る。床面はおおむね平坦で、柱穴は認められない。埋土は大きく上層（第１～２層）、中層（第３～５層）、下層（第６層）、最下層（第７・８層）の４層群に分けることができる。第３～５・７層は地山ブロックが混入しており、

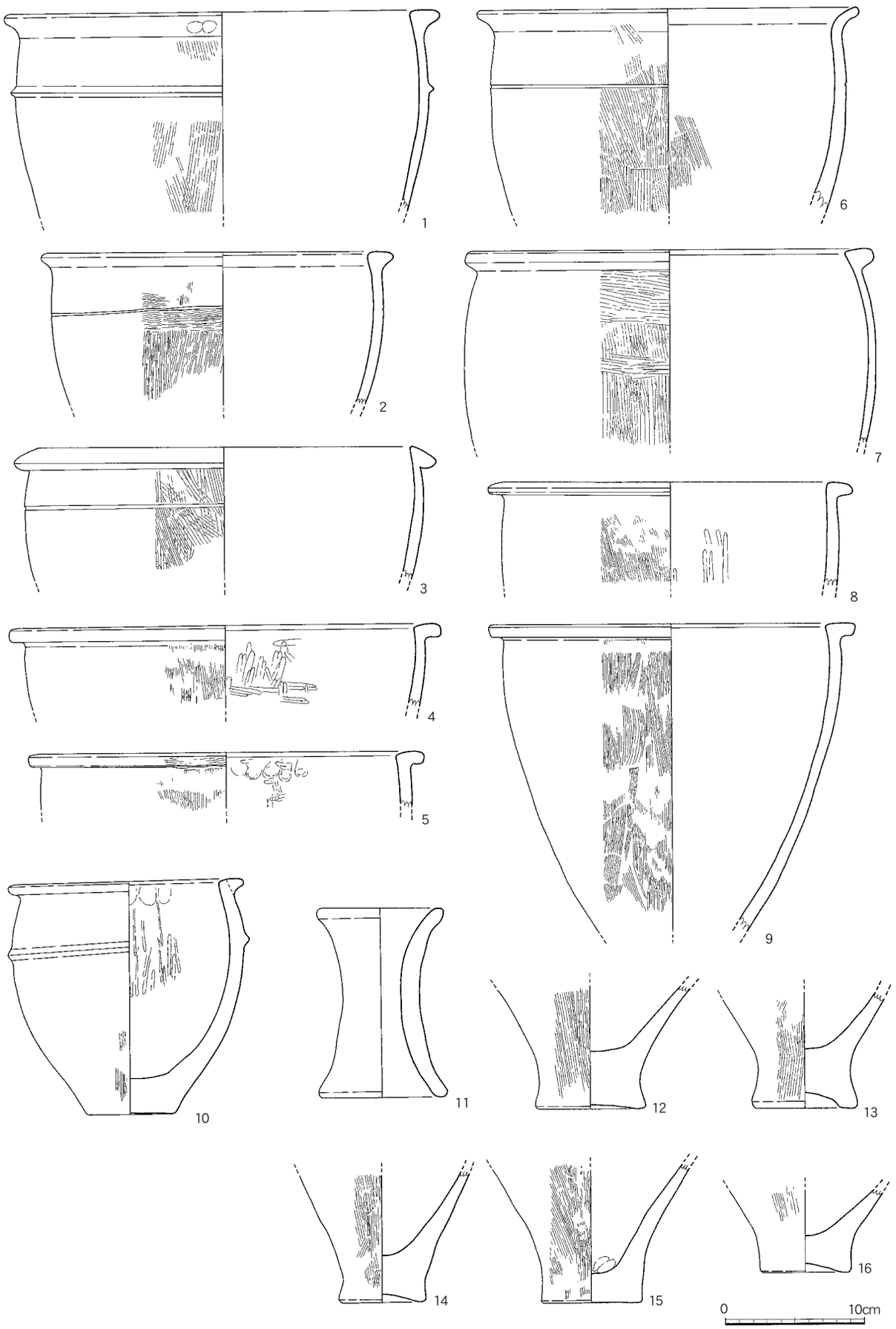
第５層の黄褐色粘質土は崩落土と考えられる。第６層には土器が集中して出土している。

第17図は出土土器である。３は上層、７は中層、１・２・５・６・８～10・12・13・15・16は下層、11は最下層より出土している。全体として、城ノ越式段階の甕が主体を占める。１・２・３は口縁外面を断面三角形状に肥厚させる。４・５・７・８・９は逆Ｌ字状口縁を呈する。１は口縁部下位に１条の三角突帯を巡らす。復元口径は31.4cm を測り、胎土に金雲母を含む。２は口縁部下位に１条の沈線を巡らせ、復元口径24.6cm を測る。３は垂れ下がり気味の口縁を呈し、口縁部下位に１条の沈線が巡る。４は復元口径21.0cm を測る。外面にタテ方向のハケメ調整、内面にミガキ調整を施す。５は復元口径28.4cm を測る。外面にタテ方向のハケメ調整、内面にミガキ調整、一部指頭圧痕も確認できる。６は如意状口縁で、口縁部内側に若干の稜がみられ、口縁部下位に１条の沈線が巡る。復元口径は27.4cm である。７は丸味をもつ胴部を有し、口縁部を肥厚させる。復元口径は29.4cm を測る。胎土には石英、赤色粒子、金雲母を含む。８は内面にナデ及びミガキ調整が認められ、復元口径24.4cm を測る。胎土に赤色粒子を含む。９は上面が平坦な口縁部を有し、復元口径は26.4cm を測る。10は完形に近い状態で出土し、外面に三角の粘土帯を貼り付け逆Ｌ字状に整形する。最大径は胴部上位にあり、その位置に１条の三角突帯が巡る。復元口径16.9cm を測り、内面にミガキ調整がみられる。外面は被熱により胴部上位が黒変し、底部付近は赤変する。胎土に粗い砂粒や赤色粒子を含む。色調はにぶい黄褐色を呈する。11はほぼ完形の単純に開く器台で、端部は丸くやや歪んでいる。器高13.8cm、口径9.1cm を測る。色調は浅黄橙色を呈する。12～16は甕の底部である。12は底がわずかに窪み、厚みのある底部で底径7.9cm、内底面に砂粒を多く含む。13は厚みのある上げ底の底部で被熱により、外面は赤変する。胎土には砂粒を含む。14は窪み底の底部で、底径6.2cm を測る。15は平底で、内面にヘラミガキが施され、底径7.2cm である。16は窪み底の底部で、底径6.4cm、胎土に金雲母を含む。第20図１・２も下層出土の甕底部である。１は厚みのある底部で外面はタテハケ、内面にはヘラミガキが施される。２は平底で厚みがあり、



（層序）
1層　黒色粘質土
2層　淡灰色軟質土
3層　暗黄褐色粘質土（多量の地山ブロックを含む）
4層　明黄褐色粘質土（地山ブロックを含む）
5層　暗黄褐色粘質土（3層と同じ）
6層　黒褐色粘質土（多量の土器片を含む）
7層　暗黄褐色粘質土（4層と同じ）
8層　灰褐色粘質土

第 16 図　103 号貯蔵穴実測図（1/30）



第 17 図　103 号貯蔵穴出土遺物実測図（1/4）

外面にタテハケを施す。

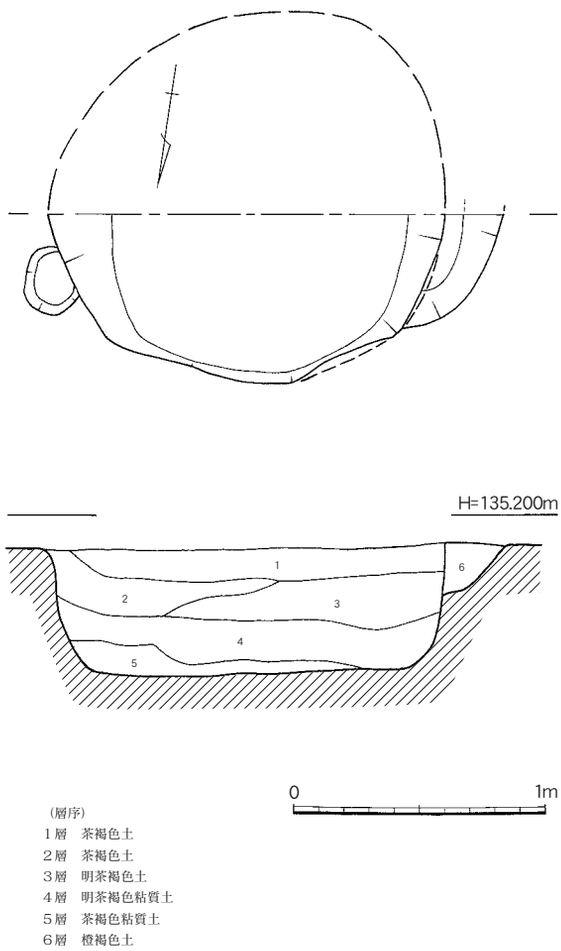
第６層に集中する土器はほぼ同時期に廃棄されたものとみられ、貯蔵穴の機能を失うと、廃棄土坑として利用されたものと推測される。また、ほぼ床面直上の器台や第６層の10は、完形に近い状態で割れることなく出土しており、注目される。貯蔵穴の使用停止時期については第６層に集中する土器から城ノ越式段階を下限とする時期が考えられる。（米村）

104号貯蔵穴（第18図、図版11）

調査区中央よりで検出された貯蔵穴であり、北側半分のみを掘り下げた。平面はほぼ円形を呈し、上面径は約1.5m、底面径は1.2～1.3m、深さは検出面から約0.6mを測る。底面はほぼ水平を呈している。この貯蔵穴の埋土は全体的に粘質はあるがしまりのない茶褐色土で構成され、各層に２～３cm以下の地山ブロックを含み、４層では肌色ブロックを含む。図化できる出土遺物はなかった。（下森）

105号貯蔵穴（第19図、図版12）

調査区中央よりで検出された袋状貯蔵穴である。平面は略円形を呈し、上面径は1.2～1.4m、床面は若干中央部に向かって窪むがほぼ水平で径は1.2～1.3m、深さは検出面から約1.1m、床面から約0.2mの位置で最大径に達し径1.5mを測る。埋土は1層が砂質、他の２～９層までが粘質となっている。１・４～７層では肌色ブロックを含み、４～６・８・９層では地山ブロックを含んでいる。４～６・１・８層では地山ベースの土質である。図化できる出土遺物はみられなかった。（下森）

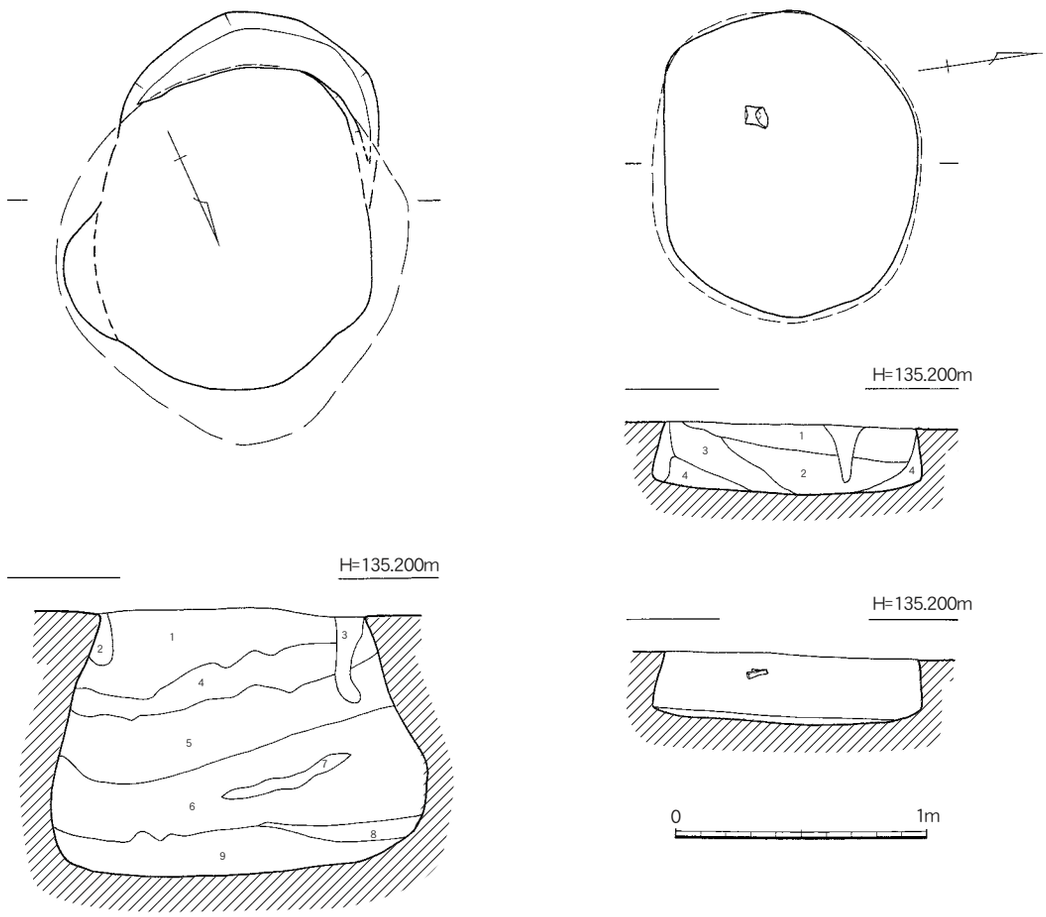


第 18 図　104 号貯蔵穴実測図（1/30）

111号貯蔵穴（19・20図、図版12・13）

調査区のほぼ中央で検出された貯蔵穴である。上面は削平されており、規模は径1.26×1m、深さ0.28m、底径1.24 ×1.08mを測る。床面は中央部がやや窪むが、おおむね平坦である。埋土の1層は、パサパサして柔らかく、焼土の小塊と炭化物を含み、土器を包含する。2層は貯蔵穴一括埋土で黄褐色ブロックを含む。3層は焼土と炭化物を多く含み、柔らかい。4層は自然流土である。図の左側壁面と中央右側には幅0.02m～0.24m、深さ0.23mの撹乱を受けている。

20図は出土土器である。3は上面から7cmほどで検出された甕の底部である。復元底径７cm、残存器高8.3cmを測り、窪み底を呈する。外面には縦ハケによる調整があるが、磨耗が著しく確



（層序）
1層　明淡茶褐色砂質土
2層　淡茶褐色粘質土
3層　茶褐色粘質土
4層　茶褐色粘質土（地山ブロック含む）
5層　淡茶褐色粘質土
6層　明淡茶褐色粘質土
7層　暗茶褐色粘質土
8層　暗茶褐色粘質土
9層　暗茶褐色粘質土（地山ブロック若干含む）

（層序）
1層　暗褐色土（焼土・炭化物若干含む）
2層　茶褐色粘質土
3層　暗茶褐色土（焼土・炭化物多く含む）
4層　淡茶褐色土

第19図　105号・111号貯蔵穴実測図（1/30）

認しにくい。内面には底部近くに指頭圧痕が確認できる。4は甕の底部である。残存器高は4.2cmを測る。外面は磨耗しており、調整を確認する事ができないが、内面は縦方向へのミガキによる調整が確認できる。中期初頭から前半代に属するものであろう。（末國）

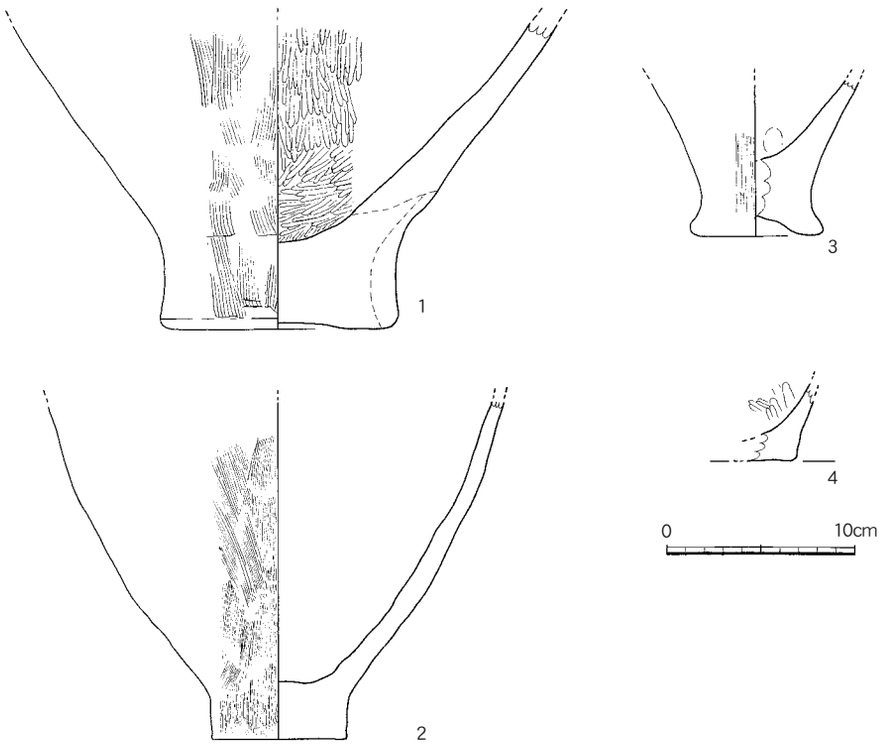
(3) 土坑・柱穴

主に調査区東側を中心に未掘のものまで含めて21基の土坑が出土している。小型のものが多く、円形、略円形、楕円形、長方形などのタイプがある。柱穴としたものは土坑と形状は同じであるが、さらに小型のものである。柱痕などを検出していないので厳密な意味での区分は難しい。

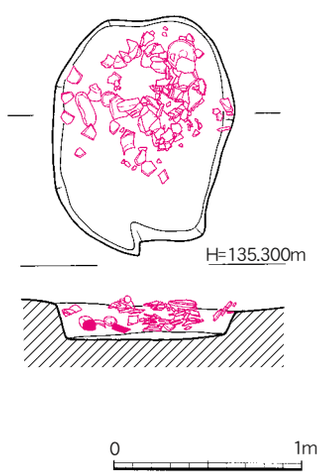
112号土坑
（第21～23図、
図版13・14）

34号土坑に隣接して検出された、長軸1.24m、短軸0.98m、深さ0.15～0.2mを測る、楕円形の土坑である。主軸はN63°Wである。

遺物は主に上層から土器･石器が出土した。第22図は蛇紋岩製のノミ形を呈する小型磨製石斧である。体部はやや湾曲し、刃部は湾曲した側が平坦に研磨され片刃に近い両刃となっている。調整の研磨は両面が横方向、側面は縦方向に施される。刃部には縦方向に使用痕と思われる擦痕が確認できる。第23図の１～３・６～11・13は甕である。１は復元口径24.4cmを測る。逆Ｌ字状口縁で外面はともに磨滅が著しく調整は不明である。２･３は外面に断面三角形の貼り付け突帯が巡る。２は復元口径26cmを測り、外面にタテ方向のハケメ調整、内面にナデ調整を施す。３は復元口径32cmを測り、内外面ともナデ調整が施される。６は底径８cmを測る。平底で厚みが強い。７は復元底径8.8cmで底面がやや窪む。８も底面がやや窪み底径7.5cmを測る。９は底径７cmを測る厚みの強い底部である。６～９は外面にタテハケを施し､内面はナデ調整である。10は底径5.4cmを測る小型の底部である。11は復元底径8.4cmを測る。同土坑から出土する他の甕とは異なり､上げ底が著しく、脚部が発達している。また、調整も外面がタテ方向のミガキ調整が施され、他とは異なる。13は厚みが少なく平底を呈する。底径11.8cmを測る。外面にタテ方向ハケメ調整､内面にナデ調整、一部指頭圧痕が確認できる。４･５･12は壺である。４･５は口縁部、頸部を欠損するが４は胴部に２条の断面三角形の貼り付け突帯が巡る。最大胴部径21.8cm、底径5.6cmを測る。外面は胴部中～下位にかけてミガキ調整、底部ではタテ方向のハケメ調整後にナデ調整､内面はハケメ調整後工具によるナデ調整が施される。５は底径4.4cmを測る。内面にナデ調整を施し、一部指頭圧痕も確認できる。12は復元底径7.9cmを測る。内面にナデ調整を施す。



第20図　103・111号貯蔵穴出土遺物実測図（1/4）



第21図　112号土坑実測図（1/40）

127号土坑（第24図、図版14）

調査区東から103号貯蔵穴の南東に隣接して検出された。長軸0.99m、短軸0.5m、深さ0.09～0.19m を測る楕円形の土坑である。主軸は N84°Ｅである。遺物は上層から礫が出土している。

128号土坑（第24図）

調査区東から132号土坑と切り合って検出された。長軸0.8m、短軸0.75m、深さ0.04～0.08m を測る不整円形の土坑である。主軸は N8°Ｅである。出土遺物は確認されなかった。

131号土坑（第24･25図、図版15）

調査区東端で検出された。遺構の東側が調査区域外のため全容は不明であるが、深さ0.04～0.09m の楕円形の土坑であると推測される。出土遺物は主に検出面に集中する。

第25図３～８は甕である。３は如意形の口縁を有し復元口径27.9cm、復元胴径27.8cm、復元底径8.65cm、復元器高33.5cm を測る。外面の口縁部下に沈線が巡る。磨滅が著しく、調整は不明瞭であるがタテ方向のハケメ調整とミガキ調整、口縁部直下に指頭圧痕が確認できる。底面形状は窪み底を呈する。４は復元口径33.2cm を測る。短い逆Ｌ字状口縁を持ち、外面に不定方向のハケメ調整が施される。５は復元口径36.6cm を測る。口縁端部は肥厚させ外面に断面三角形の突帯が１条巡る。タテ方向のハケメ調整が一部確認できる。内面はナデ調整が施される。６は底径８cm を測り、底面形状が凸レンズ状を呈する。外面にはタテ方向のハケメ調整、内面にはナデ調整が施される。７は底径８cm を測り、やや底面が窪む形状である。外面にはタテ方向のハケメ調整、内面にはミガキ調整、指頭圧痕が確認できる。８は欠損が著しいものの、復元底径8.2cm を測り窪み底を呈する。外面に不定方向のハケメ調整が施される。

132号土坑（第24･25図）

調査区東から128号土坑と切り合って検出された、底面に段を有する不整形の土坑で最深部は0.36m を測る。遺物は検出面から約0.1m 下にある１段目のテラス上から出土した。

第25図９は甕の口縁部で、復元口径32cm を測る。口縁端部は肥厚させ外面に断面三角形の貼り付け突帯を施す。調整はハケメ後ミガキが確認できる。内面にはミガキ調整、指頭圧痕が確認できる。

133号土坑（第24･27図、図版15）

調査区東から149号掘立柱建物と切り合って検出された。直径0.69m、深さ0.16～0.19m の円形の土坑である。

遺物は中層から上層に集中して出土した。第27図１は口径30cm を測る甕で、端部は短い逆Ｌ字状を呈し外面には沈線が巡る。沈線以下にはタテ方向のハケメ調整が施される。２は壺の下半部で底径8.4cm を測る。

137号土坑（第24図）

調査区中央北から検出された、最深部0.33m を測る不整円形の土坑である。出土遺物は確認さ

れなかった。

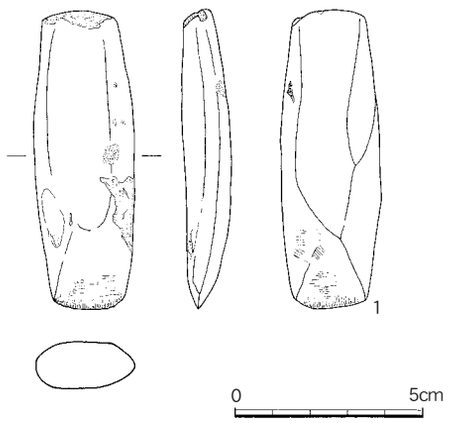
140号土坑（第24図）

調査区北東から149号掘立柱建物と切り合って検出された。直径0.71m、深さ0.1～0.15mの円形の土坑である。出土遺物は確認されなかった。

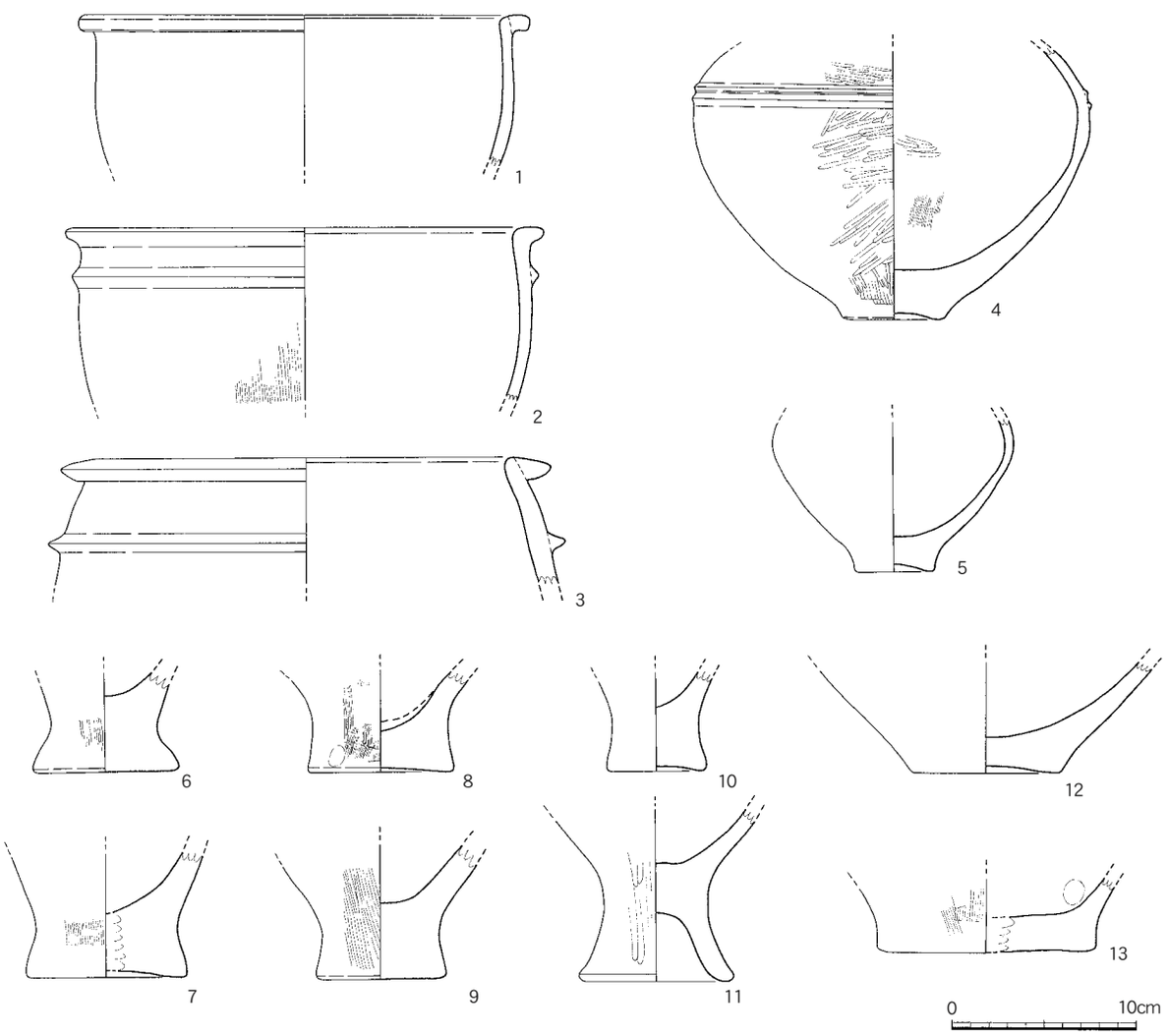
143号土坑（第24･27図、図版16）

調査区西から100号溝と切り合って検出された。100号溝に切られているため、一部分のみ掘り下げた。遺構の全容は不明である。

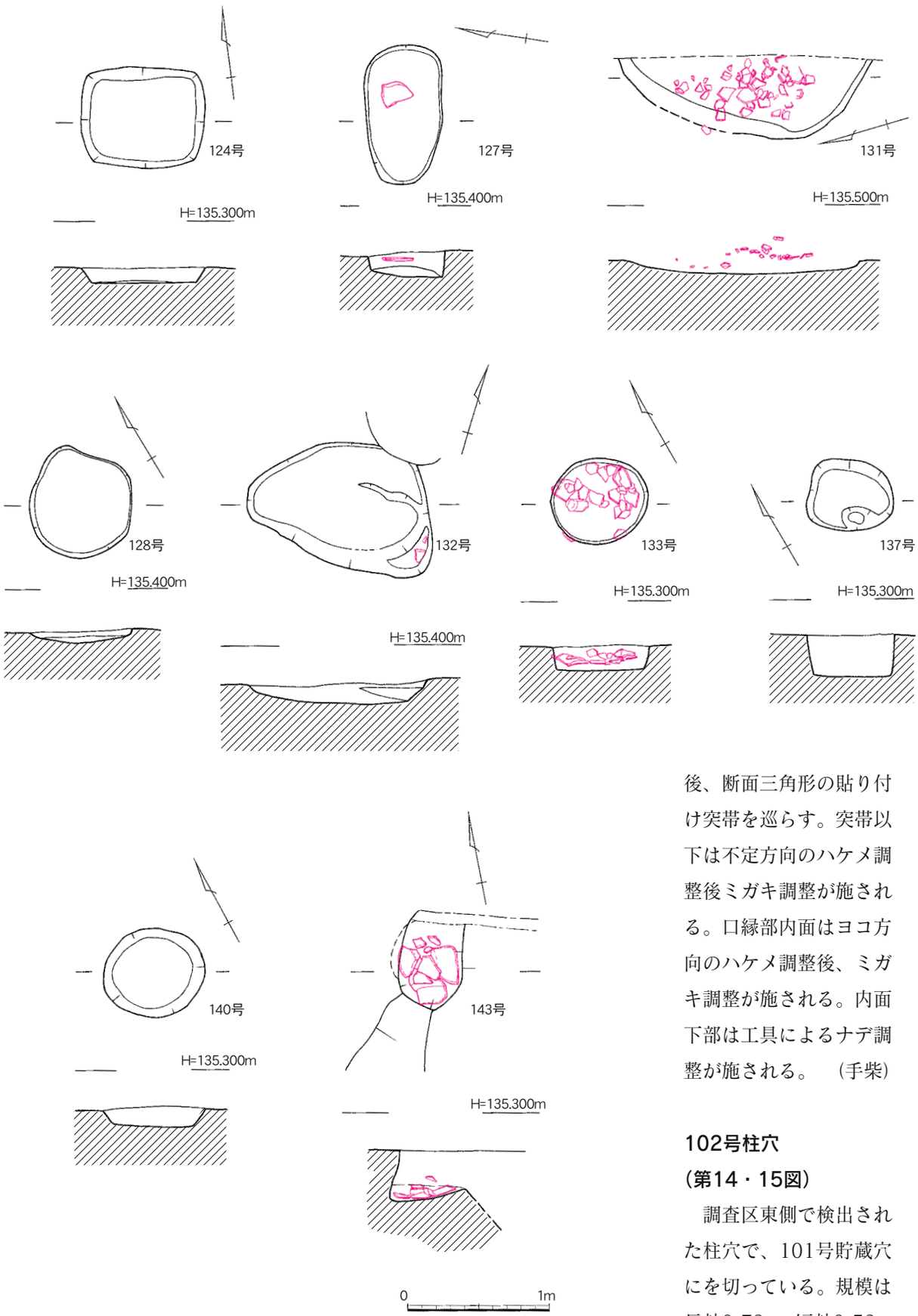
第27図３は復元口径24.9cm、復元胴部径41cmを測る壺である。口縁部は外反し、器壁が厚い。外面の頸部下にタテ方向のハケメ調整



第22図　112号土坑出土遺物実測図（1）(1/2)



第23図　112号土坑出土遺物実測図（2）(1/4)

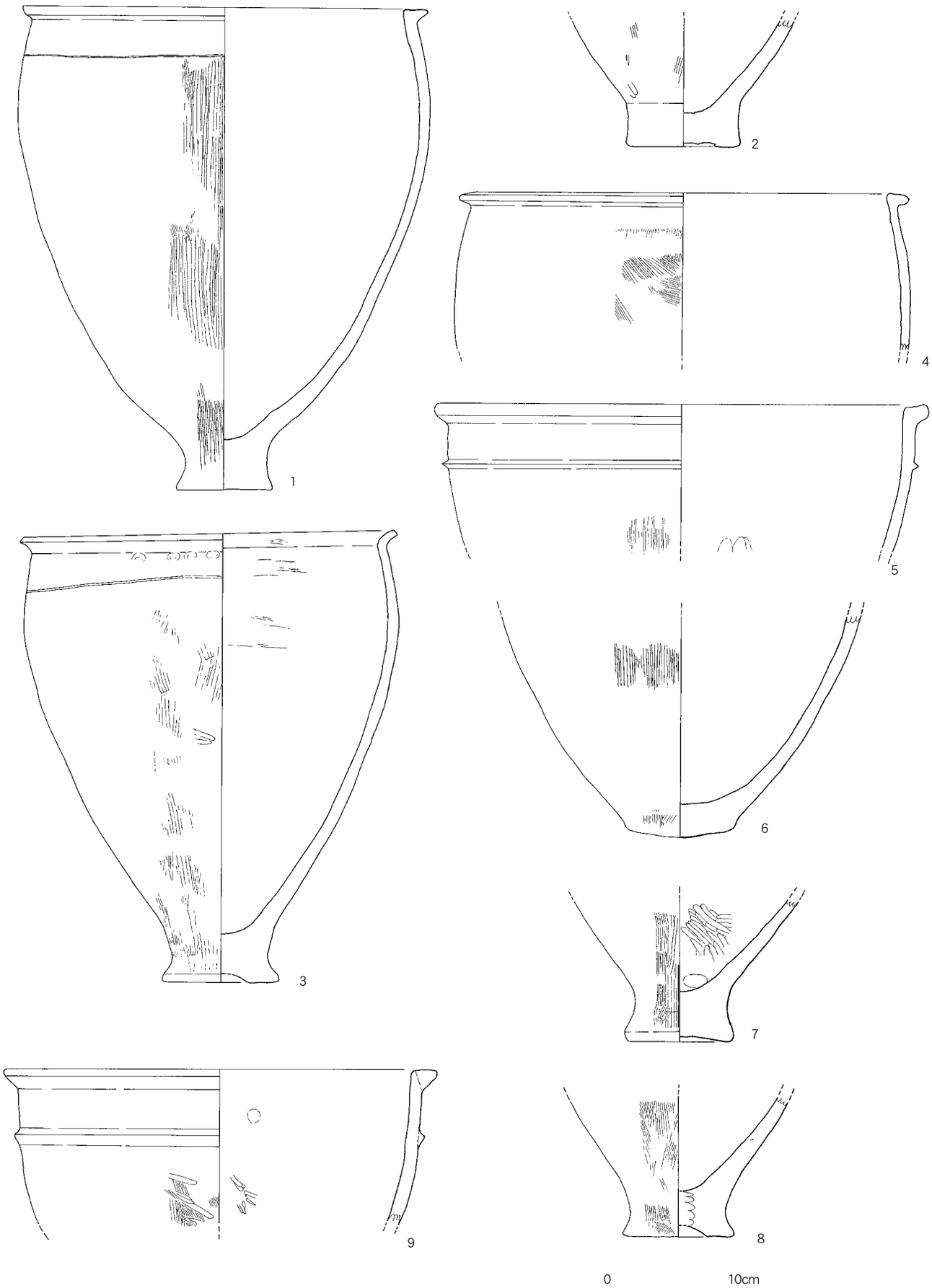


第24図　127・128・131～133・137・140・143号土坑実測図（1/40）

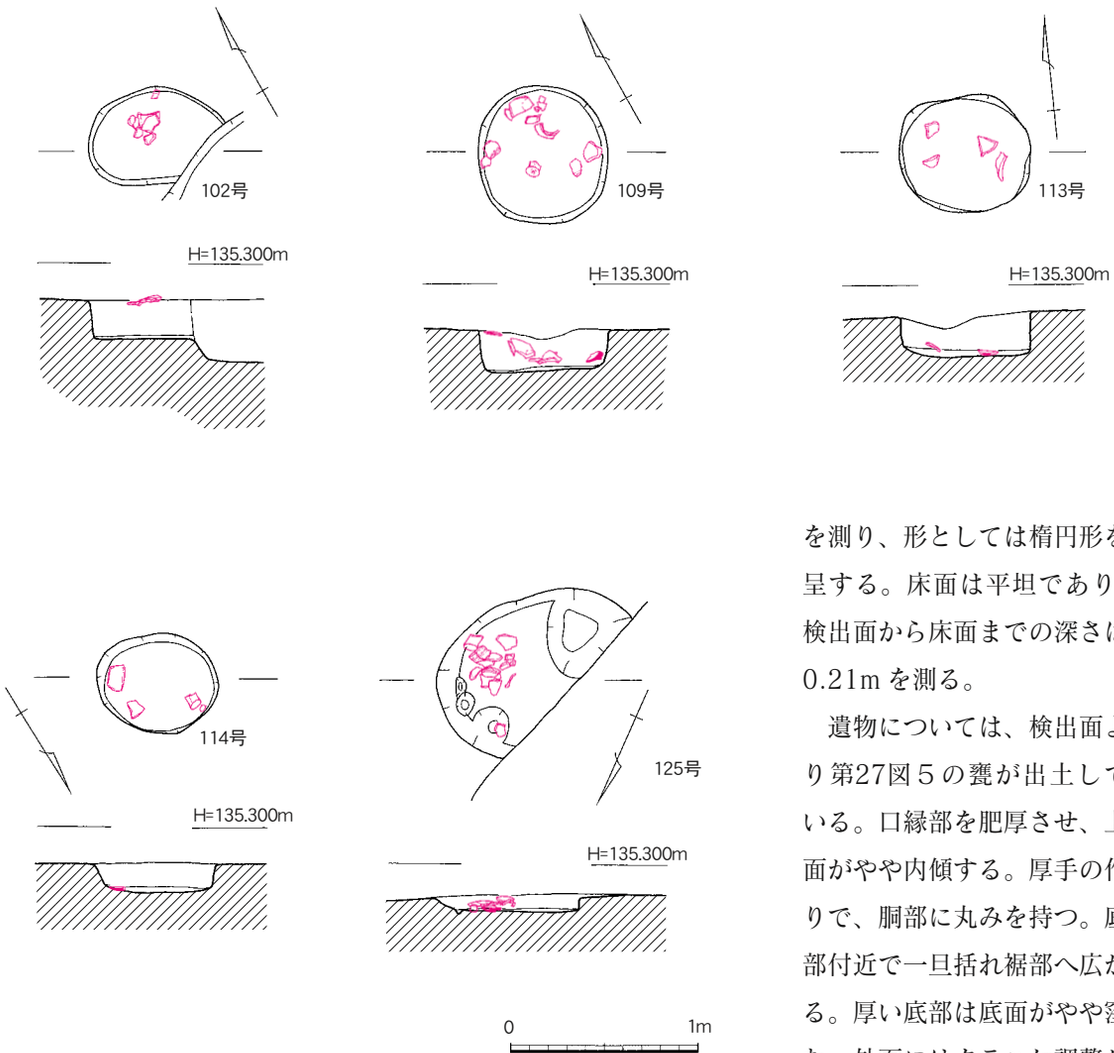
後、断面三角形の貼り付け突帯を巡らす。突帯以下は不定方向のハケメ調整後ミガキ調整が施される。口縁部内面はヨコ方向のハケメ調整後、ミガキ調整が施される。内面下部は工具によるナデ調整が施される。　（手柴）

102号柱穴
（第14・15図）

調査区東側で検出された柱穴で、101号貯蔵穴にを切っている。規模は長軸0.72m、短軸0.52m



第 25 図　土坑出土遺物実測図（1/4）



第 26 図　102・109・113・114・125 号柱穴実測図（1/40）

を測り、形としては楕円形を呈する。床面は平坦であり、検出面から床面までの深さは0.21m を測る。

遺物については、検出面より第27図５の甕が出土している。口縁部を肥厚させ、上面がやや内傾する。厚手の作りで、胴部に丸みを持つ。底部付近で一旦括れ裾部へ広がる。厚い底部は底面がやや窪む。外面にはタテハケ調整が施される。

109号柱穴（第26・28図、図版16）

調査区東側で検出された柱穴である。規模は径0.69～0.73m を測り、ほぼ円形を呈する。床面は、ほぼ平坦で検出面から床面までの深さは0.22m を測る。

第27図６～12が出土遺物である。６は甕の口縁部で如意状を呈す。７は壺の底部で平底である。外面にミガキを施す。８は壺の口縁部から胴部で、口縁は平坦で仕上げ肩部に断面三角形の貼り付け突帯を巡らす。９は壺の口縁部で外端に刻目を施す。10は甕の底部で上げ底を呈する。11は甕の底部で平底だが、やや窪む。12は甕の底部で外面にハケ目調整を施す。底部付近に焼成後の穿孔が認められる。

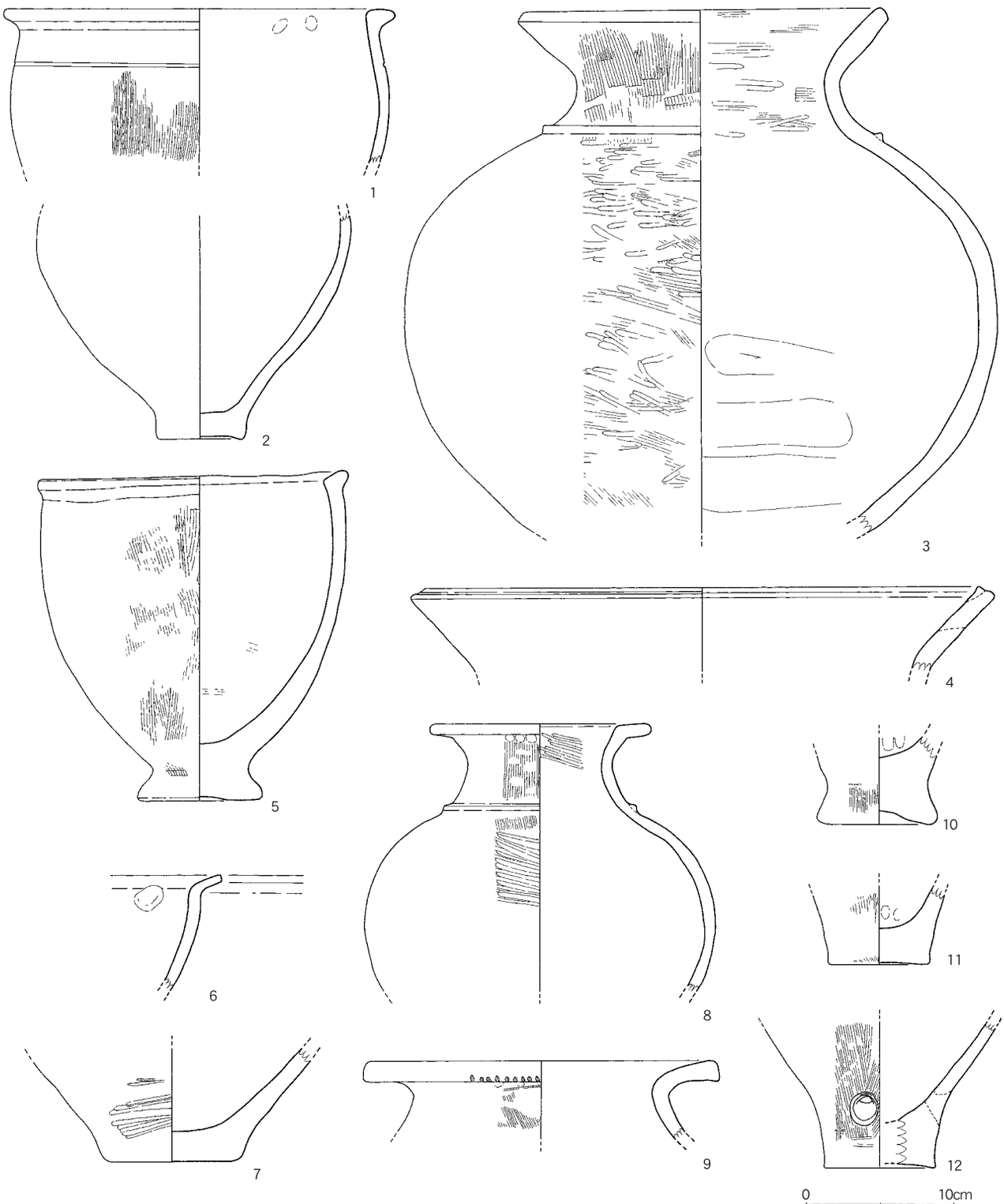
113号柱穴（第26・27図、図版17）

調査区東側で検出された柱穴であり、101号貯蔵穴を切っている。規模は長軸0.69m、短軸0.55m を測り、略円形を呈する。床面はほぼ平坦で、検出面から床面までの深さは0.23m を測る。遺物は、第28図１・２が出土している。１・２は甕の口縁部で、端部を肥厚させ外面にはハケ目調整後に

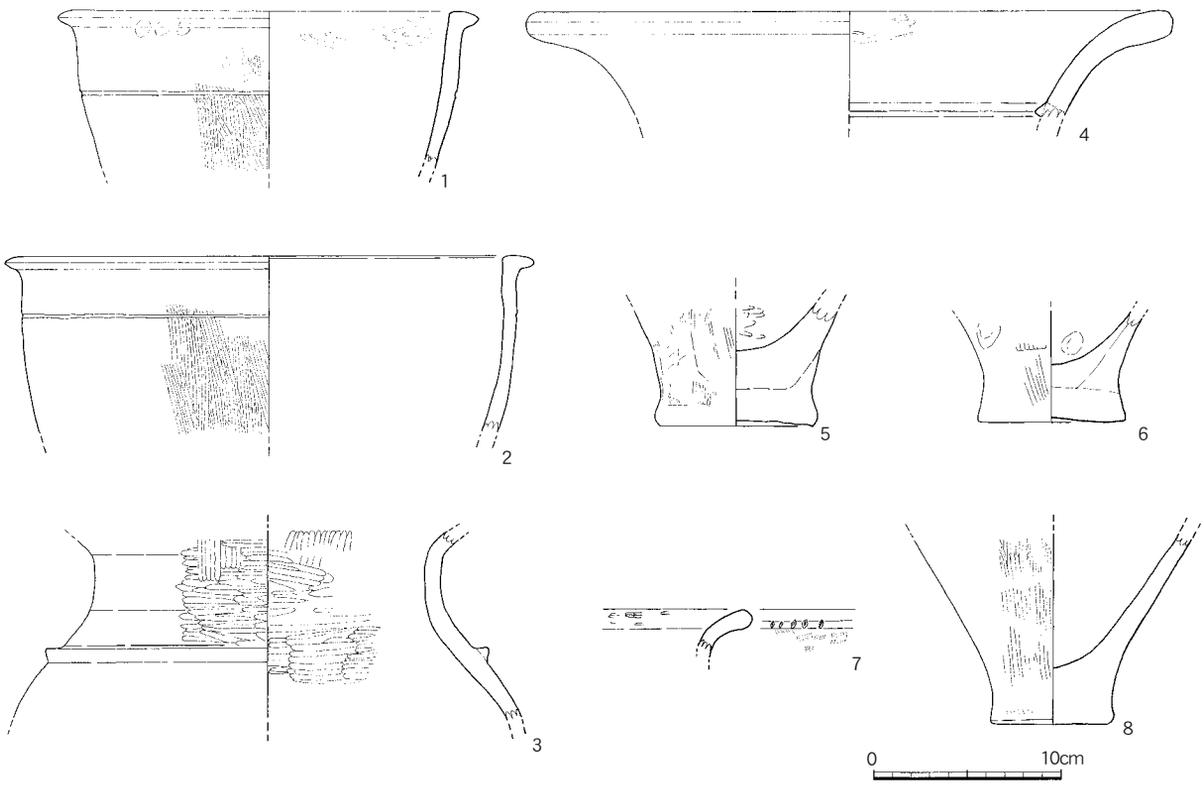
沈線を１条巡らす。

114号柱穴（第26～28図、図版17）

調査区東側で検出された柱穴である。規模は長軸0.55m、短軸0.53m を測り、ほぼ楕円形を呈



第 27 図　土坑及び柱穴出土遺物実測図（1/4）



第 28 図　柱穴出土遺物実測図（1/4）

する。床面は平坦というよりもやや丸底気味で、検出面から床面までの深さは0.12m ～0.17m を測る。

第28図４・５は下位より出土した遺物である。４は壺の口縁部で口縁部内面に断面三角形の貼り付け突帯を有する。周防灘沿岸地域の影響を受けていると思われる。５は厚みの強い甕の底部で底部外面はやや窪む。

125号柱穴（第26図）

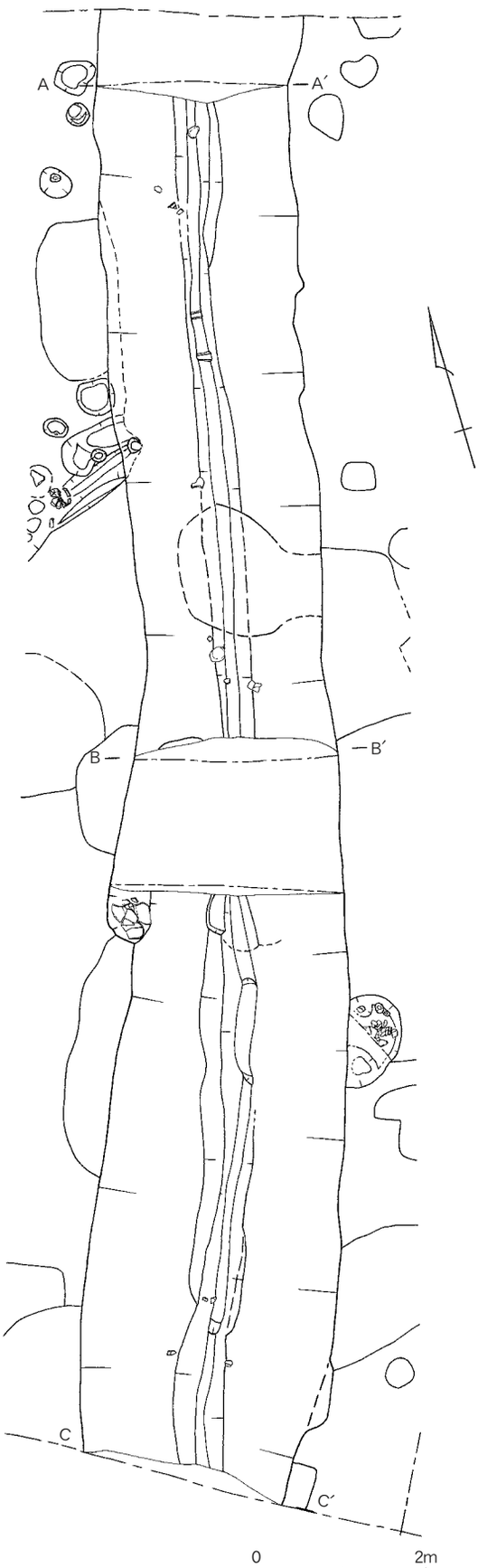
調査区西側で検出された柱穴である。100号溝により西側を切られているため、規模は不明である。床面は平坦で検出面から床面までの深さは0.09m を測る。

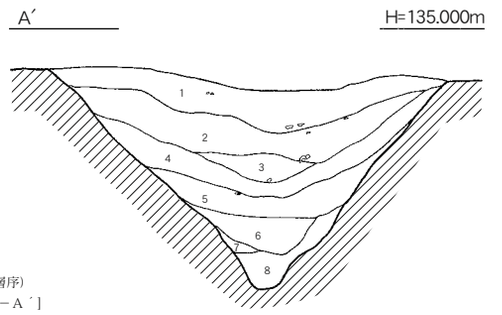
その他土坑・柱穴出土遺物（第25・27・28図）

第25図１は113号土坑から出土した甕である。口縁部は短い逆Ｌ字状を呈し、口縁下に１条の沈線が巡る。底部は厚みを持ち裾広がりである。口径30.0cm、器高35.7cm を測る。２は118号土坑から出土した甕底部である。厚みを持ち外面にタテハケとミガキが施される。

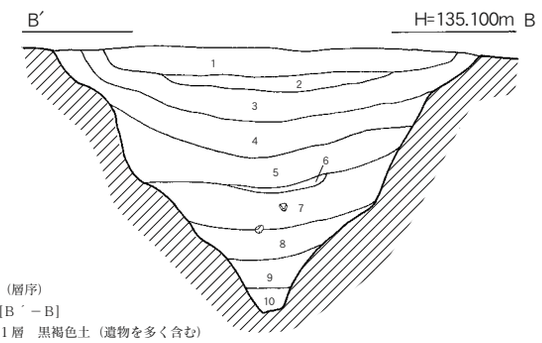
第27図４は101号柱穴から出土した壺の口縁部である。口縁部内面に粘土を貼り付け、上から押さえつけたと思われる。内面の断面に粘土の接合痕が見られる。

第28図３は121号柱穴より出土した壺の胴部である。肩部に断面三角状の貼り付け突帯を巡らせ、内外面にミガキを施す。６・７は143号柱穴より出土。６は甕の底部で厚い平底を呈するが、やや窪む。7は甕の口縁部で内面にミガキを施し、口縁部下端には刻目、ハケ目調整を施す。８は160号柱穴より出土した甕の底部で厚い平底を呈する。（田中健）

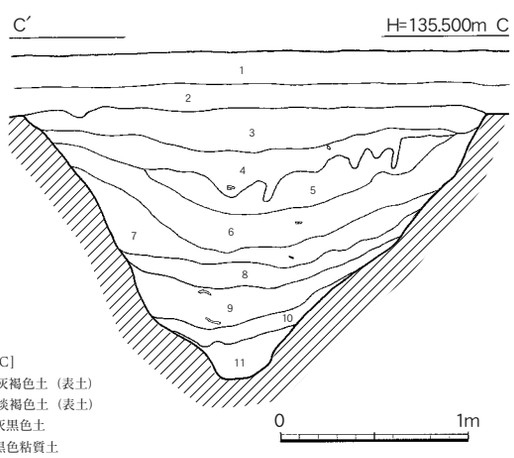




（層序）
[A－A′]
1層　灰褐色土（遺物を多く含む）
2層　茶褐色粘質土（1と同じ）
3層　淡茶褐色粘質土
4層　淡褐色粘質土（地山ブロックを含む）
5層　淡黄茶褐色粘質土（4と同じ）
6層　暗茶褐色土（地山ブロックを含み、遺物を多く含む）
7層　黄褐色粘質土（6と同じ）
8層　灰褐色粘質土



（層序）
[B′－B]
1層　黒褐色土（遺物を多く含む）
2層　黒色粘質土
3層　淡褐色粘質土（弱粘質、小石を含む）
4層　茶褐色粘質土（遺物と炭化物を少量含む）
5層　暗褐色土（4と同じ）
6層　淡黄色粘質土
7層　暗褐色粘質土（小石を含む）
8層　暗褐色粘質土（地山ブロックを含み、遺物を少量含む）
9層　暗褐色粘質土（地山ブロックを含む）
10層　暗褐色粘質土（炭化物を含む）



（層序）
[C′－C]
1a層　灰褐色土（表土）
1b層　淡褐色土（表土）
2層　灰黒色土
3層　黒色粘質土
4層　茶褐色粘質土
5層　暗茶褐色土
6層　暗褐色粘質土
7層　灰褐色粘質土（地山ブロックを少量含む）
8層　暗灰褐色粘質土（地山ブロック、炭化物を含む）
9層　暗褐色粘質土
10層　暗灰褐色粘質土（炭化物を含む）

第29図　100号溝実測図（1/40・1/80）

(4) 溝

調査区西側でほぼ南北に伸びる大溝が１条検出された。

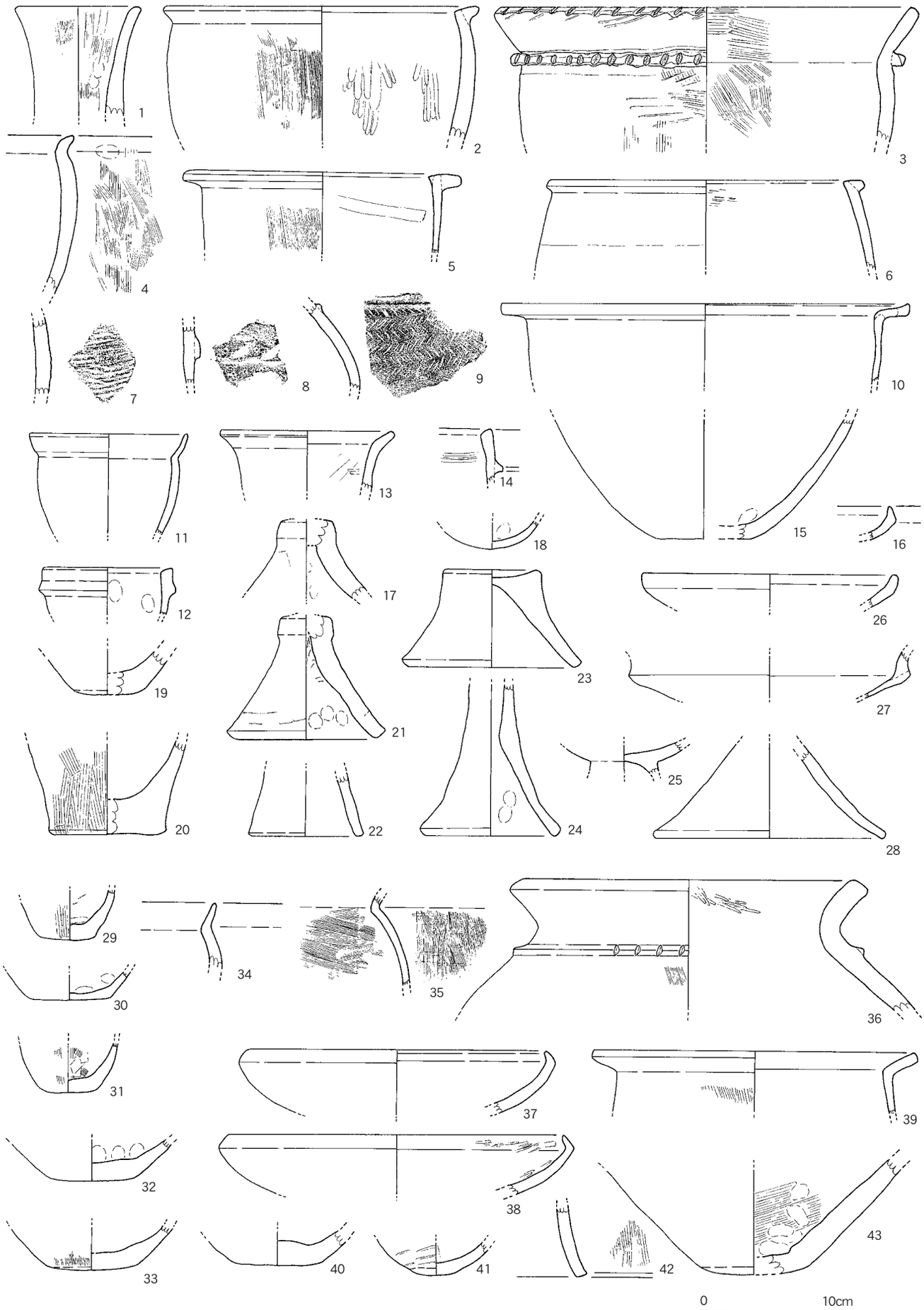
100号溝（第29～32図・図版18～20）

西側で検出された溝状遺構である。南北方向にやや歪みながら直線的に伸びる。約17mにわたって検出されたが、南北とも調査区外に伸びている。溝は検出面で約0.2m、底面で約0.08m 南側より北側が下がっている。断面はおおむね「V」字状を呈し、約50°の傾斜を持つ。また、底面近くでは法面の壁が部分的に「Y」字状に切り込むように落ちているのが観察できる。幅は検出面で２～3.1m、底面で0.1～0.2m、深さは検出面より1.05～1.45mを測る。溝の方位はN17°Eを向く。II区中央部の底面には地山を掘り残したような部分が、約0.2m の間隔をあけて２ヵ所確認された。下層から弥生後期終末に近い時期の土器群が出土しているので、溝も同時期と考えてよかろう。

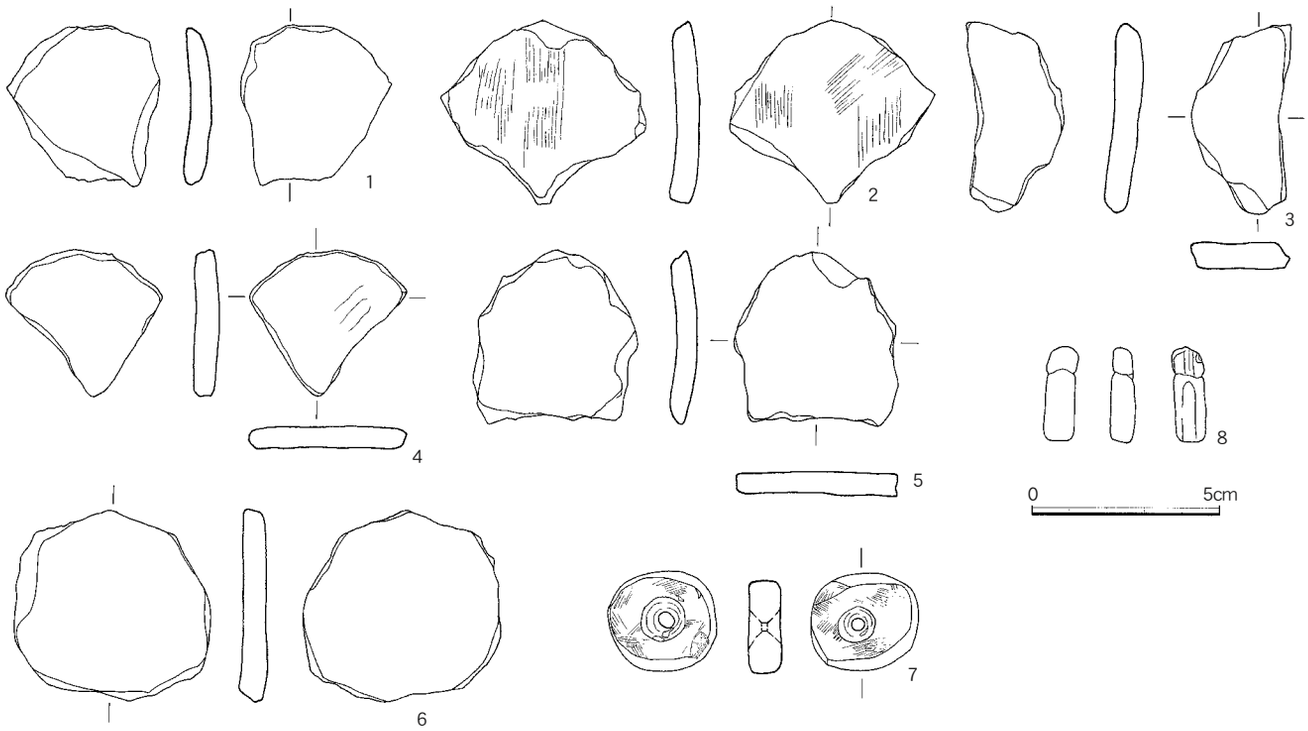
第30図1～28は上層、32・36・41・43は中層、29～31・33～35・40・42は下層、37・38は最下層からの出土である。１は器台である。２は甕で、短い逆Ｌ字状口縁を呈する。３は外反するくの字状口縁の端部に刻目を施す甕で、頸部にも刻目突帯を有している。４は如意形口縁を有する甕である。５は逆Ｌ字状口縁を有する甕である。端部は肥厚する。６は口縁部外面を肥厚させた甕である。７は甕の胴部片である。外面にタテハケ後に横方向のタタキが施される。８は刻目を施した突帯を有する甕の胴部片である。９は突帯下部に羽状文を数条施す壺胴部片である。10は跳ね上げ口縁の甕である。11は小ぶりの甕で、くの字状の口縁は内湾気味に立ち上がる。12は鉢である。口縁部が肥厚し、三角突帯を施す。13は口縁部がやや外反する甕である。14は樽形壺である。15は丸みをもつ甕の底部である。16は豊前系高坏の坏部片である。17は支脚であろう。18は丸底の壺の底部である。19は丸平の甕の底部である。20は厚底の甕の底部である。21は支脚である。内面にシボリ痕が観察できる。22は器台、23は甕底部の再加工品である。24は器台である。裾部があまりひらかず、細身である。25は高坏であろう。26は所謂豊前系の高坏の坏部である。口縁部がわずかに内湾し、端部は丸みを帯びる。27は坏部と口縁部の境に明瞭な稜線を持つ高坏の坏部である。口縁端部を欠失するが、口縁部は立ち上がりながら外反する。28は甕蓋であると考えられる。29は丸平の底部をもつ小型の甕底部である。30はやや丸みのある平底の甕底部である。31も甕底部で丸みをもつ。32は丸平の壺の底部と考えられる。33も32と同タイプの壺底部である。34はくの字状を呈する甕の口縁である。35は甕の頸部から胴部である。胴部にタタキの後にタテハケが施されている。36は壺である。頸部に刻目突帯を有している。37・38は強く内湾する口縁をもつ豊前系高坏である。39は直線的に伸びるくの字状口縁を有する甕で、内面の胴部との境に明瞭な稜がみられる。40は丸平の壺底部である。41は五様式系の甕底部でタタキ調整が施される。42は器台の裾部片である。43は甕の胴部下半から底部にかけての破片で、底面は凸レンズ状を呈す。

第31図はすべて３層から出土している。１～６は土器片加工品である。周縁部を打ち欠きにより整形し、２～４・6は研磨を施している。７は土製の平らな円盤型を呈する紡錘車である。８は中子状の土製品である。

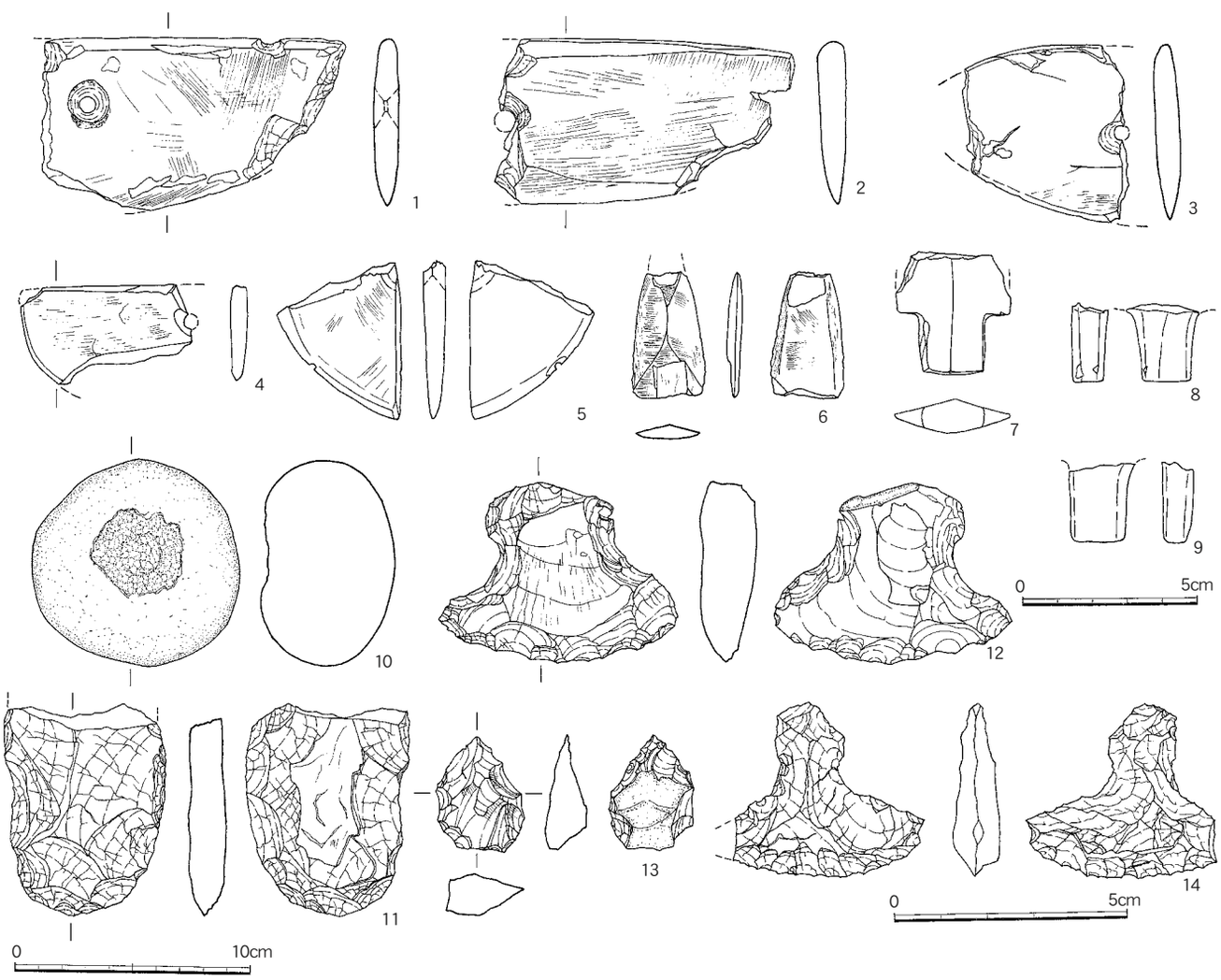
第32図３・５・14は１層、１・2・4・11・12は２層、６～10・13は３層から出土している。1～５はいずれも破片で出土した外湾刃半月形石庖丁で、両面ともよく研磨されている。４は頁岩



第 30 図　100 号溝出土遺物実測図（1）(1/4)



第 31 図　100 号溝出土遺物実測図（2）（1/2）



第 32 図　100 号溝出土遺物実測図（3）（2/3・1/2・1/3）

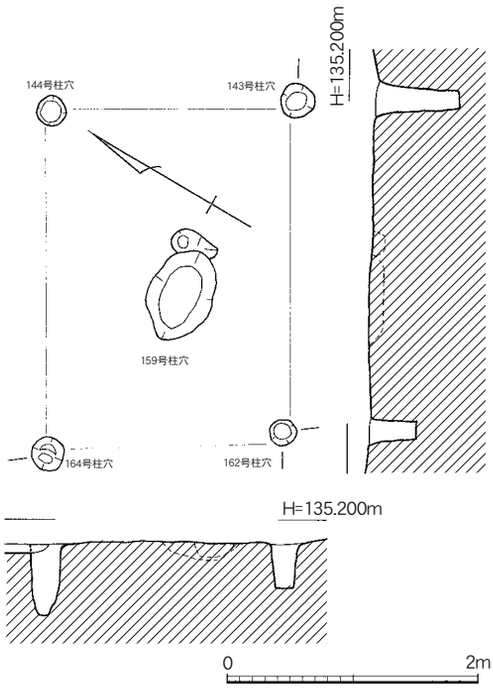
製、５は安山岩製、１～３は輝緑凝灰岩製である。６は頁岩製の磨製石鏃である。7～９は頁岩製の磨製石剣茎部である。10は安山岩製の凹石である。中央部に敲打による凹みがみられる。12・14はサヌカイト製の石匙である。両面を丁寧な二次加工により整形している。11は緑泥片岩製の短冊形を呈する打製石斧である。13は剥片で自然面の残存する黒曜石の周縁部に二次加工を加え、形を整形している。

（米村・下田・下森）

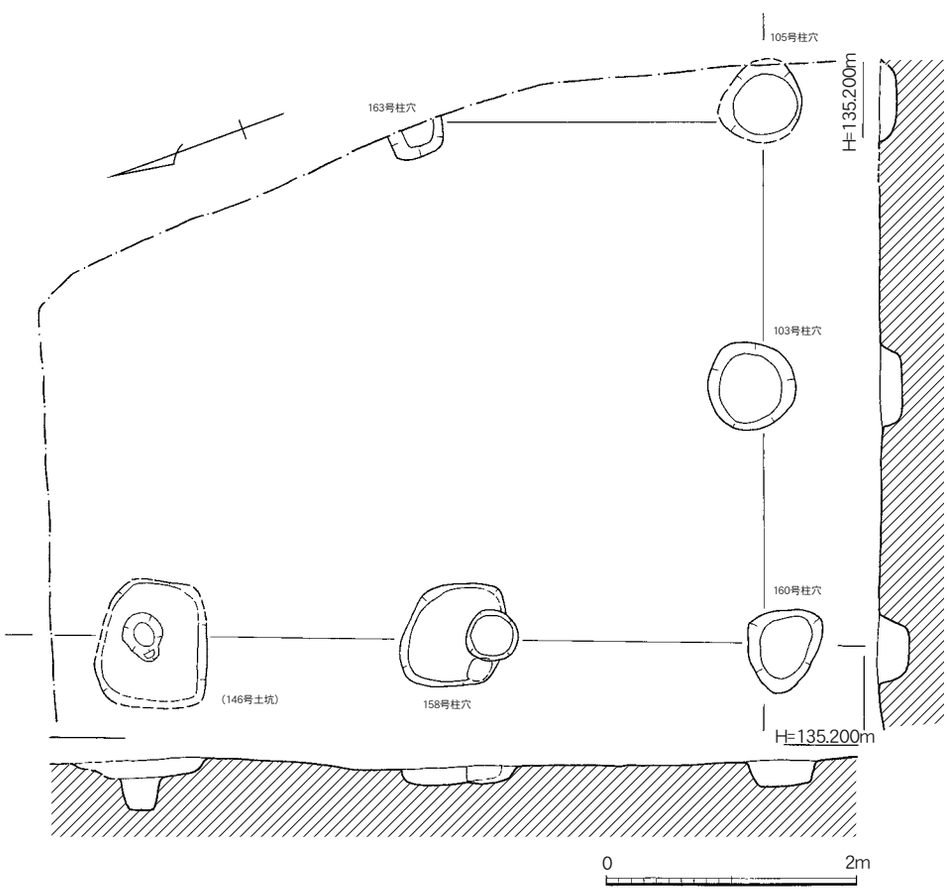
（5）掘建柱建物

149号掘立柱建物（第33図・図版21）

Ａ２区の中央部で検出された掘立柱建物である。４個の柱穴からなり、桁行１間×梁行１間の長方形建物が復元できる。主軸はN59°Ｅにとる。柱穴掘方平面はいずれも円形を呈し、平面径は0.20～0.28m を測る。柱穴掘方はいずれも一段掘りで、検出面からの



第 33 図　149 号掘立柱建物実測図（1/60）



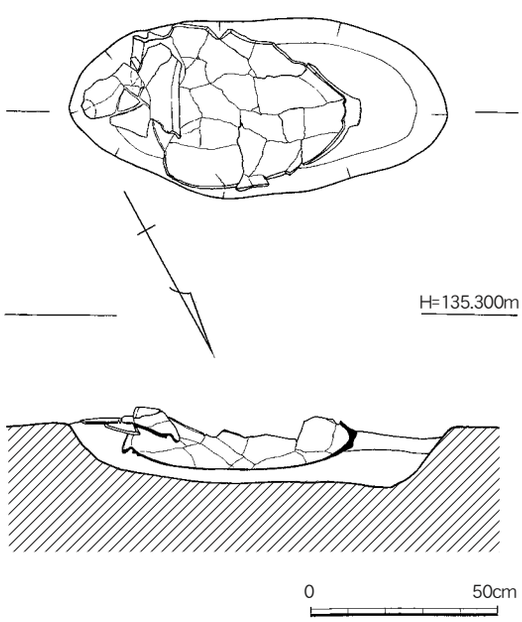
第 34 図　150 号掘立柱建物実測図（1/60）

深さは0.38～0.67m を測る。建物の規模は桁行長2.64～2.78m、梁行長1.9～1.96m、床面積5.3㎡を測る。平面からみた建物の中央部分には、大小１つずつの柱穴が確認でき、大きい方が小さい方を切っている。これらが建物に関連する柱穴かどうかは不明である。掘方埋土内からの出土遺物は、いずれの柱穴からも少量の土器破片が出土したのみで、時期を判定できるものはなかった。そのため、遺構の時期についてははっきりしない。（下田）

150号掘立柱建物（第34図、図版21）

北東隅のＡ２～３区に位置する掘立柱建物である。西側柱列のいちばん北に位置する柱穴は122号住居に切られている。調査区内では、６個の柱穴が確認された。これらの柱穴から桁行２間×梁行２間以上の長方形の建物が復元でき、主軸をN21°Ｅにとる。柱穴掘方平面は円形・隅丸方形・不整円形と一定でなく、最大径が1.05×0.85m、最小径が0.45×0.45m であるが、全体的には平均0.7m 前後の平面径を有する。柱穴掘方断面は最北部の柱穴を除き現存で１段掘りであり、遺構検出面から0.11～0.17m 残存する。最北部の柱穴については122号竪穴住居に切られているため、竪穴床面から0.03～0.04m しか残存していなかった。しかし、掘方平面のほぼ中央部にもう１段掘り込んだ柱穴の掘方が確認された。平面は円形を呈し、径は0.3m、122号竪穴住居の床面からの深さは0.35m を測る。この柱穴は122号住居の床面下で確認されており、122号竪穴住居よりも古い時期のものであることは明らかである。他の柱穴からは、柱痕と認められる土色の違いや掘り込みは検出できなかった。建物の規模は桁行長５m以上、梁行長4.4m、床面積22㎡以上になるとみられる。梁行側の柱間は2.1mと2.3m、桁行側の柱間は2.5～2.8m となり、桁行側の柱間隔が広くなる。建物の北東部は調査区外に広がっていると推測され、本来の建物はさらに規模が大きくなると考えられる。柱穴からの出土遺物は少なく図示はしていないが、158号柱穴から出土した甕の口縁部片は、端部に三角の粘度帯を貼り付けて肥厚させている。160号柱穴から出土した甕の底部片は厚みのある平底を呈し、外面に粗いタテハケを施す。いずれも城ノ越式土器の要素を有している。他の新しい時期の遺物が混入していないことから、150号掘立柱建物は弥生時代中期初頭に位置づけられよう。

（下田）



第 35 図　116 号甕棺墓実測図（1/20）

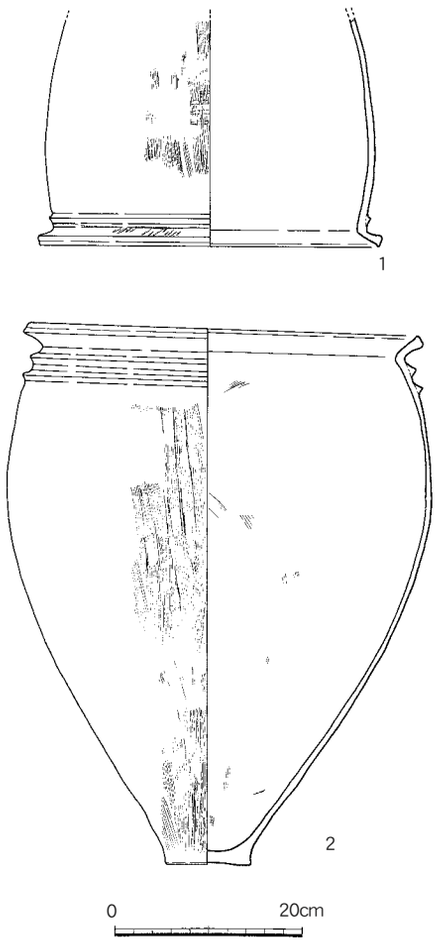
（6）甕棺墓

116号甕棺墓（第35･36図、図版22）

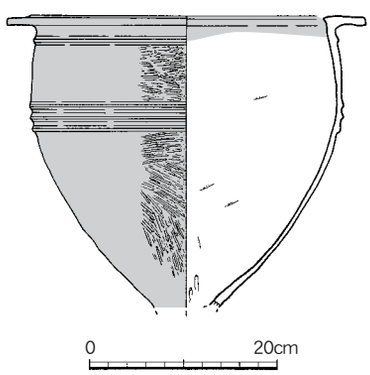
Ｃ２区の東側で検出された合口の小児用甕棺墓である。墓壙の平面形は楕円形を呈し、規模は、検出面で長軸約0.99m、短軸0.46m、深さは0.18m を測る。主軸方向はN70°W、埋置傾斜角度は10°である。耕作のため削平が激しく、上甕は胴下半と底部、下甕は上半部を

欠損している。

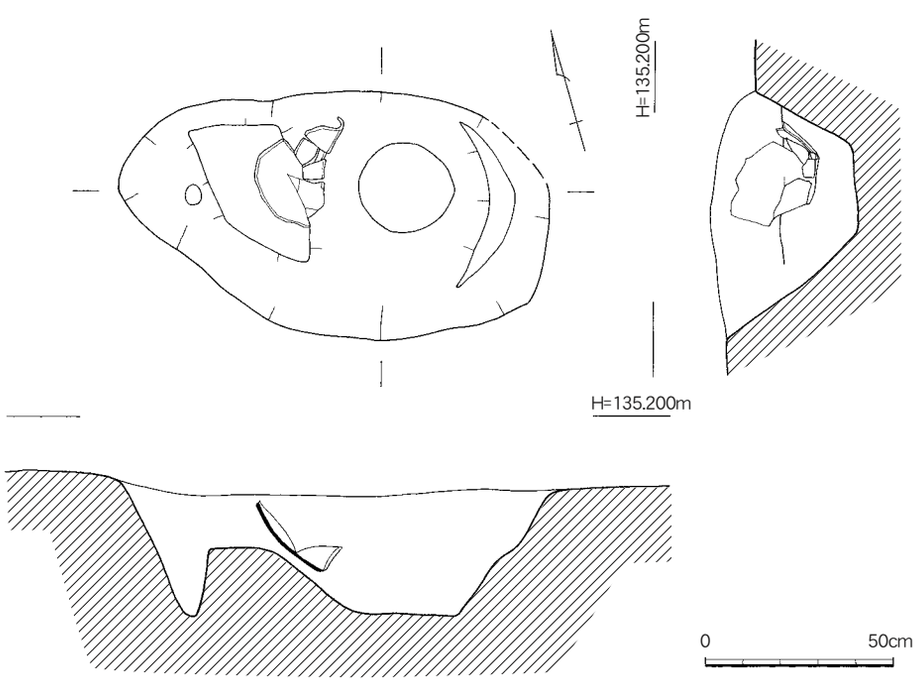
第36図１・２は出土甕棺である。上甕は口縁部のみ残存しており、くの字状を呈する跳ね上げ口縁を有する。頸部には断面三角形の突帯を１条巡らす。器壁は薄手である。復元口径36.4cm を測る。下甕はくの字状を呈する跳ね上げ口縁を有し、頸部には断面三角形の突帯を２条巡らしている。上甕と同様に器壁は薄く、胴部最大径はやや上位に位置する。底部は平底である。復元口径は39.1cm、胴部最大径40cm、底径８cm、器高56cm を測る。小児用甕棺の上甕、下甕の口縁部や底部の形態的特徴から須玖Ⅱ式に併行するとみられ、時期は弥生時代中期後半と考えられる。　（松竹）



第 36 図　116 号甕棺実測図（1/8）



第 38 図　144 号甕棺実測図（1/8）

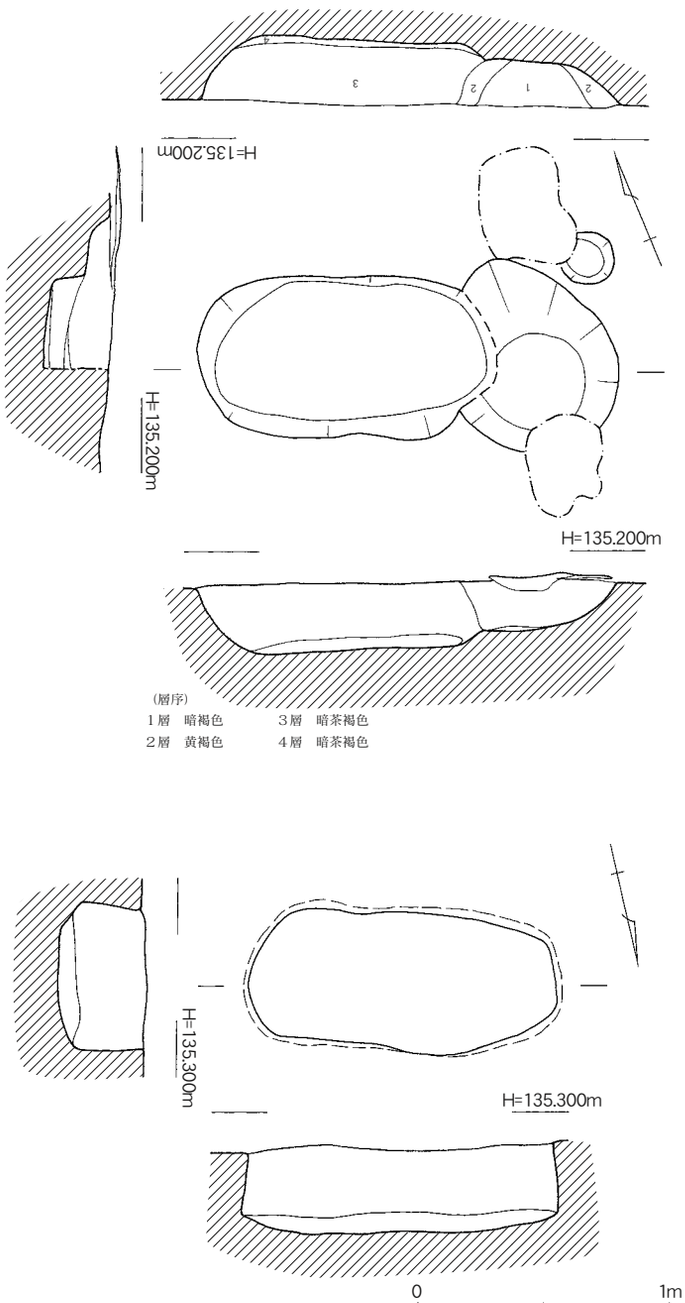


第 37 図　144 号甕棺墓実測図（1/20）

144号甕棺墓（第37･38図、図版23）

Ｂ１区のほぼ中央部で検出され、９・10次調査区全体において検出された甕棺墓群からは７ｍ程北側に位置する小児用甕棺墓である。墓壙は細長い楕円形の掘り込みを呈し、東西両端を柱穴に切られている。正確な平面プランは把握できないが、ほぼ楕円形に復元できる。復元長1.15m、幅0.65m、深さ0.33m を測る。主軸はN73°Wで、埋置傾斜角度は30°である。甕棺は、２個の甕が合口の状態で埋置されていたと推定される。上甕は後世の削平および掘り込みによって、底部および全体の約４分の３を欠損しているが、残存部は正位置を保っている。また、下甕の推定位置は前述の東側柱穴がほぼ全体を切っており、これが掘られた際に下甕ごと抜き取られたものとみられ、破片は全く残っていなかった。

第38図は上甕である。逆Ｌ字に近い鋤先状の口縁を有し、外方にわずかに垂れ下る。端部は中央をやや窪ませ、面取りを施す。器壁は薄く、胴部最大径は上位に位置する。口縁下に１条、胴部中位に３条のＭ字状突帯を巡らす。復元口径38cm、残存高31.2cmを測る。口縁部から胴部の外面にかけては丹塗研磨が施されている。残存する口縁部・胴部の形態および復元時のプロポーションから須玖Ⅱ式の新段階が想定され、時期は弥生中期後半に比定されよう。（下田）



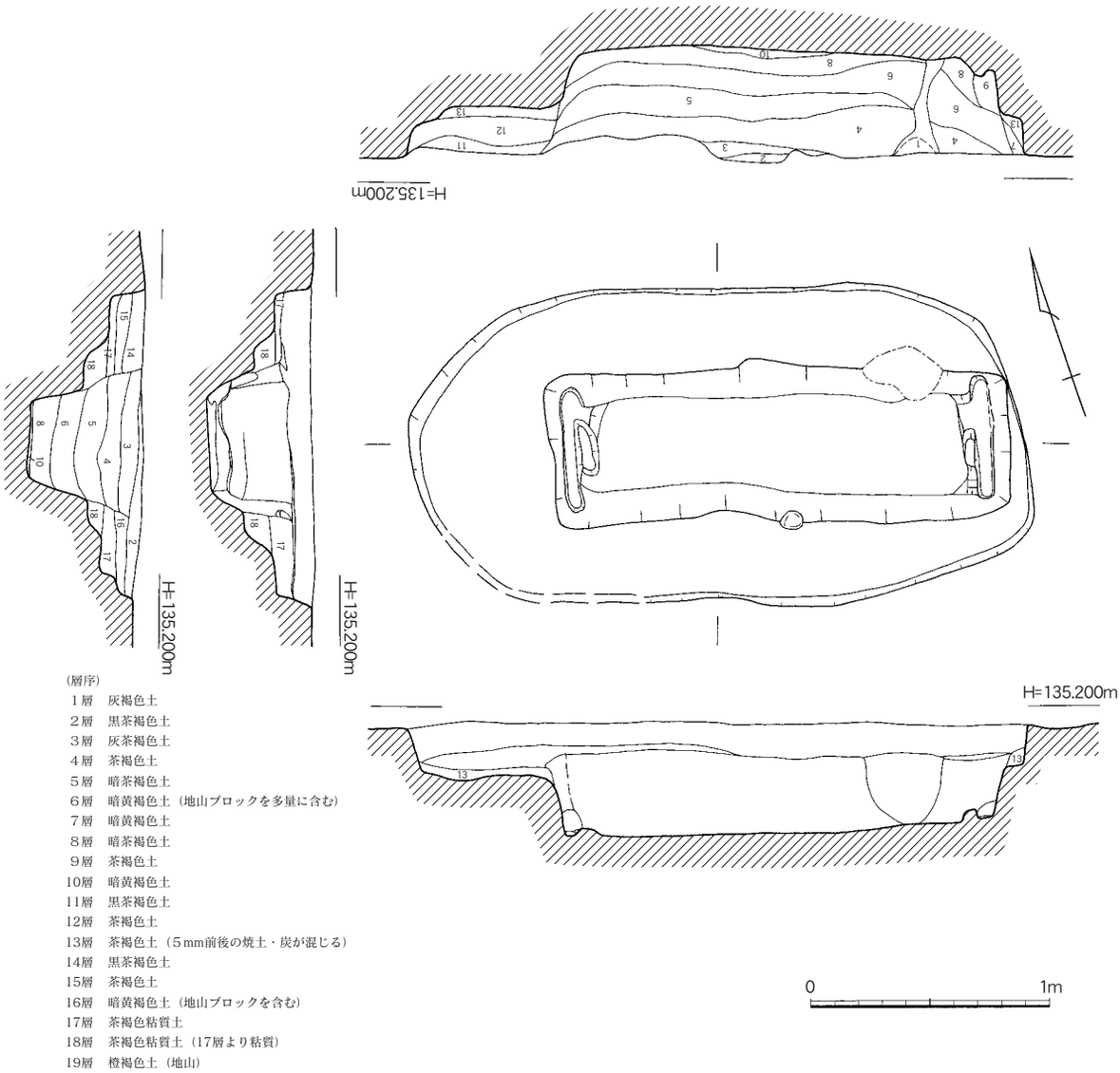
第 39 図　136 号・147 号土壙墓実測図（1/30）

(7) 土壙墓・木棺墓

調査した土壙墓は３基、木棺墓は２基である。９次調査の続きが広がっており、10次調査区ではさらに北側には広がらないことが明らかになった。136・147号遺構は形状と埋土から中期後半以前の土壙墓と判断して報告しておきたい。

136号土壙墓（第39図、図版23）

調査区の東側で検出された土壙墓と推定されるものである。全体図では120号柱穴に切られているが、実際は東側を120号柱穴に切られている。墓壙の平面形は長軸1.20m、短軸0.64m



第40図　107号木棺墓実測図（1/30）

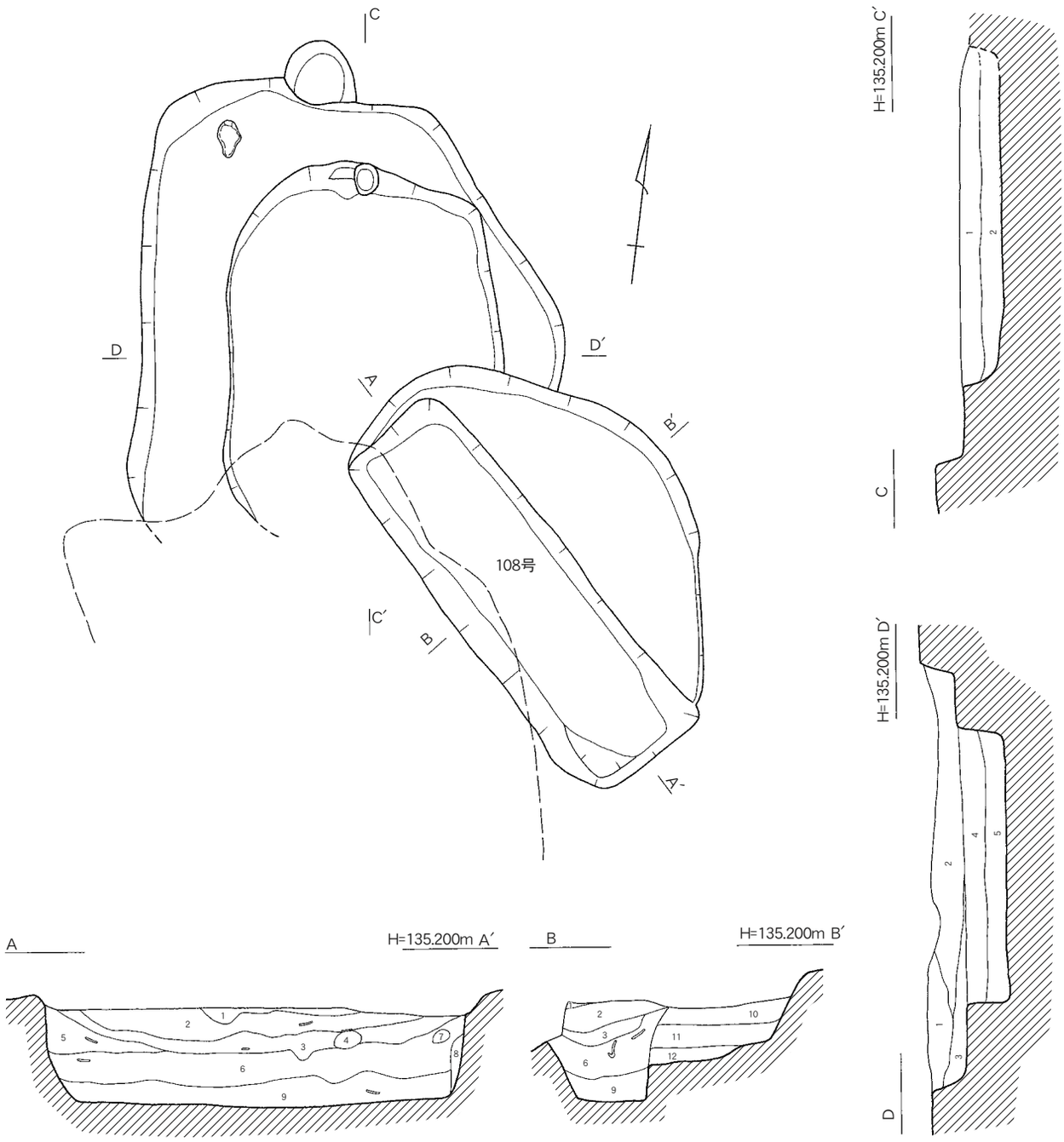
の楕円形を呈する。床面は中央部がやや窪み、検出面から床面までの深さは0.28mを測る。主軸はN60°Wをとる。埋土は淡茶褐色を呈し均質である。

147号土壙墓（第39図、図版24）

調査区の東側で検出された土壙墓である。墓壙の平面形は長軸1.22m、短軸0.56mの楕円形を呈する。壁面はオーバーハングし床面は中央部がやや窪む。主軸はN71°Wで、埋土は136号土壙墓と同じである。（末國）

107号木棺墓（第40･42図、図版24・25）

Ｂ２区の南側で検出された組み合わせ式木棺墓である。墓壙は東西2.6m、南北1.3mの長楕円形を呈しており、９次調査で検出した25号貯蔵穴の一部を切っている。主軸は、N60°Wである。検出面から0.15mを掘り下げたところ、墓壙の東寄りの位置に長方形の木棺のプランが確認され



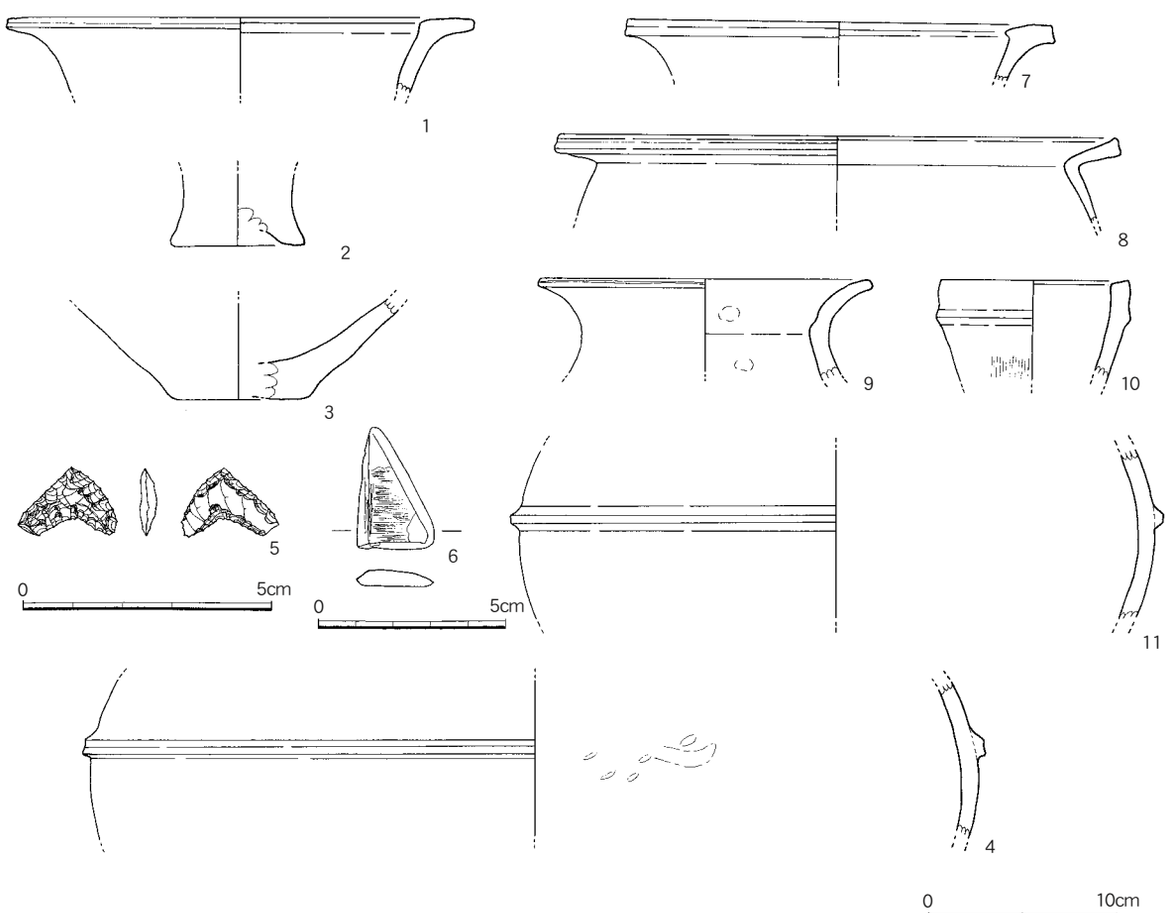
（層序）[A′－A・B′－B]
1層　黄褐色土（地山ブロックを含む）
2層　灰黒色土
3層　黒色土
4層　暗褐色土
5層　暗褐色土（地山ブロックを多量に含み、しまりがある）
6層　暗褐色土（地山ブロックを多量に含み、しまりがない）
7層　地山ブロック
8層　7層と同じ
9層　暗褐色土（6層よりやや黒っぽく、地山ブロックを多量に含む）
10層　暗茶褐色粘質土（2cm大の地山ブロックや炭が混入する）
11層　暗茶褐色粘質土（10層と同じ、10層より暗い）
12層　茶褐色粘質土（地山ブロックを含む）

（層序）[C′－C・D′－D]
1層　褐色土
2層　橙褐色土
3層　淡灰褐色土
4層　黄褐色土
5層　淡黄褐色土

第41図　108号木棺墓・109号土壙墓実測図（1/30）

た。長軸1.8m、短軸0.4mで検出面から床面までの深さは0.45mを測る。地山を掘り抜いて造らており、棺内側壁および小口側の壁はやや外方に傾いている。床面は平坦である。副葬遺物は全く確認されなかった。また、木棺材も残存していなかった。両小口面とも床面に接する部分から0.1mほど内側に、長さ0.2～0.21m、幅0.05～0.08m、高さ0.05mの小口面と平行する細長い地山の盛り上がりが認められる。これは小口板を埋め込んで固定するために、地山を意図的に掘り残したものとみられる。また、小口面の幅を床面の幅より少し大きめにとって掘り込んでいる。両小口板が側板を挟み込むように組み合わせたものであろう。墓壙内の土層堆積状況は上層と下層に大きく分けられ、上層には地山ブロックが含まれず、下層には多量の混入が確認できる。頭位は掘方の幅や床面の傾斜から東側ではないかと推測される。

遺物は土器、石器が出土している。第42図１は壺の口縁部で、鋤先状を呈し上面はほぼ水平である。２は底径6.4を測る上げ底を呈する甕の底部である。外面はナデ調整が施され、底面に指頭圧痕が確認できる。４は壺の胴部で球状を呈し、中窪みをもつ貼付のコの字状突帯を１条巡らす。胎土には１～２mmの金雲母を含む。また突帯の上部に黒斑が認められる。５は姫島産黒曜石製の石鏃である。長さ1.4cm、幅2.0cm、厚さ0.3cm、重さ0.5ｇを測る。全体的に節理がみられ、片面は周辺端部のみ調整が施される。埋葬時期は、出土遺物や他の遺構との関連から弥生中期後半と考えられる。（内藤）

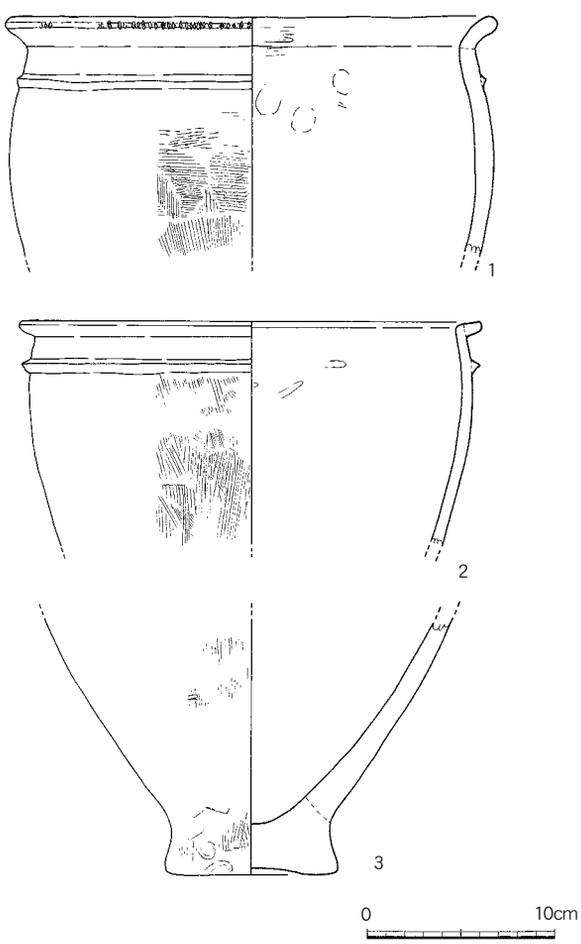


第42図　107号・108号木棺墓出土遺物実測図（2/3・1/2・1/4）

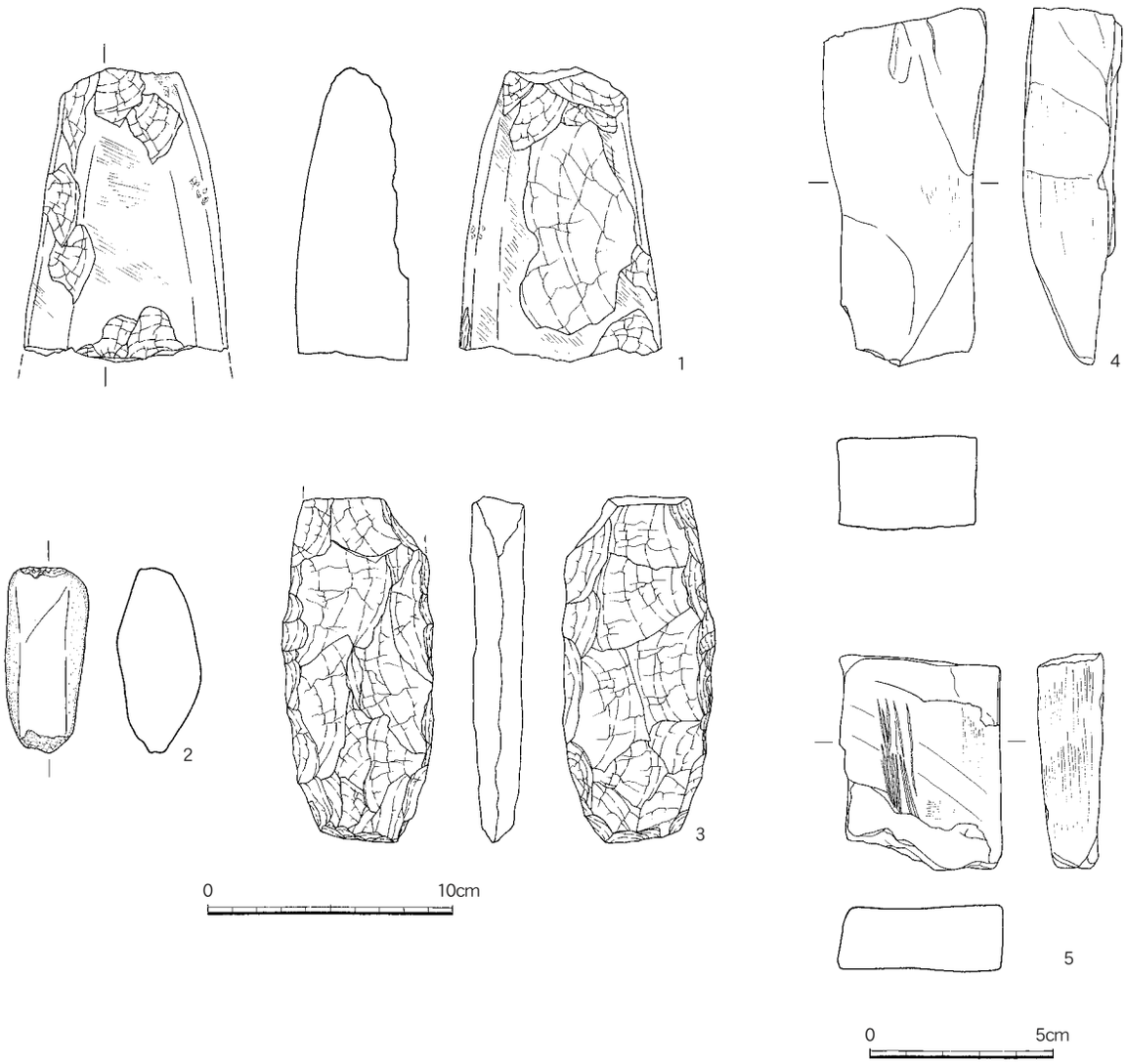
108号木棺墓・109号土壙墓（第41・42図、図版25・26）

両遺構はＢ１・２区で検出され、108号は木棺墓、109号は土壙墓と推定される。108号木棺墓が109号土壙墓を切り、また９次調査で検出した５号甕棺石棺併用墓が両遺構を切っている。108号木棺墓の墓壙の平面形は、長軸2.1ｍ、現存短軸1.3ｍの楕円形を呈し、その下に長軸2.1ｍ、短軸0.65ｍの長方形土壙を１段掘る。床面は平坦であり、検出面から床面までの深さは0.5ｍを測る。主軸はＮ43°Ｗをとる。土層の堆積状況をみると、墓壙埋土は大きく上層と下層に分けられ、上層には地山ブロックはあまり含まれず、下層には多く含まれていることがわかる。109号土壙墓は東側下半部を108号木棺墓に、南側下半部を５号石棺甕棺併用墓に切られている。墓壙の平面形は、現存長軸2.1ｍ、短軸２ｍの長楕円形を呈し、その下に現存長軸２ｍ、短軸1.8ｍの長楕円形土壙を１段掘る。床面は平坦であり、検出面からの深さは0.2ｍを測る。主軸はＮ５°Ｗをとる。土層の堆積状況は墓壙上層の上から順に、１．褐色土、２．燈褐色土、３．淡灰褐色土が堆積し、２段目の土壙部分に、４．黄褐色土、５．淡黄褐色土が堆積する。４・５層には地山ブロックを含み、２層にもそれを含む。両遺構とも墓壙および棺内の埋土から壺・甕などの破片が出土したが、埋葬行為に伴う副葬遺物等は確認できなかった。

108号木棺墓からの出土土器は、棺内埋土から第42図３・７・８・11が、墓壙上層からは６・９・10がそれぞれ出土している。３は壺の底部である。平底を呈し外に大きく開く。復元底径は7.３cmを測る。６は片岩製の石製品であり、最長3.2cm、幅2.05cm、厚さ0.4cm、重さ3.7ｇを測る。７は未発達な鋤先状の壺の口縁部である。口縁部は肥厚し、端部は中窪みである。復元口径25.2cmを測る。８は甕の口縁部である。くの字状を呈し、端部は跳ね上げている。復元口径30.2cmを測る。９は壺の口縁部である。頸部はやや窄まりながら口縁端部は外反する。10は小型の鉢形土器である。口縁端部は平坦ながらわずかに窪み、口縁下には１条の三角突帯を巡らす。ほぼ直線的にすぼまりながら平底の底部へ移行すると考えられる。復元口径は10cmを測る。11は壺の胴部である。球状を呈し、中窪みがみられる台形突帯を１条巡らす。また、赤色顔料を塗布した痕跡が認められる。復元胴部最大径は34.6cmを測る。108号木棺墓から出土した遺物は中期前半から中期後半まで認められるが、跳ね上げ口縁の甕から、中期後半代に属すると考えられる。なお、109号土壙墓からは図示可能な遺物は出土しなかった。切り合い関係から109号土壙墓→108号木



第43図　その他の遺構出土遺物実測図（1/4）

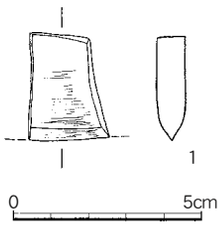


第 44 図　115 号竪穴住居・113 号貯蔵穴・126 号土坑出土遺物実測図（1/2・1/3）

棺墓→５号石棺甕棺併用墓という変遷が考えられ、109号土壙墓は108号木棺墓よりも時期的には古くなるとみられる。（内藤・下田）

柱穴・遺構検出・表採・その他の出土遺物（第43～45図）

第43図は146号貯蔵穴から出土したもので、１は口縁が如意形を呈し、その下に三角突帯を有する甕である。外面は縦及び横方向のハケが施され、内面には口縁部に横方向のミガキ、胴部に指頭圧痕が観察できる。２は逆Ｌ字状口縁を有する甕である。口縁下に三角突帯が巡る。外面はタテハケ、内面は若干のミガキにより調整されている。３は窪み底を呈する甕の底部である。外面はタテハケの後に工具ナデによって調整され、一部ではミガキが施されている。44図１は113号貯蔵穴の遺構検出面から出土した結晶片岩製の磨製石斧である。全面を荒割により整形し、研磨により整えている。敲打による調整の痕跡が若干残る。２は126号土坑から出土した安山岩製の敲石である。長軸の両端に敲打の痕跡が窺える。３～５は115号住居址から出土した。３は緑泥片岩製の打製石斧である。全面を荒割して、周縁部に細かな調整を施している。４は肌理細かい頁岩質の石



第45図　10次調査遺構検出面
出土石器実測図（1/2）

材を用いた砥石である。主に2面を主要面として使用し、他の一面では一部のみ棒状の素材を研磨した痕跡が窺える。５は４と同質の石材を使用している砥石である。多面的に使用されているが、特に一面では顕著な研ぎ痕が観察できる。45図１は若干厚い作りの石庖丁である。石材は頁岩や砂岩と類似しているが若干の相違が窺える。（下森）

小結

10次調査は、９次調査区Ｂ地点を北側及び西側に拡張して実施したものである。９次調査と同様、生活関連遺構と墓地遺構の広がりが確認できた。生活関連遺構の中では、弥生時代後期後半から終末に近い時期の竪穴住居や大溝が新たに検出された。

前期末から中期初頭にかけての遺構は、竪穴住居、掘立柱建物、袋状貯蔵穴、土坑、柱穴群などがある。36号竪穴住居は、径４ｍを測る円形プランである。半分しか掘り下げていないが、壁周溝、主柱穴、炉址などは検出されなかった。厳密な意味では住居としての要素を欠くが、プランの形状から住居の範疇に含めておきたい。昨年度調査の竪穴住居群と共に集落の広がりが想定できるのではなかろうか。掘立柱建物は２棟検出されている。柱穴が多く分布するので、他にも掘立柱建物が存在したと考えられる。150号掘立柱建物は、２間×２間以上の建物で、やや大型の建物になるとみられる。柱穴からは城ノ越式土器が出土しており、中期初頭に位置づけられる。吹上遺跡では、中期初頭の段階でやや大型の掘立柱建物と竪穴住居が組み合わさることは重要である。袋状貯蔵穴は、プランのみ確認したものも含めて13基出土した。昨年度の調査分も含めて考えると、大きく２グループに分けることができる。西側のグループと東側のグループとの間には10ｍにわたって貯蔵穴の空白地帯がある。西側のグループは一部しか掘り下げていないので、時期的な問題もあるが、これらの貯蔵穴群は集団単位で作られた可能性がある。中でも、102号貯蔵穴のように特大のものは中心的な役割を担う貯蔵穴であったのかも知れない。

中期後半から中期末にかけては墓地の広がりが確認できた。小児用甕棺墓２基、木棺墓１基、土壙墓５基である。116号と144号の小児用甕棺墓を除くと、墓地は帯状に伸びず、長さ10ｍの方形の枠内に納まってしまう。１・２・４次の調査結果からも、墓地は大きく広がらない可能性があり、集団単位で作られた塊状の墓地構成をとるとみられる。

また、後期後半から終末に近い時期の竪穴住居と大溝が検出されたことも注目される。同時期の竪穴住居は台地中央部で集中して検出されているが、西側にも集落の存在が明らかになった。後期の終末に近い時期には100号溝が造られ、後期後半代の115号竪穴住居を切っている。ほぼ南北に伸びる「V」字溝で、集落を限る条溝か環濠になると考えられる。122号・145号竪穴住居は溝と同時期で内側に位置する。日田市域内では、後期後半以降環濠集落が相次いで造られるが、吹上遺跡もそれらと連動した形で大溝が掘削されたものであろう。時期的には北側台地に位置する小迫辻原遺跡の前段階と考えられ、吹上遺跡はその後急激に廃れることから、小迫辻原遺跡へ収斂していったものと理解されよう。

第１表　10次調査出土土器観察表

挿図番号	区名	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
					口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第5図　1	36 号　竪穴住居	P4	弥生	甕	(25.8)	-	-	-	縦方向のハケ・ナデ	ナデ	ABEFGH	良	暗褐色	暗褐色	沈線、如意形口縁
第５図　2	36 号　竪穴住居	2 層	弥生	甕	(24.4)	-	-	-	ハケ・ナデ	ナデ	ABEFG	不良	暗赤褐色	暗褐色	沈線、如意形口縁
第５図　3	36 号　竪穴住居	5 層	弥生	甕	(20.0)	-	-	-	ハケ・ナデ	-	ABDEFGH	不良	褐色	黄橙色	
第５図　4	36 号　竪穴住居	上層	弥生	壺	(31.4)	-	-	-	ナデ後ヘラミガキ	ナデ後ヘラミガキ	ACF	良	暗褐色	暗褐色	頸部に暗文
第５図　5	36 号　竪穴住居	2 区 1 層	弥生	壺	(33.2)	-	-	-	ナデ	ナデ	AFH	良	淡黄褐色	淡黄褐色	跳ね上げ口縁
第５図　6	36 号　竪穴住居	P 6	弥生	壺	(19.8)	-	-	-	縦方向のハケ後ミガキ	ミガキ	BDEFGH	良	淡黄褐色	淡黄褐色	突帯
第５図　7	36 号　竪穴住居	上層	弥生	甕	-	-	(8.8)	-	縦方向のハケ	ナデ	ABFGH	不良	褐色	淡黒褐色	
第５図　8	36 号　竪穴住居	1 層	弥生	甕	-	-	7.1	-	-	-	ABDGH	不良	明褐色	明褐色	底部に穿孔（0.9cm）
第５図　9	36 号　竪穴住居	3 層	弥生	甕	-	-	(11.0)	-	縦方向のハケユビオサエ	-	ACFH	不良	淡褐色	淡褐色	
第５図　10	36 号　竪穴住居	上層	弥生	器台	-	-	(10.6)	-	-	-	ABFGH	不良	暗黄褐色	淡黄褐色	
第７図　1	115 号　竪穴住居	P 2	弥生	甕	(20.8)	-	-	-	縦方向のハケ・ナデ	ナデ	ABFGH	良	暗褐色	黄褐色	如意形口縁
第７図　2	115 号　竪穴住居	P 7	弥生	甕	15.0	17.8	5.8	16.1	ナデ･タタキ	ナデ	ABDFGH	良	黄褐色	黄褐色	
第７図　3	115 号　竪穴住居	P 6	弥生	高坏	(30.0)	-	-	-	-	-	ABFGH	良	淡黄褐色	黄褐色	
第７図　4	115 号　竪穴住居	P 2	弥生	壺	-	-	(7.0)	-	-	ユビオサエ	ABDFGH	不良	淡黄褐色	灰褐色	底部は凸レンズ状
第７図　5	115 号　竪穴住居	4 区検出面	弥生	壺	-	-	(7.0)	-	-	ユビオサエ	ABFGH	不良	褐色	淡黒褐色	
第９図　1	122 号　竪穴住居		弥生	甕	(23.6)	-	-	-	ハケ・ナデ	-	ABCG	良	淡赤褐色	明黄褐色	
第９図　2	122 号　竪穴住居		弥生	甕	-	-	-	-	タタキ	-					在地の甕
第９図　3	122 号　竪穴住居	P 2	弥生	高坏	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ABF	良	明茶褐色	明茶褐色	
第 10 図　1	142 号　竪穴住居	P 2	弥生	甕	(20.6)	(19.5)	(7.9)	19.2	縦方向のハケ	工具ナデユビオサエ	ABCFH	良	明黄褐色	明黄褐色	
第 10 図　2	142 号　竪穴住居	P 6	弥生	甕	(20.4)	(21.0)	-	-	縦方向のハケヨコナデ	ナデ・ユビオサエ	ABCFH	良	明黄褐色	明黄褐色	
第 10 図　3	142 号　竪穴住居	検出面	弥生	甕	-	-	-	-	タタキ	-	ABF	良	明黄褐色	明黄褐色	
第 10 図　4	142 号　竪穴住居	検出面	弥生	器台	-	-	(9.6)	-	ナデ後ミガキ	ナデ	ABFGH	良	明黄橙褐色	明黄橙褐色	
第 10 図　5	142 号　竪穴住居	P 2	弥生	蓋	摘径 6.0	-	-	-	縦方向のハケヨコナデ	ナデ	ABFG	良	黄褐色	黒褐色	内面に爪跡が確認できる。
第 10 図　6	142 号　竪穴住居	P5	弥生	甕	-	-	(6.2)	-	縦方向のハケ	ナデ	BCFH	良	橙褐色	明茶褐色	
第 13 図　1	101 号　貯蔵穴	撹乱	弥生	甕	-	-	-	-	-	ヨコナデ	ABFGH	良	明黄褐色	明黄褐色	
第 13 図　2	101 号　貯蔵穴		弥生	壺	-	-	-	-	-	-	ABGH	良	赤褐色	赤褐色	突帯
第 13 図　3	101 号　貯蔵穴	北側	弥生	壺	-	-	-	-	ナデ	ハケ後ミガキユビオサエ	ABFG	良	赤褐色	明茶褐色	口縁端部に刻目
第 13 図　4	101 号　貯蔵穴	撹乱	弥生	甕	-	-	(6.4)	-	縦方向のハケ	-	ABFGH	良	黄褐色	黄褐色	
第 15 図　1	102 号　貯蔵穴	中層西側	弥生	甕	(21.4)	-	-	-	縦方向のハケ後工具ナデ	ナデ	ABDGH	不良	淡褐色	淡褐色	
第 15 図　2	102 号　貯蔵穴	上層	弥生	甕	(20.8)	-	-	-	ハケ・ユビオサエ	ナデ	AFGH	不良	暗褐色	暗褐色	沈線
第 15 図　3	102 号　貯蔵穴	上層	弥生	甕	(20.3)	(22.0)	-	-	縦方向のハケ	ナデ	ABFGH	良	淡褐色	淡褐色	沈線
第 15 図　4	102 号　貯蔵穴	上層西側	弥生	甕	(29.8)	(27.5)	-	-	縦方向のハケ後ヨコミガキ	ヨコミガキユビオサエ	ABFGH	良	淡茶褐色	黒褐色	
第 15 図　5	102 号　貯蔵穴	上層西側	弥生	甕	-	-	-	-	-	ナデ	ABFGH	良	淡暗褐色	淡白褐色１部、灰褐色	
第 15 図　6	102 号　貯蔵穴	4 層東側	弥生	壺	(12.8)	-	-	-	ミガキ	ナデ	ABFGH	良	淡橙褐色	淡橙褐色	突帯
第 15 図　7	102 号　貯蔵穴	中層西側	弥生	甕	-	-	(6.9)	-	ハケ	ナデ	ABCGH	良	赤褐色	黒褐色	
第 15 図　8	102 号　貯蔵穴	中層西側	弥生	壺	-	-	-	-	ハケ後ミガキ	ヨコミガキユビオサエ	ABFGH	不良	淡褐色	灰白褐色	重弧文・丹塗り
第 15 図　9	102 号　貯蔵穴	5 層西側	弥生	甕	-	-	(8.0)	-	ハケ	ナデ	ABFG	良	黄褐色	暗黒褐色	
第 15 図　10	102 号　貯蔵穴	4 層西側	弥生	甕	-	-	(8.0)	-	ハケ	ナデ・ユビオサエ	ABDH	良	赤褐色	淡赤褐色	爪の痕が見られる
第 15 図　11	102 号　貯蔵穴	上層西側	弥生	甕	-	-		-	横方向のハケ	ヘラケズリ後ミガキ	ABFGH	良	明褐色１部茶褐色	明褐色	
第 15 図　12	102 号　貯蔵穴	4 層	弥生	甕	-	-	9.4	-	縦方向のハケ	ナデ	ABH	不良	褐色	褐色	黒斑
第 15 図　13	102 号　貯蔵穴	5 層西側	弥生	甕	-	-	8.2	-	ナデ	ナデ	ABCGH	良	赤褐色	赤褐色	
第 17 図　1	103 号　貯蔵穴	D12	弥生	甕	(31.4)	-	-	-	ハケ後ナデユビオサセ	-	ABGH	不良	淡黄褐色	淡黄褐色	突帯
第 17 図　2	103 号　貯蔵穴	下層	弥生	甕	25.4	-	-	-	横･縦方向のハケ	ナデ	ABEGH	良	淡暗褐色	灰褐色	沈線直下に横方向のハケその下に縦方向のハケ
第 17 図　3	103 号　貯蔵穴	2 層南側	弥生	甕	31.4	-	-	-	縦方向のハケ	ヨコナデ	ABFGH	不良	暗褐色	暗褐色	沈線
第 17 図　4	103 号　貯蔵穴		弥生	甕	(21.0)	-	-	-	ハケ	ミガキ後ナデ	ABFGH	良	淡橙褐色	淡橙褐色	
第 17 図　5	103 号　貯蔵穴	中層南側	弥生	甕	(28.4)	-	-	-	縦方向のハケ後ヨコナデ・ユビオサエ	縦･横方向のハケ後ミガキ、ユビオサエ	ABFGH	良	淡橙褐色	淡橙褐色	口縁口唇部には横方向のハケ
第 17 図　6	103 号　貯蔵穴	P3	弥生	甕	(27.4)	-	-	-	縦方向のハケ	ハケ後ミガキ	ABEFH	良	暗褐色	灰褐色	沈線
第 17 図　7	103 号　貯蔵穴	中層	弥生	甕	(29.4)	-	-	-	縦方向のハケ後横方向のハケ・ナデ	ナデ	ABEFG	良	暗黄褐色	明黄橙褐色	
第 17 図　8	103 号　貯蔵穴	中層	弥生	壺	(26.2)	-	-	-	縦方向のハケ	ナデ･ミガキ１部ヘラミガキ	ABF	良	暗褐色	黒灰褐色	
第 17 図　9	103 号　貯蔵穴	P12	弥生	甕	(29.0)	-	-	-	縦方向のハケ	-	ABFGH	不良	黄褐色	黄褐色	
第 17 図　10	103 号　貯蔵穴	P4	弥生	甕	16.9	-	6.2	16.9	縦方向のハケ後ヘラミガキ	ヨコナデの後縦ヘラミガキ、ユビオサエ	ABEFH	良	赤褐色	灰黒色灰黒褐色	突帯
第 17 図　11	103 号　貯蔵穴	P1	弥生	器台	9.1	5.5	9.2	13.6	ナデ	ナデ	ABDFG	良	淡灰褐色	淡灰褐色	黒斑
第 17 図　12	103 号　貯蔵穴	P11	弥生	甕	-	-	7.9	-	縦方向のハケ	ナデ	ABFGH	良	淡灰褐色	淡灰褐色	
第 17 図　13	103 号　貯蔵穴	P2	弥生	甕	-	-	7.6	-	縦･斜め方向のハケ	ナデ	ABGH	不良	赤褐色	黒褐色	
第 17 図　14	103 号　貯蔵穴	P9	弥生	甕	-	-	6.2	-	縦方向のハケ	-	ABFGH	良	灰褐色	灰褐色	
第 17 図　15	103 号　貯蔵穴	P7	弥生	甕	-	-	(7.2)	-	縦方向のハケ	ナデ・ミガキユビオサエ	ABGH	不良	赤褐色	淡灰褐色	
第 17 図　16	103 号　貯蔵穴	P1	弥生	甕	-	-	6.4	6.4	縦方向のハケ	ナデ	BCEFH	不良	褐色	褐色	日田の胎土と異なる
第 20 図　1	103 号　貯蔵穴 100 号　溝	中層・上層 2 区 2 層接合	弥生	甕棺	-	-	12.7	-	縦方向のハケ後底部ヨコナデ	ミガキ	ABEFGH	良	暗褐色	明褐色	底部に黒斑・内部調整は底部と胴部では方向が異なる
第 20 図　2	103 号　貯蔵穴	P8	弥生	甕	-	-	7.2	-	縦方向のハケ	ナデ･１部ハケ	ABFGH	良	淡褐色	淡褐色	
第 20 図　3	111 号　貯蔵穴		弥生	甕	-	-	(7.0)	-	ハケ	ユビオサエ	ABDGH	良	赤褐色	暗褐色	
第 20 図　4	111 号　貯蔵穴		弥生	甕	-	-	-	-	ナデ	ミガキ	ABFH	良	赤褐色	赤褐色	
第 23 図　1	112 号　土坑	P50	弥生	甕	(24.4)	-	-	-	-	-	ABFGH	不良	淡黄褐色	暗茶褐色	黒斑
第 23 図　2	112 号　土坑	P105			(26.0)	-	-	-	-	-	ABFH	不良	黒赤褐色	黒褐色	突帯

挿図番号	区名	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
					口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第 23 図　3	112 号　土坑	P81	弥生	甕	(26.6)	-	-	-	-	-	ABFGH	不良	明黄褐色	黄橙色	突帯
第 23 図　4	112 号　土坑		弥生	壺	-	-	5.4	-	縦方向のハケ後ミガキ	ハケ	AFGH	良	暗茶褐色	黒褐色	突帯２条
第 23 図　5	112 号　土坑	P13	弥生	壺	-	-	4.4	-	-	ナデ･ユビオサエ	ABDFH	良	淡黄褐色	淡黄褐色	黒斑
第 23 図　6	112 号　土坑	P55	弥生	甕	-	-	8.0	-	ハケ	-	ABFH	良	赤褐色	赤褐色	
第 23 図　7	112 号　土坑	P46	弥生	甕	-	-	(8.8)	-	ハケ	ナデ	ABFH	不良	褐色	黒褐色	
第 23 図　8	112 号　土坑	P67	弥生	甕	-	-	7.5	-	縦方向のハケ	ナデ	ABFH	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 23 図　9	112 号　土坑	P63	弥生	甕	-	-	7.0	-	縦方向のハケ	ナデ	ABFGH	良	褐色	褐色	
第 23 図　10	112 号　土坑	P58	弥生	甕	-	-	5.4	-	-	ナデ	ABCEFH	良	淡褐色	淡褐色	
第 23 図　11	112 号　土坑	P96	弥生	甕	-	-	(8.4)	-	縦方向のヘラミガキ	ナデ	ABDFH	良	暗褐色	暗褐色	
第 23 図　12	112 号　土坑	P3	弥生	壺	-	-	(7.9)	-	-	ナデ	ABFGH	良	明褐色	明褐色	
第 23 図　13	112 号　土坑	ベルト中	弥生	甕	-	-	11.8	-	縦方向のハケ･ナデ	ナデ･ユビオサエ	ABEFGH	良	黒褐色	赤褐色	
第 25 図　1	113 号　土坑		弥生	甕	30	30.6	7.0	35.7	縦方向のハケ	ナデ	ABFGH	不良	暗褐色	黄橙色	沈線
第 25 図　2	118 号　土坑		弥生	甕	-	-	8.4	-	ハケ･ミガキ	-	ABCDFG	良	暗褐色	黄橙色	胎土に黒色粒子含む
第 25 図　3	131 号　土坑	一括	弥生	甕	(27.9)	(27.8)	(8.65)	(33.5)	縦ハケ後縦ナデ１部ミガキ、ユビオサエ	工具ナデ	ABFGH	良	暗灰褐色	灰褐色	沈線
第 25 図　4	131 号　土坑	P5	弥生	甕	(33.2)	-	-	-	ハケ	-	ABFGH	良		黄褐色	黒斑
第 25 図　5	131 号　土坑	P28	弥生	甕	(36.6)	-	-	-	ハケ	ナデ・ユビオサエ	ABGH	不良	明褐色	明褐色	沈線･突帯
第 25 図　6	131 号　土坑	P13	弥生	甕	-	-	8.0	-	縦方向のハケ	ナデ	ABFH	良	赤褐色	赤褐色	
第 25 図　7	131 号　土坑		弥生	甕	-	-	8.0	-	縦方向のハケ	ナデ・ミガキユビオサエ	ABF	良	淡褐色	淡褐色	
第 25 図　8	131 号　土坑	一括	弥生	甕	-	-	(8.2)	-	ハケ	底部に工具痕	AB	良	暗褐色	暗褐色	
第 27 図　1	133 号　土坑	P9	弥生	甕	(30.4)	-	-	-	縦方向のハケ･ナデ	ナデ･ユビオサエ	ABGH	不良	黄褐色	黄褐色	沈線
第 27 図　2	133 号　土坑	P3・7・10一括接合	弥生	壺	-	-	6.1	-	ナデ	ナデ	ABFGH	不良	赤褐色	黄褐色	
第 27 図　3	143 号　土坑	P4	弥生	壺	(29.4)	(41.0)	-	-	横･斜め方向のハケ後ミガキ・ヨコナデ	ハケ・ヨコナデ	ABFGH	良	暗赤褐色	暗褐色	突帯・胴上半に指幅の凹痕があるがタタキと断言できるほど明確ではない
第 27 図　4	101 号　柱穴	一括	弥生	壺	(39.4)		-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	ABEF	良	淡茶褐色	淡茶褐色	
第 27 図　5	102 号　柱穴		弥生	甕	(20.9)	(20.6)	-	-	縦方向のハケ後ナデ	ハケ後ナデ	ABFGH	良	茶褐色	明茶褐色	
第 27 図　6	109 号　柱穴	P2	弥生	甕	-	-	-	-	ユビオサエ	ユビオサエ	ABCDF	良	茶褐色	暗褐色	
第 27 図　7	109 号　柱穴	P8	弥生	壺	-	-	8.1	-	ヘラミガキ	-	ABFH	不良	黄褐色	黄褐色	底は手ナデ
第 27 図　8	109 号　柱穴	Ｐ８	弥生	壺	(14.6)	-	-	-	縦方向のハケ・ナデ横方向のミガキ	ナデ口縁部付近はミガキ	ABDFGH	良	黒褐色	淡褐色	突帯
第 27 図　9	109 号　柱穴	一括	弥生	壺	(22.8)	-	-	-	ハケ･ユビオサエ工具ナデ	-	ABEFGH	良	淡黄褐色	淡黄褐色	口縁下部に刻目
第 27 図　10	109 号　柱穴	P3	弥生	甕	-	-	6.9	-	ハケ･ナデ	ユビオサエ	ABDFGH	不良	淡褐色	淡褐色	
第 27 図　11	109 号　柱穴	一括	弥生	甕	-	-	(6.4)	-	縦･斜め方向のハケ	ナデ・ユビオサエ	ABCFH	良	赤褐色	明黄褐色	
第 27 図　12	109 号　柱穴	P1	弥生	甕	-	-	(7.4)	-	縦･斜め方向のハケ	ミガキ	ABFGH	良	茶褐色	茶褐色	底部付近の穿孔は焼成前で片側穿孔（外側から）と思われる。
第 28 図　1	113 号　柱穴		弥生	甕	(19.2)	-	-	-	縦方向のハケ後ナデ	ミガキ	ABFG	良	茶褐色	茶褐色	沈線・胎土に黒色粒子含む
第 28 図　2	113 号　柱穴		弥生	甕	24.8	-	-	-	縦方向のハケヨコナデ	ナデ	ABFG	良	暗茶褐色	淡茶褐色	沈線・胎土に黒色粒子含む
第 28 図　3	121 号　柱穴		弥生	壺		-	-	-	ナデ･ミガキ	ミガキ	ABFG	良	淡茶褐色	淡茶褐色	突帯・赤色顔料
第 28 図　4	114 号　柱穴		弥生	壺	(34.4)	-	-	-	-	ヨコハケ後ミガキ	ABFGH	良	暗茶褐色	明橙褐色	内側に突帯。形態は周防灘系だが、胎土は在地のものである
第 28 図　5	114 号　柱穴		弥生	甕	-	-	(8.6)	-	ヘラケズリ後縦方向のハケ後横工具ナデ	ヨコミガキ	ABFGH	良	橙褐色	暗褐色	
第 28 図　6	143 号　柱穴		弥生	甕	-	-	(7.8)	-	斜め方向のハケユビオサエ	ユビオサエ	ABCDFG	良	明褐色	暗褐色	
第 28 図　7	143 号　柱穴		弥生	甕	-	-		-	縦・斜め方向のハケナデ	ミガキ	ABCDF	良	黒褐色	黒褐色	口縁部に刻目
第 28 図　8	160 号　柱穴		弥生	甕	-	-	6.6	-	縦方向のハケ	ナデ	ABFGH	不良	明橙色	黄橙色	黒斑
第 30 図　1	100 号　溝	１区１層	弥生	器台	(9.5)	-	-	-	ハケ	ハケ･ユビオサエ	ABD	良	橙褐色	橙褐色	外面・内面共に一部黄橙褐色
第 30 図　2	100 号　溝	１区２層	弥生	甕	(23.8)	-	-	-	ハケ	ミガキ	ABFG	良	暗褐色	茶褐色	黒斑
第 30 図　3	100 号　溝	２区２層	弥生	甕	(32.0)	-	-	-	ハケ･タタキ	ハケ	ABFG	不良	暗茶褐色	暗茶褐色	口縁端部・突帯に刻目
第 30 図　4	100 号　溝	１区３層	弥生	甕		-	-	-	ハケ・ユビオサエ	横方向のハケ後ナデタタキ	ADFG	良	茶褐色	赤褐色	
第 30 図　5	100 号　溝	２区３層	弥生	甕	(21.0)	-	-	-	ハケ後ナデ	工具ナデ	ABH	良	茶褐色	茶褐色	
第 30 図　6	100 号　溝	２区３層	弥生	甕	(23.8)	-	-	-	ハケ	ナデ	ABFG	良	灰褐色	茶褐色	
第 30 図　7	100 号　溝	１区１層	弥生	甕	-	-	-	-	タタキ	-					
第 30 図　8	100 号　溝	１区２層	弥生	甕	-	-	-	-	-	-	ABG	良	黄褐色	黄褐色	突帯に刻目
第 30 図　9	100 号　溝	２区３層	弥生	壺	-	-	-	-	ミガキ	-	ABEF	良	茶褐色	茶褐色	突帯
第 30 図　10	100 号　溝	２区３層	弥生	甕	(30.8)	-	-	-	-	-	ABFG	良	茶褐色	黄褐色	
第 30 図　11	100 号　溝	２区上層	弥生	甕	(11.8)	-	-	-	ナデ	ナデ･ユビオサエ	ABC	不良	暗褐色淡橙褐色	淡橙褐色	口縁部から頸部にかけて黒斑
第 30 図　12	100 号　溝	１区３層	弥生	鉢	(9.6)	-	-	-	ナデ	ナデ･ユビオサエ	ABF	良	黒褐色	黒褐色	
第 30 図　13	100 号　溝	２区３層	弥生	甕	(12.9)	-	-	-	ナデ	ナデ･ミガキ	ABFG	良	橙褐色	橙褐色	
第 30 図　14	100 号　溝	２区３層	弥生	樽型土器	-	-	-	-	-	-	ABEF	良	赤褐色	赤褐色	丹塗り
第 30 図　15	100 号　溝	２区３層	弥生	甕	-	-	(6.6)	-	-	-	ABF	良	赤褐色	暗褐色	
第 30 図　16	100 号　溝	２区最下層	弥生	高坏	-	-	-	-	-	-	ABFGH	良	黒褐色	淡黄褐色	
第 30 図　17	100 号　溝	２区３層	弥生	蓋	-	-	-	5.9	ハケ後ナデ	-	ABDFG	不良	淡黄褐色	淡黒褐色	
第 30 図　18	100 号　溝	２区３層	弥生	支脚	-	-	-	-	-	ユビオサエ	ABF	良	暗褐色	暗褐色	
第 30 図　19	100 号　溝	２区３層	弥生	甕	-	-	(5.0)	-	ナデ	-	AF	不良	赤褐色	淡褐色	
第 30 図　20	100 号　溝	１区３層	弥生	甕	-	-	8.8	-	ハケ	ナデ	ABCDGH	良	淡赤褐色	赤茶褐色	
第 30 図　21	100 号　溝	２区３層	弥生	支脚	-	-	-	-	工具痕	ナデシボリ･工具痕	ABDEFG	良	暗茶褐色	淡茶褐色	
第 30 図　22	100 号　溝	２区３層	弥生	器台	-	-	(8.6)	-	-	-	ABEF	良	橙褐色	橙褐色	
第 30 図　23	100 号　溝	２区３層	弥生	加工	-	-	(13.5)	-	-	-	AC	不良	淡黄褐色	淡黄褐色	甕の底部を加工後利用

挿図番号	区名	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
					口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第 30 図　24	100 号　溝	1 区 2 層上層	弥生	器台	-	-	9.6	-	ナデ	ナデ･ユビオサエ	BFGH	良	淡黄褐色	黄褐色	
第 30 図　25	100 号　溝	2 区 3 層	弥生	高坏	-	-	-	-	ナデ	ナデ･ユビオサエ	ABC	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 30 図　26	100 号　溝	2 区 3 層	弥生	高坏	(19.4)	-	-	-	ナデ	ナデ	ABCF	不良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 30 図　27	100 号　溝	2 区 3 層	弥生	高坏	坏部 (10.2)	-	-	-	ナデ	ナデ	AF	不良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 30 図　28	100 号　溝	2 区 3 層	弥生	蓋	(17.5)	-	-	-	ナデ	ナデ	ABFG	良	淡褐色	淡褐色	
第 30 図　29	100 号　溝	1 区下層	弥生	甕	-	-	4.2	-	ミガキ	ナデ	AC	良	明黄褐色	明黄褐色	黒斑
第 30 図　30	100 号　溝	1 区南側 土層 P9	弥生	甕	-	-	6.0	-	-	ナデ	ADFGH	良	淡褐色	黒褐色	
第 30 図　31	100 号　溝	1 区南側土層 P1	弥生	甕	-	-	3.0	-	ハケ	ハケ	BEFGH	良	茶褐色	茶褐色	
第 30 図　32	100 号　溝	1 区最下層	弥生	壺	-	-	6.3	-	ナデ	ナデ	BEFGH	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 30 図　33	100 号　溝	1 区 2 層下層	弥生	壺	-	-	(6.6)	-	ハケ後ナデ	ナデ	ABC	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 30 図　34	100 号　溝	2 区 P5	弥生	甕	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ACDF	良	淡黄褐色	橙褐色	
第 30 図　35	100 号　溝	1 区最下層	弥生	甕	-	-	-	-	タタキ後ハケ	ハケ	AB	良	暗茶褐色	暗茶褐色	
第 30 図　36	100 号　溝	1 区 2 層下層	弥生	壺	24.8	-	-	-	ハケ後ミガキ	ナデ後ミガキ	ABFGH	良	黄褐色	暗褐色	頸部に突帯
第 30 図　37	100 号　溝	1 区最下層	弥生	高坏	(22.6)	-	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	AF	不良	黄褐色	黄褐色	
第 30 図　38	100 号　溝	1 区最下層	弥生	高坏	(25.4)	-	-	-	-	ハケ後ミガキ	ABDF	良	淡褐色	淡褐色	
第 30 図　39	100 号　溝	2 区 P5	弥生	甕	(24.6)	-	-	-	ハケ・ナデ	-	ABG	不良	淡褐色	淡褐色	
第 30 図　40	100 号　溝	1 区最下層	弥生	壺	-	-	(7.0)	-	ナデ	ナデ	ABF	良	淡褐色	明茶褐色	
第 30 図　41	100 号　溝	2 区 P5	弥生	甕	-	-	(4.2)	-	タタキ後ナデ	工具ナデ	ABCF	良	淡黄褐色	淡橙色	
第 30 図　42	100 号　溝	1 区最下層	弥生	器台	-	-	(8.4)	-	ハケ	ナデ	ABCF	良	淡褐色	淡褐色	
第 30 図　43	100 号　溝	2 区 P4	弥生	甕	-	-	(8.4)	-	ナデ	ハケ後ナデ	BCDFG	不良	淡褐色	淡褐色	
第 36 図　1	116 号　甕棺墓		弥生	甕棺	(37.2)	-	-	-	ハケ・ナデ	-	ABCFGH	良	淡褐色	淡黒褐色	上甕、胴上部に突帯
第 36 図　2	116 号　甕棺墓		弥生	甕棺	(39.1)	-	-	56.6	ハケ	ハケ	ABEG	良	暗褐色	淡褐色	下甕、胴上部に突帯 2 本
第 38 図　1	144 号　甕棺墓		弥生	甕	(38.0)	(32.2)	-	-	タタキ後ヘラミガキ	工具ナデ	ABC	良	赤色	鈍い橙色	突帯頸部（1 条）・胴部（3 条） 赤色顔料を塗布
第 42 図　1	107 号　木棺墓	1 区墓壙上層	弥生	壺	(25.0)	-	-	-	ナデ	ナデ	ABCFGH	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第 42 図　2	107 号　木棺墓	セクションベルト下層	弥生	甕	-	-	(6.4)	-	ナデ	-	ABGH	良	赤褐色	赤褐色	
第 42 図　3	108 号　木棺墓	主体部内下層	弥生	壺	-	-	(7.3)	-	ナデ	ナデ	ACDFG	良	淡黒褐色	白褐色	
第 42 図　4	107 号　木棺墓	墓壙内	弥生	壺	-	(48.0)	-	-	-	ナデ	ABCE	良	淡灰褐色	褐色	突帯、黒斑
第 42 図　7	108 号　木棺墓	主体部内 (棺内)	弥生	壺	(25.2)	-	-	-	ナデ	ナデ	ABCFGH	良	淡茶褐色	淡茶褐色	
第 42 図　8	108 号　木棺墓	主体部内 (棺内)	弥生	甕	(30.2)	-	-	-	-	-	ABCFH	良	灰白色	灰白色	
第 42 図　9	108 号　木棺墓	棺内上層	弥生	壺	(17.2)	-	-	-	ナデ	ナデ	ABDFGH	良	淡褐色	淡褐色	沈線
第 42 図　10	108 号　木棺墓	表層一括	弥生	鉢	(10.0)	-	-	-	ナデ	ナデ	ACFGH	不良	淡褐色	黒褐色	突帯
第 42 図　11	108 号　木棺墓	棺内下層	弥生	壺	-	(34.6)	-	-	-	ナデ	ABCDFGH	不良	灰褐色	灰褐色	突帯・丹塗
第 43 図　1	146 号　貯蔵穴		弥生	甕	(26.1)	-	-	-	ハケ後ナデ	ミガキ	ABFH	良	暗茶褐色	褐色	胴上部突帯、刻目口縁
第 43 図　2	146 号　貯蔵穴		弥生	甕	(24.6)	-	-	-	ハケ後ナデ	ミガキ	ABFGH	良	暗褐色	褐色	胴上部突帯
第 43 図　3	146 号　貯蔵穴		弥生	甕	-	-	9.05	-	ハケ後ナデ・ミガキ	ナデ	ABFGH	良	暗茶褐色	暗茶褐色	

胎土：A 角閃石　B 石英　C 長石　D 輝石　E 雲母　F 赤色粒子　G 白色粒子　H 砂粒
法量の単位は c m。「()」書きは、残存と復原を示す

第１表　10次調査出土土製品観察表

挿図番号	区名	遺構名	器種	胎土	長さ	幅	厚さ	重量	備考
10 図　7	142 号　竪穴住居	P3	メンコ	ABCH	5.3	4.8	7 ～ 8.5	21.1	甕の胴片を利用している。
31 図　1	100 号　溝	1 区 2 層	メンコ	ABFH	4.15	4.1	0.5	10.9	
31 図　2	100 号　溝	1 区 3 層	メンコ？	ABH	4.9	5.5	0.6	14	表裏共にハケの跡があるが、不明瞭である。
31 図　3	100 号　溝	1 区 3 層	メンコ	ABF	5	2.65	0.7	11.1	表側の 1 部にミガキの痕跡が確認できる。
31 図　4	100 号　溝	1 区 3 層	メンコ	ABF	3.9	4.2	0.6	8.8	I 部分にだけミガキが確認できる。
31 図　5	100 号　溝	1 区 3 層	メンコ？	ABF	4.7	4.3	0.6	13.7	
31 図　6	100 号　溝	2 区 3 層	メンコ	ABF	5.1	5.2	0.6 ～ 0.7	24.3	
31 図　7	100 号　溝	2 区 3 層	紡錘車	ABH	2.9	2.6	1.1	7.3	
31 図　8	100 号　溝	2 区 3 層	土製品	ABH	2.5	0.9	0.7	1.8	全体的に赤色顔料を塗っていた痕跡が確認できる .

胎土：A 角閃石　B 石英　C 長石　D 輝石　E 雲母　F 赤色粒子　G 白色粒子　H 砂粒

第１表　10次調査出土石器観察表

挿図番号	区名	遺構名	器種	胎土	長さ	幅	厚さ	重量	備考
5 図　11	36 号　竪穴住居	一括	砥石	砂岩	7.5	4	2.6	122.4	全面研磨しているが、片面では棒状のものを研磨したような凹みがある
5 図　12	36 号　竪穴住居	一括	石庖丁	緋雲母片岩	3.7+	2.6+	0.9+	14.2	周囲がすべて欠損し、紐孔の一部が残存していることから石庖丁と判断
5 図　13	36 号　竪穴住居		砥石	砂岩	9.1	3.3	3.25	159.4	全面に使用の痕跡がうかがえる
7 図　6	115 号　竪穴住居	埋土内一括	石鏃	腰岳産黒曜石	2.1	1.6	0.4	1.2	
15 図　14	102 号　貯蔵穴	東側中層	紡錘車	凝灰岩	3.9	1.75+	0.8	5.9	
15 図　15	102 号　貯蔵穴	東 3 層	石鏃	サヌカイト	1.2	1.3	0.3	0.4	
15 図　16	102 号　貯蔵穴	土層	抉入柱状片刃石斧	頁岩	4.7+	2.6+	1	17.5	破片
15 図　17	102 号　貯蔵穴	東側 3 層上層	磨製石斧	緑色片岩	8.4+	4.8+	?	125.2	
22 図　1	112 号　土坑	Ｐ－９	小型磨製石斧	蛇紋岩	7.9	2.6	1.25	48.5	横方向の研磨痕、刃部の擦痕が見られる、刃こぼれ有り
32 図　1	100 号　溝	1 区 2 層上層	石庖丁		8.7	4.9	0.7		
32 図　2	100 号　溝	1 区 2 層上層	石庖丁	輝緑凝灰岩	8.3	4.6	0.7	38.4	
32 図　3	100 号　溝	2 区 1 層	石庖丁	輝緑凝灰岩	5	4.6	0.7	25.8	
32 図　4	100 号　溝	2 区 2 層	石庖丁	頁岩	2.9+	4.9+	0.4	9.5	
32 図　5	100 号　溝	1 区 1 層	石庖丁	輝緑凝灰岩	4.5+	3.55+	0.6+	10.9	立岩産
32 図　6	100 号　溝	2 区 3 層	磨製石鏃	頁岩	3.5+	2.1	0.4	3.5	
32 図　7	100 号　溝	3 層	磨製石剣	頁岩	3.4+	3.3	0.8	12	刀身が折れて、欠損している
32 図　8	100 号　溝	2 区 3 層	磨製石剣	頁岩	2.2+	2.0+	1	6.7	柄の部分から先端にかけて欠損している
32 図　9	100 号　溝	2 区 3 層	磨製石剣	頁岩	2.3+	1.9+	0.9	6.6	柄の部分から先端にかけて欠損している
32 図　10	100 号　溝	1 区 3 層	凹石	安山岩	8.8	8.8	5.5	586.8	一面の中心部が敲打により著しく窪んでいる
32 図　11	100 号　溝	1 区 2 層上層	打製石斧	緑泥片岩	9.0+	6.8+	1.6	159.4	基部が欠損している
32 図　12	100 号　溝	1 区 2 層上層	石匙	サヌカイト	3.9	5.1	1.2	19.9	
32 図　13	100 号　溝	2 区 3 層	石鏃	黒曜石	2.5	1.8	0.9	1.4	未製品
32 図　14	100 号　溝	1 区黒色土層	石匙	サヌカイト	3.7	4.0+	1	11.3	端部が欠損、全面を丁寧に調整、特に刃部は細かな調整を受ける
42 図　5	107 号　木棺墓	4 区墓壙上層	石鏃	姫島産黒曜石	1.4	2	0.3	0.5	全体的に節理が若干みられる片面は周辺端部のみの調整となっている
42 図　6	108 号　木棺墓	棺内上層	用途不明	片岩	3.2	2.05	0.4	3.7	
44 図　1	113 号　貯蔵穴	遺構検出面	磨製石斧	結晶片岩	8.0+	5.6+	3.0+	215.6	先端部欠損・打痕があまりみられない全体を荒割により整形し、研磨している
44 図　2	126 号　土坑		敲石	安山岩	7.5	3.2	3.3	128.6	両端に敲打痕がうかがえる
44 図　3	115 号　竪穴住居	Ｐ－ 13	打製石斧	緑泥片岩	14.1	5	2.1	263.2	基部欠損
44 図　4	115 号　竪穴住居	Ｐ－８	砥石	不明	9.4	4.4	2.5	145.1	左側の側面の一部だけ（約２. 1 cm）砥石として使用
44 図　5	115 号　竪穴住居	１－４区埋土内一括	砥石	不明	5.9	4.35	1.6	71.6	形状の一端から再利用の可能性も考えられる
45 図　1		遺構検出面	石庖丁	不明	1.9+	2.2+	0.7+	6.1	石材は軽く、砂岩や頁岩とも違う

法量単位　長さ・幅・厚さ　cm　　重量　g

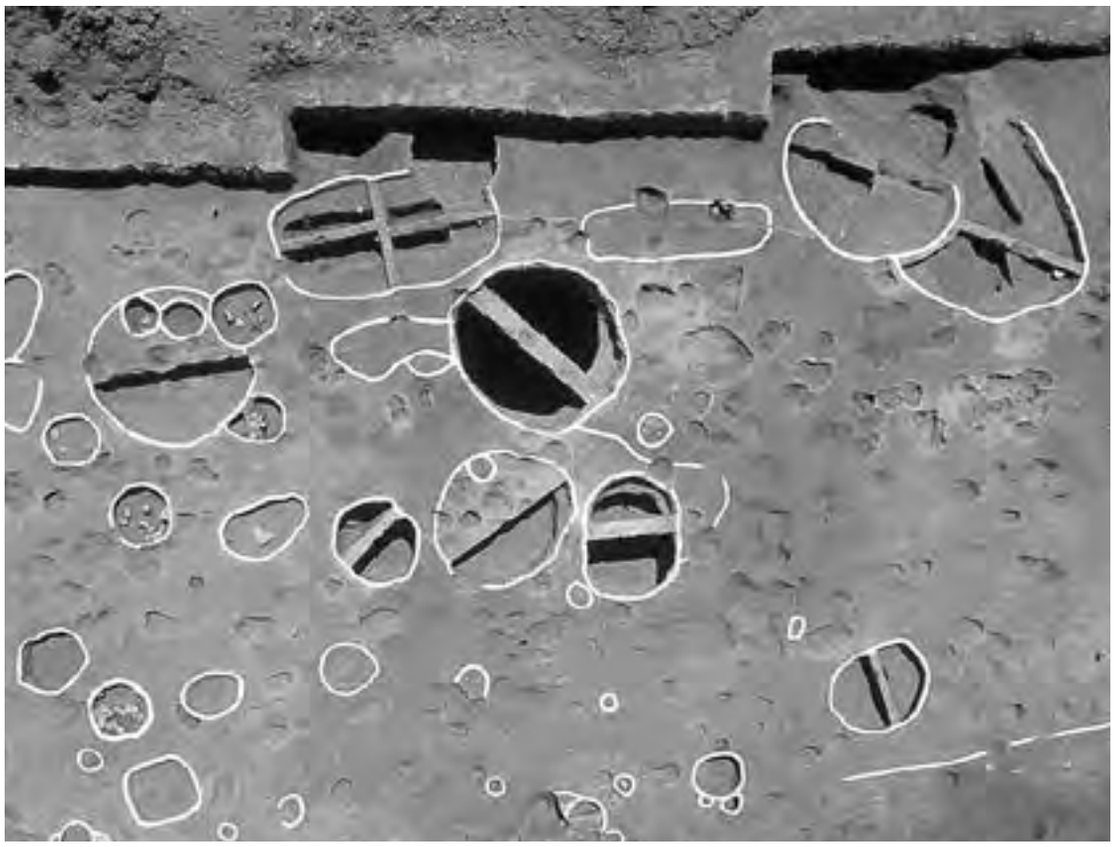
10 次調査区及び市街地遠望（北上空から）

調査区全景（東から）

図版２

調査区遠望（東上空から）

調査区全景（上空から）



遺構群分布状況（1）（上空から）

遺構群分布状況（2）（北上空から）

図版４

遺構群分布状況（3）（北上空から）

36 号竪穴住居出土状況（東から）

115 号竪穴住居出土状況（東から）

115 号竪穴住居出土状況（北から）

115 号竪穴住居遺物出土状況（西から）

115 号竪穴住居炉址出土状況（1）（南から）

115 号竪穴住居炉址出土状況（2）（東から）

122 号竪穴住居出土状況（南から）

145 号竪穴住居出土状況（南から）

101 号貯蔵穴土層堆積状況（北から）

102 号貯蔵穴土層堆積状況（東から）

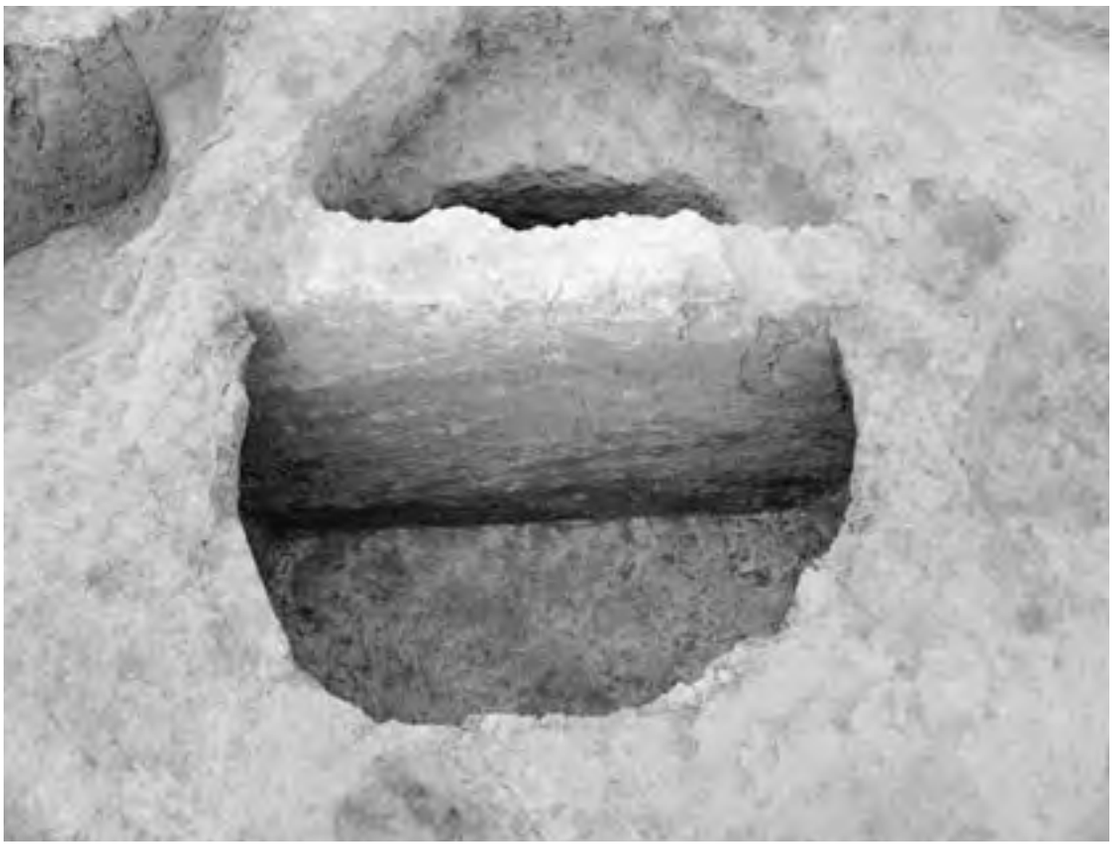
102 号貯蔵穴出土状況（北から）

103 号貯蔵穴土層堆積状況（北から）

103 号貯蔵穴遺物出土状況（北から）

103 号貯蔵穴出土状況（南から）

104 号貯蔵穴土層堆積状況（北から）



105 号貯蔵穴土層堆積状況（北から）

111 号貯蔵穴出土状況（北から）

111 号貯蔵穴出土状況（西から）

112 号土坑遺物出土状況（北から）

112 号土坑遺物出土状況（東から）

127 号土坑出土状況（東から）

131 号土坑遺物出土状況（西から）

133 号土坑遺物出土状況（南から）

143 号土坑遺物出土状況（東から）

109 号柱穴遺物出土状況（南から）

113 号柱穴遺物出土状況（南から）

114 号柱穴遺物出土状況（南から）

図版 18

100 号溝全景（北上空から）

100 号溝全景（東上空から）

100 号溝全景（北から）

100 号溝 I 区南側土層堆積状況（北から）

図版 20

100 号溝Ⅱ区南側土層推積状況（北から）

100 号溝Ⅱ区北側土層推積状況（南から）

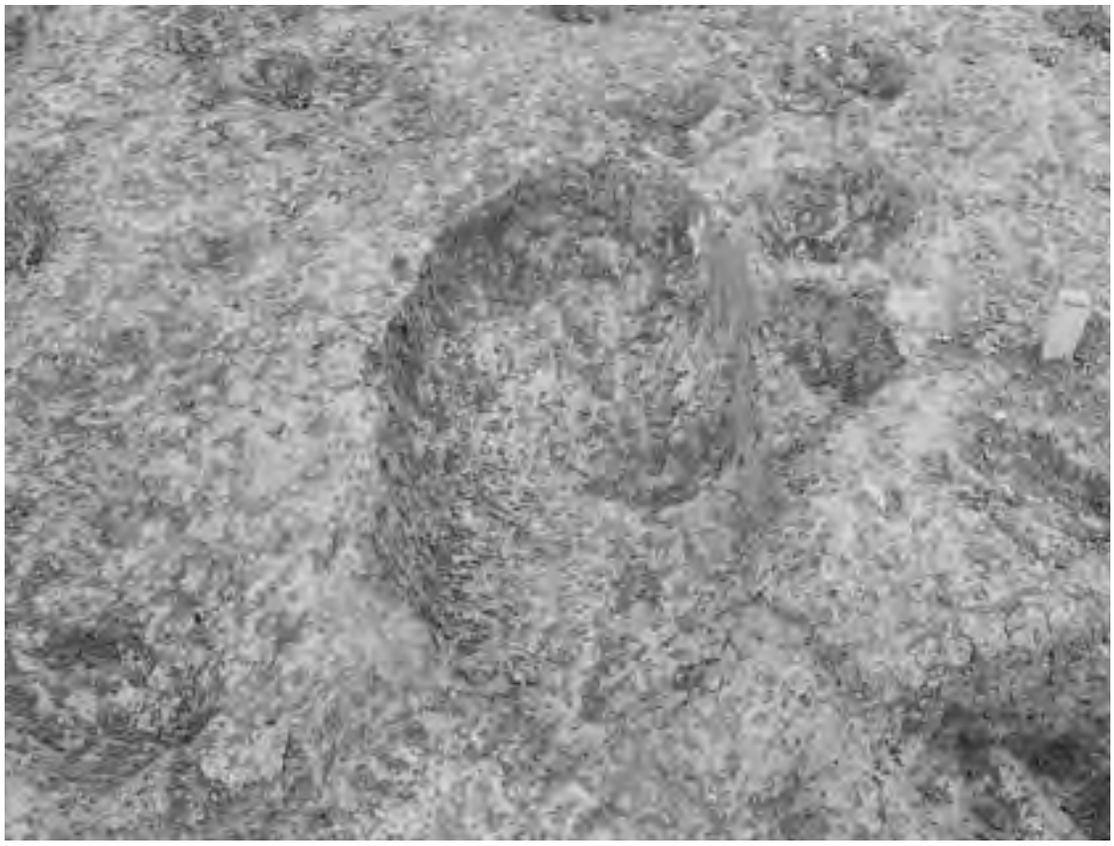
149 号掘立柱建物出土状況（東から）

150 号掘立柱建物出土状況（南から）

116 号甕棺墓出土状況（南から）

116 号甕棺墓出土状況（西から）

144 号甕棺墓出土状況（東から）



136 号土壙墓出土状況（東から）

147 号土壙墓出土状況（東から）

107 号木棺墓出土状況（東から）

107 号木棺墓出土状況（北から）

108 号木棺墓出土状況（南から）

108 号木棺墓出土状況（東から）

109 号土壙墓出土状況（南から）

5-3

5-8

10-5

5-2

5-10

10-6

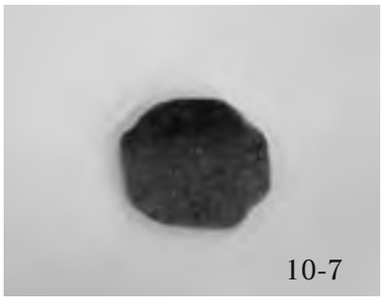
5-6

7-1

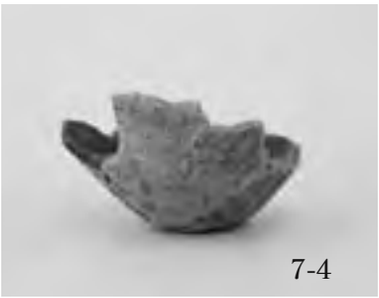
10-4

5-4

7-5


10-7

5-5


7-4

13-4

5-7

7-3

15-1

図版 28

15-2

15-13

17-3

15-3

15-12

17-9

15-6

15-14

20-1

15-10

17-7

17-14

15-9

17-2

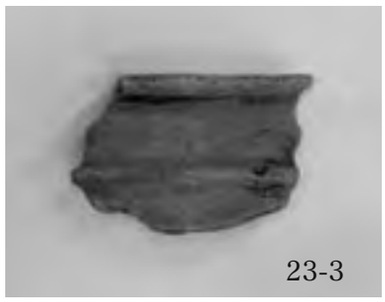
17-17

15-7

17-8

17-13

17-15


23-3

23-7

17-12

23-5

23-9

17-16

23-12

23-11

20-3

23-6

25-4

23-1

23-8

25-5

23-2

23-10

25-6

図版 30

25-7

27-6

28-4

25-9

27-8

28-5

27-1

27-12

28-3

27-2

27-10

28-2

28-8

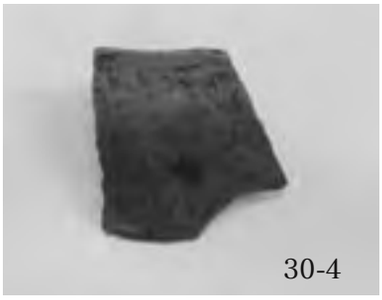
27-7

30-2

25-2

27-11

30-39


30-4

30-7

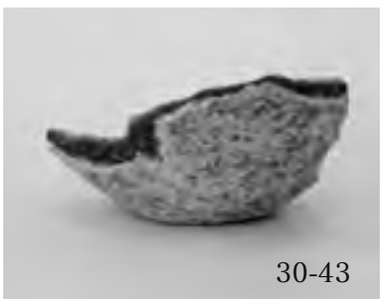
30-24

30-3

30-23

30-21

30-36


30-43

30-20

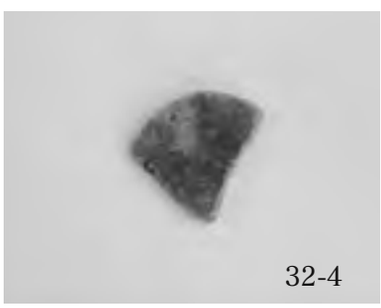
30-27

30-19

32-7

30-38

30-41


32-4

30-12

30-25

32-6

図版 32

42-7

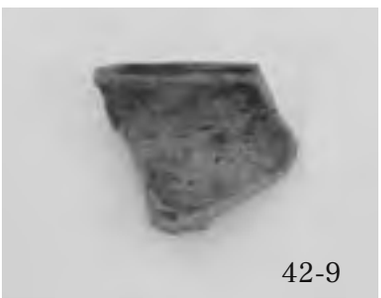
5-13

15-17

42-8

5-11

32-2


42-9

7-6

32-3

42-10

44-4

32-7

42-11

44-5

11 次 10-10

42-3

15-16

11 次 10-9

7-7

25-3

10-1

25-1

17-6

27-3

17-1

図版 34

17-10

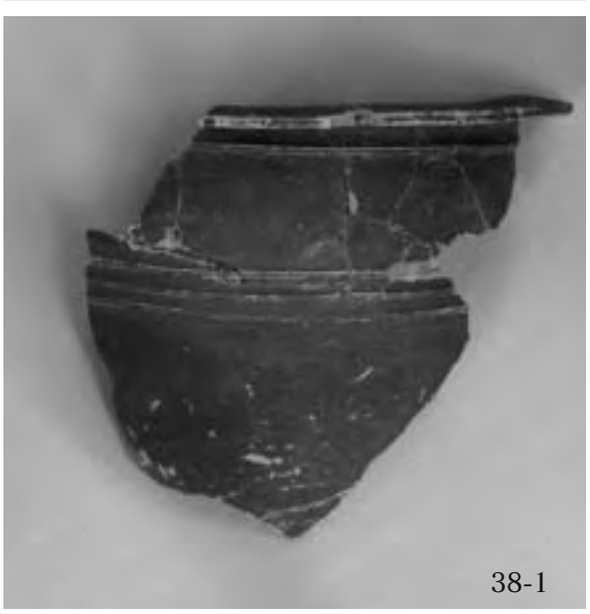
17-11

23-4

27-5

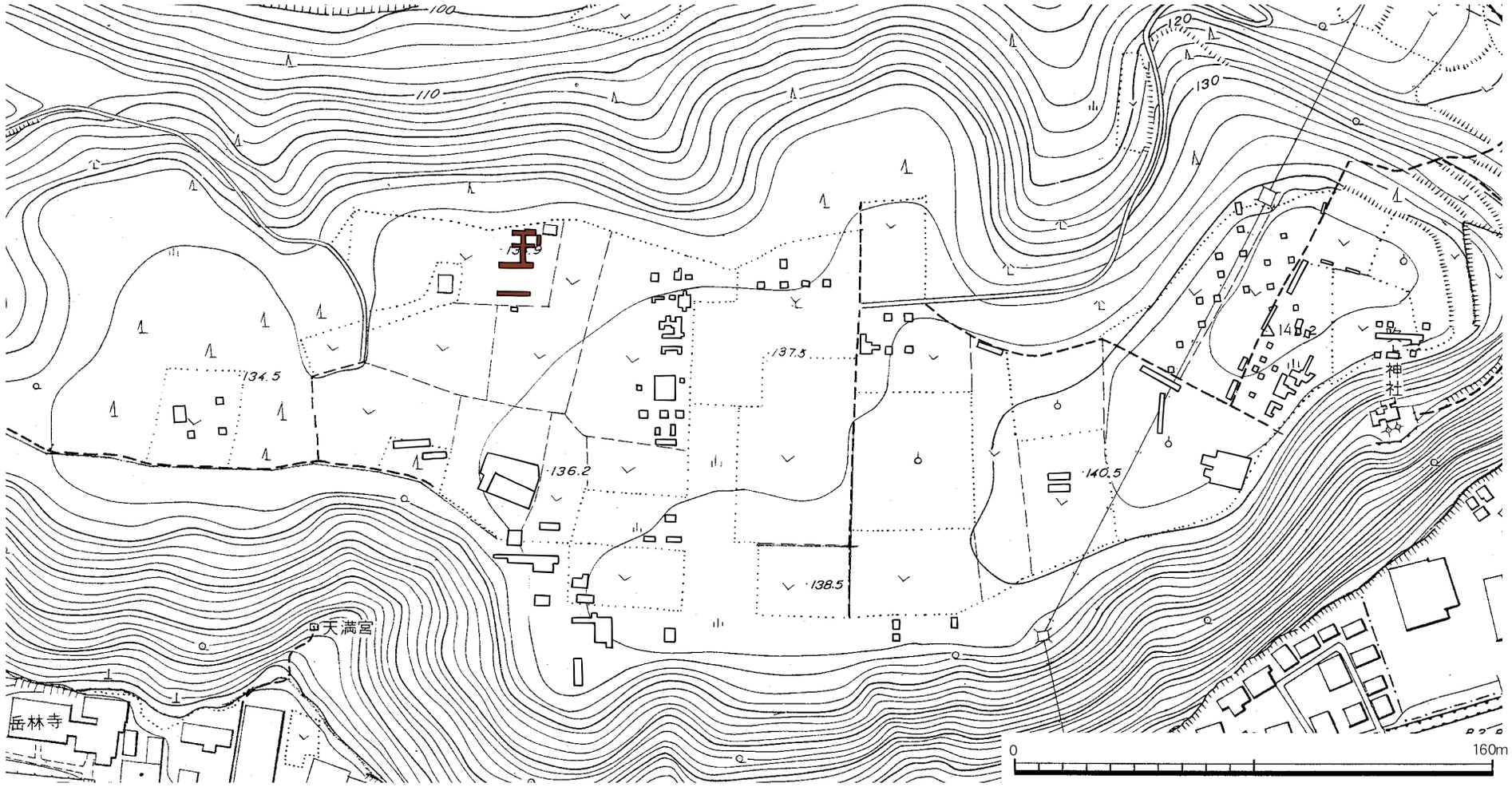
36-1

36-2


38-1

第８章　11 次調査の記録

吹上原台地空中写真（白印は調査位置）



第1図　11 次調査の位置（1/2500）　11次

第１節　調査の概要

11次調査は、10次調査で確認された環濠もしくは条溝の一部と考えられる大溝の延長と性格を検討するため、10次調査区の北側約70ｍの地点にトレンチを設定して調査を行った。調査は平成12年７月24日に着手し８月11日まで実施した。調査面積は122.5㎡である。11次調査地点は台地北側の縁辺部にあたるところで、都合７本のトレンチを入れた。調査の結果、竪穴住居１軒、貯蔵穴２基、土坑５基、溝２条、柱穴30穴などが確認された。調査内容の一部はすでに概要を年報にまとめているので本報告もそれを踏襲しているが、変更が生じた部分については本報告をもって正式な報告とする。なお、『吹上Ｉ』の調査組織に志賀智史（別府大学文化財研究所研究員）が記載されていなかったので追記しておきたい。

11次調査の報告に関する平成15年度の組織体制は、以下のとおりである。

調査責任者　諫山康雄（日田市教育委員会教育長）

調査　事務　後藤　清（同文化課長）、佐藤　晃（同文化課文化財係長兼埋蔵文化財係長）、園田恭一郎（同文化課主査）

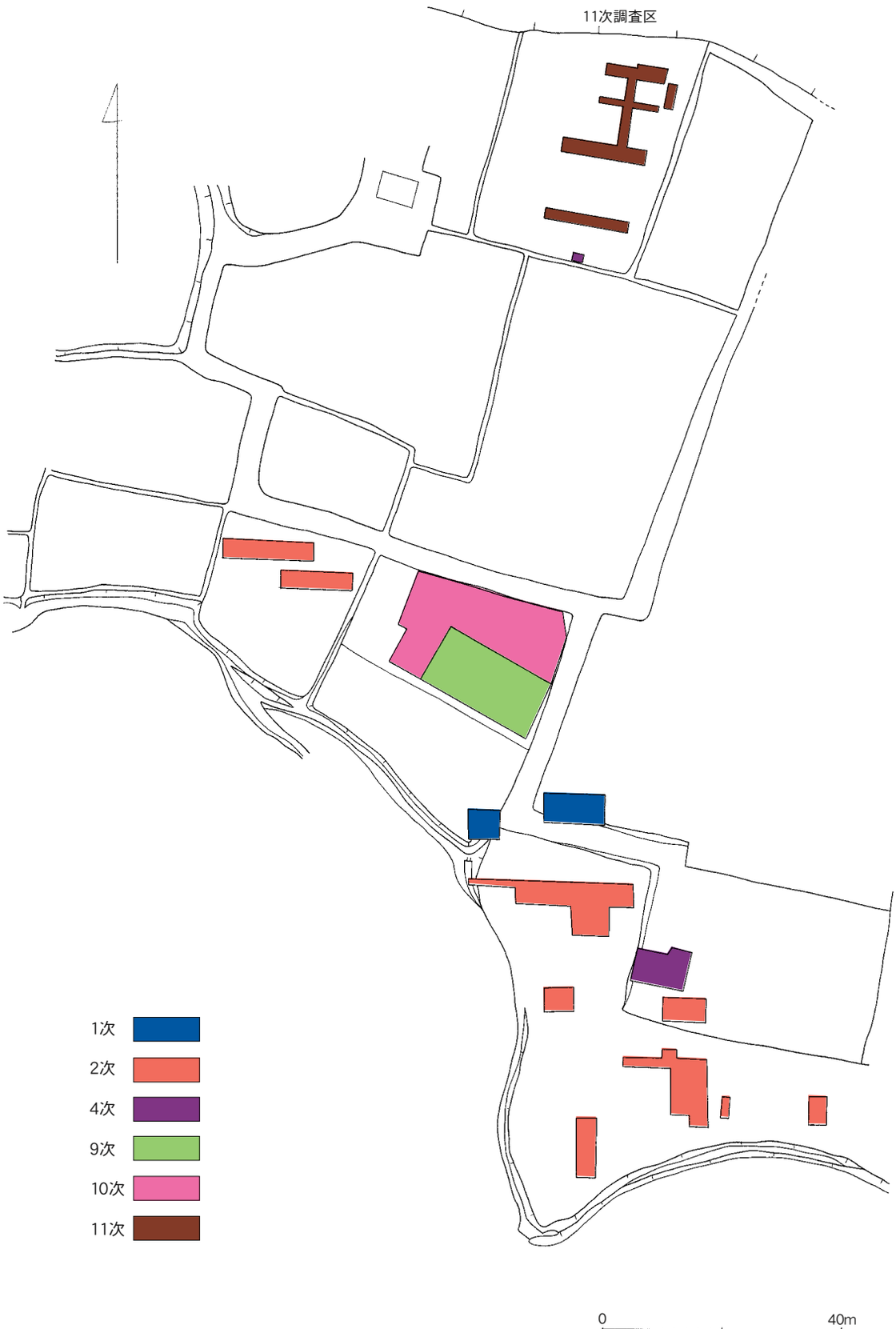
報告書担当　土居和幸（同文化課主査）、下村　智（別府大学文学部助教授）

整理　作業　玉川剛司、北川貴洋、下森弘之、手柴智晴（文化財学専攻大学院生）、岩満　聡（那珂川町教育委員会嘱託）、宇都宮大地（ケアホーム小さなこかげ）、江上正高（大分市教育委員会嘱託）、吉田朋史（大分県教育委員会嘱託）

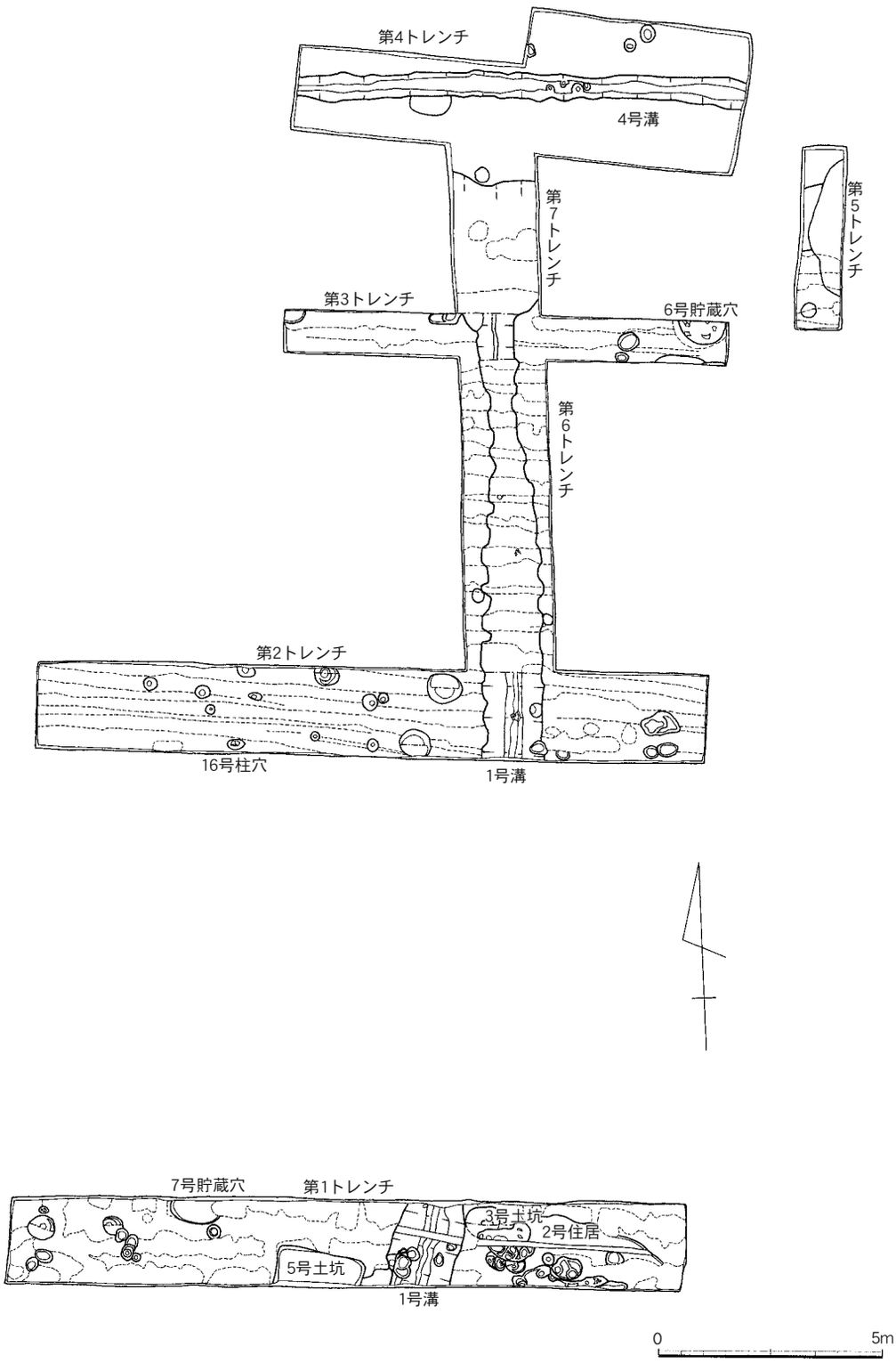
なお、報告書に掲載した挿図・図版作成に携わった関係者は、次のとおりである。

遺物　実測　玉川剛司、井上誠二、織田教雅、北川貴洋、下森弘之、松浦憲治、松尾秀昭、伊藤友美子、末國琢也、田中健一郎、鶴田貴大、手柴智晴、坂井貴志（文化財学専攻大学院生及び科目等履修生）、岩満　聡（那珂川町教育委員会嘱託）、宇都宮大地（ケアホーム小さなこかげ）、江上正高（大分市教育委員会嘱託）、吉田朋史（大

写真１　発掘調査風景



第２図　11 次調査区の位置図（1/1000）



第３図　11 次調査区全体図（1/150）

分県教育委員会嘱託）

製　　図　吉田和彦、下森弘之、手柴智晴（文化財学専攻大学院生）、豊田沙和美（文化財学科学生）、江上正高（大分市教育委員会嘱託）

遺物　写真　玉川剛司（文化財学専攻大学院生）

第２節　調査の内容

（1）竪穴住居

２号竪穴住居（第４・５図、図版２）

第１トレンチ東側で検出された竪穴住居址である。削平や撹乱を受け遺存状況は悪い。現況では床面に炉址、貼り床等は検出されていない。住居内では柱穴の切り合いが多くみられるが、どれが伴うかは確定できなかった。平面プランは径６～７ｍの円形であると想定される。また内側に、掘り込みがなされていた可能性がある。

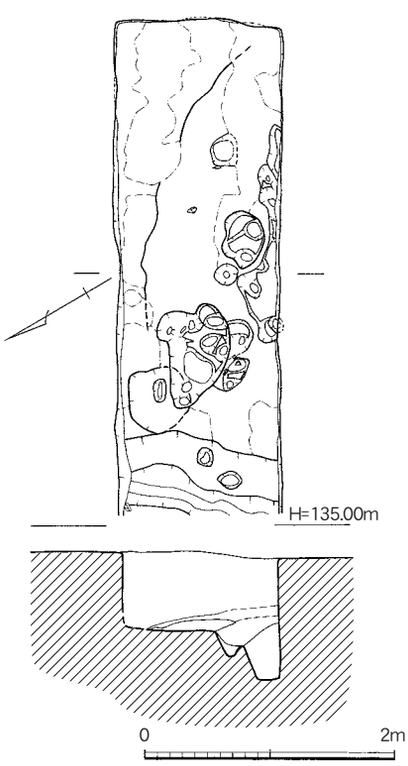
第５図は出土遺物である。１・２は丹塗研磨の高坏と甕の底部である。高坏には坏部中央にM字状の突帯を巡らす。復元口径18.0cm を測る。中期前半代か。２は底径7.4cm を測り、厚い平底をなす。外面にタテハケ、内面にナデを施す。

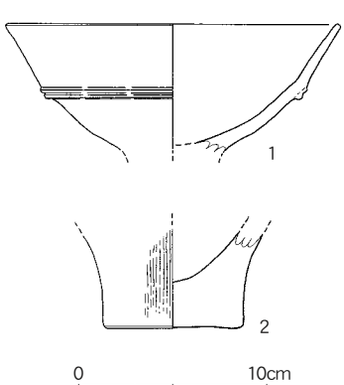
（2）貯蔵穴

６号貯蔵穴（第６・８図、図版３）

第３トレンチ東端部で検出した袋状貯蔵穴である。上面径1.1ｍ、最大径1.3ｍで、深さ0.7ｍまで掘り下げ、それより下は保存のため掘り下げていない。土層の堆積状況をみると、土層は計17層に分かれ、数回に渡り壁面が崩落している様相を呈している。また、8・12・13層からは土器がまとまって出土している。

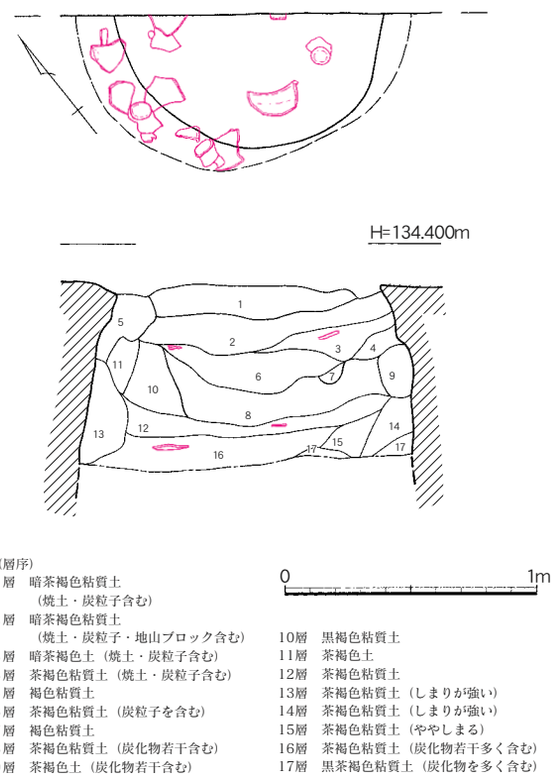
第８図６～８・11～23が出土遺物である。11～13は口縁部外面を断面三角形状に肥厚させた甕である。11は最下層、13は中層から出土している。14は中層から出土した逆Ｌ字状口縁を有する甕である。11～14はともに口縁下に沈線を巡らせ、タテハケを施している。14は沈線下位で胴部が若干外湾し、張り出す。15は壺の胴部である。内外面ともにハケにより調整されている。16は如意形口縁を有する甕である。外面はタテハケにより調整され、底部は欠損している。17





第４図　２号竪穴住居実測図（1/60）　第５図　２号竪穴住居出土遺物実測図（1/4）

は口縁端部を断面三角形状に肥厚させ、その下位に三角突帯を巡らせた甕である。18は肩部に三角突帯を巡らす壺の胴部片である。19は壺の底部片である。内底面では指オサエによる調整の痕跡が観察できる。20～23は底部のみ残存している甕である。20・21・23は底部に若干の窪みがみられ、22は窪み底の底部となっている。21は中層から出土し、厚底で外面にヘラナデ調整が施されている。６は姫島産黒曜石製の剥片である。７は平基式の磨製石鏃である。砂岩を用い全面を研磨により調整している。８は中層から出土した磨石兼敲石である。一面に顕著な磨痕がみられ、周縁部には敲打痕が観察できる。



第６図　６号貯蔵穴実測図（1/30）

７号貯蔵穴（第７図）

第１トレンチ１号溝の西部、調査区北面に位置する小型の袋状貯蔵穴である。北側半分は調査区外に広がっている。上面は耕作による削平や撹乱を受けており、推定直径1.1m、深さ0.15～0.18mを測る程度しか残存していない。図化できる遺物は出土していない。

（３）土坑

３号土坑（第３・８図）

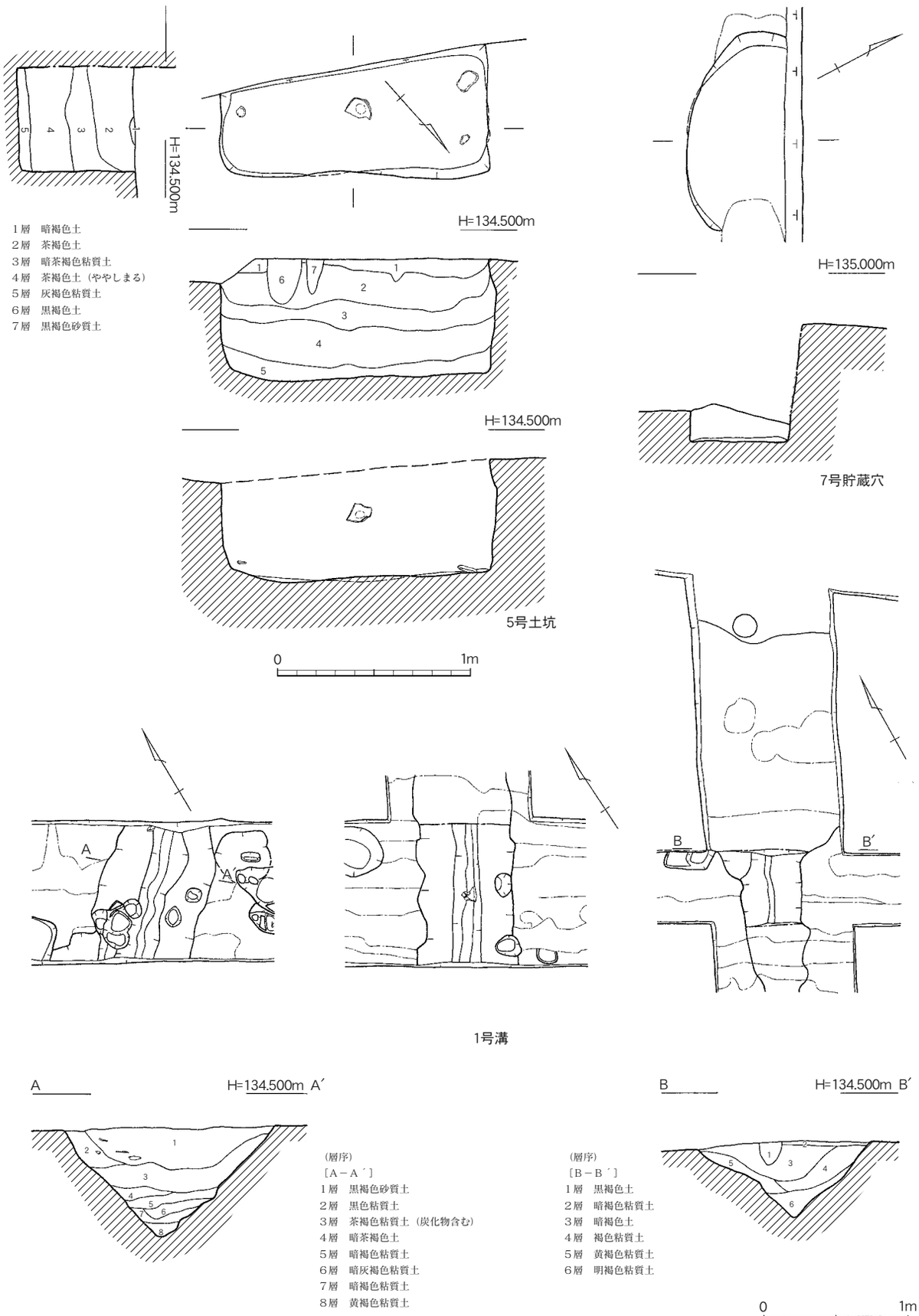
第１トレンチ２号竪穴住居址内に位置する不定形土坑である。土坑内外に柱穴による切り合いが多く入り、床面の形状は不明である。検出面の深さは約0.51mを測る。

第８図１は南半部下層から出土した軽石を素材とする砥石である。軽石の一面が平坦になるまで使用されている。２・３は上層から出土した漆黒色を呈する西北九州産黒曜石を素材とする遺物である。２は石鏃である。基部と先端部をともに欠損しているが、細かな調整剥離によって成形がおこなわれている。３は不純物を若干含む素材を使用した剥片である。背面に一部自然面を残している。端部に使用痕剥離が若干ではあるが窺える。

５号土坑（第７・８図、図版４）

第１トレンチの１号溝西側に位置する土坑で、南側は調査区外に広がっている。平面プランは方形もしくは長方形で、床面はほぼ平坦である。主軸はN49°Ｗを向く。長さ1.85m、幅0.9m＋α、深さ0.8mを測る。

第８図９は口縁端部外面に粘土帯を貼り付け肥厚させた甕の口縁部である。10は底部から胴部下半まで残存している壺である。外面にタテハケ後にヘラミガキが施されている。底面は平坦であ



第７図　７号貯蔵穴・５号土坑・１号溝実測図（1/30・1/40・1/80）

るが若干の窪みが確認できる。４は石庖丁の再加工品の可能性が考えられる遺物である。もとの刃面とは別の面に片刃の刃部を研磨により作出している。５は磨石兼敲石である。平坦面を磨石として使用し、周縁部を敲打に使用したものと考えられる。

（4）溝

１号溝（第７・９図、図版５・６）

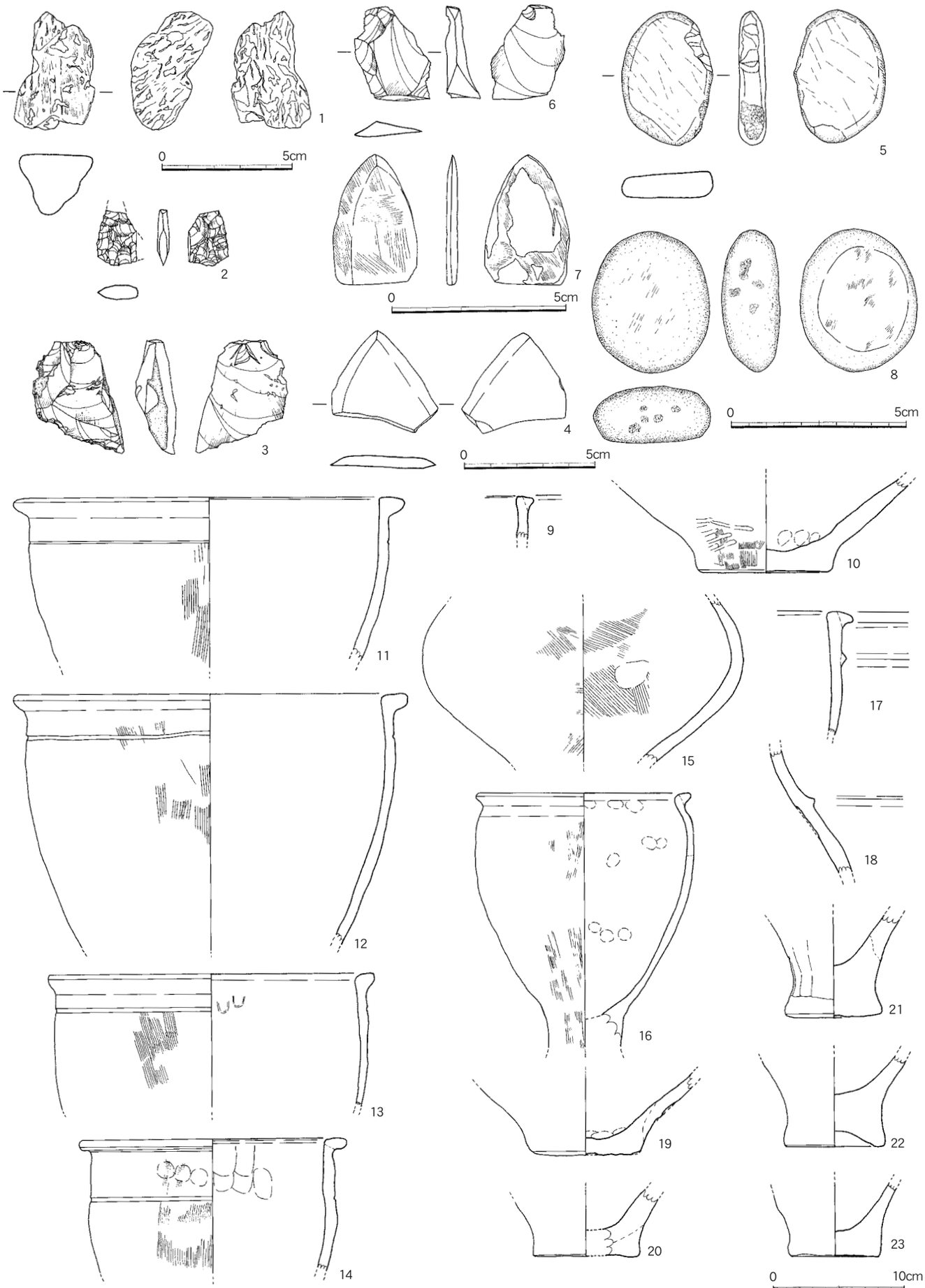
第１～第３トレンチではほぼ直交し、第６トレンチでは並行して検出された南北に走る溝である。第６トレンチではプランのみの確認であったが、他のトレンチでは完掘している。上面は耕作等による削平を受けている。溝はそれぞれ、第１トレンチでは幅約1.53m、深さ約0.76m、底面の標高約133.5mで、第２トレンチでは幅約1.37m、深さ約0.6m、標高約133.69m、第３トレンチでは幅約1.18m、深さ約0.54m、標高約133.62mを測り、底面の標高はほぼ均一である。断面Ｖ字状を呈している。溝がどのように巡るのかを確認するために設定した第５・７トレンチで、東西に走る大溝が検出され、１号溝とＴ字状に接合する。この１号溝南側は、10次調査の100号溝と方向性が合う。また、100号溝の底面が、標高約133.71mであり、１号溝の標高とほぼ一致することから100号溝から連なる南北の溝であると考えられる。

第９図は各トレンチ出土遺物である。１～14は第１トレンチ、15・16・19・20は第２トレンチ、18は第３トレンチ、17は第６トレンチから出土している。１・15はくの字状の跳ね上げ口縁を有する甕である。頸部下には三角突帯を巡らせている。2・3は口縁部を肥厚させ、その下に突帯を巡らせる甕である。4・5・7・16・17は甕の底部片である。4・5・7・16は底部がほぼ丸平底を呈し、ナデにより調整されている。17は底部が窪み底を呈している。6はタタキにより調整された甕胴部片である。外面には黒斑、内面には当て具痕が観察できる。8は立岩産輝緑凝灰岩製の石庖丁である。紐孔と刃面の距離が近いことから端部に再加工を施し使用したものと考えられる。9は頁岩製の石庖丁である。10は立岩産輝緑凝灰岩製の石庖丁である。11は安山岩製の磨石である。主要な磨面が２面確認でき、平滑である。12・13は上層から出土している黒曜石製の石鏃である。12は主要剥離面の周縁部にのみ二次加工を加え、背面には一部自然面が残る雑な調整剥離によって整形されている。13は透明度の高い黒曜石を使用している。凹基式の基部を呈し、丹念な調整剥離によって整形されている。14は黒曜石製の残核である。両端からの剥離によって剥片を剥離している。18は頁岩製の磨製石剣である。全体を丹念な研磨で調整しているが、大きく欠損している。19はハリ質安山岩製のスクレイパーである。主要剥離面での風化が進行し、主要剥離面と背面の二次加工とに時期差が考えられ、前時代遺物の再利用の可能性がある。20は黒曜石製の二次加工剥片である。剥片の端部に細かな二次加工を施している。

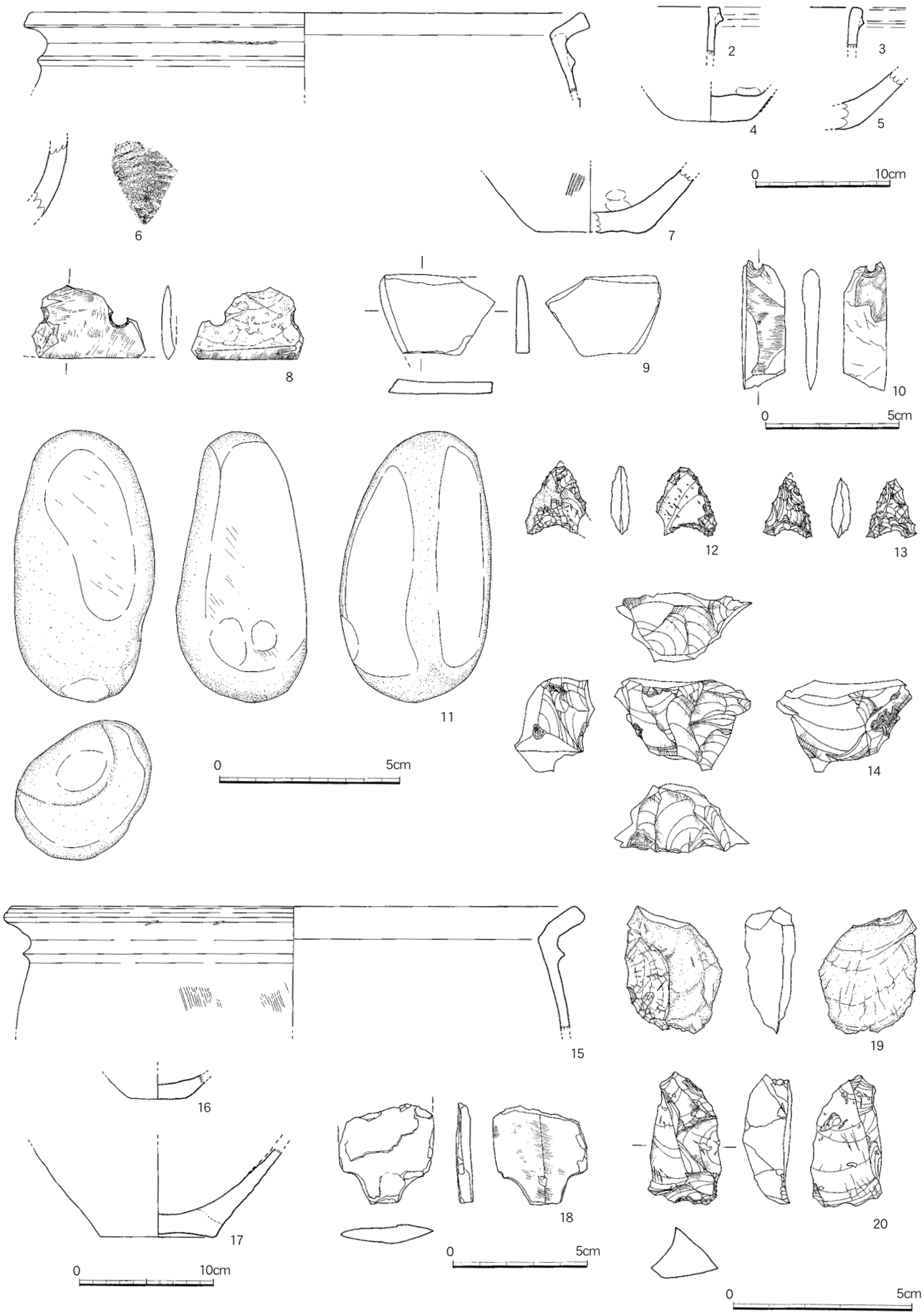
４号溝（第３・10図、図版６）

第４トレンチ中央に位置し、ほぼ東西に走る溝である。１号溝とは接合しないが、１号溝と接合する大溝と並行に並ぶ。規模は、幅約0.7m、検出面からの深さ約0.25m、標高約132.49mを測る。

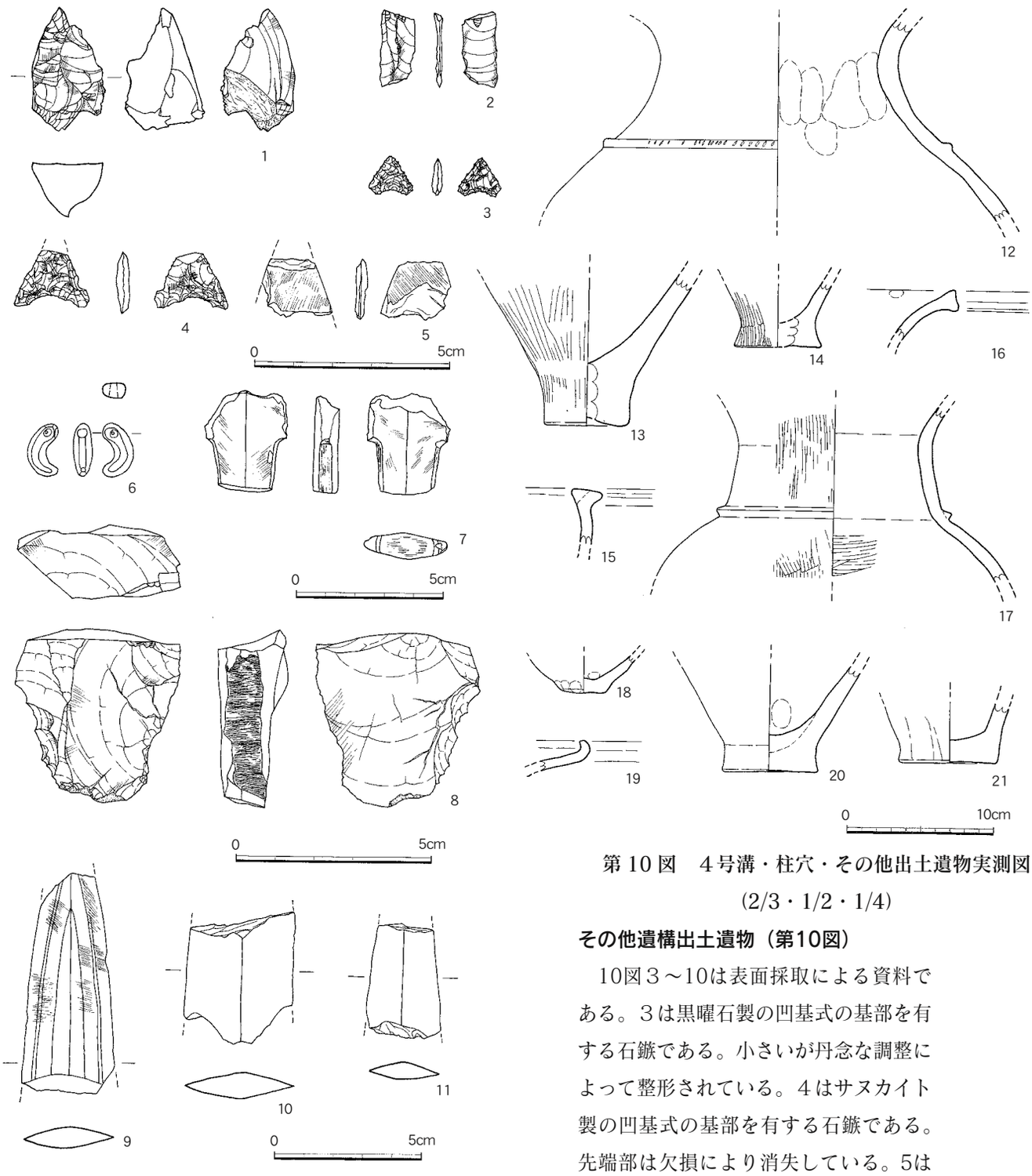
第10図１・２は石材の特徴から西北九州産の黒曜石と考えられる。１は残核である。一端の剥離面に時期差がみられ、前時代遺物の再利用の可能性がある。２は剥片である。



第８図　３号・５号土坑・６号貯蔵穴出土遺物実測図（2/3・1/2・1/3・1/4）



第９図　１号溝出土遺物実測図（2/3・1/2・1/3・1/4）



第10図　4号溝・柱穴・その他出土遺物実測図
(2/3・1/2・1/4)

その他遺構出土遺物（第10図）

10図３～10は表面採取による資料である。３は黒曜石製の凹基式の基部を有する石鏃である。小さいが丹念な調整によって整形されている。４はサヌカイト製の凹基式の基部を有する石鏃である。先端部は欠損により消失している。5は緑泥片岩製の磨製石鏃である。先端と基部をともに欠損しているが、残存部は丁寧に研磨されている。６は翡翠製の勾玉である。片側から円錐状に穿孔を施している。７・９～11は頁岩製の磨製石剣である。９は鎬の部分に模様状の脈がくるように石材を加工している。８はサヌカイト製の剥片である。一部に自然面を有し、その形状から角礫を素材として剥片剥離を行なったと考えられる。12は肩部に刻目突帯を有する壺で

ある。内面に多くの指頭圧痕が観察できる。16号柱穴からの出土である。13・14は底部から胴部下半にかけて残存する甕である。13は窪み底を呈し、厚い作りである。外面にはタテハケを施す。17号柱穴から出土している。14は若干の窪みが確認できる底部である。15は口縁部内外面を肥厚させている甕である。上面は平坦に仕上げる。第１トレンチからの出土である。16は口縁端部が両側に張り出し、中央部がやや窪む壺の口縁部である。器面は磨耗により荒れているが、外面はタテハケ、内面は指頭圧痕がみられる。第６トレンチ出土である。17も第１トレンチ出土で、頸部に三角突帯を施す壺の口縁部である。外面はタテハケ、内面はヨコハケによって調整されている。18は第１トレンチ出土の壺底部である。内外面ともに指オサエが観察できる。19は所謂豊前系の高坏である。坏部が大きく開き、口縁部が内湾する。調整は磨耗のため断言できないが、横方向のミガキが施されていると思われる。第６トレンチ出土である。20・21は甕の底部片である。20は平底であり、21は若干ではあるが底部が窪んでいる。20は第１トレンチ、21は第７トレンチ出土である。なお、写真図版32の10－10・９は11次調査の表採遺物である。　（玉川・北川・下森）

小結

11次調査では、10次調査で検出された断面Ｖ字状の大溝がどのように延びて、どういう性格のものなのかを検討するために実施したが、その結果、10次調査区で出土した大溝（100号溝）の推定延長上にあたり、幅1.4ｍ残後、深さ0.8ｍと幅及び深さが10次と比較すると小さな値になっているが、一連の溝である可能性がきわめて高いと判断された。11次調査区は10次調査区よりも基盤が0.5ｍ程削平されているので、それを加味すればほぼ同じ規模になる。溝底のレベルは大体同じであった。したがって、台地上を100ｍ以上にわたってほぼ一直線に延びる条溝であることが判明した。しかも、台地端部で台地縁辺部を取り囲む環濠と考えられる大溝にＴ字状に接続していることも新たに確認された。これまで、吹上遺跡は独立した台地上に立地しているため環濠を有しない遺跡と考えられてきたが、台地縁辺部を環濠が巡り内部は条溝で区画されるという遺構の構造が徐々に明らかになってきた。このことは11次調査の大きな成果であろう。また、東西に並行する４号溝や第６トレンチで１号溝が極端に幅が狭くなっていることなども、今後出入り口等を考える上で重要である。以前の１・２次調査で台地中央部や南部で部分的ではあるが大溝が検出されており、これらがどのように関連するのか今後の課題である。

また、南側隣接地では４次調査として甕棺墓が１基調査されている。周辺にどのように分布しているか明らかではないが、11次調査では翡翠製の勾玉が１点採集されている。形状から弥生時代のものとみられ、甕棺墓の副葬品の可能性がある。

生活遺構としては竪穴住居、袋状貯蔵穴、土坑などが検出された。２号住居は円形プランで中期前半代に属するものであろう。３号土坑もほぼ同時期になるとみられる。４号溝は環濠と考えられる大溝と並行して伸びるため時期的には後期後半から終末の時期に相当するものではなかろうか。５号土坑は方形もしくは長方形を呈し、壁は直に立ち上がる。方形の貯蔵穴であろう。６号・７号は袋状貯蔵穴である。６号貯蔵穴からは遺物がある程度まとまって出土した。このように、今回は生活関連遺構の広がりも確定することができた。吹上遺跡は各時期を通じて日田盆地の核となるような遺跡であることがさらに明確になったといえよう。

第１表　11次調査出土土器観察表

挿図番号	区名	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
					口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第５図　1	1 トレ	平面図２№３	弥生	高坏	-18	-	-	-	ナデ後ヘラミガキ	ナデ後ヘラミガキ	GH	良	橙褐色	橙褐色	坏部下に M 字状突帯･丹塗り
第５図　2	1 トレ	平面図２№６	弥生	甕	-	-	7.4	-	ハケ	-	ABDG	良	橙褐色	黒褐色	
第８図　9	1 トレ　５号土抗	4 区	弥生	甕	-	-	-	-	ナデ	-	ACH	不良	黄橙色	橙褐色	
第８図　10	1 トレ　５号土抗	3 区３層	弥生	壺	-	-	10.2	-	ハケ後ヘラミガキ	ユビオサエ	ACFG	良	茶褐色	黒灰色	
第８図　11	3 トレ　６号貯蔵穴	16 層	弥生	甕	29.8	-	-	-	ハケ･ナデ	-	AFH	良	黒褐色	黄褐色	沈線･黒斑
第８図　12	3 トレ　６号貯蔵穴	土器３	弥生	甕	-	-	-	-	ハケ･ナデ	-	ABCDEFGH	良	赤褐色	暗茶褐色	
第８図　13	3 トレ　６号貯蔵穴	中層	弥生	甕	-	-	(24.7)	-	ハケ	ユビオサエ	ABCH	良	黄褐色	黄褐色	沈線
第８図　14	3 トレ　６号貯蔵穴	中層	弥生	甕	(20.4)	-	-	-	ハケ･ナデユビオサエ	ナデ･ユビオサエ	AFH	良	黄橙色	黄褐色	沈線
第８図　15	3 トレ　６号貯蔵穴		弥生	壺	-	(24.5)	-	-	ハケ	ハケ	CFH	良	黄橙色	灰褐色	
第８図　16	3 トレ　６号貯蔵穴		弥生	甕	(16.3)	(16.6)	-	-	ハケ･ナデ	ナデ	ABCFH	不良	黄橙色	橙色	
第８図　17	3 トレ　６号貯蔵穴	中層	弥生	甕	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ABCFG	不良	灰褐色	灰黄褐色	
第８図　18	3 トレ　６号貯蔵穴		弥生	壺	-	-	-	-	-	-	ABCFGH	不良	暗赤褐色	褐色	突帯
第８図　19	3 トレ　６号貯蔵穴	土器 10	弥生	壺	-	-	8.3	-	-	ユビオサエ	BCDFG	良	灰黄橙色	灰黄褐色	胎土が荒い
第８図　20	3 トレ　６号貯蔵穴		弥生	甕	-	-	(8.2)	-	ハケ	-	ABCFGH	不良	橙色	黒褐色	
第８図　21	3 トレ　６号貯蔵穴	中層	弥生	甕	-	-	7.2	-	ヘラナデ	ナデ	AFG	良	褐色	黒灰褐色	
第８図　22	3 トレ　６号貯蔵穴		弥生	甕	-	-	7.6	-	-	-	AFH	良	橙色	黒褐色	
第８図　23	3 トレ　６号貯蔵穴	土器５	弥生	甕	-	-	6.8	-	ハケ後ナデ	ナデ	ACDFGH	良	赤褐色	黄橙色	
第９図　1	1 トレ　１号溝	2 層南半分	弥生	甕	(41.0)	-	-	-	ナデ	ナデ	AFGH	良	黄褐色	灰褐色	突帯
第９図　2	1 トレ　１号溝	土層図１層	弥生	甕	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ABCFGH	良	黄褐色	灰褐色	突帯
第９図　3	1 トレ　１号溝	2 層南半分	弥生	甕	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ABF	良	黄橙色	黄橙色	
第９図　4	1 トレ　１号溝	2 層南半分	弥生	甕	-	-	-	-	-	ユビオサエ	ABFH	良	暗赤褐色	褐色	
第９図　5	1 トレ　１号溝	南半分中層	弥生	甕	-	-	-	-	-	ユビオサエ	AFGH	不良	黒灰褐色	黒灰褐色	
第９図　6	1 トレ　１号溝	2 層（中層）南半分	弥生	甕	-	-	-	-	タタキ	-	AH	良	黄橙色	黄橙色	
第９図　7	1 トレ　１号溝	2 層北半分土層図１層	弥生	甕	-	-	7.4	-	縦方向のハケ･ナデ	ナデ･ユビオサエ	ABFH	良	淡褐色	淡褐色	
第９図　15	2 トレ　１号溝	中層	弥生	甕	(43.0)	-	-	-	ハケ後ナデ	-	ABFH	良	淡灰褐色	淡灰褐色	突帯
第９図　16	2 トレ　１号溝	上層	弥生	甕	-	-	4.2	-	ナデ	ナデ	ABF	不良	明灰褐色	淡黄橙色	
第９図　17	2 トレ　１号溝	上層	弥生	壺	-	-	(8.6)	-	ナデ	-	ACGH	良	灰褐色	暗灰色	黒斑
第 10 図　12	2 トレ	SP16	弥生	壺	-	-	-	-	ヨコナデ	ユビオサエ	ABF	良	明褐色	明黄褐色	突帯に刻目
第 10 図　13	1 トレ	SP17	弥生	甕	-	-	5.4	-	ハケ後ナデ	-	ABCD	不良	黄赤褐色	灰褐色	
第 10 図　14	1 トレ	SP34	弥生	甕	-	-	2.8	-	ハケ	ナデ	ABDFG	不良	明赤褐色	橙色	
第 10 図　15	1 トレ	平面図２	弥生	甕	-	-	-	-	ナデ	ナデ	ABFG	不良	暗橙色	黒褐色	
第 10 図　16	6 トレ	表土	弥生	壺	(34.0)	-	-	-	ハケ	ユビオサエ	ABH	不良	暗赤褐色	黒褐色	
第 10 図　17	6 トレ	107 及び	弥生	壺	-	-	-	-	ハケ･ナデ	ハケ	ABCDEGH	良	淡褐色	暗茶褐色	頸部に突帯
第 10 図　18	1 トレ	表土	弥生	壺	-	-	-	-	ナデ･ユビオサエ	ナデ･ユビオサエ	ABEFH	良	白黄褐色	白黄褐色	
第 10 図　19	6 トレ	表土	弥生	高坏	-	-	-	-	-	ナデ	ABFGH	良	暗黄橙褐色	黄橙色	
第 10 図　20	1 トレ	平面図２	弥生	甕	-	-	(6.4)	-	-	ユビオサエ	ABFGH	良	橙色	灰褐色	粘土接合痕
第 10 図　21	7 トレ	遺構検出中	弥生	甕	-	-	6.7	-	ナデ	ナデ	ABCFH	良	黄橙色	淡黄橙色	

胎土：A 角閃石　B 石英　C 長石　D 輝石　E 雲母　F 赤色粒子　G 白色粒子　H 砂粒　法量の単位は c m。「(　)」書きは、残存と復原を示す

第２表　11次調査出土石器観察表

挿図番号	区名	遺構名	器種	胎土	長さ	幅	厚さ	重量	備考
8 図　1	1 トレ　3 号土抗	南半分下層	砥石	軽石	4.4	2	2.5	7.8	一面を磨面とし、平滑で表面が磨り取られたかのような面になっている
8 図　2	1 トレ　3 号土抗	セクション北上層	石鏃	黒曜石	1.6+	1.2+	0.3	0.5	2 ヶ所の欠損が確認される
8 図　3	1 トレ　3 号土抗	セクション南半分 1 層	剥片	黒曜石	3.2	2.6	1.1	6.6	自然面を残す。不純物を含む黒曜石
8 図　4	1 トレ　3 号土抗	Ⅳ区	不明	不明	3.9+	4.0+	0.35	6.8	刃部が 2 面確認できる、石庖丁の再利用品か
8 図　5	1 トレ　3 号土抗	Ⅱ区	磨石兼敲石	安山岩	7.6	5.1	1.6	100.5	表裏ほぼ全面磨石として使用、打痕や磨痕がみられることから磨石や敲石として利用と思われる
8 図　6	3 トレ　6 号貯蔵穴		剥片	姫島産黒曜石	2.7	2	1	2.6	主要剥離面にはバルブとバルバースカが残る
8 図　7	3 トレ　6 号貯蔵穴		磨製石鏃	頁岩	3.8	2.4	0.3	3.8	平基式の鏃・片面では荒割り時の敲打痕が残る
8 図　8	3 トレ　6 号貯蔵穴	中層	磨石兼敲石	安山岩	8.1	6.7	3.1	217	表と裏に磨痕・裏面は平坦で主要な磨面だと思われる側面と下端部に敲打痕が見られる
9 図　8	1 トレ　1 号溝	上層（－ 20）南半分	石庖丁	立岩産？輝緑凝灰岩	2.7+	4.2+	0.6	5.4	欠損により大部分が損失・一面は欠損のようにも見えるが、荒割、細部割、研磨の研磨先段階までで、研磨が行なわれていないように見える
9 図　9	1 トレ　1 号溝	北半分第 2 層	石庖丁（再利用）	頁岩	4.3	3	0.4	9.8	
9 図　10	1 トレ　1 号溝	上層セクション北	石庖丁	立岩産輝緑凝灰岩	4.8+	1.6+	0.6	6.4	一面は真横方向に研磨し、もう一面は斜め方向に研磨されている両サイドは石の節理により欠損したと考えられる
9 図　11	1 トレ	図面２	磨石	安山岩	15	7.8	7.1	1155.6	表面、裏面、石側面、底面の四面が磨面だが、主要な磨面は表面と底面の二面と考えられる
9 図　12	1 トレ　1 号溝	北半分第 2 層	石鏃	黒曜石	1.9	1.5+	0.5	1.1	基部の一脚と先端部が欠損・一面には自然面が残る主要剥離面では基部と一部の側辺にのみ二次加工を行なう
9 図　13	1 トレ　1 号溝	南半分上層	石鏃	黒曜石	1.7	1.4	0.5	0.7	透明感の弱い黒曜石を使用している・先端部は欠損か
9 図　14	1 トレ　1 号溝	南半分中層	残核	黒曜石	2.5	3.8	2	14.9	
9 図　18	3 トレ　1 号溝	中層	磨製石剣	頁岩	3.7	3.5	0.7	9.9	基部以外の部分を大きく欠損する片面のみ丹念に磨かれていて、もう片面は全く磨かれていない
9 図　19	2 トレ　1 号溝	第 2 層（中層）	スクレイパー	ハリ質安山岩	3.5	2.8	1.4	10.466	パティナの進行の度合から、前時期に剥離された剥片の再利用の可能性あり
9 図　20	2 トレ　1 号溝	上層	二次加工剥片	黒曜石	3.7	2	1.4	7.429	端部に二次加工が行なわれていることからスクレイパーではないかと思われる・素材となる黒曜石には不純物を多く含む
10 図　1	4 トレ　拡張 4 号溝	西半分	残核	黒曜石	3.2	1.8	2	6.7	パティナの度合が二段階あり、一度目の剥離から二度目の剥離にはかなりの時間の経過がみられるので旧石器時代の再利用品と思われる
10 図　2	4 トレ　拡張 4 号溝	西半分	剥片	黒曜石	2	0.9	0.25	0.4	
10 図　3	2 トレ	表採	石鏃	黒曜石	1	1.2	0.2	0.1	小さいながらも丹念に調整され形をつくっている・光に透かすと透明度があり、シマが見えることなどから西九州産の黒曜石と思われる
10 図　4		表採	石鏃	サヌカイト	1.4+	1.9	0.3	0.6	先端部が欠損
10 図　5		表採	磨製石鏃	緑色片岩	1.5+	1.6+	0.3	0.7	先端部と基部がともに欠損
10 図　6	1 トレ	撹乱	勾玉	翡翠（硬玉）	1.8	0.6	0.5	1.1	
10 図　7		表採	磨製石剣	頁岩	3.4+	2.8+	0.9	11.7	
10 図　8	6 トレ	表土	剥片	サヌカイト	4.4	4.2	1.8	31.9	
10 図　9		表採	磨製石剣	頁岩	7.5+	3.2	0.7	21.3	刃身が折れて欠損している
10 図　10		表採	磨製石剣	頁岩	4.25+	4.65	0.9	17	
10 図　11		表採	磨製石剣	頁岩	3.85+	3.5	0.6	8.2	表面全体が若干風化しているため、磨痕は不明

法量単位　長さ・幅・厚さ　cm　重量　g

調査区全景（上空から）

調査区全景（東上空から）

図版２

調査区近景（南から）

２号竪穴住居出土状況（東から）

６号貯蔵穴遺物出土状況（南から）

６号貯蔵穴土層堆積状況（南から）

図版４

５号土坑土層堆積状況（北から）

５号土坑出土状況（東から）

第１トレンチ１号溝出土状況（北から）

第２トレンチ１号溝出土状況（東から）

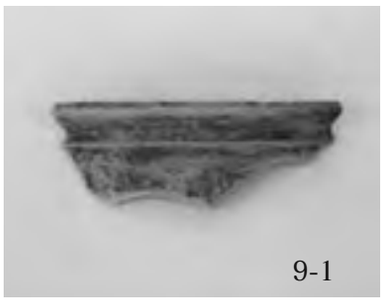
図版６

第３トレンチ１号溝出土状況（東から）

第４トレンチ４号溝出土状況（東から）

8-16

8-19


9-1

8-12

8-21

9-7

8-13

8-23

10-12

8-11

8-22

8-18

8-14

5-1

8-7

8-17

8-10

10-6

報　告　書　抄　録

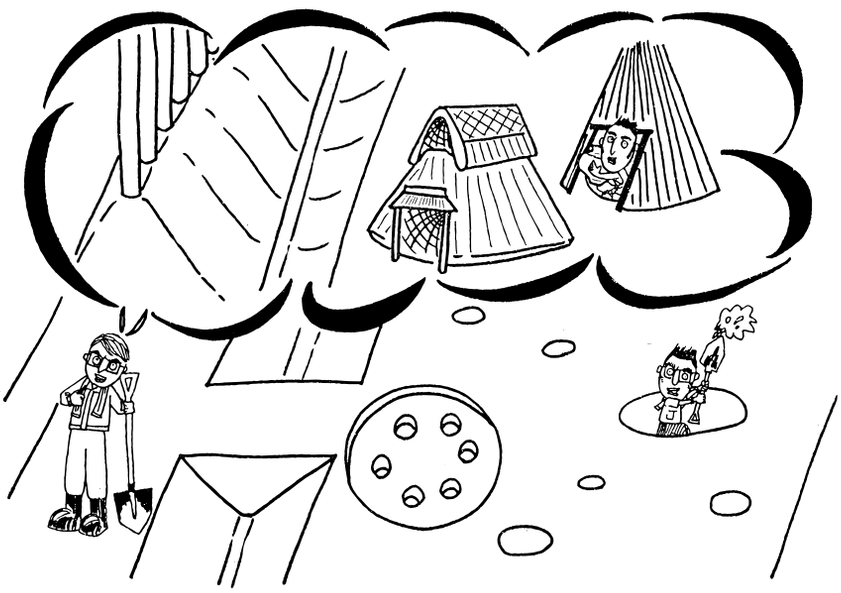
ふりがな	ふきあげ
書名	吹上Ⅱ
副書名	9～11次調査の記録
巻次	
シリーズ名	日田地区遺跡群発掘調査報告／日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	4／52
編著者名	下村智、土居和幸
編集機関	日田市教育委員会文化課
所在地	〒877－0077　日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601　日田市田島2-6-1
発行年月日	2004年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（しょざいち）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
吹上遺跡	大分県日田市大字渡里・吹上・友田	44204－6	651090	33 ′ 18"	130 ° 59'50"	19980822～19980831 19990726～19990831 20000724～20000811	9次291㎡ 10次330㎡ 11次122.5㎡	確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吹上遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴住居9軒、貯蔵穴28基、掘立柱建物4棟、溝4条、土坑38基、土壙墓7基、木棺墓3基、石蓋土壙墓1基、甕棺墓10基、石棺甕棺併用墓１基ほか	弥生土器、石器	

吹上遺跡第１０次調査

現地説明会資料



平成11年8月21日（土）

日田市教育委員会・別府大学文化財研究所

吹上遺跡 10 次調査中に発行した現地説明会資料の表紙

吹 上 Ⅱ

－９～11次調査の記録－

日田地区遺跡群発掘調査報告３

日田市埋蔵文化財調査報告書第52集

平成16年3月31日

発　行　日田市教育委員会
大分県日田市田島2-6-1

印　刷　日田時報紙器印刷（株）
大分県日田市二串町345-3